

賀茂遺跡

国道122号（太田バイパス）道路改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

1984

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

賀茂遺跡

国道122号（太田バイパス）道路改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

1984

序

昭和53年度は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、旧前橋土木事務所の建物を借用して、呱呱の声をあげた記念すべき年であります。設立された当初の、当事業団の組織・設備などきびしい状況のなかにおいて、職員は埋蔵文化財の保護に使命感を燃やし、一体となって遺跡の調査に取り組んでいました。

国道122号バイパス建設地内における埋蔵文化財の発掘調査は、当事業団発足後早々に着手した事業であり、発足当初の様々な困難を、一つ一つ克服しつつすすめられてきた調査であります。ここに報告する賀茂遺跡もその一つです。調査報告書として、その成果をここに公表するにあたり、その感慨もまた一しおであります。

賀茂遺跡にあっては、平安時代の住居址をはじめとして、縄文時代、古墳時代、奈良時代等各時代の住居址が発見され、この地が古くから集落として利用されてきた様子を見ることが出来ます。

これら資料は、地域の歴史を解明していく上で欠かせないものでありますが、今後、本報告がそのための基礎資料として有効に活用されることを切に期待いたします。

発掘調査から報告書刊行にいたるまでの間、終始御指導、御協力をいただいた県教育委員会、土木部等の関係諸機関、そして、直接調査や整理に携わった担当者をはじめとする多くの方々に厚く感謝の意を表し序といたします。

昭和59年10月1日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は、国道122号線太田バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集である。
2. 遺跡は群馬県太田市竜舞字賀茂3,848番地他に所在する。
3. 発掘調査は、県土木部（道路建設課）の委託により、予備調査を県教育委員会が、本調査を（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が行なった。
4. 調査を実施した年月日は次の通りである。
予備調査 昭和52年12月7日～昭和52年12月16日
本調査 昭和54年11月5日～昭和55年3月30日
5. 調査組織は次のとおりである。
事務担当 小林起久治、森田秀策、阿久津宗二、井上唯雄、飯塚喜代子、国定均
調査担当 右島和夫（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）
現：勢多郡北橘村教育委員会指導主事
藤巻幸男（群馬県埋蔵文化財調査研究員）
小島敦子（〃）
6. 本書作成の担当者は次のとおりである。
編集 藤巻幸男、小島敦子
本文執筆 井上唯雄、松本浩一 I-1
右島和夫 III-2～5 遺構 IV-2
藤巻幸男 II-1 III-1
小島敦子 I-2・3 II-2・3(2)(3)(4) III-2～5 遺物 IV-1
遺構写真 右島和夫、小島敦子
遺物写真 佐藤元彦（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 嘱託員）
図版作成 内田京子、手賀瑞枝、宮崎由美子、新井サイ子、吉本千保、須田まさ江、須田幸子、大塚千織、新井悦子、萩原弘子、井野みゆき、高橋順子、小池信子、平沢あや女（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）
新藤紀子（学生・現姓岡谷）
株式会社測研、中央航業株式会社
7. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略・五十音順）
新井房夫、新井和之、岡谷紀子、早田 勉、中里吉伸、檜崎彰一、能登 健、
宮田 毅
8. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
9. なお調査にあたって、作業に従事し、また多くの便宜を図っていただいた地元の方々に記して感謝いたします。

凡 例

1. 挿図縮尺は特に指定のない限り以下のとおりである。

遺構	IV-1	(縄文時代)	住居址	1/60
			土 壇	1/40
	IV-2~4	(古墳~平安時代)	住居址	1/80
			カマド	1/60
遺物	IV-1	(縄文時代)	完 形	1/6
			破片・石器	1/3
	IV-2~4	(古墳~平安時代)	杯	1/3
			壺・甕	1/4

2. 遺構図の方位記号は磁北をあらわす。

3. 遺構図のうち、出土遺物および山土位置ドット(●)に付けられた数字は、遺物実測図の番号と一致する。

4. 縄文時代の遺構図(IV-1)中の P_1 ・ P_2 はピットナンバーを表わし、ピット内の数字は、床面からの深さ(単位:cm)を表わす。また、土層断面図のスクリーン部分、耕作土・攪乱を示す。

5. 古墳~平安時代の遺構図(IV-2~4)中の破線は復元した線を表わす。また、重複した遺構では、先出の住居址について述べる時、先出の遺構の平面プランを確認し得たときは、そのプランは実線とした。

6. 遺構出土遺物の番号は、遺構ごとに通し番号となっている。

ただし、縄文時代の土壇出土土器のみ、全土壇通し番号にしてある。

7. 遺物実測図中に使用したスクリーンおよび観察表の*印は次の事項をあらわす。



胎土に繊維を含む縄文土器



黒色処理および細かな篋磨きが施された平安時代の土器

*

ロクロ使用、酸化焙焼成の土器

8. 本書IV-2~5については、紙面の都合上、遺構と構物を各節ごとにまとめた。

本文および遺物観察表にそれぞれ対応する頁を INDEX として掲げたので御活用願いたい。

9. 巻末の遺物写真の縮尺は統一されていない。

目 次

序		
例 言		
凡 例		
I 発掘調査の経過	1	
1. 発掘調査に至る経緯	1	
2. 発掘調査の方法	2	
3. 発掘調査の経過	2	
II 賀茂遺跡の生活環境	4	
1. 遺跡の位置と周辺の遺跡分布	4	
2. 賀茂遺跡の地形環境	7	
3. 賀茂遺跡の変遷	10	
(1) 縄文時代の賀茂項跡	10	
(2) 古墳時代の賀茂遺跡	11	
(3) 奈良時代の賀茂遺跡	11	
(4) 平安時代の賀茂遺跡	12	
III 検出された遺構と遺物	15	
1. 縄文時代の遺構と出土遺物	15	
(1) 竪穴住居址	(2) 竪穴状遺構	(3) 土壇
(4) 遺構外の出土遺物		
2. 古墳時代の遺構と出土遺物	65	
3. 奈良時代の遺構と出土遺物	83	
4. 平安時代の遺構と出土遺物	92	
5. 中世の遺構と出土遺物	162	
IV 成果と問題点	166	
1. 賀茂遺跡出土の平安時代の土器について	166	
2. 賀茂遺跡の集落について	171	
写 真 図 版		

挿 図 目 次

第 1 図 D地点のトレンチ配置図 ……………3	第 44 図 J 3号土壇出土遺物……………54
第 2 図 遺跡内の土層柱状図 (25ライン付近) ……3	第 45 図 J 3号土壇出土遺物……………55
第 3 図 周辺の遺跡分布図 ……………5	第 46 図 土壇出土遺物……………56
第 4 図 周辺の地形分類図 ……………6	第 47 図 土壇出土遺物……………57
第 5 図 発掘された太田市東部遺跡群……………10	第 48 図 遺構外出土土器……………59
第 6 図 賀茂遺跡の遺構分布図(1)……………10	第 49 図 遺構外出土土器……………60
第 7 図 賀茂遺跡の遺構分布図(2)……………13	第 50 図 遺構外出土土器……………61
第 8 図 J 1号住居址……………17	第 51 図 遺構外出土土器……………62
第 9 図 J 1号住居址出土遺物……………18	第 52 図 遺構外出土土器……………63
第 10 図 J 1号住居址出土遺物……………19	第 53 図 遺構外出土遺物……………64
第 11 図 J 1号住居址出土遺物……………20	第 54 図 2号住居址実測図……………65
第 12 図 J 1号住居址出土遺物……………21	第 55 図 4号住居址実測図……………65
第 13 図 J 1号住居址出土遺物……………22	第 56 図 9号住居址実測図……………66
第 14 図 遺構外出土遺物……………23	第 57 図 10号住居址実測図……………66
第 15 図 J 2号住居址……………24	第 58 図 15号住居址実測図……………67
第 16 図 J 2号住居址出土遺物……………25	第 59 図 18号住居址実測図……………68
第 17 図 J 2号住居址出土遺物……………26	第 60 図 27号住居址実測図……………68
第 18 図 J 2号住居址出土遺物……………27	第 61 図 16号住居址実測図……………69
第 19 図 J 2号住居址出土遺物……………28	第 62 図 2号溝・3号溝実測図……………70
第 20 図 J 2号住居址出土遺物……………29	第 63 図 7号溝実測図……………71
第 21 図 J 2号住居址出土遺物……………30	第 64 図 2号住居址出土遺物
第 22 図 J 2号住居址出土遺物……………31	4号住居址出土遺物……………72
第 23 図 J 2号住居址出土遺物……………32	第 65 図 9号住居址出土遺物
第 24 図 J 2号住居址出土遺物……………32	10号住居址出土遺物
第 25 図 J 2号住居址出土遺物……………33	18号住居址出土遺物
第 26 図 J 3号住居址……………35	27号住居址出土遺物……………74
第 27 図 J 3号住居址出土遺物……………36	第 66 図 16号住居址出土遺物……………76
第 28 図 J 3号住居址出土遺物……………37	第 67 図 15号住居址出土遺物……………77
第 29 図 J 3号住居址出土遺物……………38	第 68 図 2号溝出土遺物(2)
第 30 図 J 3号住居址出土遺物……………39	3号溝出土遺物(1)……………79
第 31 図 J 4号住居址……………40	第 69 図 3号溝出土遺物(2)……………80
第 32 図 J 4号住居址出土遺物……………41	第 70 図 7号溝出土遺物……………81
第 33 図 J 4号住居址出土遺物……………42	第 71 図 17号住居址実測図……………83
第 34 図 J 4号住居址出土遺物……………43	第 72 図 26号住居址実測図……………83
第 35 図 J 4号住居址出土遺物……………44	第 73 図 30号住居址実測図……………84
第 36 図 J 4号住居址出土遺物……………44	第 74 図 32号住居址実測図……………84
第 37 図 J 5号住居址……………45	第 75 図 33号住居址実測図……………85
第 38 図 J 5号住居址出土遺物……………46	第 76 図 35号住居址実測図……………85
第 39 図 J 1号竪穴状遺構……………47	第 77 図 36号住居址実測図……………86
第 40 図 J 1号竪穴状遺構出土遺物……………48	第 78 図 17号住居址出土遺物……………87
第 41 図 J 1号竪穴状遺構出土遺物……………49	第 79 図 26号住居址出土遺物……………88
第 42 図 土壇……………50	第 80 図 30号住居址出土遺物
第 43 図 土壇……………52	32号住居址出土遺物

	33号住居址出土遺物		
	35号住居址出土遺物		
	36号住居址出土遺物	90	
第 81 図	1号住居址実測図	92	
第 82 図	5号住居址実測図	92	
第 83 図	6・7号住居址実測図	93	
第 84 図	11号住居址実測図	94	
第 85 図	14号住居址実測図	95	
第 86 図	19号住居址実測図	95	
第 87 図	23号住居址実測図	96	
第 88 図	24号住居址実測図	96	
第 89 図	25号住居址実測図	97	
第 90 図	21号住居址実測図	98	
第 91 図	28号住居址実測図	98	
第 92 図	29号住居址実測図	99	
第 93 図	38号住居址実測図	99	
第 94 図	37号住居址実測図	100	
第 95 図	39号住居址実測図	101	
第 96 図	40号住居址実測図	101	
第 97 図	41号住居址実測図	102	
第 98 図	46号住居址実測図	102	
第 99 図	42・43・44号住居址実測図	103	
第 100 図	47号住居址実測図	104	
第 101 図	48号住居址実測図	104	
第 102 図	49号住居址実測図	105	
第 103 図	31号住居址実測図	105	
第 104 図	50号住居址実測図	106	
第 105 図	52号住居址実測図	106	
第 106 図	51号住居址実測図	107	
第 107 図	69号住居址実測図	107	
第 108 図	53号住居址実測図	108	
第 109 図	54号住居址実測図	108	
第 110 図	56号住居址実測図	109	
第 111 図	55号住居址実測図	109	
第 112 図	58号住居址実測図	110	
第 113 図	57号住居址実測図	110	
第 114 図	59号住居址実測図	111	
第 115 図	62号住居址実測図	111	
第 116 図	63号住居址実測図	112	
第 117 図	64号住居址実測図	112	
第 118 図	65号住居址実測図	113	
第 119 図	66・69号住居址実測図	113	
第 120 図	68号住居址実測図	114	
第 121 図	3号住居址実測図	114	
第 122 図	45号住居址実測図	114	
第 123 図	13号住居址実測図	115	
第 124 図	61号住居址実測図	116	
第 125 図	60号住居址実測図	115	
第 126 図	34号住居址実測図	116	
第 127 図	1号溝実測図	117	
第 128 図	6号溝実測図	119	
第 129 図	1・3・5号住居址出土遺物	120	
第 130 図	6・7号住居址出土遺物	121	
第 131 図	11号住居址出土遺物(1)	123	
第 132 図	11号住居址出土遺物(2)	125	
第 133 図	69・20・21・22号住居址出土遺物	126	
第 134 図	14号住居址出土遺物(1)	128	
第 135 図	14号住居址出土遺物(2)	130	
第 136 図	23・24号住居址出土遺物	131	
第 137 図	25号住居址出土遺物	133	
第 138 図	28・29号住居址出土遺物	134	
第 139 図	31・38・39号住居址出土遺物	136	
第 140 図	37号住居址出土遺物(1)	138	
第 141 図	37号住居址出土遺物(2)	140	
第 142 図	37号住居址出土遺物(3)	142	
第 143 図	37号住居址出土遺物(4)	143	
第 144 図	40・42・43・45号住居址出土遺物	145	
第 145 図	47号住居址出土遺物	146	
第 146 図	48号住居址出土遺物	147	
第 147 図	49号住居址出土遺物	148	
第 148 図	50・53・51・52号住居址出土遺物	149	
第 149 図	55号住居址出土遺物	151	
第 150 図	56・57号住居址出土遺物	152	
第 151 図	58・59号住居址出土遺物	154	
第 152 図	61・62号住居址出土遺物	155	
第 153 図	63・64号住居址出土遺物	157	
第 154 図	65・66・68号住居址出土遺物	159	
第 155 図	6号溝出土遺物	160	
第 156 図	7号土坑実測図	161	
第 157 図	9号土坑実測図	162	
第 158 図	8号土坑実測図	163	
第 159 図	4・5号溝実測図	164	
第 160 図	8号土坑・4号溝出土遺物	165	
第 161 図	賀茂遺跡出土の平安時代土器の変遷	169	
第 162 図	古墳～平安時代の住居変遷(1)	171	
第 163 図	古墳～平安時代の住居変遷(2)	171	
第 164 図	賀茂遺跡の時期別住居分布(部分)	173	
第 165 図	II期の住居規模	173	
第 166 図	IV～VI期の住居規模	173	
付 図	賀茂遺跡全体図		

写 真 図 版

PL 1—1	II区般空写真 (北から)	3	7号溝	埋積土層断面	
2	III区全景写真 (西から)	4	同	遺物出土状態	
PL 2—1	J 1号住居址	遺物出土状態 (南から)	5	同	遺物出土状態
2	同	遺構全景 (南から)	6	16号住居址	全景
3	同	セクション	7	同	カマド
4	J 2号住居址	遺物出土状態 (北から)	8	17号住居址	全景 (東から)
5	同	セクション	PL 8—1	17号住居址	カマド
6	同	床面上遺物出土状態 (東から)	2	33号住居址	全景 (東から)
7	同	大型破片出土状態	3	33号住居址	カマド
8	同	環状石製品出土状態	4	5号住居址	全景 (西から)
PL 3—1	J 3号住居址	遺物出土状態 (南から)	5	1号住居址	全景 (西から)
2	J 5号住居址		6	6号住居址	全景 (北から)
3	J 4号住居址	遺物出土状態 (南から)	7	7号住居址	全景 (西から)
4	同	遺構全景	PL 9—1	7号住居址	遺物出土状態
5	J 3号土塚		2	同	
6	同	セクション	3	11号住居址	全景 (西から)
7	J 3・4号土塚		4	同	カマド
8	J 5号土塚		5	同	遺物出土状態
PL 4—1	J 6号土塚		6	同	
2	J 7号土塚		7	14号住居址	全景 (南から)
3	J 8号土塚		8	同	遺物出土状態
4	J 9号土塚		PL 10—1	14号住居址	カマド 遺物出土状態
5	J 10号土塚		2	同	カマド
6	J 11号土塚		3	24・25・26号住居址の	全景 (西から)
7	J 12号土塚		4	25号住居址	カマド
8	J 14号土塚		5	26号住居址	カマド
PL 5—1	2号住居址	全景 (南から)	6	24号住居址	北カマド
2	同	遺物出土状態	PL 10—7	同	東壁カマド
3	4号住居址	全景 (南から)	PL 11—1	19号住居址	全景 (西から)
4	同	遺物出土状態	2	23号住居址	全景 (西から)
5	9号住居址	全景 (西から)	3	21号住居址	1号溝埋積土層
6	同	遺物出土状態	4	同	全景 (西から)
7	10号住居址	全景 (南から)	5	28号住居址	全景 (西から)
8	同	カマド	6	29号住居址	全景 (西から)
PL 6—1	15号住居址	全景 (東から)	7	30号住居址	全景 (西から)
2	同	カマド	8	31号住居址	全景
3	18号住居址	全景 (東から)	PL 12—1	38号住居址	全景 (西から)
4	27号住居址	全景 (東から)	2	同	カマド
5	2・3号溝	全景 (北から)	3	37号住居址	埋積土層断面
6	同	埋積土層断面	4	同	遺物出土状態 (南から)
PL 7—1	2・3号溝	遺物出土状態	5	同	全景 (南から)
2	同	遺物出土状態	6	同	東壁カマド
			PL 12—8	40号住居址	全景 (西から)

PL 13—1	46号住居址	全景（西から）	3	同		
	2	47号住居址	全景（西から）	4	J 4号住居址出土土器	
	3	48号住居址	全景（西から）	PL 23—1	同	
	4	同	カマド	2	同	
	5	49号住居址	全景（西から）	3	J 2号土壇出土土器	
	6	50号住居址	全景（西から）	4	J 3号土壇出土土器	
	7	52号住居址	全景（西から）	PL 24—1	土壇出土土器	
	8	同	カマド		（J 9・10・12・・13・18号土壇）	
PL 14—1	51号住居址	全景（西から）	2	遺構外出土土器	第1群～第5群	
	2	同	遺物出土状態	3	同	第5群
	3	51号住居址下住居	全景（西から）	4	同	第5群
	4	同	カマド	PL 25—1	同	第5群～第7群
	5	53号住居址	全景（西から）	2	同	第8群～第11群
	6	54号住居址	全景（西から）	3	住居址出土石器	（J 1号住居）
	7	55号住居址	全景（西から）	4	同	（J 1・2号住居）
	8	56号住居址	全景（西から）	PL 26—1	同	（J 2・3号住居址）
PL 15—1	58号住居址	全景（西から）	2	同	（J 4号住居・	
	2	59号住居址	全景（南から）		J 1号竪穴状遺構）	
	3	同	遺物出土状態	3	遺構外出土石器	
	4	62号住居址	全景（西から）	PL 27	2・4・9・10・15・18・27号住居址出土遺物	
	5	63号住居址	全景	PL 28	3・7号溝・16号住居址出土遺物	
	6	64号住居址	全景（西から）	PL 29	1・5・6・7・17・23・26・36号住居址出土遺物	
	7	同	カマド	PL 30	11・14号住居址出土遺物	
PL 16—1	65～67号住居址	全景		PL 31	14・19～24号住居址出土遺物	
	2	68号住居址	全景（西から）	PL 32	25・29・30・31・37号住居址出土遺物	
	3	3号住居址	全景（東から）	PL 33	37号住居址出土遺物	
	4	45号住居址	全景（西から）	34	37・38・39号住居址出土遺物	
	5	61号住居址	全景（西から）	PL 37	42・43・45・47・48・49・51・52号住居址出土遺物	
	6	1・4号溝	全景（東から）	PL 36	55・58・59・61・62・64・66・68号住居址出土遺物	
	8	4号溝	埋積土層断面	PL 37	6・11号溝・51号住居址出土遺物	
PL 17—1	1号溝	遺物出土状態				
	2	7号溝	埋積土層断面			
	3	7号土壇	埋積土層断面			
	4	8号土壇	埋積土層断面			
PL 18	J 2・4号住居址					
	J 3・4号土壇出土遺物					
PL 19	J 2号住居址、J 3・4号土壇出土遺物					
PL 20—1	J 1号住居址出土土器					
	2	同				
	3	同				
	4	同				
PL 21—1	同					
	2	同				
	3	同				
	4	同				
PL 22—1	J 3号住居址出土土器					
	2	J 3号住居址出土土器				

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経緯

太田市街地内の交通渋滞を緩和する目的で計画された国道122号バイパスは、昭和52年に路線計画が発表された。それによると、竜舞地区で本線と分岐し、下小林地区を経由して北部環状線をこえ、只上地区で国道50号バイパスにとりつく路線である。

このバイパス建設工事に関連して、竜舞、下小林の2地区にわたる延長3kmの間については、埋蔵文化財包蔵地が含まれていることから、県教育委員会、土木部(道路建設課)、太田土木事務所の三者で協議、調整を図り県教育委員会が改めて分布調査を実施した。その結果、仮称A～G地点にいたる7地点、約30,000㎡の地域が調査対象地としてあげられた。しかし、表面採集による分布調査では各遺跡の遺構の有無、遺跡の範囲等で不明確な点も多いため、直接工事を担当する太田土木事務所と県教育委員会とで再度協議し、対象地7地点について試掘調査を実施することとし、昭和52年12月になって、県教育委員会文化財保護課による試掘が行われた。その結果、次の6ヶ所について本調査を実施することで合意された。

地点	遺跡名	分布調査、試掘調査による対象面積	備考	
			実調査面積	
A	小町田 B	7,000㎡	6,300㎡	
B	—	—	—	試掘調査の結果、旧状は湿地帯と見られ、遺構確認されないため対象から除外
C	賀茂	8,000	8160㎡	C地点寄りに遺構集中、本調査に際してはC地点と総合し賀茂遺跡とする。
D	—	2,500		
E	庚塚	3,100	3,100	
F	上	2,160	2,160	
G	雷	1,450	1,450	

以上の調整に基づいて、発掘調査は、昭和53年7月に発足した財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の事業として実施することとなり、県教育委員会、県土木部(道路建設部)、太田土木事務所、(財)埋蔵文化財調査事業団とで細部の調整をした後、群馬県知事と埋蔵文化財調査事業団理事長との間で委託契約が結ばれた。

調査は、昭和53年8月から55年1月までの2年次にわたって実施することとなり、庚塚遺跡(E地点)から着手された。

賀茂遺跡(C・D地点)は、小町田遺跡の調査に引き続き昭和54年11月から調査に入った。計画段階では、小町田遺跡の調査を6月に終了し、引き続き賀茂遺跡に入り、55年1月終了の予定であったが、小町田遺跡の調査が湧水と多層面調査によって長びいた影響により、調査着手が4ヶ月遅れた。この遅れは工事工程にも影響することから、数次にわたる工程調整を図り、最終的には年度未終了を確認し、調査担当者・作業者の増加をはかりつつ55年3月末終了に対応した。

I 発掘調査の経過

2 発掘調査の方法

本調査は、バイパス路線内A地点と呼称された小町田遺跡の発掘調査に継続して、同じ体制で行われることが決まっていたので、小町田遺跡調査終了の約1ヶ月初旬に、土層観察と遺構概数の把握を目的として1.5×8mのトレンチによる試掘調査を実施した。この調査により、表土（I層）はローム層（II層）上面まで達しており、耕作の進行が顕著であることが判明した。したがって、遺構の確認ができるのは、いずれの時期についてもローム層上面であると考え、重機で当該面まで掘削することにした。

また、賀茂遺跡（C地点）の北側には、遺跡としてD地点がマークされていたので、前述のトレンチ調査を行なった。ここでも家屋や耕作による土層攪乱が目立ち、ローム層中まで入りこんでいたので、遺構残存状態が極めて悪く、2ヶ所の比較的良好なところを除いて調査区からははずすことにした。この調査できた部分は、賀茂遺跡の範囲内として扱った。なお、攪乱部より西はトレンチ調査によって遺構が把握できなかった。

調査は、路線内全面発掘を原則としたが、既存の生活用道路、農業用水、高圧電線の鉄塔などのため一部未調査となった部分がある。

図化記録は、道路中央杭を基準にした座標により行なった。中央杭No66を原点とし、杭No0と結んだ線をCラインとして5mグリッドを設定した。標高は、道路の工事用のBMから測り調査用のB・Mを設けて測定した。

発掘調査は排土処理の都合から発掘区を3区に分け、南からI、II、III区とし、I区→III区→II区の順序で行なった。

3 発掘調査の経過

小町田遺跡の調査が台風などの影響によって遅れ、賀茂遺跡の本格的な調査が始まったのは、11月5日であった。I区はサク状の耕作痕が深く入りこんで、遺構の残存状態はあまり良いとはいえなかったので、遺構の残存する部分と破損された部分を区別するため、耕作痕もすべて掘りあげることにした。縄文時代の遺構は埋土が地山と似ており、壁や床面の検出に手間どった。また、包含層のような遺物出土状態を呈する部分が多く、当該期の調査に時間がかかり、I区の調査に約1ヶ月を費し、12月3日に終了した。この間、III区の表土剥ぎおよびD地点の確認調査を併行して行なった。また11月20日には、太田土木事務所と今後の調査日程についての調整会議を現場で開いた。

III区は、I区と併行して、11月21日から調査が開始された。西端から遺構確認作業を行ない、住居址の発掘から始めた。住居址は、平安時代のもが多く、それ以前の遺構と重複する例が多かった。なおかつ耕作痕の激しい北側部は遺構の平面プランをつかむことが難しく、土層をみながら徐々に掘り下げるという方法をとった。2号・3号溝は、埋土中から多量の遺物を検出したが、住居址群と併行して、調査は順調にすすんだ。1号溝は、確認時から規模が大きいことが予想されたため重機による荒い掘削を行ない、重複する21号住居址との土層観察用にベルトを残して完掘した。堀の高低を記録するため、等高線を測量した。この1号溝の発掘時法面に関東ローム層中の軽石の純層と埋土中に火山灰の純層を検出したので、11月28日群馬大学の新井房夫教授に同定をお願いした。関東ローム層については、II区の遺構のない所をえらんでテストピットをあけ、基本土層の柱状図を作成した。III区は、遺構の重複ヶ所が多く調査に時間を要したが、12月14日全景写真撮影を行なって、12月20日に終了した。

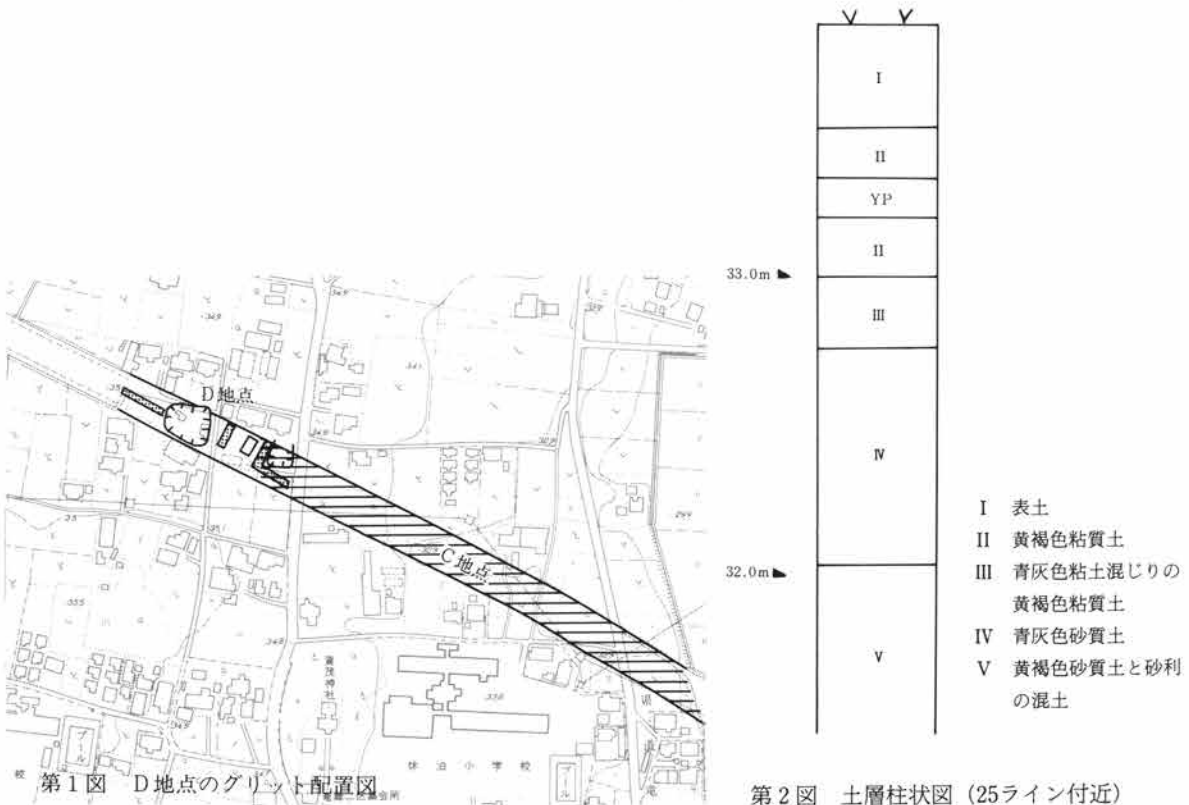
3 発掘調査の経過

当初、D地点とされていた部分は、III区終了間近の12月12日から調査を始め、9軒の住居址を調査した。測量作業などIII区と平行して行ない12月20日に終了した。

II区は、東半を先行して12月17日から調査を行なった。遺構は全体的に少なく、I区に近い東半部でI区からの連続と考えられる縄文時代の遺構が確認された。この地区でも耕作痕が顕著で、新しい時期の住居址は残存状態があまり良くなかった。そのなかで37号住居址は、確認面からの壁高も深く、火災に遭っており、遺物の残りの良い住居址であったので、調査も慎重となった。この37号住居址の遺物とりあげをもって昭和54年の調査を終了した。年が明けて1月9日から作業を再開し、II区東半の土師器を出土する住居址群の全景写真を撮影し、西半の遺構確認の調査を行なった。1号溝の東に同規模の4号溝が検出され、これも重機による荒い掘削を行なった。1月16日からはII区東半の縄文時代の住居址の調査を行ない、1月25日に終了した。II区西半は、4号溝をはじめとして数条の太い溝を検出したが、住居址は1軒確認されたにすぎない。東半分になって住居址が検出され、2月12日から住居址群の調査を行なった。2月23日に全景写真を撮り、終了した。

残る現場事務所周辺のII区中央部は、1月25日から表土を剥いで調査を開始した。小型の平安時代の住居址が集中して検出された。事務所内の遺物等の搬出を行ない、プレハブを2月15日に撤去した。その後はテント1棟を事務所として、プレハブ敷地下の調査を継続した。3月4日に発掘調査は終了したが、遺物の洗浄および注記の作業をテントで続け、3月11日現場撤収を迎えた。

整理作業は、昭和56年度、57年度事業として事業団整理室で行なった。前年度には古墳時代～平安時代について、次年度には縄文時代について、小町田遺跡と併行して作業を進めたものである。



II 賀茂遺跡の生活環境

1 遺跡の位置と周辺の遺跡分布

賀茂遺跡は東武小泉線竜舞駅から北東へ0.9km、休泊小学校の北側に位置する。所在は、太田市龍舞字賀茂3,848番地他である。休泊台地の東側台地上に立地しており、東に広大な水田地帯を一望することができる。標高は34mで、現水田との比高は3m程である。調査区内では、縄文時代前期黒浜期、および古墳時代和泉期～平安時代国分期の集落が検出されている。ここでは、周辺の遺跡分布を時代を追って概観しておきたい。

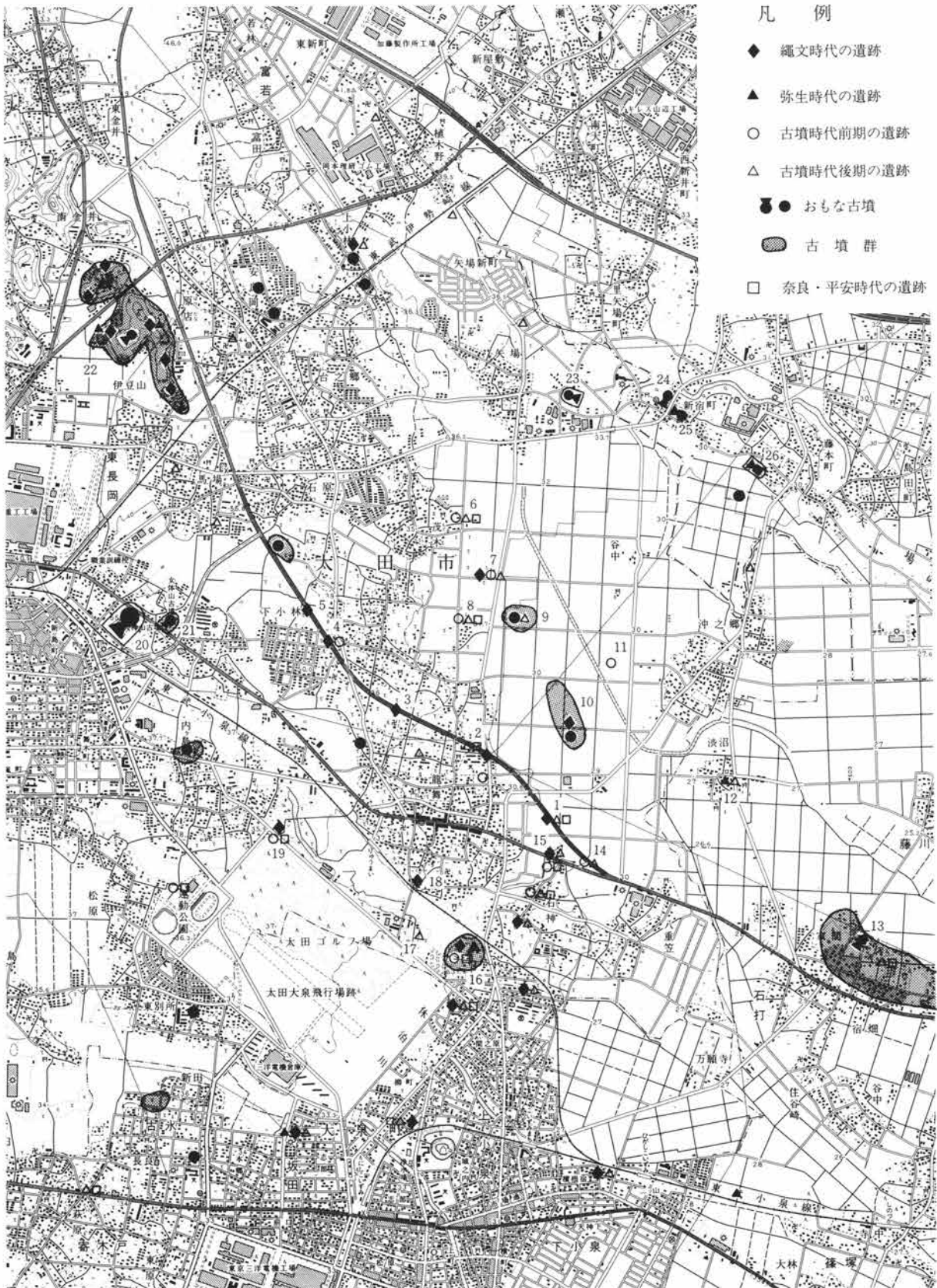
本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は未だ確認されていないが、邑楽台地は沖積層で埋没したローム層の微高地に立地する御正作遺跡で、黒曜石製のナイフ形石器を伴うユニット3ヶ所が調査されている。

縄文時代になるとまず草創期前半の尖頭器が金山丘陵東側に位置する3ヶ所の遺跡で採集されており、また本遺跡南東の小町田遺跡⁽¹⁾でも有舌尖頭器が2点出土している。草創期前半は、上遺跡⁽⁴⁾・間之原遺跡⁽¹⁶⁾、早期前半は小町田遺跡⁽¹⁾・焼山遺跡⁽²²⁾をあげられるのみであり、いずれも土器片数点の検出にとどまる。早期後半は本遺跡⁽²⁾をはじめ、上遺跡⁽⁴⁾・間之原遺跡⁽¹⁶⁾・焼山遺跡⁽²²⁾で比較的多量の遺物が出土しており、今後遺構が検出される可能性が高い。前期前半は、小町田⁽¹⁾・賀茂遺跡⁽²⁾で遺物が出土しており、上⁽⁴⁾・間之原遺跡⁽¹⁶⁾では関山2式期の住居址が検出されている。時に間之原遺跡では住居址が環状にめぐることが確認されており、本地域の先駆的な環状集落として注目される。前期後半は、遺跡が急増する時期である。小町田⁽¹⁾・賀茂⁽²⁾・上⁽⁴⁾・清水田⁽⁷⁾・塚廻り⁽¹⁰⁾・15⁽¹⁶⁾・間之原⁽²²⁾の各遺跡で遺構・遺物が検出されており、なかでも黒浜期の遺跡が多く、集落が認められている。中期前半はやや遺跡数が減少し、特に初頭期は小町田⁽¹⁾・賀茂⁽²⁾・上遺跡⁽⁴⁾で少量の遺物が出土したのみである。中期後半になると再び遺跡は増加し、小町田⁽¹⁾・賀茂⁽²⁾・庚塚⁽³⁾・上⁽⁴⁾・雷⁽⁵⁾・15⁽¹⁶⁾・間之原⁽²²⁾・焼山遺跡⁽¹⁾等をあげることができる。なかでも小町田遺跡では住居址23軒・土壇40基以上が検出されており、継続的な集落遺跡であることが判明している。後期前半は遺跡数が減少するものの、中期後半を引き継ぐあり方を示している。後期後半⁽⁵⁾・晩期⁽¹⁰⁾は遺跡数が急減し、雷⁽¹⁶⁾・塚廻り⁽¹⁶⁾・間之原の各遺跡で少量の土器が出土するにとどまる。

弥生時代の遺跡は、渡良瀬川扇状地I面の渋沼遺跡⁽¹²⁾、邑楽台地の間之原遺跡他2ヶ所⁽¹⁶⁾、金山丘陵の焼山遺跡⁽²²⁾(3地点)など合計5遺跡が確認されているが、遺構の確認例は今のところない。また沖積層で埋没した微高地(以下微高地と記す)からの出土例がない点は注目する必要がある。

古墳時代になると遺跡は急減する。遺跡の多くは微高地や台地縁辺に立地し、継続的な集落が営まれるようになる。石田川期の遺跡は上⁽⁴⁾・宮免⁽⁶⁾・清水田⁽⁷⁾・上神原⁽⁸⁾・沖之郷⁽¹¹⁾・深町⁽¹⁴⁾・15⁽¹⁶⁾・間之原⁽²²⁾・焼山遺跡、和泉期の遺跡は賀茂⁽²⁾・清水田⁽⁷⁾・沖之郷⁽¹¹⁾・深町⁽¹⁴⁾の各遺跡であり、いずれも広大な沖積地を臨む葦川・休泊台地東縁や邑楽台地北縁に集中している。この時期に対応する古墳としては、矢場薬師古墳⁽²³⁾・女体山古墳⁽²¹⁾・太田天神山古墳⁽²⁰⁾がある。なかでも天神山古墳は毛野地域の中樞を司どる大首長の墓であり、本地域がその拠点といわれている。なお、本遺跡周辺で方形周溝墓の調査例はまだない。鬼高期になると遺跡は各台地一円に分布するようになる。前時期から継続する遺跡では遺構の面的な拡大が認められ、水田耕作を中心とする生産基盤の安定と拡大が想定できる。また、それらを背景とした多数の古墳群が、丘陵上・台地縁辺・微高地に分布している。

1 遺跡の位置と周辺の遺跡分布



II 賀茂遺跡の生活環境

奈良・平安時代の遺跡は、そのほとんどは鬼高期から継続しているが、遺跡の規模はさらに拡大し、台地内部にまで居住域を拡げるようになる。休泊台地の分布調査では、鬼高期の土器が台地縁辺を中心に濃密な散布地点をブロック状に点在させるのに対し、国分期の土器は、台地縁辺にそって切れ目なく散布していた。詳細な調査は行ない得なかったが、他の台地でも同様な傾向が予想される。

本地域の広大な水田地帯は、ほ場整備をほぼ完了しつつあるが、それに伴う発掘調査により、沖積層で埋没した微高地上の遺跡が予想以上に存在することが明らかとなった。また、それらのなかには旧石器時代にまで遡る遺跡や縄文時代の集落遺跡も含まれており、本地域での遺跡群研究はこれらの確認調査を前提に考えなければならない。

No.	遺 跡 名	概 要	文 献
1	小 町 田 遺 跡	国道122号線バイパス建設に伴い、昭和53年から54年にかけて県埋文事業団が調査。沖積地のなかの微高地上の遺跡であり、縄文時代中期後半および古墳時代後半～平安時代の集落址が検出された。縄文時代では、草創期前半の有舌尖頭器2点・早期前半の押型文・沈線文をはじめ、前期初頭～後期前半の土器群が出土しており、前期後半の住居址2軒・土壇5基、中期中頃の住居址1軒・土壇13基、後期前半の住居址2軒・土壇8基等も検出されている。また、太田東部地区園場整備事業に伴い、昭和53・54年の2年次に亘って122号線バイパスの東側を県教育委員会が調査。ほぼ同様の遺構が検出されている。なお、平安時代の溝や井戸からは、火竈 ^{ヒノコ} 2点・木製陽物3点・木皿・曲物・カンピョウ製容器等が出土している。	1 4
2	賀 茂 遺 跡	本遺跡	
3	庚 塚 遺 跡	国道122号線バイパス建設に伴い、昭和53年県埋文事業団が調査。中世～近世にかけての溝12条・井戸7基・土壇122基等を検出。他に、縄文時代中期中葉～後期前半および奈良・平安時代の遺物が出土しているが、遺構は検出されていない。	2
4	上 遺 跡	国道122号線バイパス建設に伴い、昭和53年県埋文事業団が調査。縄文時代前期関山期の住居2軒、中期中葉～後期初頭の土壇10基・埋設土器2点、石田川期住居3軒を検出。他に、縄文時代草創期後半～後期前半の土器、および鬼高期の土器が出土しており、周辺に遺構が存在する可能性が高い。	2
5	雷 遺 跡	国道122号線バイパス建設に伴い、昭和53年県埋文事業団が調査。東へ緩傾斜する台地縁辺部にあたり、縄文時代早期後半条痕文系土器、中期加曾利E3式土器、後期堀之内II式・加曾利B式土器が少量検出された。東に位置する上遺跡と一連の遺跡となる可能性がある。	2
6	宮 免 遺 跡	太田東部地区県営園場整備事業に伴い、昭和50～51年にかけて県教育委員会が道水路部分を調査。低台地上の遺跡で、現況は桑園である。耕作等による攪乱が著しく、遺構は検出されていないが、古墳時代～平安時代の土器が出土している。	
7	清 水 田 遺 跡	太田東部地区県営園場整備事業に伴い、昭和51年・52年の2年次に亘って県教育委員会が調査。北西からつらなる台地端部微高地上の遺跡で、石田川期～国分期の住居が140軒検出され、継続的集落であることが判明している。平安時代の遺物では、緑釉土器・巡方等があり、また墨書土器も多数認められ注目される。他に、縄文時代前期黒浜期の土壇1基が検出されている。	3 a
8	上 神 原 遺 跡	太田東部地区県営園場整備事業に伴い、昭和50～51年にかけて県教育委員会が道水路部分を調査。調査区は沖積地となっており、遺構は確認されていないが、西側の台地には石田川期～国分期の土器が濃密に分布している。	
9	塚 井 古 墳 群	太田東部地区県営園場整備事業に伴い、昭和50年教育委員会が調査。上毛古墳総覧では7基の古墳が確認されているが、大半は消滅しており、2基の古墳が調査された。古墳は径10m前後の円墳で、7世紀頃の築造と考えられる。また、墳丘下から鬼高期の住居群が検出されている。	3 a
10	塚 廻 り 古 墳 群	太田東部地区県営園場整備事業に伴い、昭和52年県教育委員会が調査。沖積地のなかの微高地上に7基の古墳が確認された。墳丘径はいずれも18m前後である。そのうちの5基が調査され、多種多様な形象埴輪・円筒埴輪を伴う帆立貝式古墳で構成される6世紀中頃の古墳群であることが判明した。なお、墳丘下から縄文時代前期黒浜式・諸磯C式土器、後期称名寺II式・加曾利B式・安行式土器、および石田川式土器が出土している。	3 b
11	沖 之 郷 遺 跡	太田東部地区県営園場整備事業に伴い、昭和49年県教育委員会が調査。沖積地のなかの微高地上に石田川期の住居5軒と和泉期の土器溜りが検出されている。調査は小規模であり、遺跡は20,000㎡に及ぶ規模が予想されている。	3 a

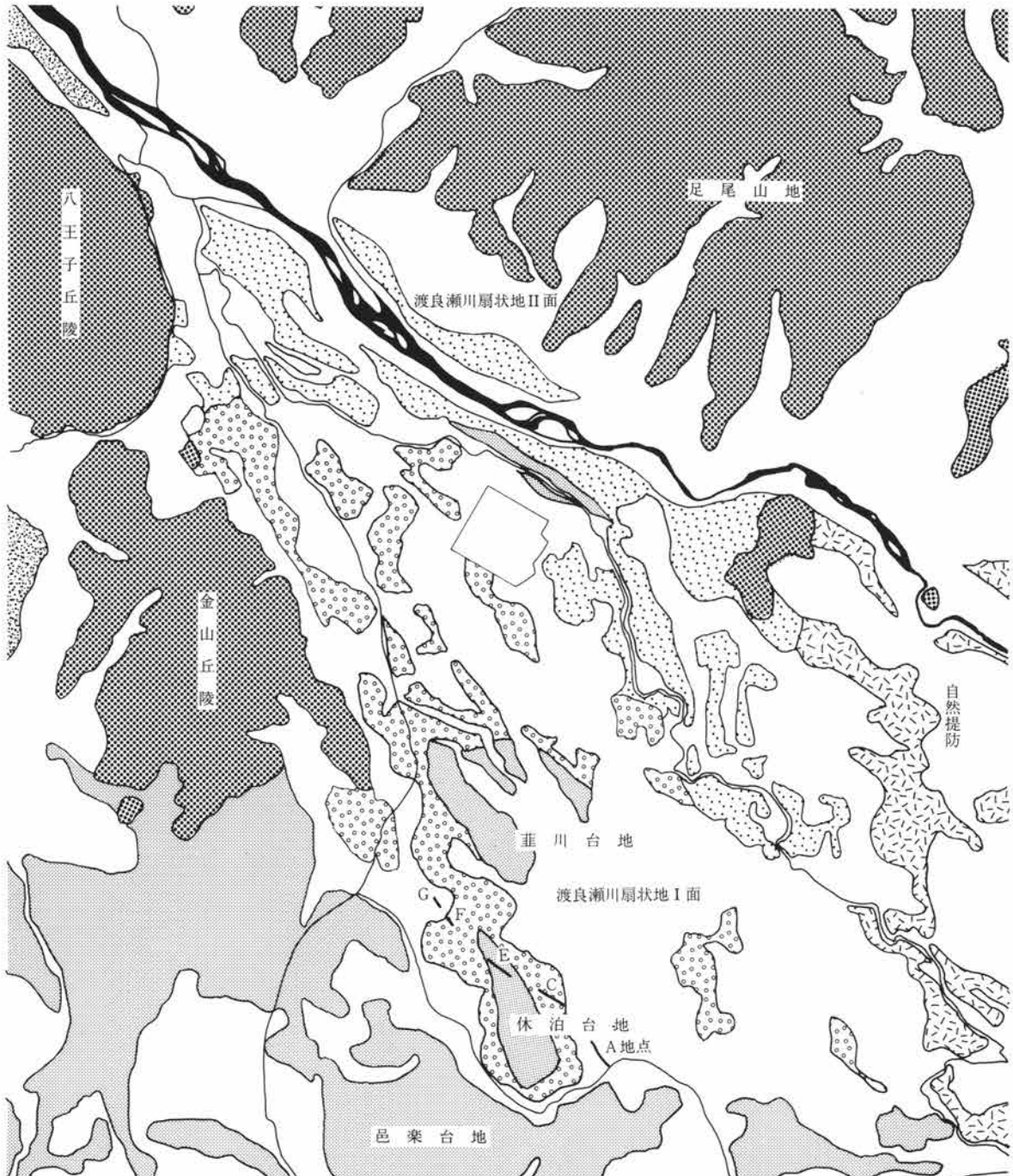
1 遺跡の位置と周辺の遺跡分布

No.	遺跡名	概要	文献
12	渋沼遺跡	渋沼の集落をのせる微高地上の遺跡で、弥生土器・土師器が採集されている。遺物は大泉高校に保管されている。	
13	松本古墳群	邑楽台地にのる遺跡で、全長60mの八王子古墳を含む3基の前方後円墳と20基ほどの円墳で構成される6世紀代の古墳群である。また、奈良時代の土器が広範に亘って採集されており、集落址が予想される。	
14	深町遺跡	微高地上に立地する遺跡で石田川期～鬼高期の土器のかなり広範な散布が確かめられており、集落址が予想される。昭和52年、国道122号線バイパス工事中に和泉期の住居3軒が確認された。	3 b
15		西側と北側へ緩傾斜する台地で、縄文時代前期黒浜式、中期加曾利E2・3式、鬼高期～国分期の土器が濃密に分布しており、小町田遺跡と一連の遺跡となる可能性が高い。また、台地南端で石田川期の土器を採集している。	
16	間之原遺跡	土地区画整理事業に伴い、昭和55年から2次に亘って太田市教育委員会が調査。縄文時代前期関山2式期の環状集落址、古墳時代石田川期の住居群、6世紀後半～7世紀初頭の帆立貝式古墳を含む古墳群、平安時代の住居群等が検出されている。他に、縄文時代草創期後半（燃糸文）～晩期の土器、弥生時代の土器、鬼高式土器、貨泉・布泉を伴う墓址等が検出されている。	12 27
17	大塚遺跡	土地区画整理事業に伴い、昭和55年に太田市教育委員会が調査。攪乱が著しく、遺構は溝が検出されたのみだが、周辺には古墳時代の遺物の散布が認められる。	12 27
18		分布調査で、台地縁辺部に縄文時代前期黒浜式土器、中期加曾利E3式土器の散布を確認した。	
19		土地区画整理事業に伴い、昭和54～55年にかけて太田市教育委員会が調査。縄文時代前期黒浜期の住居1軒、古墳時代和泉期住居1軒・土塚2基、平安時代住居29軒を確認している。	
20	太田天神山古墳	5世紀中頃の前方後円墳。全長210mは東日本最大規模である。主体部は組合せ式の長持形石棺。	
21	女体山古墳	5世紀中頃の帆立貝式古墳。全長60mの規模を有し、天神山古墳に先行して構築された。	
22	焼山遺跡	丘陵上の遺跡で、はにわの会により総合調査がなされ、縄文時代草創期前半の尖頭器と思われるものをはじめ、田戸下層式、茅山式、黒浜式、諸磯a・b・c式、浮島式、加曾利E式、堀之内I式の各土器、弥生時代中・後期の土器、石田川式土器が確認されている。また、鉄剣を伴う4世紀代の方形台上墓様の墓址、および全長56mの前方後円墳を中心に円墳40基前後で構成される6世紀後半～7世紀の古墳群がある。	15
23	矢場薬師山古墳	4世紀末～5世紀初頭の前方後円墳。	
24	矢場川41号墳	6世紀前半の前方後円墳。全長60～70m。	
25	矢場川39号墳	同上	
26	藤本観音山古墳	5世紀初頭の前方後方墳。全長126m。	

2 賀茂遺跡の地形環境

群馬県東南部は、関東平野の北西の隅にあたり、山地形の北部・西部とは対照的である。この地域は、地形が山地から平野に変わる地形変換点で、さまざまな地形要素が組みあわさっている。地形はいろいろな意味で、人間の生活と関わってきた。賀茂遺跡の発掘調査報告に先立ち、周辺の地形を概観して、原始・古代の人々の生活の舞台をイメージしておこう。

群馬県のほぼ中央に位置する赤城山は、秩父古生層を基盤とする第4紀火山である。数十万年の間火山活動を繰り返した結果、火砕流堆積物によって秀麗な山体を形成し、その裾野は大きく広がっている。群馬県



第4図 遺跡周辺の地形分類図

東辺には同じく秩父古生層を基盤とする足尾山地が栃木県側から伸びている。その西側に対峙するようにある八王子丘陵および金山丘陵は、東半分は足尾山地と同様に秩父古生層が基盤となっており、足尾山地とつながる地形である。西半分は溶結凝灰岩という火山性の地質を有しており、第3紀における火山活動が考えられるが、詳細は未だわかっていない。

第4紀更新世になると下末吉海進による古東京湾が、群馬県南東部に入りこむ。この東京湾に流れこんでいた古渡良瀬川が、活発な活動期であった赤城山の火砕流や泥流を運び、厚い砂礫層を堆積させたのが大間々扇状地である。この扇状地は、海退の進行により、中部ローム層以上をのせる西側のI面と、上部ローム層以上をのせるII面とに分けられる。その崖線は現在早川の流路となっている。

邑楽・館林台地は、中部ローム層以上をのせる洪積台地で、その原形は砂と粘土の地層である。この地層が堆積したところは古東京湾が入りこんでいた時代で、古渡良瀬川は扇状地を抜けると、湾の沿岸をゆるく蛇行して流れ、砂を堆積させて湾に流れこんでいた。いわば、邑楽・館林台地は、利根川・古渡良瀬川の自然堤防帯あるいは三角州といった景観をみせていただろう。そして吹きよせられていた火山灰質の砂が、有名な内陸古砂丘を形成した。その後、海退に伴って河川の侵食が進み、ローム層が堆積して台地化したといわれている。

さて、賀茂遺跡の立地する、八王子丘陵・金山丘陵と足尾山地の間の地域は、沢口宏によれば「渡良瀬川扇状地」と呼ばれている。沢口は実地調査によって、本扇状地には、現成（沖積世）扇状地と洪積世扇状地とこれらとは異なる洪積台地の三者があることを示した。このうち洪積台地は葦川台地・休泊台地とよばれ、台地の核となっている。中部ローム層以上をのせるが、原形面はラミナの発達する特異な砂礫層である。同じバイパス路線内で調査された庚塚遺跡は、この部分に立地する。

扇状地は形成時期から2面に分けられている。I面は洪積世末期、上部ローム層上部をのせる旧扇状地面で、ところによってYP層が鍵層として存在する。渡良瀬川右岸・丸山以南に分布し、沖積世の侵食によって分断されている。第2図は発掘区内に設定した土層柱状図である。発掘調査時には扇状地礫層を確認できなかったが、砂礫層と、それを覆う上部ローム層およびローム層中のYP層を確認した。賀茂遺跡は、この扇状地I面に立地しているのである。この扇状地面は、台之郷や龍舞では前述の洪積台地をとり巻くように分布し1つの台地を形成している。庚塚遺跡とともに調査された上遺跡もこの地形面に立地すると考えられる。

渡良瀬川扇状地II面は、沖積世に形成されたもので、関東ローム層は認められない。この面には旧河道を示す凹地形がよく残存している。足利市田中町・福居町以南では砂質の微高地からなる自然堤防も形成されている。

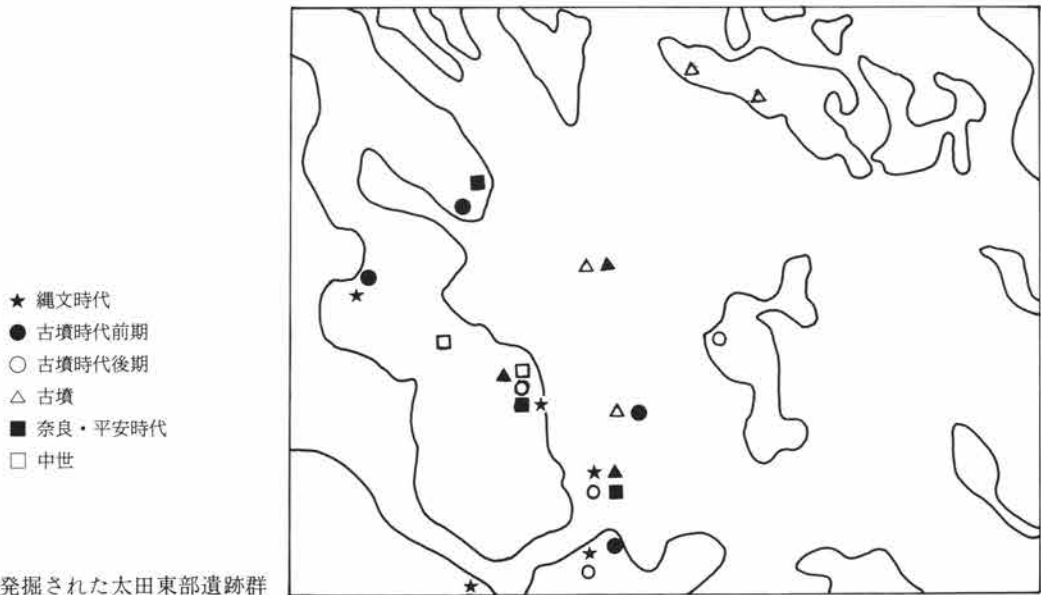
沢口によれば、扇状地礫層は「標高27m付近から下流では後背湿地堆積物に埋積される」という。すなわちこの龍舞一台之郷一矢場一藤本一沖之郷にかこまれた沖積地帯には埋没地形があることに注意しなければならない。沢口らによる地質学的・地形学的成果はもとより、考古学の調査結果からも、本来微高地に立地する古墳群や住居址群が水田下に存在する例が知られており、現地形とは異なった地形を、当時の生活環境として把握することが必要である。

註1 本章については、次の各文献を参考とした。

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| 1) 野村 哲編、1978 (文献 7) | 4) 沢口 宏 1966 (文献10a) |
| 2) 木崎喜雄・野村哲・中島啓治編著 1977 (文献 8) | 1977 (文献10b) |
| 3) 大地のあゆみ編集委員会編 1982 (文献 9) | 1978 (文献10c) |

II 賀茂遺跡の生活環境

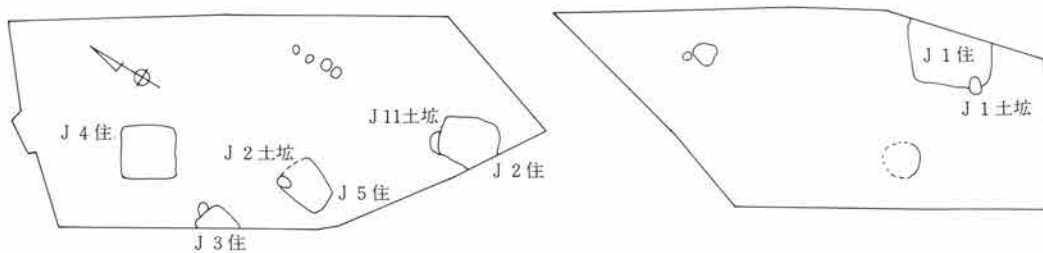
3 賀茂遺跡の変遷



第5図 発掘された太田東部遺跡群

(1) 縄文時代の賀茂遺跡

調査区の北側に台地がやや湾入する部分があり、周辺の分布調査では、調査区の南側台地縁辺から北側の湾入部分緩斜面にかけて、黒浜式、諸磯a・b式、加曾利E式土器が約6,000㎡の範囲に認められた。今回の調査区は分布域の中央からやや南寄りの部分にあたる。検出された遺構は、前期黒浜期の住居址5軒と土壇11基、諸磯a期の土壇1基、前期後半の竪穴状遺構1基と土壇1基であり、黒浜期を中心とする集落址であることが判明した。遺構は調査区東側端から約100mの範囲に認められ、住居址は東側に1軒、西側に4軒があり、2群に分けられる。東側には住居址と重複する黒浜期の土壇1基と竪穴状遺構があり、いずれも台地縁辺寄りに位置する。東側台地縁辺は水田化により削平されており、本来の台地は緩傾斜しながら東へさらに伸びるものと思われ、遺構の存在が想定される。西側には住居址の他に黒浜期の土壇10基と諸磯a期の土壇1基があり、住居址と重複するものと住居址から離れて集中するものがある。西群は黒浜期の古い段階から諸磯a期のものが認められ、継続性がみられる。また、東群と西群の間に黒浜期の土壇2基が近接して位置する。これらの他に、調査区では早期後半～後期前半の土器が出土しており、関山式・諸磯a式・b式土器は出土量が多く、遺跡内に遺構の可能性が考えられる。また、加曾利E式土器は台地内部にも分布が認められた。



第6図 賀茂遺跡の遺構分布図(1)

0 20m

(2) 古墳時代の賀茂遺跡

発掘調査では、古墳時代の遺構は、住居址7軒と溝址3条が検出された。遺構の分布は偏在しており、発掘区の西方の3軒の小群と、東端の4軒の小群に分けられる。溝は発掘区中央部に1条、西の住居址群の中に2条が重複して検出された。

東群の4軒のうち、2号住居址および4号住居址は、和泉式土器を検出し、他の2軒よりも古い様相を示す。9号住居址、10号住居址は鬼高Ⅰ式土器の時期であろう。東群の4軒は、5世紀末ごろから居住を始めた住居址群であり、東方への広がりはないことを確認している。台地の縁地にそって北と南へ広がる居住域が考えられる。西群の4軒は、比較的大型の住居址であり、いずれも鬼高Ⅲ式の様相をもった土器を出土した。カマドの検出されなかった18号住居址を除いて、カマドは西壁に設けられており、15号住居址では対面の東壁に入口に関連するとみられる小ピットを検出している。15号住居址は、2、3号溝で他の3軒と隔てられているが、この溝の性格は明らかでない。この住居址群から西方へ380mほどのところは、庚塚遺跡として調査されているが、^{註2} 当期の住居址は検出されていない。また本調査のD地点のトレンチ調査でも古墳時代の遺構は検出されていない。この西群の4軒は、東側の広い沖積地を生産基盤とした人々の居住域の西の限界であろう。

これらの住居址間には前述したように若干の時間差がある。居住域内の移動も考えられるが、部分的調査の為断定はできない。両群のほぼ中間にある7号溝も性格は不明であるが、鬼高Ⅲ式の時期にあたり、西群との同時併存の可能性が高い。何らかの区画と考えられよう。

前章で述べたようにこの地域では、広い沖積地帯を臨み、それをとり囲むように遺跡が分布している。弥生時代以降、人々はこの沖積地を生産基盤として農耕集落を営んだのであろう。弥生時代の遺跡は本地域では明らかでないが、古墳時代初頭については清水田遺跡^{註3}および深町遺跡^{註4}で住居址群が検出されている。赤城南麓や大間々扇状地では、初期農耕集落は、数キロの一定の間隔をもって沖積地沿いに分布していることが認められている^{註5}。そしてこの初期農耕集落は、5世紀末から6世紀初めにかけて、耕地拡大を伴う発展をとげるのであるが、本地域においても同様のことが看取される。すなわち、前述したように古墳時代前期の遺構のみられない本遺跡調査区の遺構分布については、5世紀後半の耕地拡大に伴う居住域の^{註6} 新開の結果とみることができるであろう。

同様な新開集落は、沖之郷遺跡^{註7}・塚井遺跡^{註7}・小町田遺跡^{註8}などで検出されている。沖積地内の埋積された微高地には、塚廻り古墳群や塚井古墳群が立地し、1定の地域を形成しているのである。

(3) 奈良時代の賀茂遺跡

発掘区内で検出された遺構は6軒の住居址のみである。遺構分布は、奈良時代になると、東端にあった住居址群はなくなり、西の住居址群は台地内へひろがる傾向をみせながら継続する。32、33号住居址は、他の住居址よりやや古い様相を示し、まっ先に台地の内側の方へ移った住居址群である。17、26、32、33号住居址は、回転糸切り後、底部をへら調整する杯形土器を出土する住居址群で、32、33号住居址に後続する時期のものである。16号住居址が古墳時代終末に位置づけられることを考えれば、住居址群は、発掘区内ではそれぞれの位置で継続していることがわかる。

奈良時代は、律令制の確立した時代といわれている。収奪の単位として、国一郡一郷という区画が設定されたことが文献から知られ、本遺跡のある太田市龍舞は、真張郷に比定されている^{註9}。広い沖積地をかかえこんだ充実した郷であったとの推測も可能であるが、発掘区内では遺構の検出は少ない。周辺の他の新開集落

II 賀茂遺跡の生活環境

註10

でも、奈良時代の遺構を検出しているのは小町田遺跡だけである。数も12軒と少ない。沖之郷遺跡や塚井遺跡、および古墳時代前期から居住域となっている清水田遺跡では、古墳時代後半まで人々の居住域となっているが奈良時代の遺構はない。発掘調査された区域は一部にすぎないので、即断することはできないが、奈良時代の遺構の調査結果からみれば、本遺跡の農耕集落は古墳時代からの漸移的な継続に止まっていると考えられよう。律令国家形成のプロセスを、本遺跡の奈良時代の遺跡から、考古学的に再検討することも今後の課題である。

(4) 平安時代以降の賀茂遺跡

平安時代の遺構は、住居址48軒と溝4条が検出された。古墳時代や奈良時代と比較すると、住居址数も増大し重複も激しい。本項では9～12世紀(400年間)にわたる国分式土器を出土する住居址を抽出しており、これが一時期の住居址数とはいえない。むしろ、台地中央部でのこの重複現象は住居占地の継続性を示している。平安時代には、台地縁辺から中央部に広がった居住域がその形態を定着させているのである。

発掘区東半部中央に55～59号住居址という当該期の住居址群が重複して検出されている。これらは57号→55・59号→58号→56号という新旧関係である。57号住居址はコの字状口縁の甕形土器を、55・58・59号住居址は羽釜を、56号住居址は土釜をそれぞれ出土する住居址である。この例から、平安時代の住居址には少なくとも四時期あることがわかる。平安時代を通じて、集落形態が定着し継続しているのである。

1号、4号、6号溝は規模の大きな溝である。大溝の性格は明らかでないが、それぞれ時間差・形態差があり、同時に機能したものではないと考えられる。特に4号溝は、1号溝のように浅間B軽石の純層を埋土に挟み、埋土中に粒子として含んでいるので、1号溝より新しく中世の遺構であろう。走行もほぼ一致しており、1号溝の掘り換えとも考えられる。8～9号土壇も出土遺物等から中世の遺構である。

律令制による収取が崩壊するとされる平安時代末期に、この地域は大倉保(後に寮米御厨に転化)とされたところである。賀茂遺跡の調査で検出された住居址群は、その律令制の崩壊とともに歩んできた集落といえるだろう。平安時代の居住域は、奈良時代に比べると飛躍的に拡大している。周辺の小町田遺跡や清水田遺跡でも当該期の住居址が数多く検出されている。清水田遺跡の調査担当者は「神殿」「伴」などの墨書土器や施釉土器の豊富さから、「10～11世紀に展開する清水田遺跡を、大倉保の候補地と考えることもできる。」としている。大倉保の成立については、文献史の立場からも不明であるが、広い沖積地を臨んで立地する賀茂遺跡や小町田遺跡・清水田遺跡などの平安時代の遺跡群地域が、平安時代末期になって律令制崩壊に伴って不確実になった収奪を、寺社や地方官衙領である保として改編するための重要な地域に選ばれたことは予想に難くない。大きく広げた沖積地は、良好な生産適地だったはずである。

註1 生活環境の復元については、発掘調査の対象は地域の一部分であり、本稿で述べることには限界がある。今後の調査により訂正されることは否めない。

2 大木紳一郎他1980(文献2)

3 石塚久則1977(文献3a)

4 石塚久則1980(文献3b)に紹介されている。

5 能登健・石坂茂・小島敦子・徳江秀夫1983(文献4)

6 このような、5世紀末からの新しい居住域を筆者らは、「第1次新開集落」とよんでいる。(文献5・6)第1次新開集落には、溜井灌漑の採用による新しい農耕地拡大によって、初期農耕集落から離れたところに生活を始めるものと、初期農耕集落の周辺拡大

として新しく集落となるものの2者がある。本遺跡については、溜井のような技術革新を裏づけるものの存在が未知であるので、後者である可能性が高い。

7 石塚久則1977

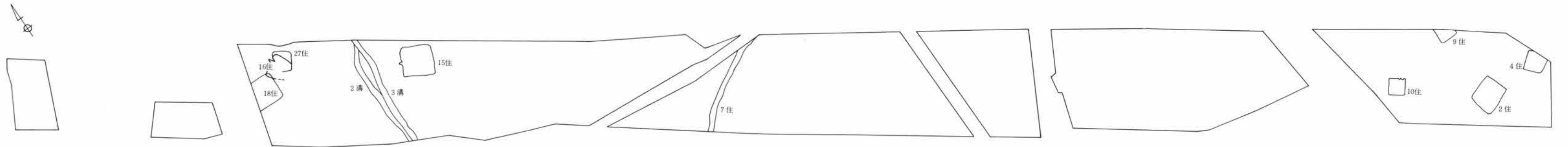
8 飯塚卓二1978(文献4)

右島和夫・藤巻幸男・柏崎敦子1979(文献1)

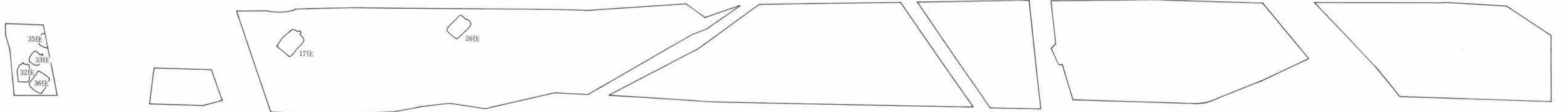
9 吉田東伍『大日本地名辞書』による。

10 1112(建久3)年『伊勢大神宮神領注文』には寮米御厨の名は見えず、鎌倉末期の『神鳳抄』には追加されている。

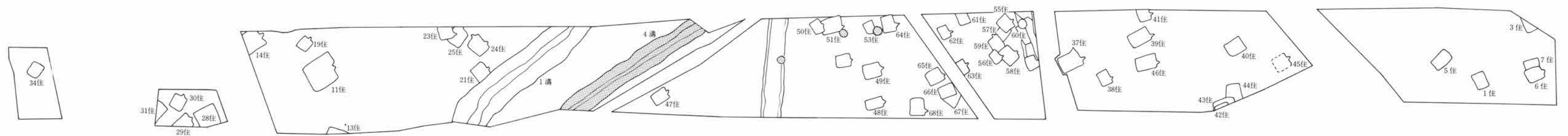
保および御厨の理解については、『群馬県百科辞典』によったが、成立の明らかな保は平安時代末とされている。



1. 古墳時代の遺構分布

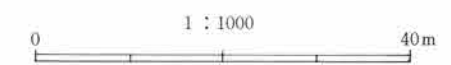


2. 奈良時代の遺構分布



3. 平安時代の遺構分布 (アミ部分は中世)

7 図 賀茂遺跡遺構分布図(2)



III 検出された遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と出土遺物

本遺跡では、前述のように住居址5軒と土壇12基が検出されている。しかし、縄文時代の遺構が分布する台地上は耕作等による攪乱が地表下60cmにまでおよんでいるため、遺構の大半は上半部を破壊されており、特に住居址では壁が検出できないものもある。住居址覆土出土とした遺物の中にはこの攪乱土中に含まれていたものもあるが、調査時に明確な分離ができなかった。そこで、住居址については出土遺物のうち、床面上10cm以内のレベルから出土したものには遺物番号に○を付け、床面密着あるいは直上から出土したものには「床直」と付記した。

遺構外からは早期末葉～後期前半にかけての土器群および石器が出土しているが、量的にははたって少なく、遺物の大半は遺構に集中していると言えよう。

なお、出土遺物は以下のように分類したが、類別は便宜的なものであることを付記しておきたい。

第1群土器 早期末葉 条痕文系土器群

第2群土器 早期末葉～前期初頭と思われる土器群

1類 縄文条痕土器

2類 条を縦位に施文する縄文土器

第3群土器 花積下層式土器

第4群土器 関山式土器

1類 口縁部あるいは胴部に竹管文を施すもの

2類 結節縄文を施すもの

3類 ループ縄文を施すもの

4類 正反の合燃の縄文を施すもの

5類 組紐を施すもの

第5群土器 黒浜式土器

1類 単節縄文を施すもの

2類 無節縄文を施すもの

3類 ループ縄文を施すもの

4類 附加条縄文を施すもの

A 軸縄の圧痕を主とするもの

B 附加条の圧痕を主とするもの

5類 半截竹管による平行沈線を施すもの

6類 半截竹管による爪形文を施すもの

7類 半截竹管による平行沈線と爪形文、施すもの

8類 沈線を施すもの

9類 櫛歯文を施すもの

10類 貝殻文を施すもの

11類 その他

III 検出された遺構と遺物

第6群土器	諸磯式土器	1類 諸磯a式土器
		2類 諸磯b式土器
		3類 諸磯c式土器
第7群土器	浮島式土器	
第8群土器	前期末葉の土器群	
第9群土器	五領ヶ台式土器	
第10群土器	加曾利E式土器	
第11群土器	堀之内I式土器	

(1) 住居址

J1号住居址 (第8図・PL₂)

位置 D-65・67グリッド。東側は調査範囲外のため未調査である。

形状 東側長辺が広がる台形状を呈すると思われる。長辺は西側で7.6m、短辺は北側で7mである。

壁 壁高は南側で10~25cm、北側で20~40cmで、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 北側約は水平であるが、南側では若干起伏がみられる。また、中央部分には僅かな窪みが認められる。状態は全体に軟弱である。

柱穴 合計15本のピットが検出された。主柱穴は不明である。

炉 検出されていない。焼土等も認められなかった。

重複 J1号土壇に切られている。

遺物の出土状態

土器のほとんどは小破片であり、覆土上面および耕作土中からの出土が大半であった。

出土遺物 (第9図~第13図)

土器は第1群・第3群~第8群土器が出土しており、総計約1050点である。このうち、第5群が約800点、第6群が170点である。なお、石器は14点が出土している。

第1群土器 (1)

表裏共に斜位の条痕が施された口縁部破片である。口唇部には刻みが施されている。胎土に少量の繊維と砂粒を含む。

第3群土器 (2)

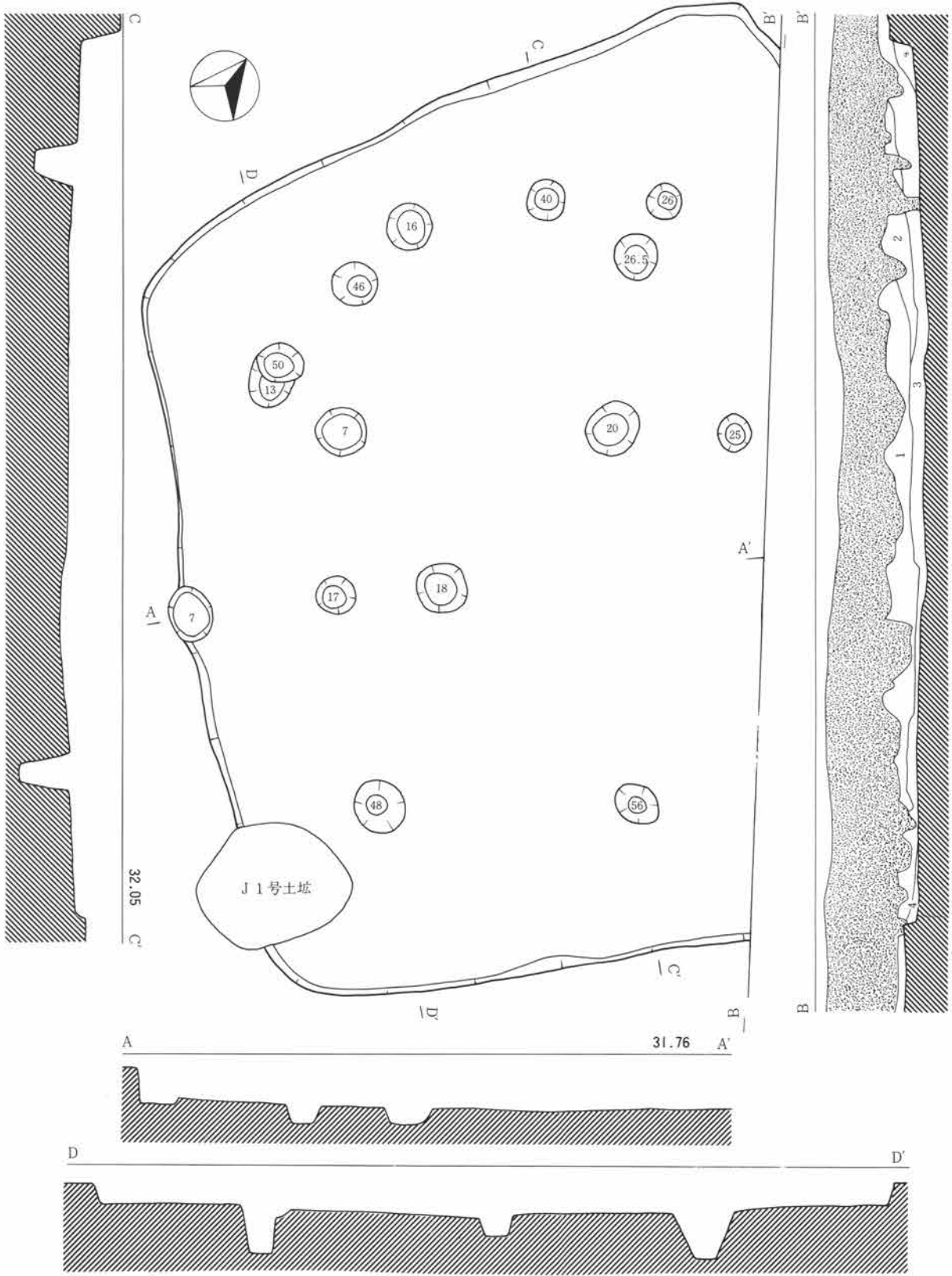
花積下層式土器の口縁部破片である。口唇には山形の突起が付けられる。文様は、口唇下に斜行沈線と刺突沈線で構成される文様帯をめぐらし、その直下に2本の隆線をめぐらして文様帯を区画し、口縁部にはL縄文の原体圧痕による文様を施している。なお、口唇下隆帯間には縄末端部(クロスエンド)による刺突が施されている。胎土には多量の繊維を含む。

第4群土器 (3-5)

関山式土器である。胎土には多量の繊維を含む。

2類 (4)

1点のみである。L縄2本による結縷縄文を施文したもので、口唇道に櫛状工具によるコンパス文が施されている。

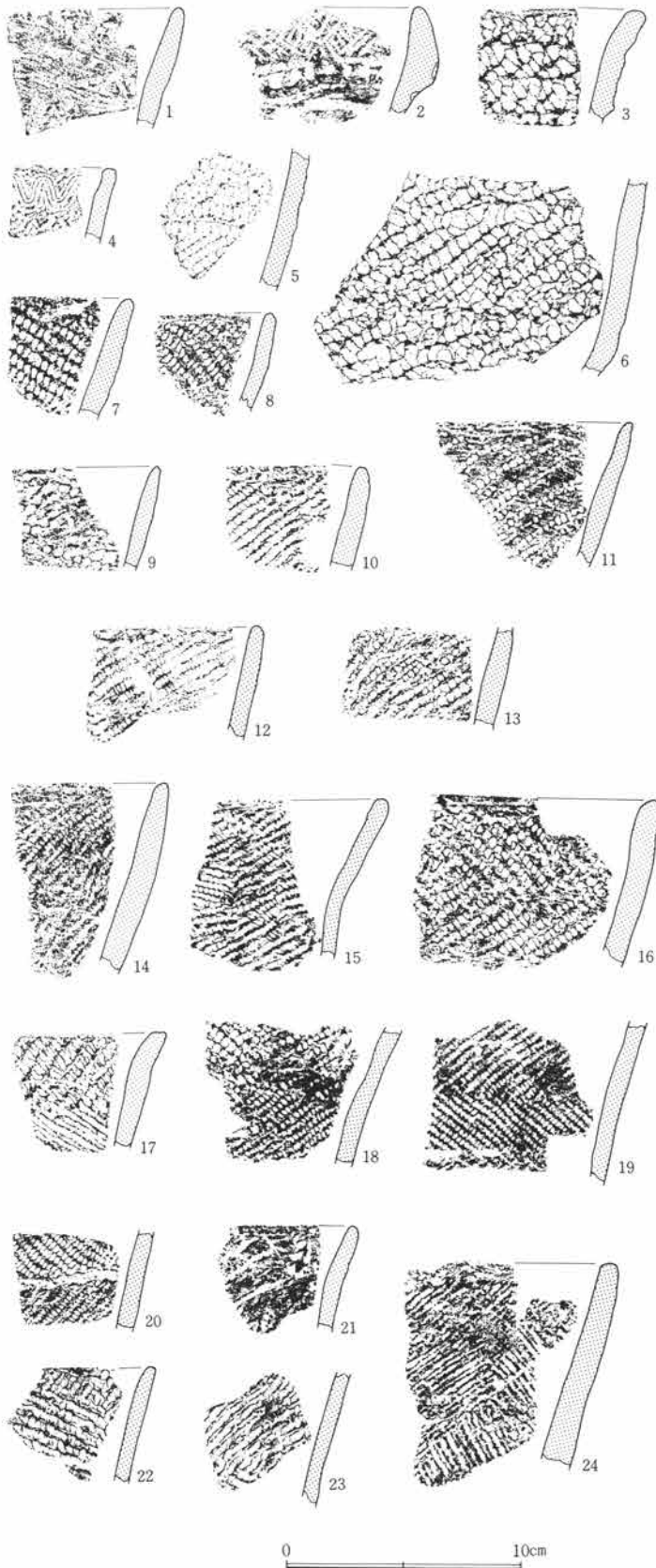


1. 黄褐色粘質土のブロックを含む茶褐色土。
2. 黄褐色粘質土のブロックを含む灰褐色土。
3. 粘質灰褐色土。
4. 黄褐色粘質土。

第8図 J1号住居址

0 2 m

III 検出された遺構と遺物



第9図 J1号住居址出土遺物

3類 (3・5)

ループ縄文を施文する土器で、ループ部分を多段施文している。原体は3がLR、5が0段3条LRである。

第5群土器 (6~54)

黒浜式土器である。胎土に多量の繊維を含む。

1類 (7~19)

単節縄文を施した一群である。口縁は全て平縁で、口唇部は丸みを持つものが多いが、先端が薄く尖がるもの(9・11)や、平坦なもの(15)もみられる。16~19は撚りの異なった原体を交互に施文して羽状あるいは菱形を構成している。縄文は7~10がRL、12が0段多条LR、11・13~15がLR、10~19がRLとLRである。

2類 (21~23)

無節縄文を施した一群である。縄文は21がL、22・23はLとRで菱形を構成している。

3類 (6)

ループ縄文を施文した土器である。縄文はLRで、ループ部分の重畳施文と斜縄文を交互に施文している。比較的太い、稚せつな撚りの原体を使用しており、施文も粗雑である。

4類 (24~38)

附加条を施した一群である。

A (24・33~38) 軸縄を主体とするものを一括した。附加される縄は1本のみで、軸縄の条2本毎に現われる。原体は24がL+1・33がLR+L、34がRL+L、35・38がLR+R、36がRL+RとLR+R、37がRL+Rとバラエティは豊富である。また、24・34・36は菱形の構成をとるものと思われる。

1 縄文時代の遺構と出土遺物

B (25~32) 附加した縄を主体としたものである。25はR縄2本を附加した原体を施文した土器である。26~30はR縄2本を附加したものとL縄2本を附加した2種類の原体で、羽条あるいは菱形に構成される。32はR縄2本を附加したものとRとLを附加した2種類の原体で菱形を構成するものと思われる。以上のうち、軸縄を観察できるのは27・29の2点で、27は附加条第1種 $L R + \frac{L}{L}$ と R 、 $L + \frac{L}{L}$ 、29は附加条第2種 $R + \frac{R}{R}$ 、 $L + \frac{L}{L}$ である。

5類 (39~45)

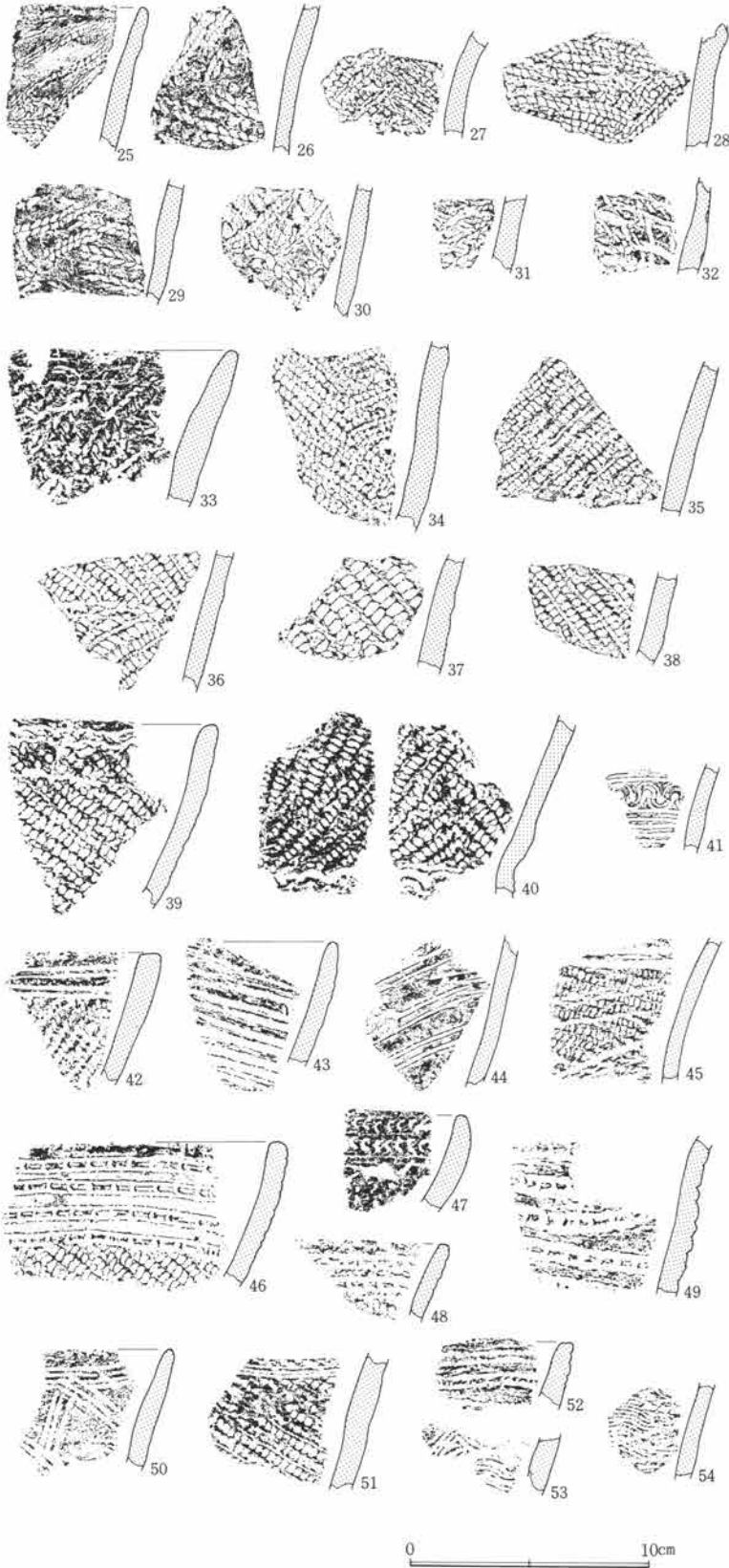
竹管による平行沈線が施文された一群である。39・40は頸部がくの字に屈曲する土器である。口縁部にRLとLRの縦位羽条縄文を施し、口唇直下および屈曲部にコンパス文をめぐらせている。41は横位の集合沈線間にコンパス文を施す土器である。42は口唇下に2条の平行沈線をめぐらし、以下にLRの縄文を施している。43・44は平行沈線を斜位に集合施文する土器である。43は波状口縁を呈す。

6類 (46~49)

爪形文を施す一群である。46~48は口唇下に2条あるいは4条の平行沈線を伴う爪形文をめぐらし、以下に縄文を施している。縄文は46・48がRL、47がLRである。49は爪形文のみで文様を構成する。

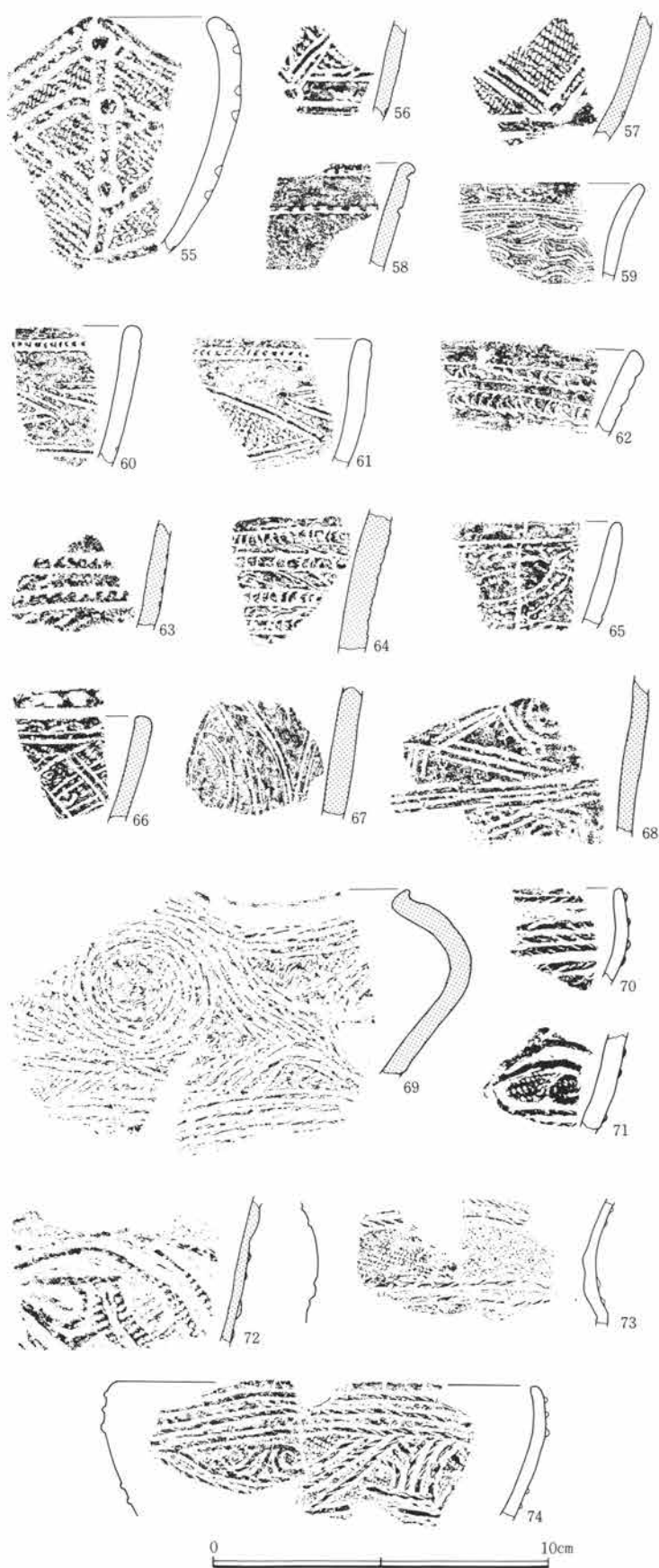
9類 (50・51・53・54)

櫛歯文を施す一群である。50・51は3条を単位とする櫛状施文具



第10図 J1号住居址出土遺物

III 検出された遺構と遺物



第11図 J 1号住居址出土遺物

で直線的な文様を施した土器で、51の縄文は附加条第1種RL+Lである。53・54は櫛状施文具で横位の波状文を施した土器である。

11類 (20・52)

その他の土器である。20は前々段反撚LRRと反撚RRで羽状縄文を構成する土器である。52は口縁部に数条の、刺突を施した平行沈線をめぐらす土器である。

第6群土器 (55~74・77)

諸磯式土器を一括した。

1類 (55~61)

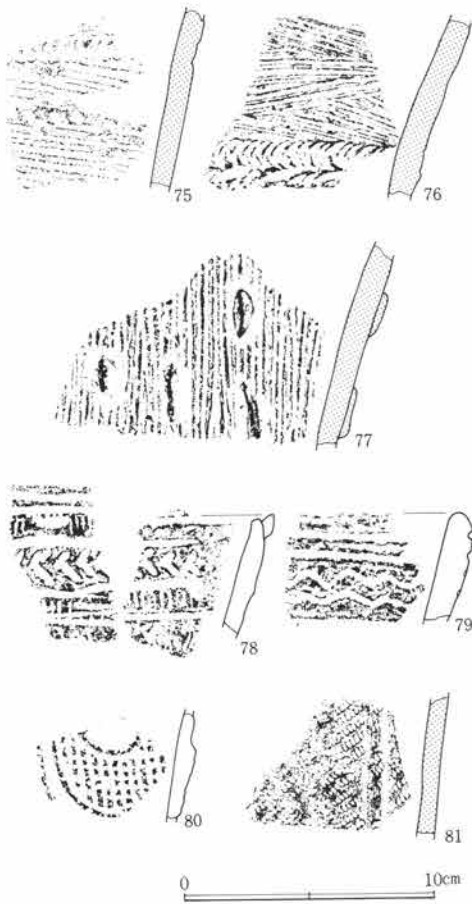
諸磯a式土器である。55~57は半截竹管による平行沈線で菱形の文様を構成する土器である。55・56は沈線の交差する部分に竹管による円形刺突文が施される。地文は3点ともRLで、56は文様間の縄文が磨消されている。58は口縁部に2条の平行爪形文をめぐらし、以下に縄文RLを施す土器である。59は口縁部に櫛状施文具で平行線をめぐらし、以下に同施文具で波状文を横位に施している。60・62は鉢形を呈する土器と思われる。文様は口縁部に平行爪形文を一条めぐらし、以下に木の葉文が施文される。地文はLRの縄文で、区画外の縄文は磨り消されている。

2類 (62~74)

諸磯b式土器である。62~64は口縁部に数条の平行爪形文をめぐらす土器で、64は爪形文間に斜位の沈線が施されている。なお、62は口唇部が外削ぎ状を呈する。地文は63にのみLRの縄文が施されている。

65~69は半截竹管による平行沈線で文様を施す土器である。65・67は孤状

1 縄文時代の遺構と出土遺物



第12図 J 1号住居址出土遺物

の文様を施す土器である。65は口縁部に平行沈線を一条めぐらし、以下に木の葉文様が施される。地文はともに縄文RL。66は口縁部に平行沈線を一条めぐらし、以下を斜稿子状の文様で構成している。また、口唇部には指頭圧痕状の刺突が施される。地文は縄文RLで、L繩の結節縄文が間隔をおいて横位に施されている。68・69は浮線文土器の文様を沈線に置き換えた土器である。69は強く内湾する波状口縁を呈する土器で、文様は口唇直下に一条の凹線および2条の平行沈線をめぐらし、胴部中程に数条の平行沈線をめぐらして文様帯を区画し、その間に3条を単位とする平行沈線で渦巻文および孤線文を施文して文様を構成している。また、平行沈線間には斜位の刻みが施される。68もほぼ同様の構成であるが、平行沈線は2本を単位としており、文様は69に較べて直線的である。また沈線間に刻みは施されない。地文は69がRLの縄文である。

70～74は浮線文で文様を施す土器である。73は胴部中程が緩やかに括れる深鉢形土器の胴部破片で、2本を単位とする浮線を4～5cmの間隔をおいて帯状にめぐらしている。74は口縁部が緩やかに内湾する深鉢形土器の口縁部破片である。文様は口縁部および胴部中程に3条の浮線をめぐらし、その間に3条の浮線を波状に施して半月状の区画をつくり、その

中に「兀」状の文様を施している。72も74と同様の文様が施されるが、他に較べて器壁が薄く胎土に大粒の片岩を含んでおり、異質な土器である。いずれも地文はRLの縄文で、浮線には斜位の刻みが施されるが、72は浮線上にも縄文RLが施されている。

3類 (77)

諸磯c式土器である。全面に半截竹管による縦位の集合沈線を施文し、その上に縦長の貼付文を施している。

第7群土器 (75・76)

浮島式土器を一括した。半截竹管による集合沈線で菱形の文様を構成し、波状爪形文で文様帯を区画している。75では沈線間に連点状の刺突文が施される。2点とも胎土に多量の細砂粒を含む。

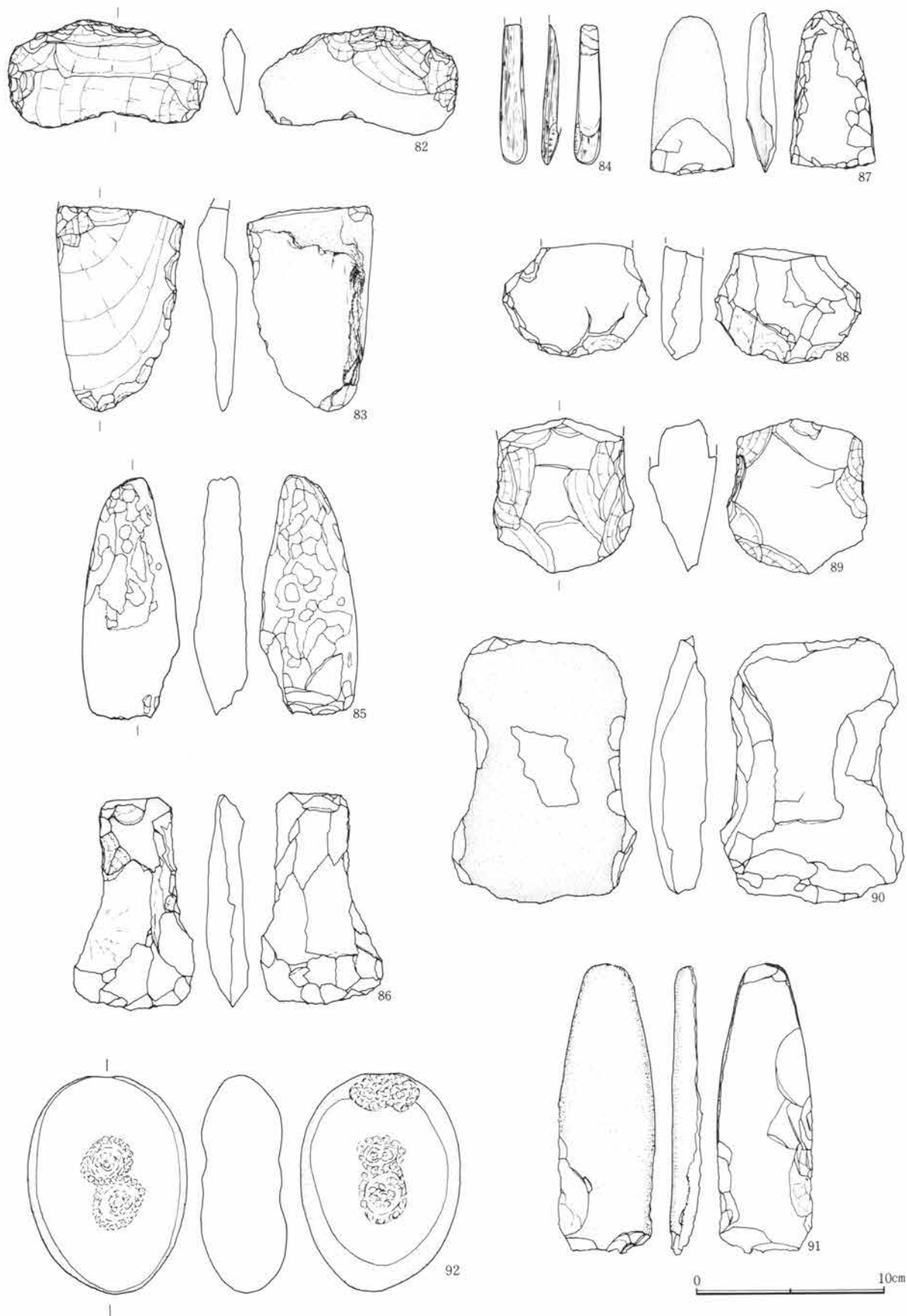
第9群土器 (78～81)

五領ヶ台式土器を一括した。78は口縁部上端および頸部に刻みを施した隆帯をめぐらし、その間にくの字状の沈線を施して口縁部文様を区画し、胴部には縦位の結節縄文を施している。79は口唇下に2条の沈線をめぐらし、その下に2本の沈線による鋸歯文を施している。80は稿子状沈線で充填された区画文と印刻文で文様が構成される土器である。81は隆帯を垂下させた胴部破片で、全面に縄文RLを縦位施文している。79・81は胎土に多量の金雲母・砂粒を含む。

石器 (82～95)

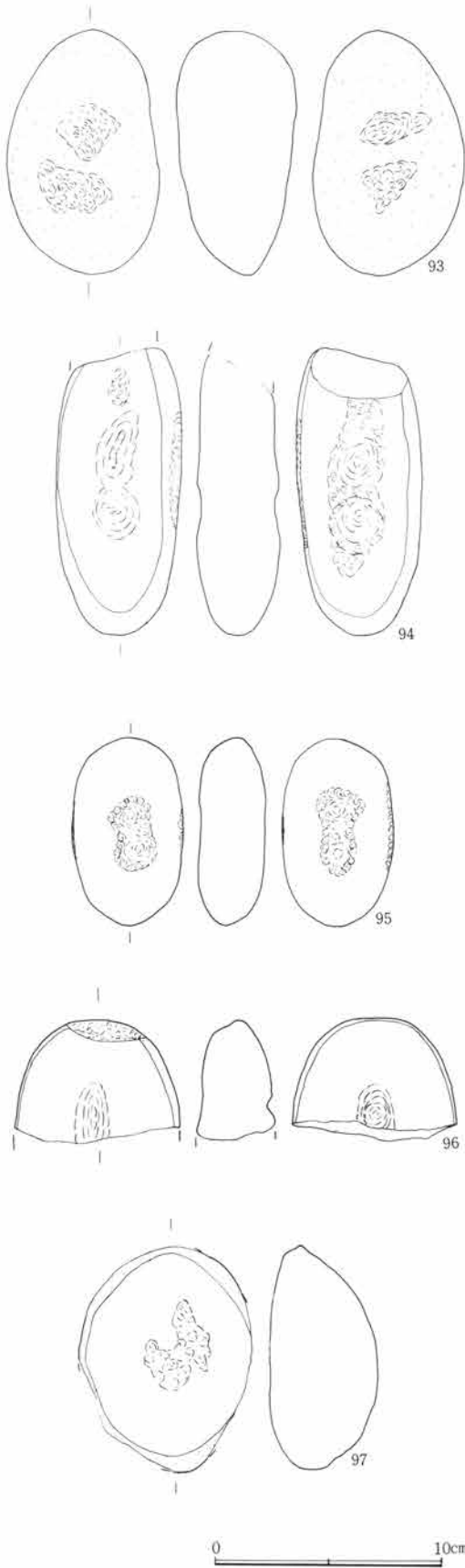
82・83は剥片石器である。82は片面に自然面をのこす縦長の剥片を素材に、長辺の一辺を刃部とし、他の

III 検出された遺構と遺物



第13図 J 1号住居址出土遺物

1 縄文時代の遺構と出土遺物



第14図 遺構外出土遺物

周縁部に調整剥片を加えている。刃部には横位の摩痕が明瞭に認められる。石質は頁岩。82は片面に自然面を残す横長剥片を素材として、下端から右側縁の部分に刃部調整を加えているが、使用による摩痕は下端から右側縁下半にのみ認められる。石質は石英斑岩。

84は小型の棒状を呈する石器で、縦方向の圧力で欠損している。幅1.2cm、厚さ0.8cmで断面形が楕円形を呈し、先端部は丸みをもつ。全体が荒い研磨で仕上げられており、研磨によるスジ痕を明瞭に残す。石質は軟質頁岩。

85は磨製石斧を転用した敲石である。体部に荒削り痕を残している。石質は角閃片岩。

86～91は打製石斧である。87は撥形の完形品であるが、刃部に使用痕は認められない。87・91はいずれも自然面をそのまま利用したもので、調整は剥離面の縁辺および刃部のみに施されている。87は小型品で、刃部は片刃で直刃状を呈する。88～90は未製品である。石質は86が輝緑凝灰岩、87が緻密安山岩、他はホルンフェルス。

92～97は磨石である。いずれも両面に比較的大きく集合打痕が認められる。92・94～97は両面に平坦面をもつ。95は器面が荒れており、97は片面が剥落しているため不明であるが、いずれも両平坦面に研磨面が形成されているものと思われる。93はややいびつな形状で、研磨面は認められない。なお、94・95は側面にも敲打痕が認められる。石質は95が角閃ヒン岩、他は安山岩。

この他に磨製石斧片1点、打製石斧片2点、同未製品1点、磨石破片1点、チャート剥片14点と剥片・礫が出土している。石器は合計21点出土しており、本遺跡住居址中では最も多い。

所見

本住居址は他に比べて大型で形状が不正形であり、また黒浜式土器と諸磯b式土器が混在して出土することから、重複を想定しながら調査にあたったが、有効な所見は得られなかった。諸磯b式土器の大型破片も出土しているが、床面出土土器は黒浜式土器であり、また黒浜期のJ1号土壇に切られていることから、本住居址は黒浜期と判定される。

III 検出された遺構と遺物

J 2号住居址 (第15図)

位置 B-55グリッド。南側コーナーは未調査である。

形状 東南短辺がやや拡がる長方形。規模は長辺6.3m、短辺は北西側で3.3m、中央部で5.2mである。また、東南短辺のコーナーは湾曲している。

壁 壁高は北側で18cm、南側で23cmをはかり、やや傾斜をもって立ち上がる。

床面 部分的に高まりが認められるものの、ほぼ平坦な面を呈する。状態は軟弱である。

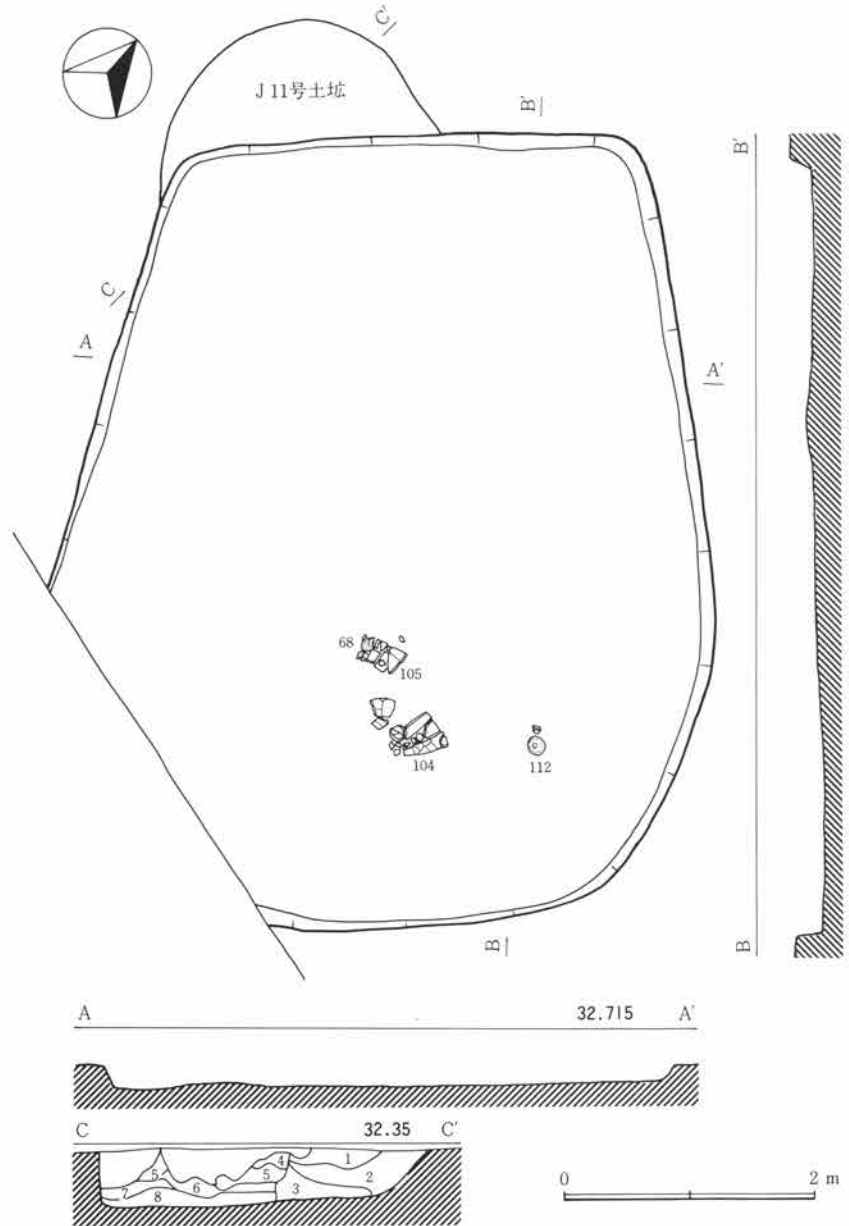
柱穴 未検出。

炉 未検出。

重複 J 11号土塚を切っている。

遺物の検出状態

今回調査された住居址の中では遺物量の最も多い住居址である。遺物の多くは覆土中から出土しているが、床面からも比較的大型の土器片が出土している。深鉢形土器(105・108)と環状石器(114)が、住居址中央からやや南東寄りの床面に密着した状態で検出された。また、覆土最上面(遺構確認面)から大型石皿の完形品(115)が出土している。



1. しまりのある灰褐色土。
2. 黄褐色粘質土の粒子を含む灰褐色土。
3. ②と④の混土。
4. 褐色の粒子を含む黄灰色粘質土。
5. 粒子の細かい灰色土。
6. 黄色粘質土のブロックを含む灰色土。
7. やや粒子のあらい黒色土。
8. 黒褐色土。

第15図 J 2号住居址

1 縄文時代の遺構と出土遺物

出土遺物 (第16図～第25図)

土器は第1群～第6群が出土しており、総数は約900点である。このうち第5群土器が全体の約9割強を占めており、第4群土器がそれについている。

第1群土器 (1～4)

4点出土している。1は表裏共に斜位の条痕が施されている。2～4は表面に斜位の条痕が施され、裏面は擦痕となっている。いずれも胎土に少量の繊維と砂粒を含む。

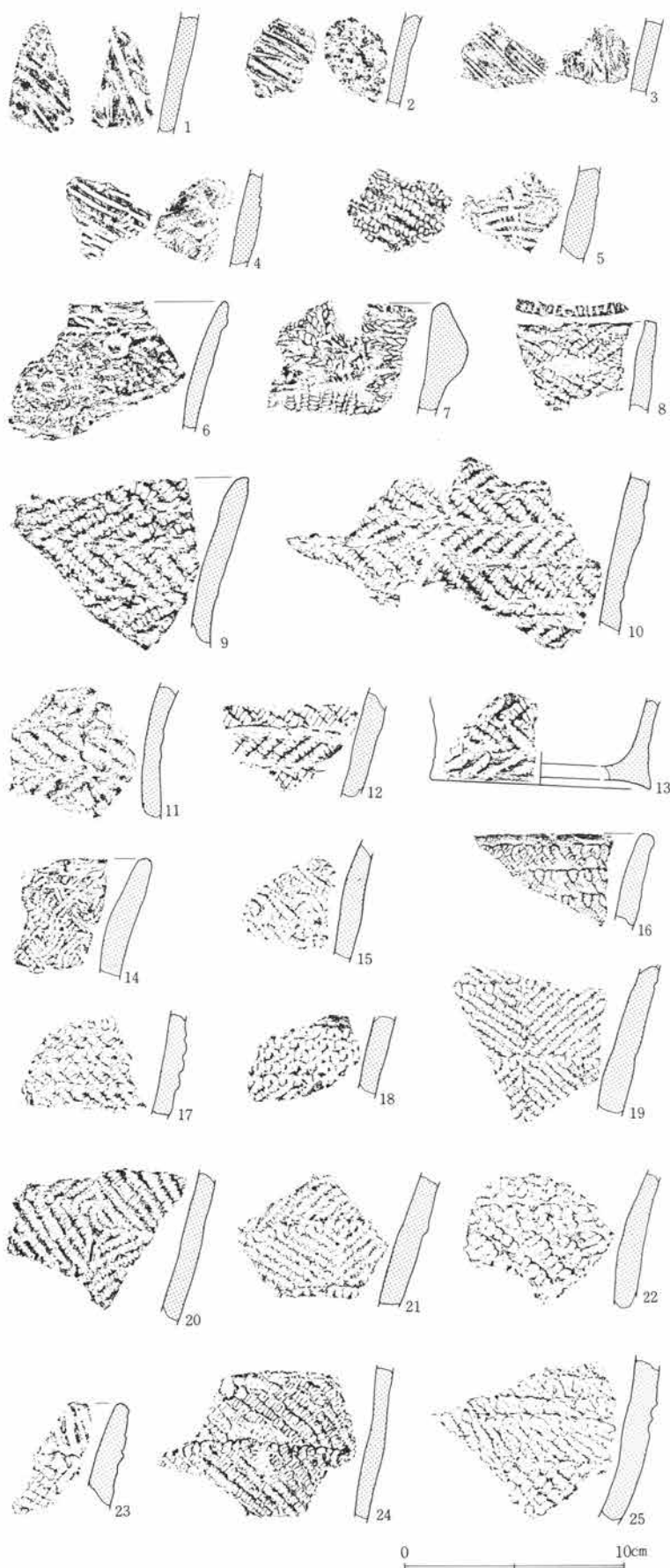
第2群土器 (5)

1類が1点のみ出土した。表面に横位施文によるRLの斜縄文が施され、裏面には横位の条痕が明瞭に施文されている。胎土に繊維を含む。

第3群土器 (6～13)

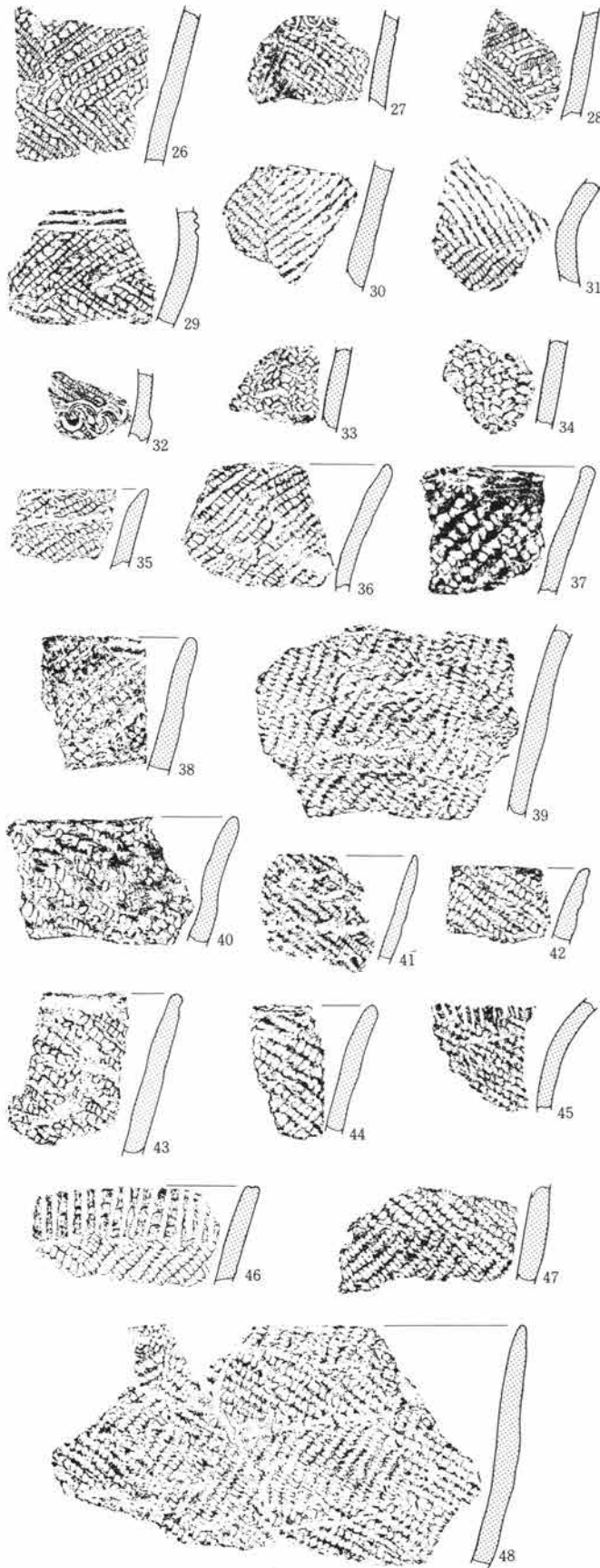
8点が出土した。6・7は口縁部文様帯をもつ土器である。6は口縁部が緩やかに外反する土器で、文様は口唇下に刻みを施した1条の隆線をめぐらし、口縁部にR縄2本L縄2本による撚糸圧痕で蕨手状の文様を構成している。また、文様の要点には竹管による円形刺突文が施される。7は口縁部に山形に肥厚した突起をもつ土器で、文様は幅の狭い口縁部にR縄とL縄各1本による撚糸圧痕を横位に数条施し、胴部には0段多条RLの縄文を条を縦位に施している。

8～12は羽条縄文が施された土器である。8は口唇部が角頭状を呈し、刻みが施されている。口縁部には0段3条RLの縄文を縦横に交互に施文して羽条縄文を構成している。9～13は0段3条の撚りの異なる2種類の原体を交互に横位施文して、羽条縄文を構成した土器である。原体はいずれも短か



第16図 J2号住居址出土遺物

III 検出された遺構と遺物



第17図 J 2号住居址出土遺物

いものを使用しており、一帯毎に原体の末端をしばった部分の圧痕がみられる。器形は胴部がわずかに張り出し、口縁部がやや外反しながら開口する深鉢形を呈すると思われる。9は口縁部破片で、口唇は内削ぎ状を呈する。13はわずかに上げ底状を呈する底部破片で、端部はやや外側に突出している。

いずれも胎土に多量の繊維を含んでいる。

第4群土器

関山式土器である。いずれも胎土に多量の繊維を含む。

2類 (14・15)

2点出土した。14は全面に結節縄文が施文された土器であろう。原体はR縄とL縄各1本を結節したもので、圧痕は矢羽根状となる。また、0段3条縄を使用している。15はL縄2本による結節である。

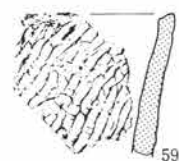
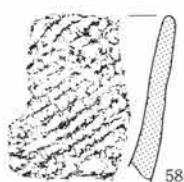
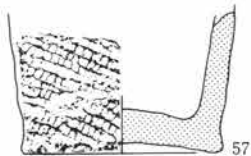
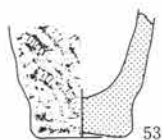
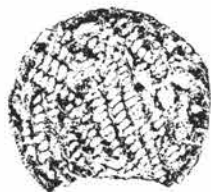
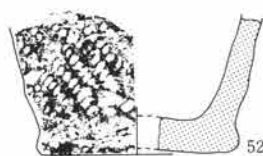
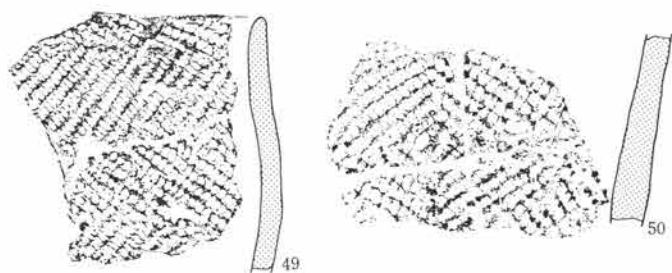
3類 (16~25)

ループ縄文が施された一群である。16~18・23は口縁部破片であるが、17・18は口唇部分を欠損している。口唇部は16・23とも丸みをもつ。16・18は口唇下に若干の無文部が設けられており、17・23は幅広い無文部に半截竹管による縦位の沈線が施されている。施文は16~18はループ部分の重畳施文、19~21・23は撚りの異なった2種類の原体を交互に施文して羽条を構成している。22・24・25は斜縄文を多段に施文しているが、22・25ではループ部分の重畳施文が併用されている。縄文原体は16・17が0段多条RL、18が0段多条LR、19・21が0段4条RL・LR、20・24が0段3条RL・LR、22・23がRL・LR、25は2種類のRL原体を使用している。

なお、19・21は2段を撚る段階で反撚りを加えている可能性が高い。

4類 (26~29・32)

正反の合を施文した一群である。いずれも胴部破片で、27・32には半截竹管によるコン



第18図 J 2号住居址出土遺物

1 縄文時代の遺構と出土遺物

パス文、29には平行沈線文が施される。縄文は燃りの異なった2種類の原体を交互に施文して、羽条あるいは菱形状に構成されるものと思われる。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ R \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} R \\ L \end{array} \right\}$ と $L \left\{ \begin{array}{l} L \\ R \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} R \\ L \end{array} \right\}$ で、26・27・32は0段3条縄を使用している。

6類 (30・31)

いずれも胴部破片で、0段3条RLとLRを交互に施文して菱形縄文を構成するものと思われる。

7類 (33・34)

組紐を施文した土器で、2点とも横位に施文されている。原体は34が32は不明。

第5群土器 (35~111)

黒浜式土器である。いずれも胎土に多量の繊維を含む。

1類 (35~44・47~57)

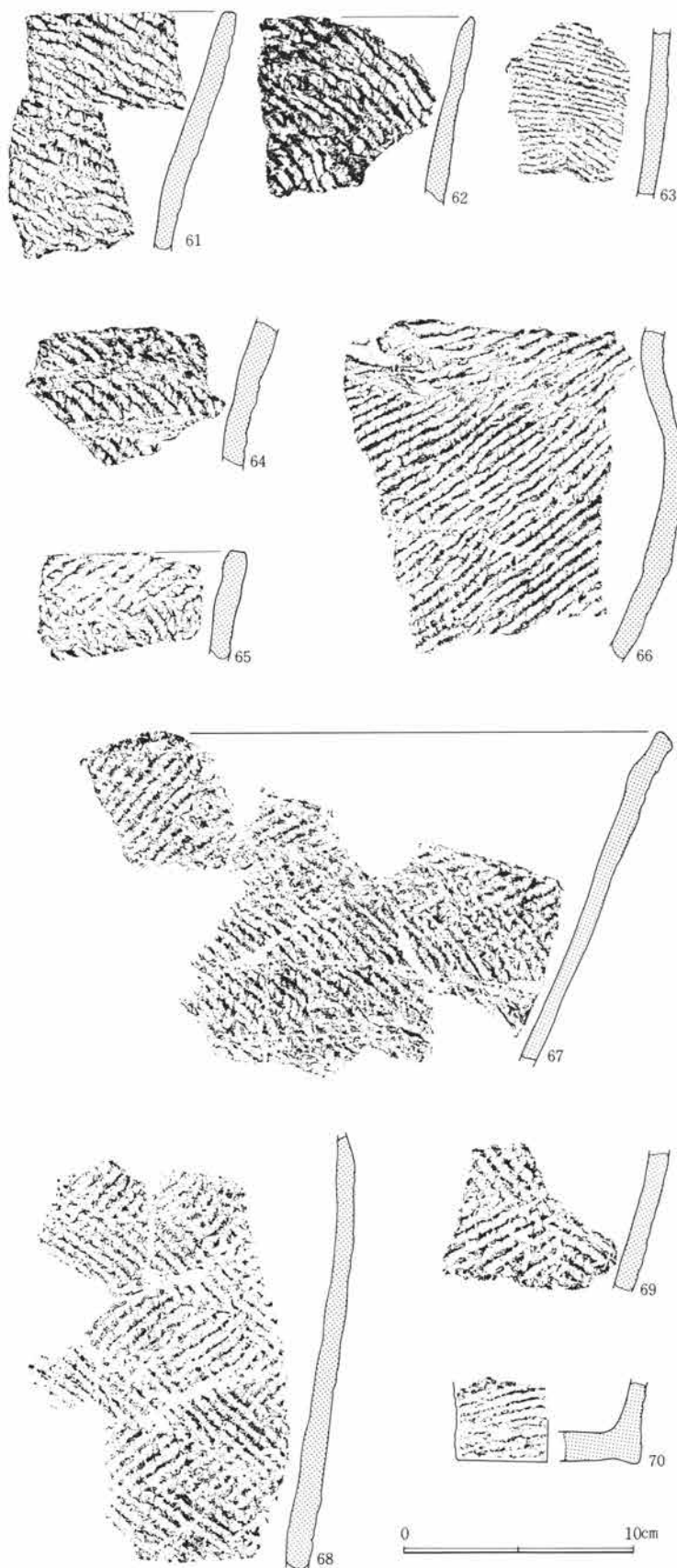
単節縄文が施されているものを一括した。本住居址出土の黒浜式土器の約7割を占めている。口縁部は直線的に開口するものが多いが、外反するもの(36・45)も認められる。口唇部は丸みをもつものも多く、端部が尖るもの(35・41・48)、平端なもの(42・56)も認められる。

35~39はLR、40~44はRLの斜縄文が施された土器で、35・39・41は0段多条縄を使用している。

47~51は羽条縄文を施文した土器である。47~49・51はRLと0段3条LRを交互に施文した土器で、羽条の変換部分では菱形となる。

52~57は底部である。ほとんどが若干上げ底状を呈し、端部が外側に突出する形態をとる。55は底面が平坦で、端部の突出も弱い。また、52は底面に

III 検出された遺構と遺物



第19図 J 2号住居址出土遺物

まで縄文が施されている。縄文は全てRLで、55は0段多条である。

2類 (57~70・106・108・110)

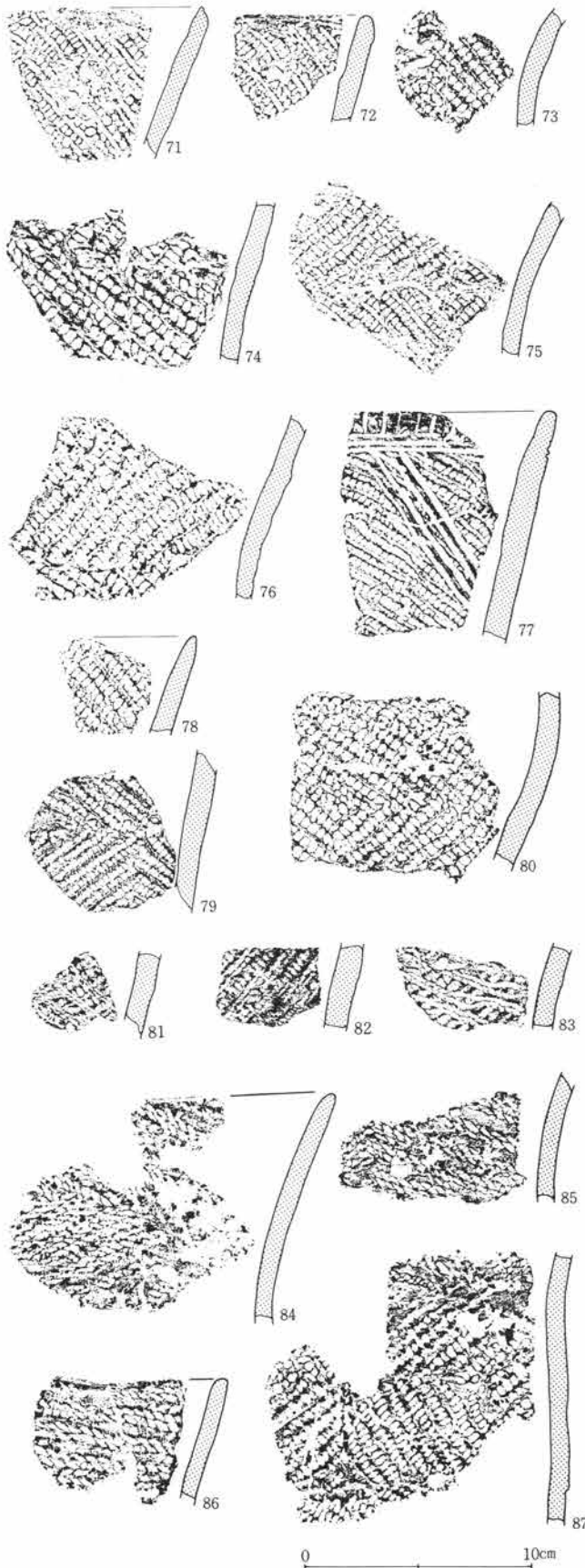
無節縄文が施文されたものを一括した。口唇部は、1類同様、丸いもの(58)、尖るもの(62)、平坦なもの(59~61・65・67・106・108・110)とがあり、平坦なものには、内削ぎ状・外削ぎ状・角頭状のパラエティがある。縄文は口縁端部までしっかり施文されたものが多い。施文はほとんど横位施文であるが、63は斜位に施されている。

58~60・66・108・110は縄文Lを施文した土器である。108は底部から直線的に開く小型の鉢形を呈する土器で、口縁の一部および底部を欠損している。縄文は胴下半まで施され、底面から2cm程は無文である。109は直線的に開く口縁部の大形破片である。縄文はやや散漫に施文されている。

61~64・105はRの斜縄文を施した土器である。105は胴上半部が直立し、胴部中程が張り出した深鉢形を呈する。本遺跡では大形の部類に属する土器で、内面は丁寧に研磨されている。

65~69は羽条縄文を施した土器である。65はRの縄文を縦横に施文して羽条を構成している。67は波状口縁の土器で、口縁部にはL、胴部にはRの縄文を施している。口縁部文様帯を意識しているのかもしれない。68・69はRとLを交互に施文して羽条を構成しており、施文の変換部では菱形状を呈

1 縄文時代の遺構と出土遺物



第20図 J 2号住居址出土遺物

する。

70は底部破片である。底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦で、端部がやや張り出している。縄文はL。

4類 (71~76・78~87・89・106・108・111) 附加条が施された一群である。

A (71~76・78~83・111)、軸縄が主体となるものを一括した。附加条第1種と第2種とが認められ、バラエティに富んでいる。

71~80は附加条第1種の原体を施文した土器である。ほとんどのものが撚りの異なる2種類の原体を交互に施して、羽条あるいは菱形縄文を構成しているが、同一原体を施文方向を変えることによって、同様に構成されるもの(73・111)もある。71・72・75は1本の縄を附加したもので、軸縄の条2本毎に附加条1本が現われる。73・74・76は、軸縄の条間に附加条を各1本ずつ加えたもので、軸縄1本毎に附加条1本が現われる。78~80・111は2本の附加条を加えたもので、軸縄の条2本毎に附加条2本が現われる。11は胴部中程がくの字状に屈曲して上半が直線的に開く、波状口縁の深鉢形土器で、全面に附加条のみが施される。附加条は1原体で、屈曲部下半では縦横に施文して菱形の文様を構成しているが、上半の構成は不明である。原体は71・72がRL+R、73がRL+L、74・76がRLF R・RとLR+R・R、75はRLとLRで附加条は不明、78がRL+ $\frac{L}{L}$ 、79・80がRL+ $\frac{L}{L}$ とLR+ $\frac{R}{R}$ 、11がRL+ $\frac{R}{R}$ である。

81~83は附加条第2種である。81はLR+ $\frac{R}{R}$ 、82は? $\frac{L}{L}$ 、83はLR+ $\frac{L}{L}$ である。

B (84~87・89・106・108)

附加した縄の圧痕を主とする一群である。附加条は口縁部文様として使用されるもの(84~87)と、地文として使用されるもの(106・102)とがある。

84~87は同一個体である。器形は頸部がわずかに括れて口縁部が緩く外反する深鉢形を呈す

III 検出された遺構と遺物



第21図 J 2号住居址出土遺物

る。文様は口縁部に0段多条LR（軸繩は不明）の附加条で菱形の文様が構成され、胴部に0段3条RLとLRで菱形繩文が構成される。89は口縁部にR繩2本とL繩2本を付加した2種類の原体が施された土器である。軸繩は不明。106・108は2種類の附加条で菱形の文様を施した胴部の大形破片である。108は上げ底を呈す。原体は106が $R + \frac{R}{R}$ と $L + \frac{L}{L}$ 、108が $R + \frac{R}{R}$ と $L + \frac{L}{L}$ である。

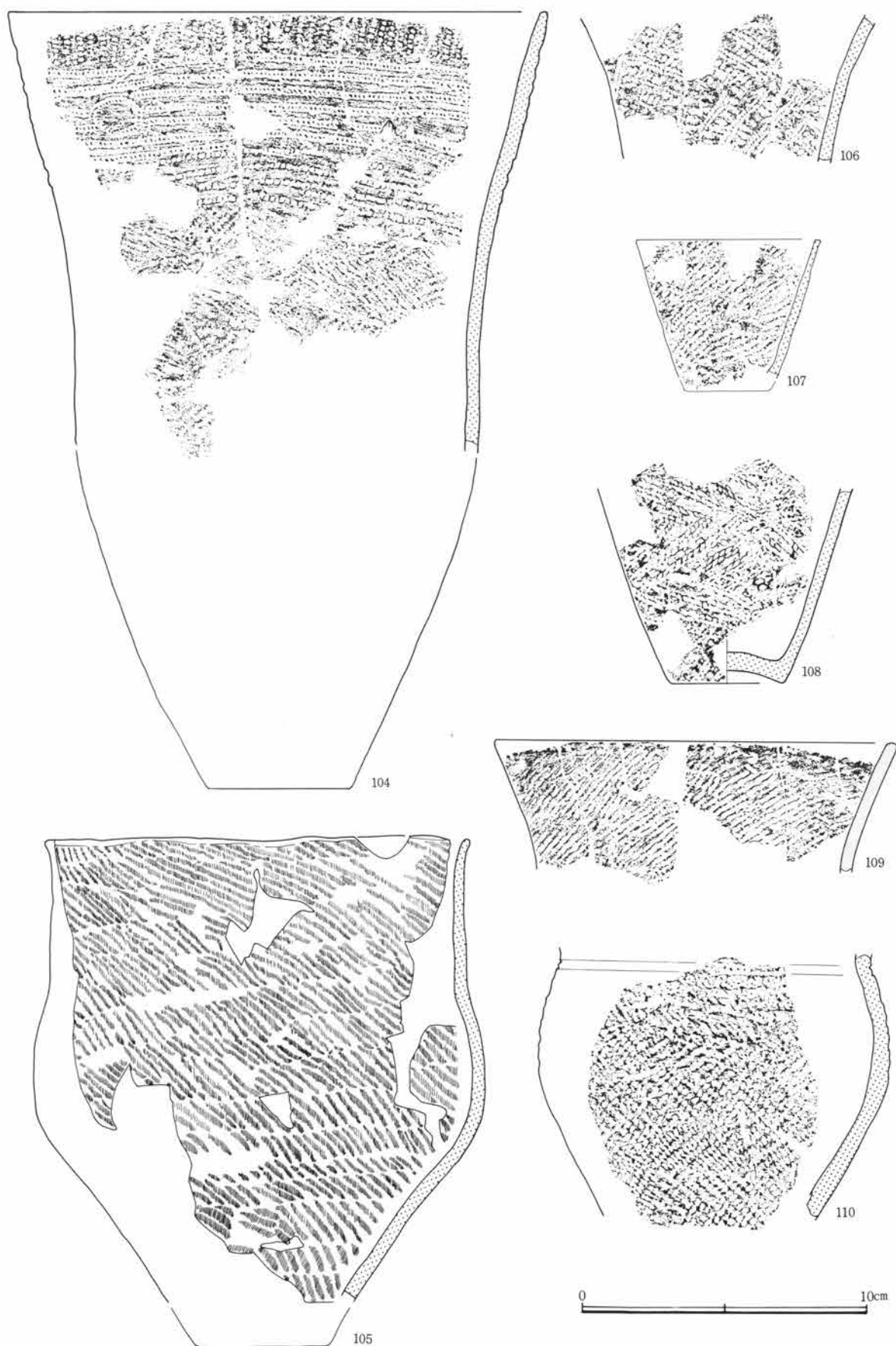
5類（45・46・77・88・90）

45・46・77・88は口縁部に縦位の沈線を施す土器である。いずれも口縁部は無文であり、繩文は沈線下から施される。縦位沈線は1本ずつ施されるもの（46・77）と半截竹管で施されるもの（88）とがある。45は沈線下に0段3条LRの繩文が施されている。46は沈線下にRLと0段3条LRを交互に施して羽条繩文を構成している。施文は沈線を施した後に繩文が施される。77は縦位沈線下を2条の平行沈線で区画し、胴部に2条の平行沈線で文様が描かれる。地文は附加条第1種（4類A） $R + \frac{L}{L}$ 。88は胴部に附加条第2種（4類B） $RL + \frac{R}{R}$ と $RL + \frac{L}{L}$ で菱形の文様が構成される。施文は附加条施文後に沈線が施される。90は胴部に3条の平行沈線がめぐる土器で、繩文はRLである。

6類（91・93～99・110）

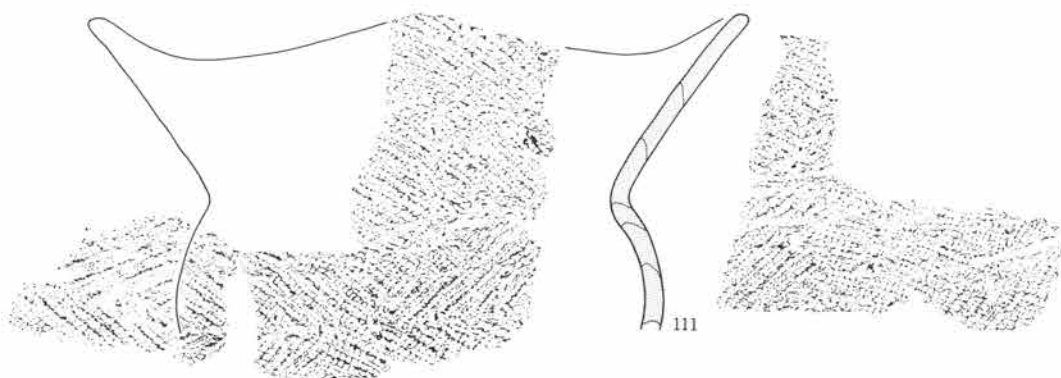
爪形文を施す一群である。器形は、胴部中程がくの字状に屈曲するもの（91・98・110）、曲線的に

1 縄文時代の遺構と出土遺物



第22図 J 2号住居址出土遺物

III 検出された遺構と遺物



第23図 J 2号住居址出土遺物

括れるもの(99)、括れないもの(95)とがある。また、波状口縁を呈するものが多く、形状は直線的に開くもの(91・97)や外反するもの(95)が多く、内湾するものは少ない。いずれも胴上半部に幅広く文様帯が構成される。91は口縁部および胴部中程に2条の爪形文をめぐらして文様帯を区画し、区画内に同2条の爪形文で「()」状の文様を施している。また、文様帯下にはLRの縄文が施される。94は胴部破片で、2条の爪形文下にRLとLRによる菱形縄文が施される。95~99は菱形の文様が構成される土器である。97は菱形の区画内に渦巻状の文様が施されている。95は文様帯下に0段3条RLとLRで羽条縄文が施される。110は胴部括れ部に平行沈線をめぐらし、その下にループ縄文を数帯施文し、以下をRLとLRによる菱形縄文で構成している。また、平行沈線間には爪形文が空白部をおいた状態で施される。93も110と同じく、空白部をおいた爪形文を横位に数条施した土器である。

7類 (92)

1点のみである。比較的細い半截竹管を使用しており、平行沈線は爪形文に沿って施されている。

9類 (103)

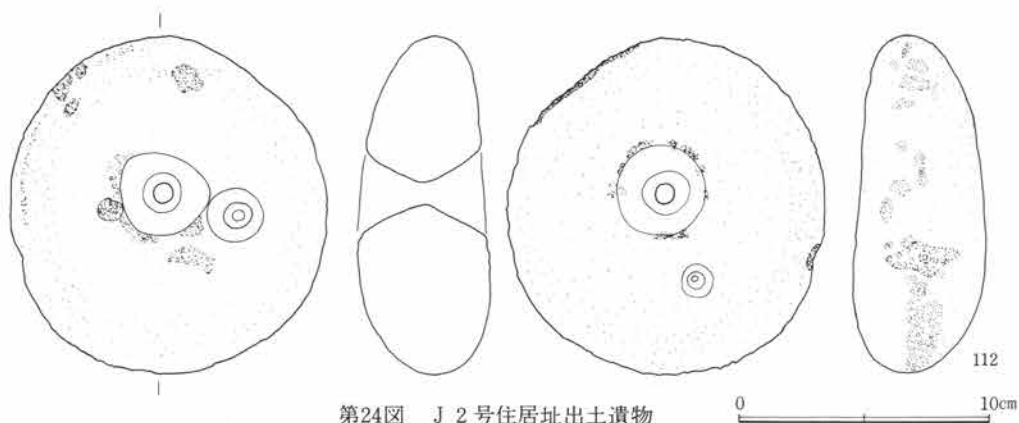
小片1点が出土した。厚手の土器で、文様は楯状具による刺突文が横位に連続して数条施されている。

10類 (101・103)

2点のみ出土した。いずれもハイガイ類による背圧痕文が、全体に密に施されている。

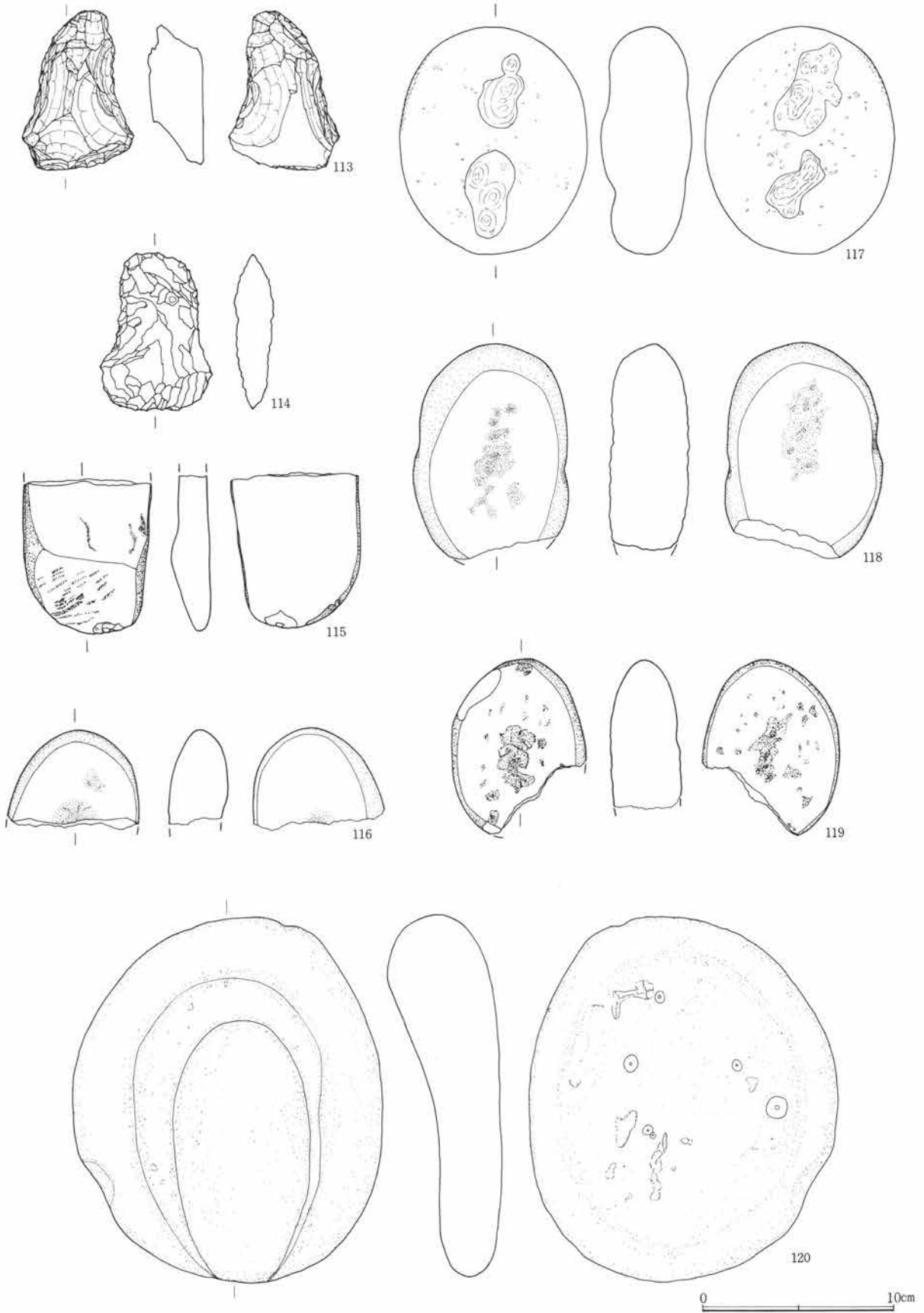
11類 (100・104)

100は口縁部に隆帯と爪形文で文様が構成される土器である。隆帯上にも爪形文が施される。104は胴部が



第24図 J 2号住居址出土遺物

1 縄文時代の遺構と出土遺物



第25図 J 2号住居址出土遺物

III 検出された遺構と遺物

わずかに張る大型の深鉢である。文様は口唇下に櫛状具による縦位の刺突文をめぐらし、その下に爪形文を6条横位にめぐらし、さらに口唇下と同様の刺突文を横位に連続して4条めぐらして文様帯を区画し、以下にRLとLRを交互に施文して菱形縄文が構成される。また、横位に施された爪形文の中程に、円形の文様が1つだけ施されている。爪形文は凹面をねかせて押し引き状に施文されている。櫛状具は5本を単位としており、わずかであるが弧状に反っている。胎土・焼成は良好で、器面は表裏面とも入念に調整され、内面は研磨が施されて光沢をおびる。また、文様も丁寧に施されている。

石器 (112~120)

112は環状石器である。偏平な円磔をそのまま使用したもので、厚みも一様ではなく、平坦面の反りも異なっている。中央には両側からの錐揉みによる円孔があげられており、円孔の周縁には敲打痕が認められる。また、平坦面には円孔の他にもう一つずつ、錐揉みによる円錐形の凹穴が穿たれているが、大きさおよび穿たれる位置は異なっている。周縁部は自然面のままの丸みをもっており、全体にわずかな敲打痕が認められる。なお、平坦面に研磨痕は認められない。石質は安山岩。

113・114は撥形を呈する小型の打製石斧である。113は装着部の断面形が三角形を呈し、刃部は裏面の平坦な自然面から一定方向の剝離を加えて、鈍角な片刃に調整されている。114は刃部が丸みをもつ形態を呈し、両面に調整剝離を加えて整った形状に仕上げられている。石質は113が頁岩、114がホルンフェルス。

115は偏平な自然磔を利用した敲石で、上半部を欠損している。先端には打撃痕が認められるが、先端部平坦面の一面に線状のキズが見られることから、石器製作の台石にも使用されたものと思われる。石質は硬質砂岩。

116~119は磨石である。117以外は欠損している。いずれも両面に広範な集合打痕が認められる。116・118は両方の平坦面に研磨面が認められるが、119には認められない。117は器面が荒れているため、観察できない。また、116の右側面および118の両側面には敲打と研磨による平坦面が形成されている。石質は4点とも安山岩。

120は石皿の完形品である。大型円磔をそのまま利用しており、周縁の整形はなされていない。窪み部は形状に合わせて楕円形を呈し、下方に掻出し口が付く。窪み部周縁には整形時の敲打痕が残っている。また裏面には錐揉み状の凹穴が、大小6つ付けられている。石質は安山岩。

これらの他に、磨製石斧の破片1点、台石と思われるものの破片1点および剝片・磔が出土している。

所見

出土遺物は比較的豊富であり、また床面付近から出土した遺物も多い。出土土器の大半を占める黒浜式土器の中には、口唇直下に縦位の沈線あるいは刺突文が施されるもの(45・46・77・88・104)、比較的幅広の爪形文で菱形状の文様を構成するもの(95~99)、空白部をもつ爪形文が施されるもの(93・110)、ループ縄文が施されるもの(22・24・25・110)、附加条Bで口縁部あるいは胴部に菱形縄文を構成するもの(84~88・106・108)が含まれている。これらの要素は、いずれも黒浜式の古い段階を特徴づける要素である。これらのうち、104・106・108・110等は床直で出土していることから、本住居址は黒浜期でも古い段階に位置づけられよう。104に見られる櫛状施文具による刺突文は有尾式土器の手法であり、注目される。また97の文様構成は、福島県宮田貝塚第Ⅲ群第1類のうち爪形文で文様が構成されるものに類似しており、類例の増加が待たれる。石器では112が注目される。関東では類例が見あたらないが、福井県鳥浜貝塚で類似するものが2点出土している。以上、気づいた点について付記しておく。

J 3号住居址 (第26図)

位置 A'-49~50グリッド。西半分は調査区外のため、未調査である。

形状 隅丸正方形を呈するものと思われる。規模は、計測できる部分で、東西が3.4m、南北が3.6mである。

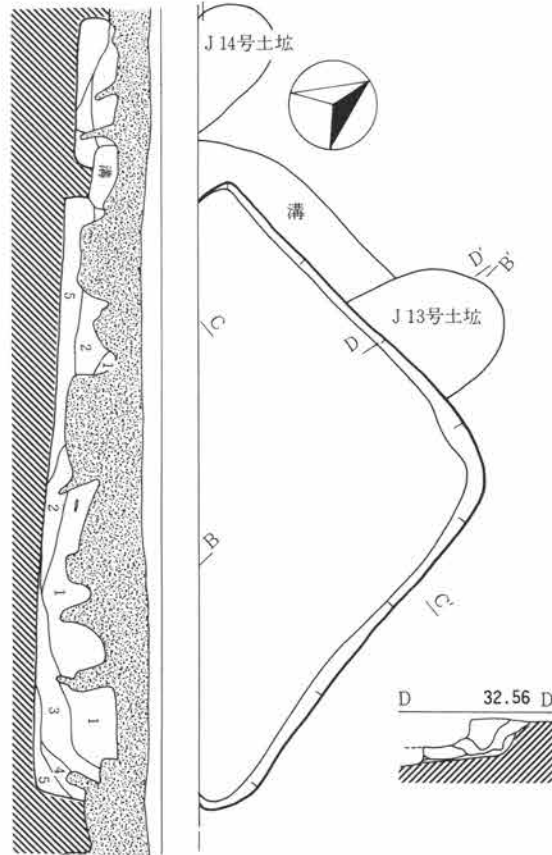
壁 壁高は約30cmで、西壁は垂直に、東壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

床面 西側から中央に向かってやや傾斜が認められるが、面はほぼフラットである。

柱穴 未検出。

炉 未検出。

重複 J3号土壇を切っている。また、北側に近世の浅い溝がめぐっており、本住居址・J3号土壇とも上面を切られている。

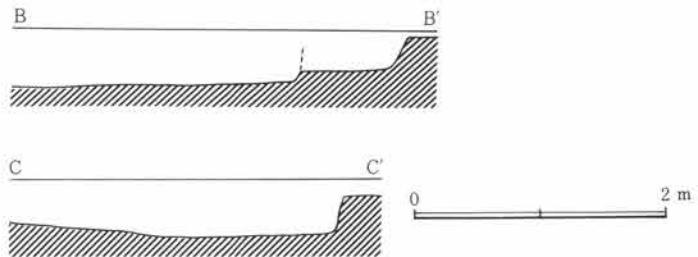


遺物の出土状態

多量の土器破片が、覆土中に混在した状態で出土した。

出土遺物 (第27図~第30図)

土器は第4群~第6群土器が出土しているが、第4群土器は2点のみである。第6群土器は1類に限られており、第5群土器との割合は約2:3である。総点数は約700点である。



1. 黒色土。
2. 粘質の黒褐色土。
3. 黒みの強い黒色粘質土。
4. 黄褐色粘質土のブロックを少量含む黒色土。
5. 黄褐色粘質土を主とし、若干、黒色土を混じる。

第4群土器 (1・2)

関山式土器は小破片2点のみである。

ともに胎土に繊維を含む。

4類 (1・2)

2点とも R $\begin{cases} L \\ R \\ R \\ L \end{cases}$ と L $\begin{cases} R \\ L \\ L \\ R \end{cases}$ を交互に施文して菱形に構成されるものと思われる。

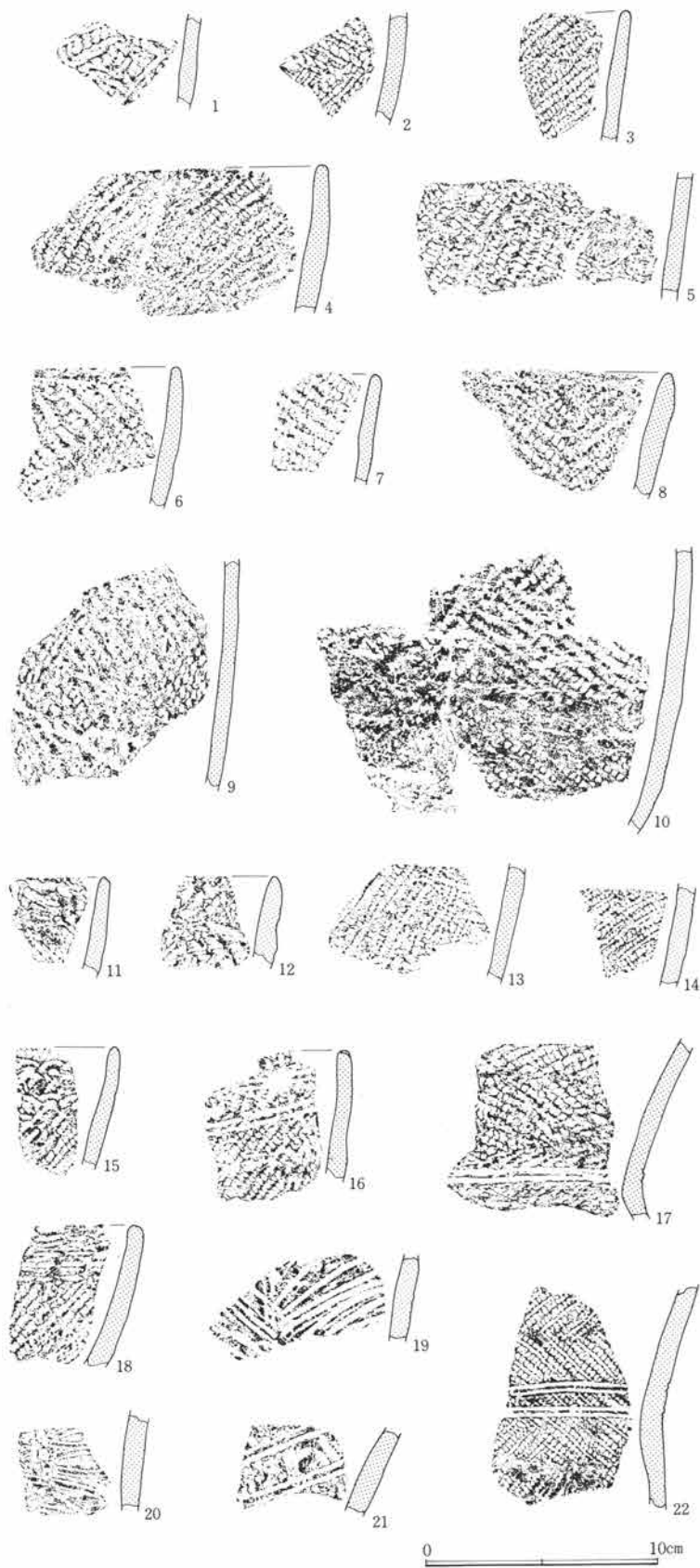
第5群土器 (3~36)

1類 (3~11・36)

口縁部はやや外傾しながら立ち上がり、口唇は丸みをもつものが多い。3~5はLR、6・7・9・35

第26図 J 3号住居址

III 検出された遺構と遺物



第27図 J 3号住居址出土遺物

はRLの斜縄文が施された土器である。3・35は0段3条縄、4・5は0段多条縄を使用している。36は底部破片である。底面は平坦で、端部の突出は認められない。

8・10はRLとLRで菱形縄文が構成される土器である。

2類 (11・12・34)

無節縄文はいたって少なく、観察可能なものは12点のみであった。12・34はRが施されている。13はLを縦横に施文して羽条縄文が構成されている。

4類 (13・14)

附加条もいたって少なく、観定可能なものは5点であった。

B (13・14)

2点とも附加条第1種である。いずれも羽条縄文が施された土器で、原体は13がLR+0段3条Rと?+L、14がRL+lとLR+rである。14は22と同個体かもしれない。

5類 (15~22)

比較的細い半截竹管を使用しており、文様は諸磯a式土器と同じ構成をとるものが多い。また、器面は丁寧に調整されており、裏面が研磨されたものが多い。

15・16・18はやや内湾しながら開く口縁部破片で、15は2条のコンパス文、16は2条の平行沈線、18は3条の点列状の平行沈線が、いずれも口唇下に施される。地文はいずれもLRで、15・16は文様施文部分にも施されているが、18は無文地である。また、16は口唇部に刻みが施されている。17は胴部中程がくの字状に屈曲する土器で、屈

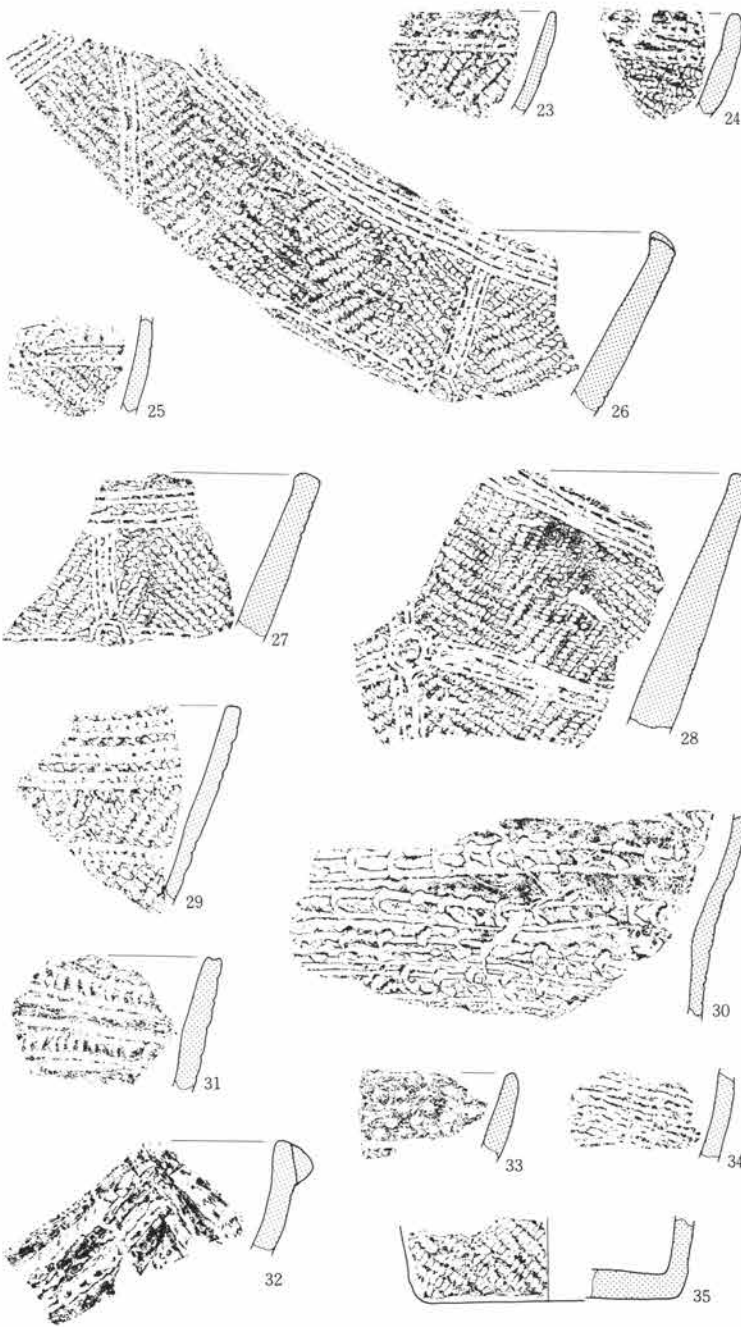
1 縄文時代の遺構と出土遺物

曲部に2条の平行沈線が施され、平行沈線間の地文は磨り消されている。地文はRLとLRによる羽条縄文である。19・21は縦位の矢羽根状の文様が施された土器である。20は肋骨文が施され、縦位沈線上に竹管による円形刺突文が施される。22は胴部中程が弱く屈曲した土器で、17と同様に2条の平行沈線が施されるが、沈線間の縄文は磨り消されない。縄文は附加条第1種RL+ \varnothing とLR+rによる羽条縄文である。

6類 (23~32)

細い半截竹管を使用したもの(23~29・32)と太いものを使用したもの(30・31)とがあり、前者は5類と同様、諸磯a式土器と共通した文様構成がなされ、器面調整も丁寧である。

23・24は形態、文様施文とも15・16・18に共通する。縄文は23がLR、24がRLで、いずれも平行沈線下に施される。26~28は直線的に開く波状口縁を呈する土器である。口唇部は裏面に突出しており、波底部には山形の小突起が付く。文様は口唇直下に細い爪形文を2条めぐらし、波頂部と波底部から同2条の爪形文を垂下させ、胴部上半の中程に同2条の爪形文をめぐらして区面文様を構成している。また、爪形文の交わる部分に円形の文様が施される。地文はRLとLRの縄文を交互に



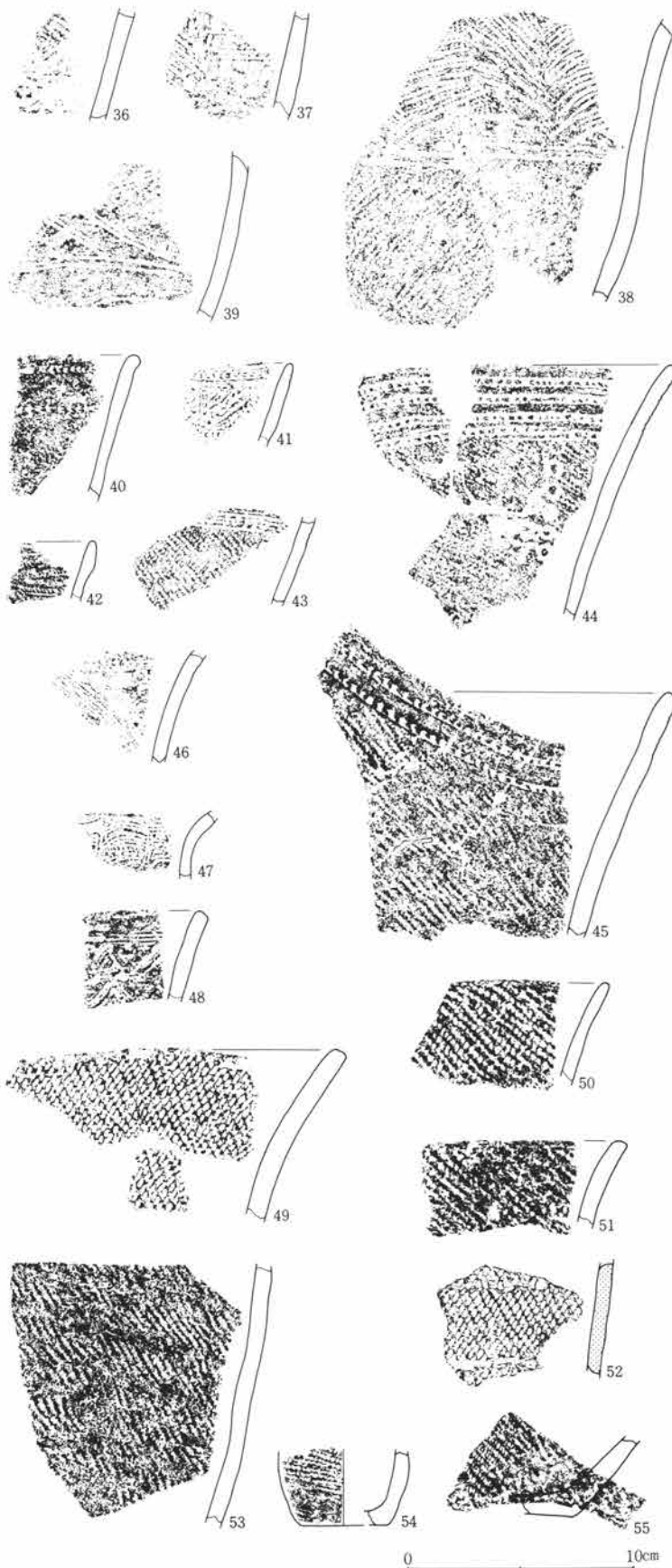
第28図 J 3号住居址出土遺物

縦施文して羽条縄文を構成している。29も同様の構成であろう。25も同様と思われるが、区画内に斜位の爪形文が施されている。地文は25がRL、29がLRで、25は平行沈線間の地文が磨り消されている。30・31は幅広の爪形文を横位に数条施した土器で、32は爪形文と平行沈線が交互に施される。なお、2点とも地文は施されていない。33は波状口縁を呈する土器で、口唇下に1本の隆帯をめぐらし、その両側に爪形文を1条ずつ施している。

10類 (34)

口縁部が内湾ぎみに開く土器で、口唇部は丸みをもつ。文様は口唇下3cmほどのところに1条の沈線をめ

III 検出された遺構と遺物



第29図 J 3号住居址出土遺物

ぐらし、その間を刺突文で充填している。

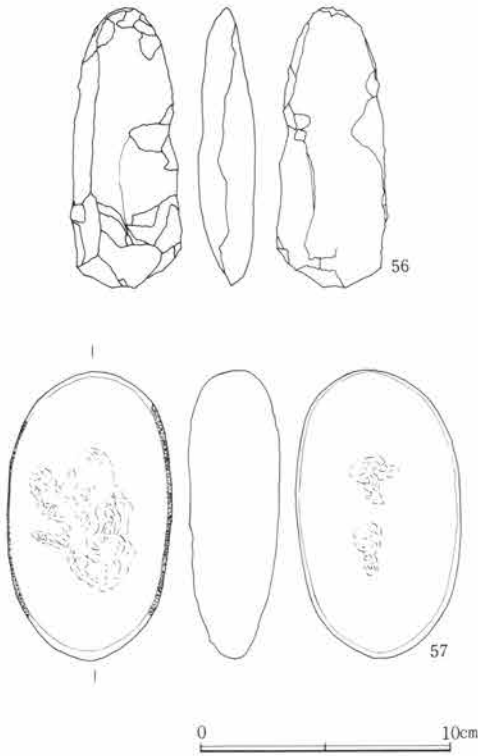
第6群土器 (36~55)

1類 (36~55)

36~39は半截竹管による平行沈線で文様が施された土器である。半截竹管は細いものを使用されている。36は縦に1条、横に2条の平行沈線を施して区画文様を構成し、さらに対角線状に平行沈線を施している。また、沈線の交わる部分に竹管による円形刺突文が施されている。地文はRLの縄文で、平行沈線間は磨り消されている。37・38は胴上半部に幅広い文様帯が構成される土器である。文様は縦位の平行沈線を等間隔に施し、その間に斜行沈線を施して矢羽根状の文様を構成している。また38では文様帯の下限を平行沈線で区画し、以下に縄文LRを施している。39は36と同様の文様が構成される土器であろう。縄文はLR。

40~45は半截竹管による爪形文で文様が構成される土器である。竹管はやはり細いものを使用されている。41は36と同様の文様が構成される土器である。40・43・44は口縁部が外反ぎみに開く平縁の土器である。口唇部は丸みを持ち、わずかに外側へ突出している。文様は口縁部に爪形文を2~4条めぐらし、竹管による円形刺突文を口縁部から胴部中程まで数単位垂下させている。40にはLR、43・44にはLRの縄文が施されるが、口縁部文様部分は磨り消されている。42は小型土器の口縁部破片である。口縁部は1.3cmほどの幅に粘土を貼り付けて肥厚させ、そ

1 縄文時代の遺構と出土遺物



第30図 J 3号住居址出土遺物

ここに爪形文を2条めぐらし、さらに肥厚帯直下に1条の爪形文をめぐらし、以下に木の葉文を施している。縄文は木の葉文内に認められるが、判読できない。45は口縁部が外反しながら開く波状口縁の土器で、文様の構成は40と同じである。縄文はRL。

46~48は櫛歯状施文具による円形刺突文を縦位に施し、その間に斜位の条線文が施される、また、文様帯は横位の爪形文で区画されている。41は口縁部が強く外反する小型土器である。文様は平行沈線を縦位に数条施し、その間に3本単位の条線文を孤状に施して文様帯を構成し、下限を1条の爪形文で区画している。また、文様帯下には縄文LRが施される。48は口唇下に条線文を1条めぐらし、以下に波状文を施した土器である。

49~51は全面に縄文のみが施される深鉢形土器の口縁部破片である。いずれも平縁を呈し、縄文は口唇端部まできちんと施されている。40・44のように、口唇が外側に突出するものはない。縄文は3点ともRL。

52・53は縄文RLが施された胴部破片である。いずれも横位施文の幅がよくわかる。52では縄の端をしばった圧痕

が明瞭に残っている。

54は小型土器の底部、55は浅鉢形土器の底部で、縄文は2点ともRLである。

石器 (56・57)

石器は2点のみ出土した。56は短冊形を呈する打製石斧である。摩耗が著しいため、剥離は不明瞭である。57は両面に集合打痕と研磨面をもつ磨石である。両側面には敲打と研磨による平坦面が形成されている。石質は56がホルンフェルス、57が安山岩。

所見

本遺跡の中では比較的残りの良い住居址であるが、出土土器は前述のとおり小片が大半であり、ほとんどが覆土中から出土している。黒浜式土器と諸磯a式土器は約3:2の割合で出土しているが、床面付近からの出土は黒浜式土器が大半であり、諸磯式a土器は覆土上層から出土したものが多い。黒浜式土器は細い半截竹管で区画文、対角線文(25)、肋骨文などを構成するものが主体となっている。これらの文様は諸磯a式土器と共通するものであり、黒浜式土器の中でも最も新しい時期と考えられる。以上のことから、本住居址が廃絶された後、遺物が投棄される頃に、黒浜式土器から諸磯a式土器へと徐々に変換されたと考えたい。よって、本住居址は黒浜期の最も新しい時期である。

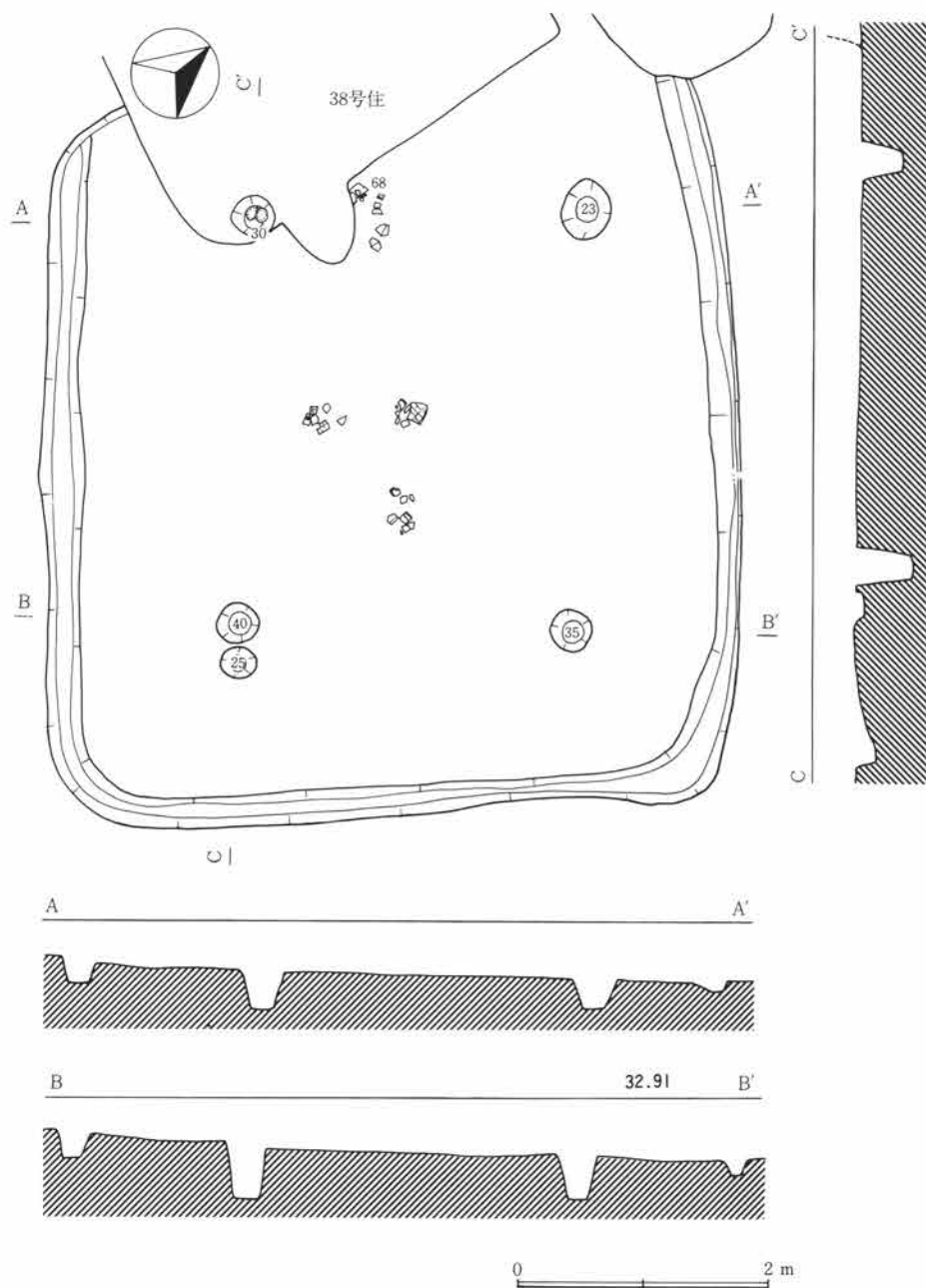
J 4号住居址 (第31図)

位置 B-48グリッド。

形状 東西がやや長い隅丸方形。規模は東西が5.9m、南北が5.56mである。

壁 攪乱が深いため壁はほとんど確認できなかったが、南北と東の壁に周溝が検出されたため、プランは

III 検出された遺構と遺物



第31図 J4号住居址

明確に把握できた。周溝は幅が大略25~30cm、深さは深いところで15cm、浅いところで7cmである。

床面 南から北に向かってやや傾斜しているが、面はフラットである。柱穴間をむすぶ範囲外は軟弱であるが、内側はやや堅い床面となっている。また、東側では中央から壁に向かって緩やかな傾斜が認められた。

柱穴 4本柱である。南側の柱穴に近接して、ピット状の浅い落ち込みが1カ所認められた。

重複 西壁を 時代の 号・ 号住居址に切られている。

遺物の出土状態

本住居址出土遺物は、全て床面直上あるいは床面密着状態の出土である。

出土遺物 (第32図～第36図)

出土土器のうち、時期の判別できるものは333点であった。内訳は、条痕文土器1点、関山式土器8点、諸磯a式土器25点、他は全て黒浜式土器である。黒浜式土器の内訳は、無節90点、単節111点(0段多条4点)、附加条68点(A23点・B45点)、縄文以外の文様が施文されるもの62点(平行線文28点・爪形文21点、他は数点ずつ)無文3点である。なお、関山期の片口部破片が1点出土している。

第4群土器 (1～7)

1類(1)

口縁部小破片が1点出土した。口唇部は内削ぎ状を呈す。文様は半截竹管による平行線文で施文され、円形の貼付文が施される。また、平行線文には荒い刻みが施されている。

2類(2)

小破片一点のみである。L縄2本による結節縄文が施されている。

3類 (3～6)

3・5は弱く外反する口縁部の破片で、口唇直下からループ縄文が多段施文される。4は小波状口縁を呈し、口唇下に無文部をおいてループ縄文を多段施文している。6も口縁部付近の破片であろう。原体はいずれもLR。

4類 (7・27)

関山式土器に多用される正反の合は3段が一般的であるが、この2点は2段の合燃りである。7

は $L \begin{cases} R \begin{cases} \emptyset \\ \emptyset \end{cases} \\ L \begin{cases} r \\ r \end{cases} \end{cases}$ と $R \begin{cases} L \begin{cases} r \\ r \end{cases} \\ R \begin{cases} \emptyset \\ \emptyset \end{cases} \end{cases}$ で菱形縄文を構成する

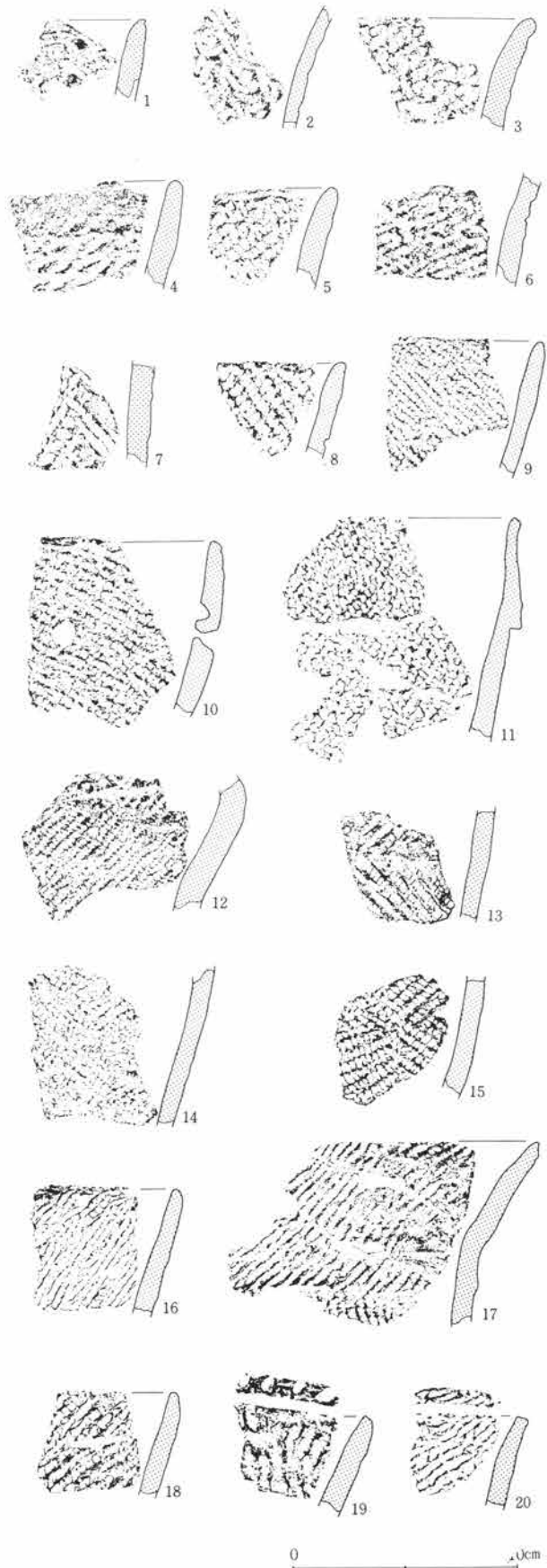
と思われる。27は $L \begin{cases} R \begin{cases} \emptyset \\ \emptyset \\ \emptyset \end{cases} \\ L \begin{cases} r \\ r \\ r \end{cases} \end{cases}$ を縦横にランダムに

施文している。

第5群土器 (8～63・67～69)

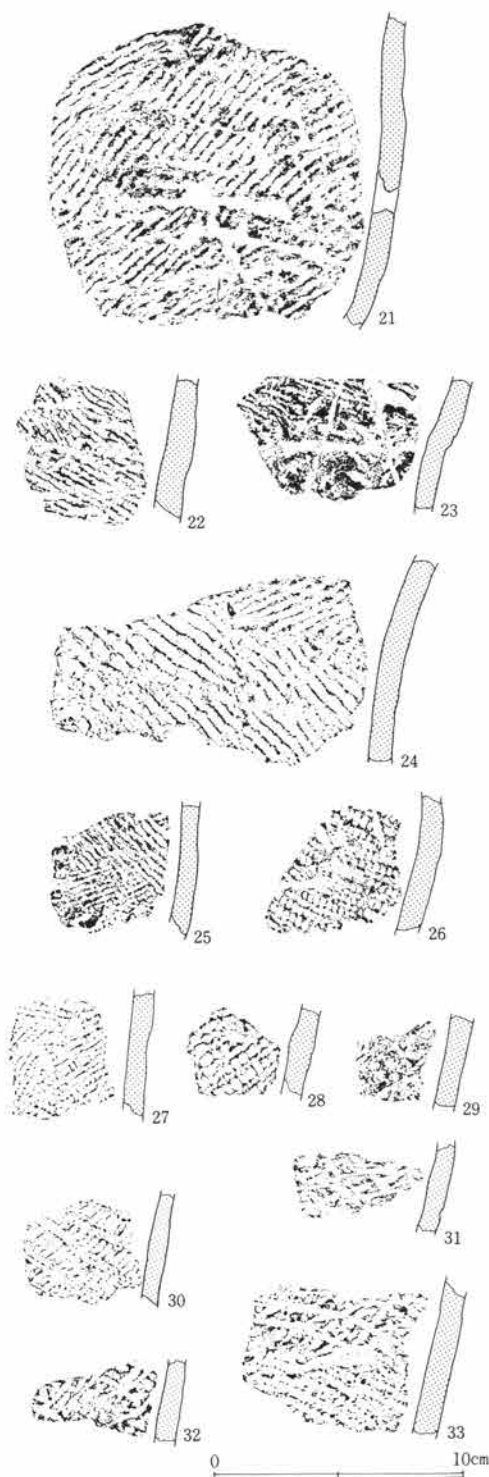
1類 (8～15・44・68)

8～10はRLの縄文を施した口縁部破片である。10は補修孔と思われる焼成後の円孔が施されている。



第32図 J4号住居址出土遺物

III 検出された遺構と遺物



第33図 J4号住居址出土遺物

11・12・44はLRの縄文が施された土器である。11は口縁部に段をもっている。

13～15・68はRLとLRによる羽条縄文が施された土器である。いずれも羽条縄文を組み合わせて菱形状に構成されるものと思われる。68は胴上半部の大形破片で、器形は胴部が張り出し、頸部がくの字状に屈曲して、口縁部が直線的に開く平縁の深形を呈す。口唇部は上面が平坦で、端部が尖る形態を呈す。縄文は、屈曲部上半では菱形状に構成されており、おそらく下半も同様に構成されるものと思われる。なお、13は0段3条縄が使用されている。

2類 (16～25)

16～21・69はLが施された土器である。17は口縁部がくの字状に折れ曲がり、口唇部は外削ぎ状を呈する。縄文は口唇端部にまで施文されており、また屈曲部のやや下で走向が変えられている。19は条が縦位になるように施文されており、口唇部には刻みが施されている。20は口唇部が角頭状を呈し、上面にも縄文が施されている。69は器高 cmの小型土器である。口縁および胴部約を欠損している。器形は胴部が直線的に開き、頸部がくの字状に屈曲して口縁部が直立する、平縁の深鉢形を呈す。口唇部はやや外反ぎみに劃り、底部は外側へ強く突出して、底面はわずかに窪んでいる。頸部の屈曲部外面はやや肥厚しており、あるいは隆帯が意識されているのかもしれない。縄文は口縁と胴部にあつまり施されている。

22・23はRが施された土器である。23は中程に弱い段が認められ、その下部は無文となっている。

24・25はLとRで羽状縄文が施された土器である。

4類

A (26・28～33・45・47)

26・28・45・47は附加条第1種が施された土器で、原体は26がRL+0段多条LR、28・45がLR+R・R、47がRL+L・Lである。45・47はいずれも底面が平坦な底部の破片で、45は端部が突出している。

30は附加条第2種が施された土器で、原体は無節の軸縄Lに細いL縄2本を附加した、 $L + \frac{L}{L}$ である。

29・31～33は附加条第3種と思われるが、圧痕が不鮮明であり、また施文も乱れているため明確に判読できない。29は軸縄は不明、L縄1本ずつを附加している。32は重複施文しているため判然としませんが、R+L・Lであろう。33はLR+R・RとRL+R・Rの2種類の原体が使用されている。

1 縄文時代の遺構と出土遺物

B (34~43・46)

附加した縄の圧痕が主体となるもの。附加される縄は2本のものが多いが、1本~4本までのバラエティがあり、いずれも同じ撚りの縄が附加されている。

34・35・46はL縄2本、37~39・42はR縄2本を附加した原体で施文された土器で、後者では施文方向を変えて菱形状に構成されるものが見られる。42では軸縄Lの圧痕が認められる。36は軸縄LRにR縄1本を附加したものである。40は細いL縄2本とやや太いL縄2本を附加した2種類の原体が使用されている。41はL縄1本を附加したもので、圧痕は撚糸状になる。43はL縄4本をならべて附加したもので、巻き方は附加条第2種によっている。

5類 (48~55)

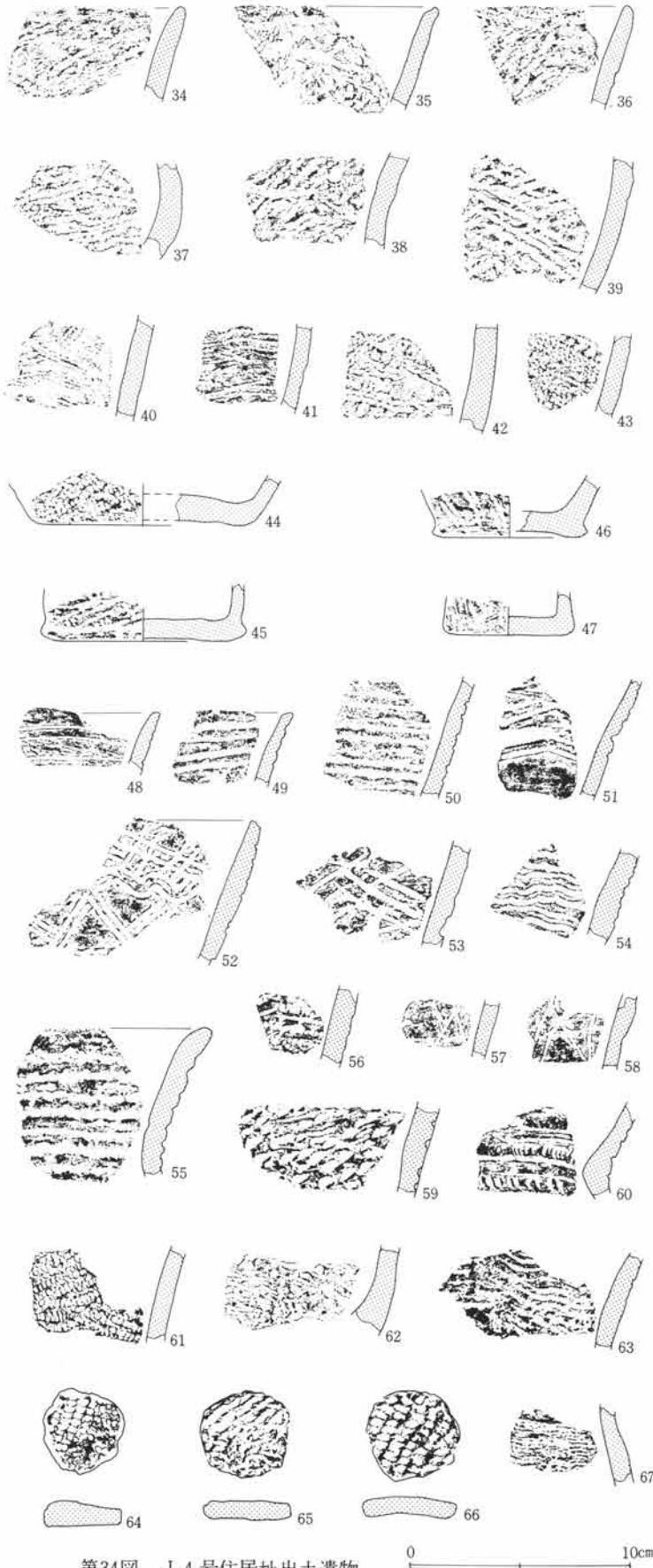
平行線文で文様が施される土器で、頸部がくの字状に折れ曲がり、口縁が直線的に開く形態を呈すると思われる。48~51・53は菱形状の文様が構成される土器で、口唇部は内削ぎ状を呈する。52は口唇部が外削ぎ状を呈し、口唇下に斜格子文を施し、下端を波状文で区画し、その下に鋸歯状の文様が施される。53は横位の波状文を施した土器である。55は口縁部が外反する土器で、弱いコンパス文が横位に等間隔に施される。

6類 (60)

頸部がくの字状に折れ曲がる土器で、C字形の密に施された爪形文が、横位に施されている。

7類 (57・58)

斜稿子状に細い沈線が施された土器である。1本の沈線で文様が施された



第34図 J 4 号住居址出土遺物

III 検出された遺構と遺物

ものはこの2点のみである。

8類 (62・63・67)

楯状貝による横位波状文が施された土器で、3点のみ出土した。62は地文に縄文のような圧痕が認められるが判然としない。

10類 (56・59・61)

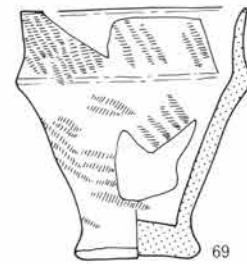
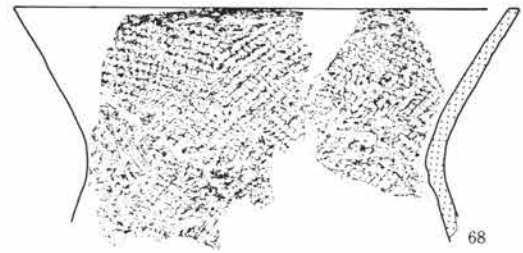
その他の土器を一括した。56は半截竹管による平行線文と楯状貝による刺突文で文様が施される土器である。59・61は器面全体に刺突が施された土器で、59はへら状施文具、61は楯状施文具で施される。

土製品 (64～66)

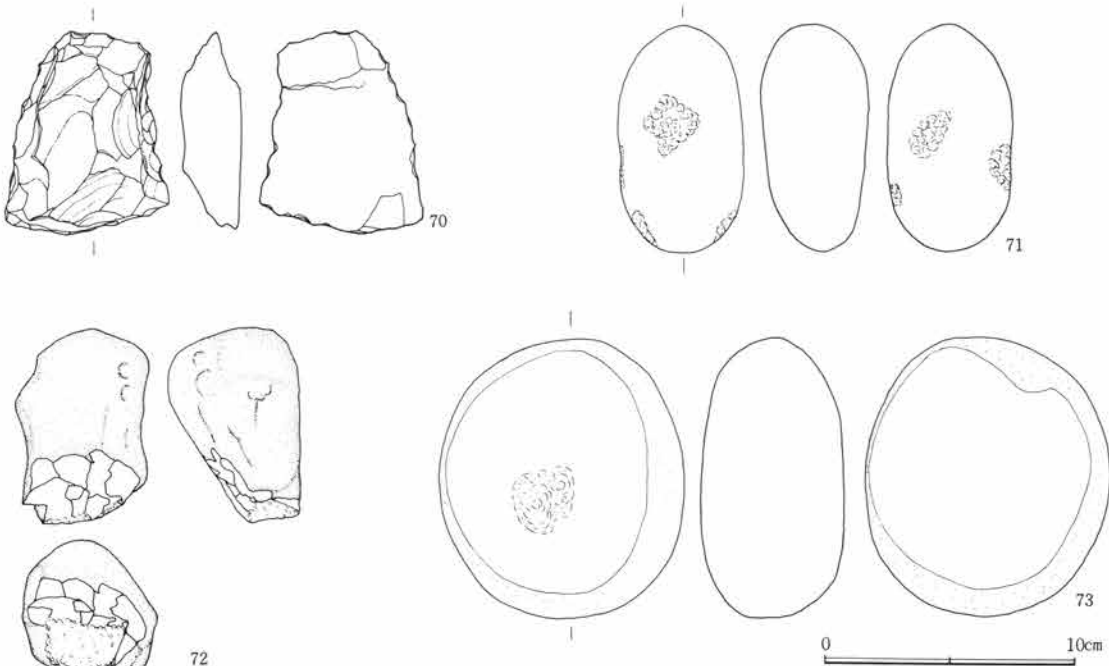
土器破片を利用した土製円盤である。いずれも黒浜式土器の破片を利用しており、胎土に多量の繊維を含む。64はLRとRLど 備縄文が施されている。65はLR、66はRLの縄文が施されており、65にはコンパス文が見られる。

石器 (70～73)

石器は4点のみである。70は台形状を呈する石器で、裏面は自然面をそのまま利用し、一定方向からの剝離で形状を整えている。下方が刃部だとすれば、52号住居址に類似している。石質は緻密安山岩。72は敲打器である。円礫をそのまま利用しており、打面周辺には敲打による剝落が著しく、打面には摩耗が認められる。石質は砂岩。71・73は磨石である。71は表裏面および周辺部に集合打痕が認められる。73は一面に集合打痕、画平坦面に研磨面が認められる。石質はともに安山岩。



第35図 J 4号住居址出土遺物



第36図 J 4号住居址出土遺物

所見

出土遺物は少なく、またほとんどが小破片であるが、前述のように遺物は全て床面および床面直上からの出土である。若干前後の時期の土器も見られるが、本住居址は黒浜期と考えるとさしつかえないだろう。さらにつけ加えるならば、附加条が多いこと、平行線文で菱形の文様が構成される土器が見られることなどから、黒浜期中頃の時期とすることができよう。なお、土製円盤および小型土器の出土に注目したい。

J 5号住居址 (第37図)

位置 A～B-52グリッド。

形状 北側の短辺がやや広い撥状の長方形を呈す。規模は、北側短辺が4.4m、南側短辺が3.5m、長辺が5.45mである。

壁 本住居址も全面に攪乱を受けており、床面範囲をかりうじでおさえることができた。また、南西コーナー付近は7cmほどの壁を検出できた。

床面 壁を検出できた南西コーナー付近では、軟弱であるがほぼフラットな床面が認められる。その他の部分は耕作痕と思われる荒しい凹凸で全面的にこわされている。

柱穴 南西側で1本のみ検出された。
床面からの深さは30cmである。

重複 北西コーナーをJ12号土壇に、
また中央部を近世の溝により鉤手状に切られている。

遺物の出土状態

南西コーナー付近の床面および覆土中から大半が出土したが、攪乱の間に僅かに残った床面からも少量出土している。

出土遺物 (第38図)

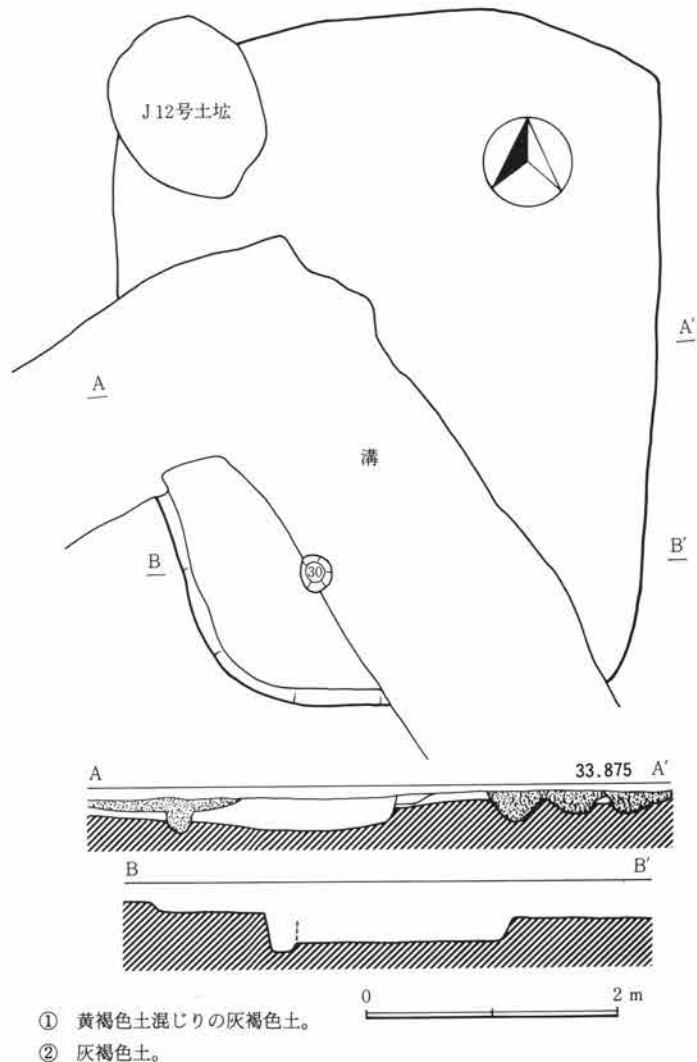
床面からは黒浜式土器6点、諸磯式土器13点が出土しており、また攪乱土中から黒浜式土器18点、諸磯a・b式土器52点が出土している。諸磯式土器は縄文のみが施された小破片がほとんどである。石器は石鏃、磨石破片が各1点ずつ出土した。また、この他に土師器10数点が混在していた。

第5群土器 (1～9)

1類 (1・2)

2点ともRLとLRで羽状縄文が施された土器である。

4類

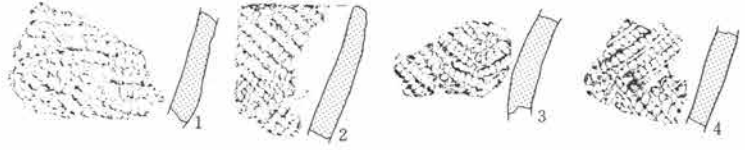


第37図 J 5号住居址

III 検出された遺構と遺物

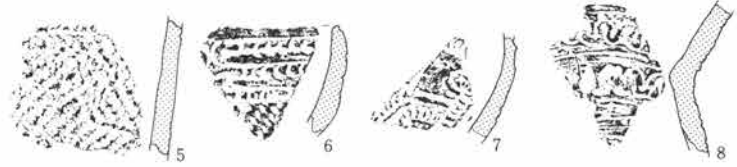
A (3)

施文が乱れており判然としないが、R縄2本が附加されたものとL縄2本が附加された2種類の原体で菱形を構成するものと思われる。



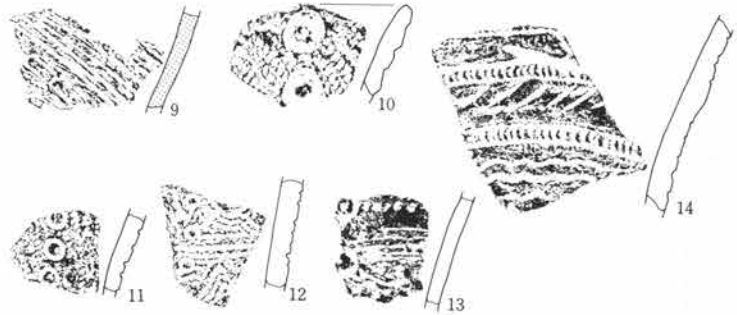
B (4)

0段縄が附加された、LR+rとRL+lによる菱形縄文が施された土器である。



5類 (8・9)

8は胴部中程がくの字状に折れ曲がる土器で、半截竹管による平行沈線とコンパス文が横位に施されている。9は平行沈線を斜位に集合施文した土器で、一部に爪形文が施される。



0 10cm

6類 (5～7)

5はRLとLRで羽状縄文が施された土器で、上端に爪形文が施されている。6は内湾する平縁の口縁部破片で、口縁部に3条の爪形文をめぐらし、以下にLRの縄文が施される。7も内湾する口縁付近の破片である。

第38図 J5号住居址出土遺物

6群土器

1類 (10～14)

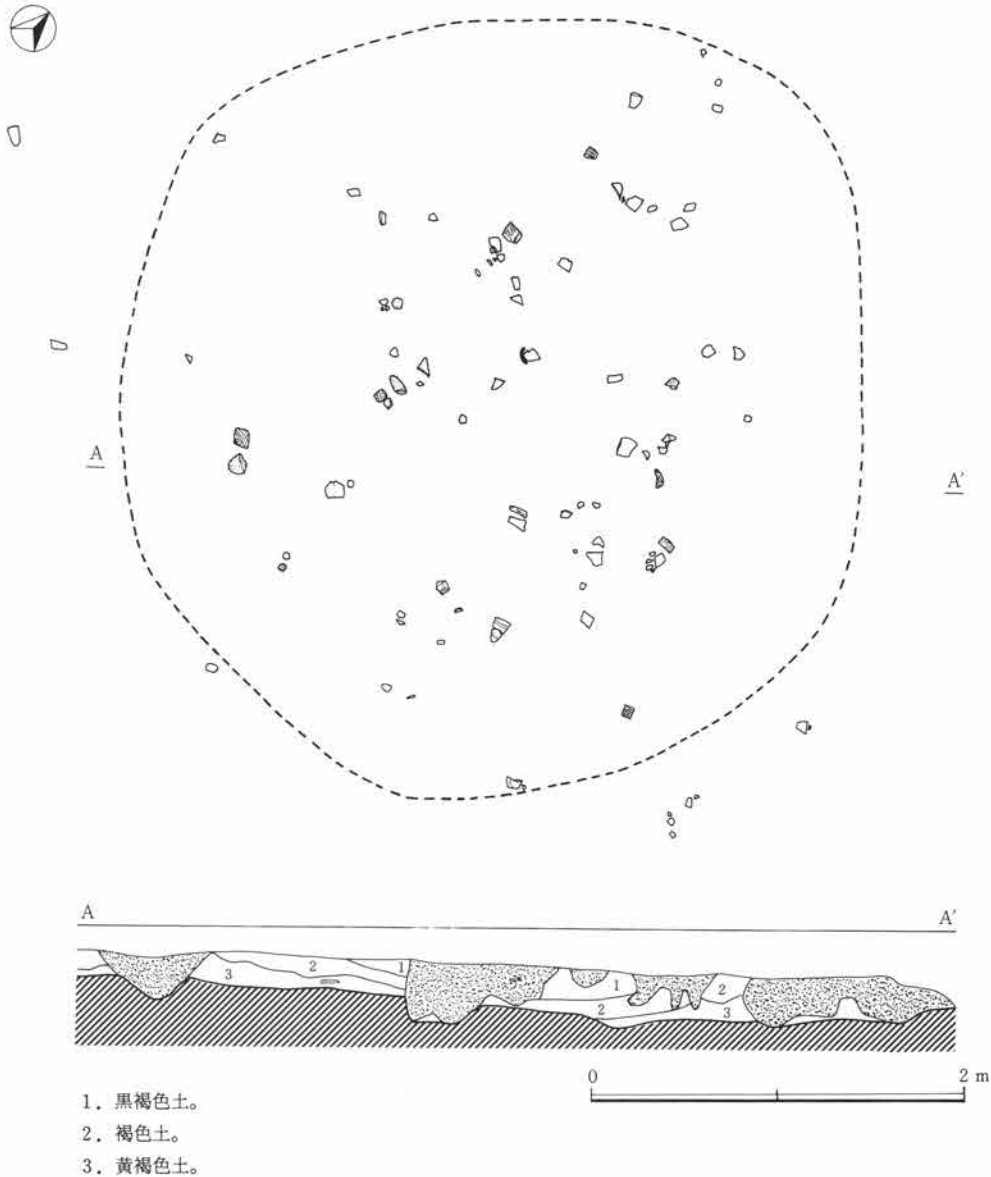
10は波状下に竹管による円形刺突文が施された小波状を呈する口縁部破片である。11は竹管による円形刺突文を縦位に施した土器破片である。12は櫛状施文具による波状文と条線文を横位に交互に施された土器で、11と同様、竹管による円形刺突文が縦位に施文されている。13は条線文を横位に数段施し、条線間に櫛状施文具による刺突が施された土器で、やはり円形刺突文が縦位に施されている。14は斜位の沈線が施された幅広の低い隆帯を1本めぐらす土器で、隆帯の両側には爪形文をめぐらし、隆帯下には半截竹管による波状文が施されている。

所見 本住居址は大半の部分が攪乱を受けており、残在状態はいたって悪い。出土遺物も、本住居址に伴うものは少数であり、また黒浜式と諸磯式とが認められる。黒浜式土器はその文様から中頃の時期と考えられ、諸磯a式土器とは不連続である。積極的な所見は述べられないが、本遺跡調査区で諸磯期の住居址は検出されていないことから、本住居址も黒浜期と考えておきたい。

(2) 竪穴状遺構

J1号竪穴状遺構 (第39図)

A～B-64グリッドに位置する。平安時代の1号・2号住居址によって上面を切られている。同住居址調査時に下面から縄文土器の破片が多量に出土するため、住居址を想定して調査を行ったが、壁や施設等は検



第39図 J 1号 竪穴状遺構

出できなかった。覆土は8～13cmの推積が認められ、遺物は混在した状態で直径ほぼ4mの範囲に集中して認められた。遺構とする根拠は弱い面もあるが、調査区内で包含層は確認されておらず、また一定範囲に遺物が集中していることから、竪穴状遺構として扱うことにした。

出土遺物 (第40図・41図)

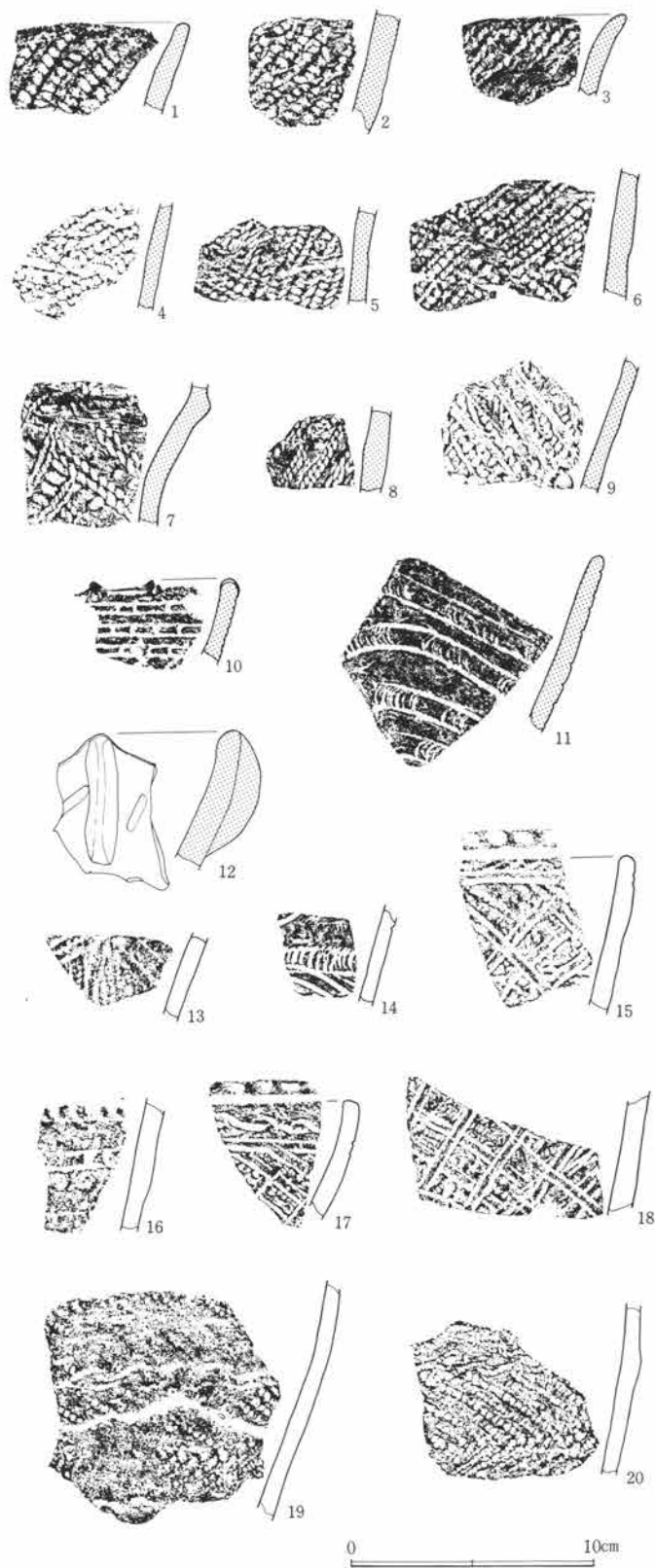
土器では黒浜式土器33点、諸磯a式土器4点、諸磯b式土器19点が出土しており、石器は打製石斧2点、磨石の欠損品2点である。なお、土製円盤が1点出土している。

第5群土器 (1～12)

1類 (1～4)

いずれもLRの斜縄文が施された土器である。1・3は口縁部の破片で、1は口唇部が丸みを持ち、3は外反し尖っている。なお、4にはR縄による縄節縄文が横位に施されている。

III 検出された遺構と遺物



4類 (5~8)

A (5・6) 2点とも附加条第1種RL+L・LとLR+R・Rによる菱形縄文が施文された土器である。附加された縄は、軸縄の条1本毎に1本ずつあらわれる。

B (7・8) 7は1条の弱い隆起帯をめぐらした外反する口縁部破片で、隆起帯下に $R + \frac{R}{R}$ と $L + \frac{L}{L}$ による菱形縄文が施される。8はR縄2本を附加した原体が施文された土器である。

6類 (9~11)

9は平行沈線を斜位に施し、その下端を爪形文で横位に区画した土器である。地文には附加条第1種(A)RL+1が施されている。10はゆるく内湾する平縁の土器で、口唇部には山形の小突起が付く。文様は口縁部に細い爪形文を数条施される。11は波状口縁の土器で、文様は口縁部に幅広い平行沈線を数条施し、その間にC字状の爪形文を、間隔をおいて密に施している。

10類 (12)

小破状を呈する口縁部破片で、波頂下に棒状の貼付文を縦位に施している。

6群土器

1類 (13・14)

諸磯式土器である。

13は半截竹管による平行沈線を縦横に施し、さらに対角線上に施して区画文を構成する土器で、沈線の交差部分には竹管による円形刺突文が施されている。14は爪形文と平行沈線で文様が構成される土器である。

2類 (15~25)

諸磯b式土器である。

15・17・18~20は口縁部がやや内湾する平縁の土器で、同一個体である。口唇部は平担で、上面には押圧が施されている。文様は、口唇下に半截竹管による平行沈線を

第40図 J 1号竪穴状遺構出土遺物

1 縄文時代の遺構と出土遺物

1条めぐらし、以下に同施文具による斜稿子文が施される。地文は結束第1種による羽条縄文で、原体の端部には末端を結んだ結節部が認められる。なお、この結節は口唇直下の無文部に、意図的に施文されている。16は爪形文を横位に数条施した土器である。地文はRL。

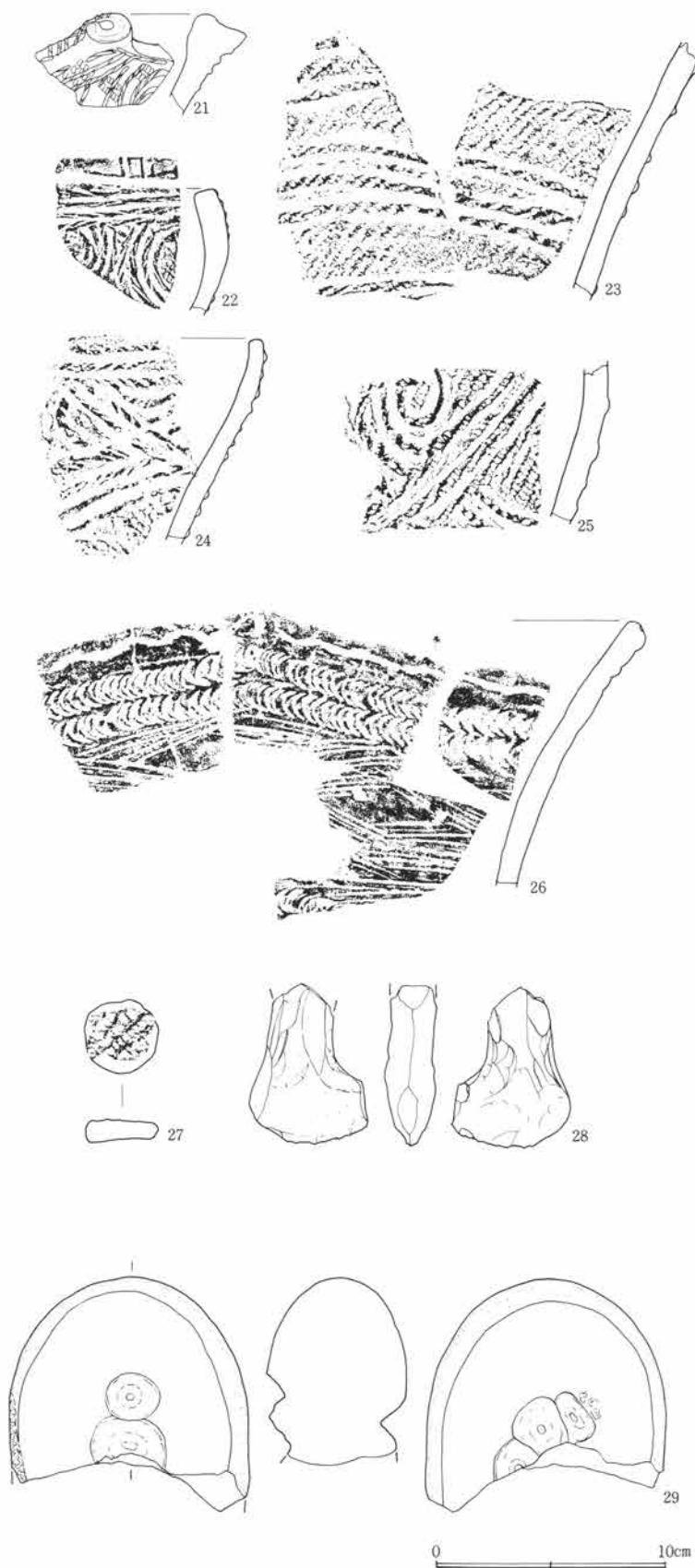
21~25は浮線文で文様が構成される土器である。器形は口縁部が弱く内湾するキャリーパー形の深鉢で、口縁部には渦巻状の文様が構成され、胴部には2~3条の浮線文が横位に数単位施される。21・22は同一個体である。口縁は波状を呈し、波頂部には渦巻状の突起が付く。また、口唇部には幅広く平坦面が形成され、そこに浮線文による鎖状の文様が施されている。なお、浮線文には斜位の刻みが施される。地文は縄文RL。24も地文が縄文RLで、浮線文に斜位の刻みが施された土器である。23・25は同一個体で、浮線文には地文と同じLRの縄文が施されている。

7群土器 (26・27)

浮島式土器である。26は外反する口縁部破片で、口唇部は外削ぎ状を呈し、波状沈線が施される。口縁部には鋸歯状の爪形文が2条施され、その下に平行沈線が斜位に施されている。27も同様な土器で、爪形文下に半截竹管による集合沈線で菱形文が構成される。2点とも胎土に細砂粒を多量に含む。

土製品 (28)

縄文LRが施された黒浜式土器を利用した土製円盤で、1点のみ出土



第41図 J1号竪穴状遺構出土遺物

III 検出された遺構と遺物

した。

石器 (29・30)

29は撥形を呈する打製石斧で、装着部を欠損している。小型品で、刃部は丸みをもつ。石質はホルンフェルス。30は磨石で欠損している。両平坦面には集合打痕と研磨面が認められる。石質は安出岩。

これらの他に打製石斧破片、磨石破片が各1点づつが出土している。

所見

本遺構出土土器は、前述のとおり黒浜式土器と諸磯b式土器を主体としており、ともに混在した状態で出土している。このような場合、一般的には時期の新しい諸磯b期の遺構とされるが、近接するJ1号住居址でもやはり諸磯b式土器がかなり多量に混在しており、即断できない。

(3) 土壇 (第42図・43図)

土壇は13基確認された。住居と同様に、上面は著しく攪乱を受けており、特にJ1号～J8号はかろうじて立ち上がりが確認されたにすぎない。形状は円形状を呈するものも多く、大きさは1m内外のものと2m内外のものがあり、前者では楕円形を呈するものがある。立ち上がりは直立するものと傾斜するものがあり、袋状を呈するものは検出されなかったが、立ち上がりの大部分は欠如しているため、即断はできない。調査区内での分布は住居址の分布範囲と一致しており、また住居址と重複するものと、住居址から離れた位置に集中して分布するものに明確に2分できる。後者では2つのブロックが認められ、そのうち北側でブロックを構成するほぼ同形態のJ5～J8号の4基の土壇は、ほぼ等間隔で南北一線上に並んでいる。

J1号土壇

C-66グリッドに位置する。J1号住居址と重複し、同住居を切っている。形状は南北にやや長い玉子形を呈し、短軸は1.2mである。遺物は黒浜式土器小片11点、諸磯式土器2点が出土している。黒浜期。

J3号土壇

D-60グリッドに位置する。北西20cmにJ4号土壇が近接する。形状は不定形であり、掘りすぎの感がある。直径は約2.2m。遺物は中央の底面上から、縄文のみが施された深鉢形土器3個体の大型破片がまとまって出土した。覆土中からは、約200点の土器片と剝片石器1点のほか、剝類・小礫が数点出土している。黒浜期。

J4号土壇

D-59グリッドに位置し、J3号土壇と近接する。形状は隅丸方形を呈するが、西側立ち上がりは攪乱を受けている。大きさは0.9mである。遺物は底面上から深鉢形土器2個体の大型破片が出土した。黒浜期。

J5号土壇

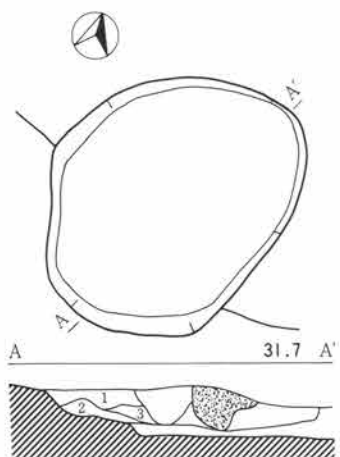
D-52グリッドに位置する。南側0.9mにJ6号土壇がある。形状はほぼ円形で、直径は約1mである。遺物は、覆土中から黒浜式土器が数片出土した。黒浜期。

J6号土壇

D-52グリッドに位置する。南側0.9mにJ7号土壇がある。形状は不正円形で、直径は約1.75mである。遺物は、覆土中から黒浜式土器が数片出土した。黒浜期。

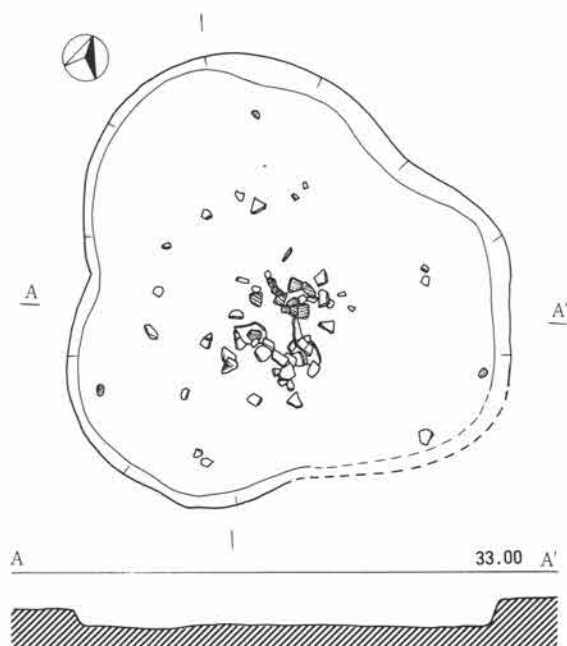
J7号土壇

D-53グリッドに位置する。南側20cmにJ8号土壇が近接する。形状はほぼ円形で、直径は0.9mである。遺物は、底面および覆土中から黒浜式土器小片が2点出土した。黒浜期。

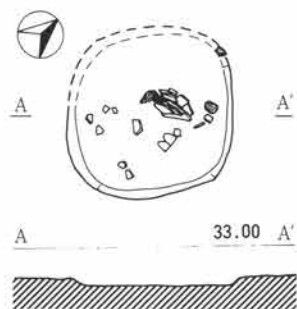


1. 黄色粘質土混じりの灰褐色土。
2. 地山の黄色粘質土と、灰褐色土の混土。
3. 灰褐色土。

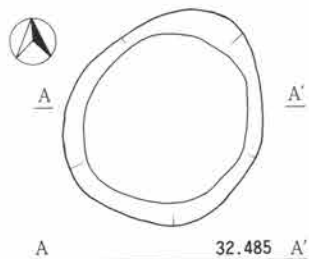
J 1号土壇



J 3号土壇

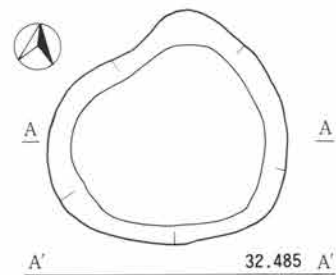


J 4号土壇



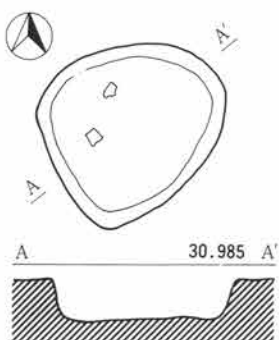
1. 黒褐色土。
2. 黄色粘質土のブロックを含む灰褐色土。
3. 黄灰色粘質土と褐色土の混土。

J 5号土壇

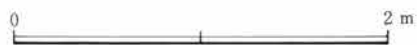


1. 黄色粘質土のブロックを含む灰褐色土。
2. 黄灰色粘質土と褐色土の混土。

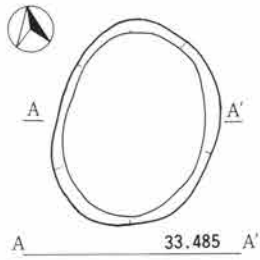
J 6号土壇



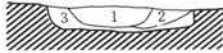
J 10号土壇



III 検出された遺構と遺物

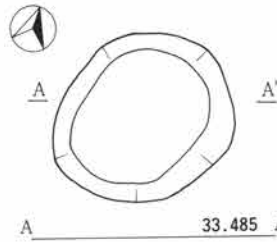


A 33.485 A'



1. 黄色粘質土のブロックを含む黒褐色土。
2. 黄色粘質土のブロックを含む灰褐色土。
3. 黄色粘質土と灰褐色土の混土。

J 8号土坑

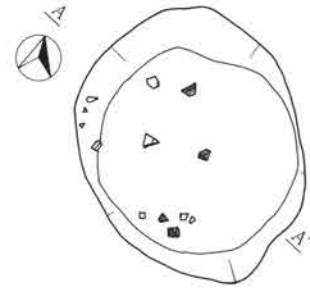


A 33.485 A'

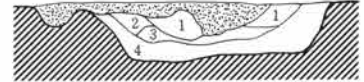


1. 黒褐色土。
2. 黄色粘質土のブロックを含む灰褐色土。
3. 黄灰色粘質土と褐色土の混土。

J 7号土坑

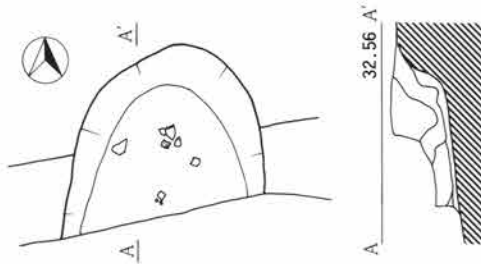


A 32.31 A'

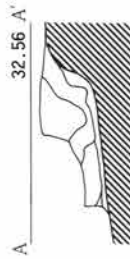


1. 黒褐色土。
2. やや粘質の黄灰褐色土。
3. 黄色粘質土の粒子を含む灰褐色土。
4. 黄色粘質土のブロックを含む灰褐色土。

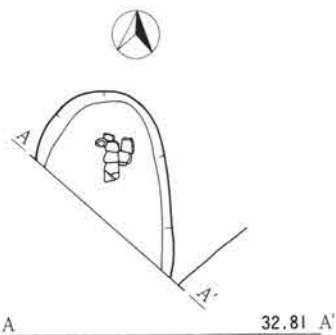
J 12号土坑



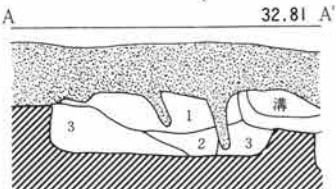
J13号土坑



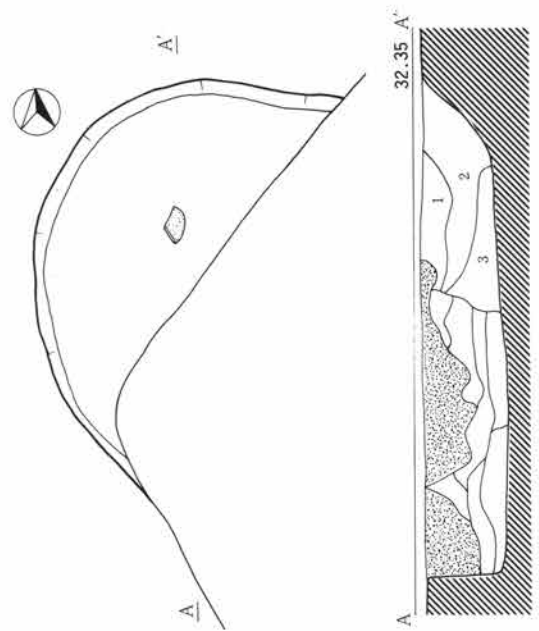
32.56 A'



J 14号土坑

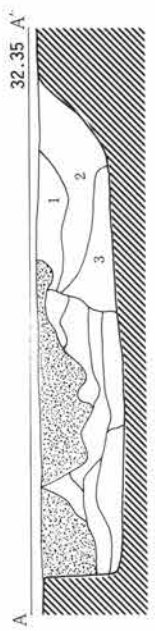


1. 黄色粘質土。
2. 黄色がかった灰褐色粘質土。
3. 灰色粘質土。



J 11号土坑

1. 灰褐色粘質土。
2. 黄色粘質土のブロックを含む灰褐色土。
3. 黄色粘質土と灰褐色の混土。



32.35 A'



第43図 土 坑

J 8号土壇

C-53グリッドに位置する。形状は南北にやや長い楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.85mである。遺物は底面から黒浜式土器が1点出土した。黒浜期。

J 9号土壇

C-48グリッドに位置する。J 4号住居址の北側にあたる。形状はほぼ円形を呈し、直径は約1mである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは丸みをもっている。遺物は、覆土中から黒浜式土器の小片46点、および小礫4点が出土している。黒浜期。

J 10号土壇

C-53グリッドに位置する。40号住居址床面下から検出された。形状はややいびつであるが、円形のタイプに含まれよう。長軸1m、短軸0.9mである。底面は平坦で、ほぼ直に立ち上がる。遺物は、覆土中から黒浜式土器1点、礫1点が出土している。黒浜期。

J 11号土壇

B-55グリッドに位置する。J 2号住居址と重複し、同住居址により切られている。形状は円形を呈するものと思われ、直径は約2mである。底面はほぼ平坦で、やや傾斜をもって立ち上がる。遺物は中央付近の底面から大形円礫の破片が1点出土したのみである。

J 12号土壇

A-52グリッドに位置する。J 5号住居址と重複するが、切り合い関係は不明である。形状は不正円形を呈し、直径約1.2mである。底面は平坦で、立ち上がりは傾斜をもっている。遺物は黒浜式土器小片2点、諸磯a式土器11点、礫1点が出土している。諸磯a期。

J 13号土壇

A-50グリッドに位置する。J 3号住居址と重複し、同住居址に切られている。形状は南北に長い楕円形を呈すると思われる。短軸は1.1mである。底面は平坦だが、南にむかってやや傾斜している。立ち上がりは傾斜をもっている。遺物は黒浜式土器小片3点、諸磯式土器小片4点、磨石片1点が出土している。諸磯式土器は摩耗が荒しく、流れ込みと思われる。黒浜期。

J 14号土壇

A'-50グリッドに位置する。南半は調査区外のため未調査であるが、J 3号住居址と重複するものと思われる。形状は、J 13号土壇と同じく、南北に長い楕円形を呈すると思われる。短軸は0.6mである。底面は平坦で、立ち上がりはほぼ直立する。遺物は黒浜式土器の大型破片1点と小片2点が出土した。黒浜期。

出土遺物

J 3号土壇 (第44・45図)

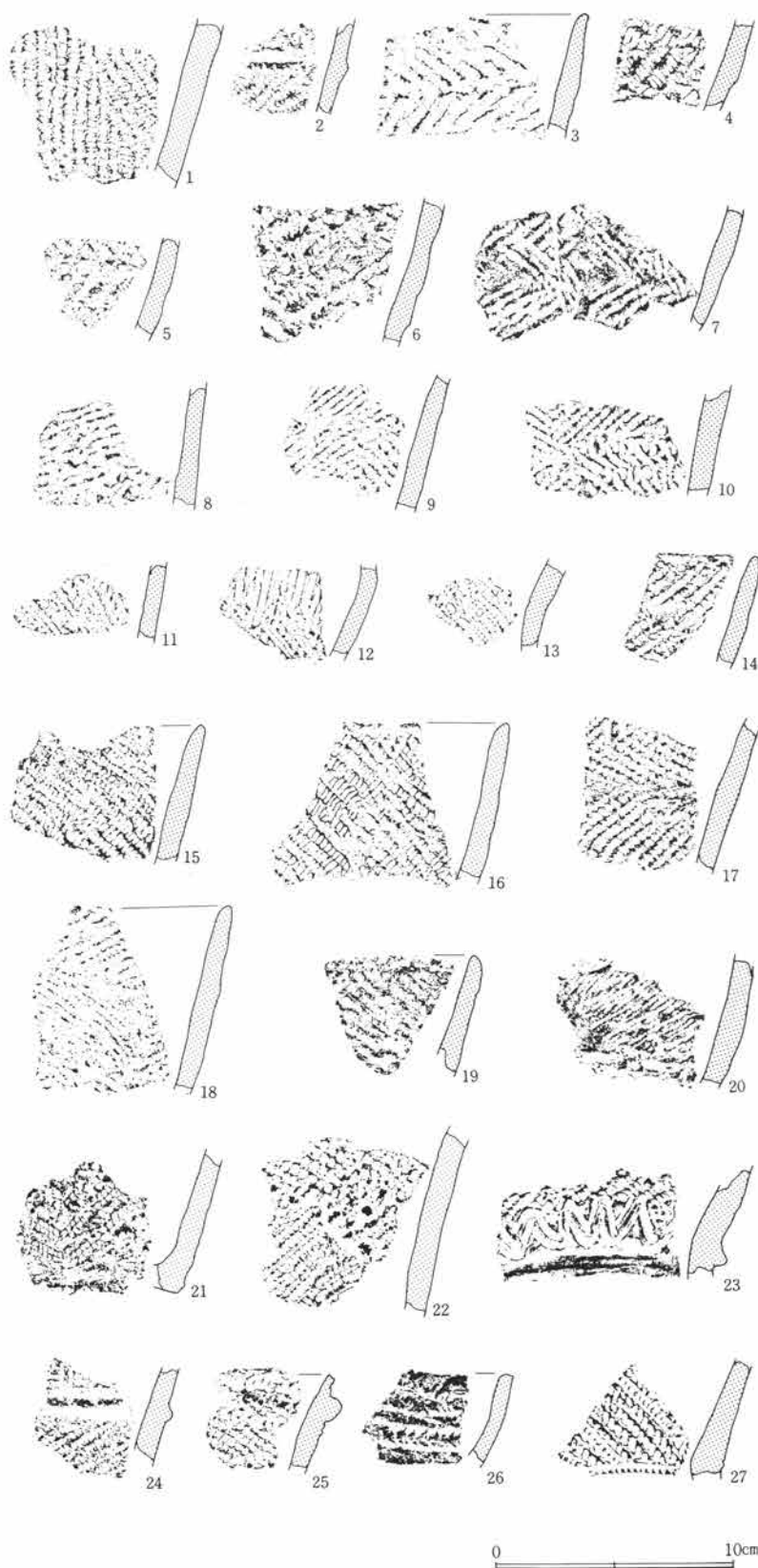
2群～5群土器が総計約200点出土した。2群～4群土器は数点ずつである。5群土器の内訳は、1類58点、2類37点、4類10点、5・6類17点、その他である。なお、この他に剥片石器1点、剥片類、小礫が数点ずつ出土している。

2群土器

2類(1)

1点のみ出土した。胴下半部の破片と思われ、やや厚手である。外面は丁寧に調整されているが、内面は荒い調整である。文様は0段3条RLの縄文を、斜位・縦位に交互に施して、縦位の羽状縄文を構成している。胎土には多量の砂粒と繊維を含む。色調は黄褐色で、焼成は良好である。

III 検出された遺構と遺物



3群土器 (2~6)

2は口縁部に文様帯をもつ土器である。文様はLの撚糸圧痕で渦巻文を施し、下端に刻みを施した低い隆帯をめぐらして文様帯を区画し、以下に0段3条LRの縄文を施している。3~6は0段3条の2種類の原体で羽状縄文が施された土器である。いずれも短縄文で、施文幅は1.5~2cmである。3は口縁部破片で、口唇部は先細りとなり、口唇下には若干の無文部がおかれている。5では原体端部の結び目が認められる。内面は丁寧に調整されており、3は研摩が施されている。

4群土器 (7~12)

胎土に繊維をサンドイッチ状に含み、内面は丁寧に整形されている。

3類 (8・10)

8は無節Lのループ縄文が施された土器である。10は0段多条RLとLRのループ縄文で羽条縄文が構成されている。

4類 (11・12)

2点とも0段3条R $\begin{cases} L \\ R \end{cases}$ $\begin{cases} R \\ L \end{cases}$ を施した土器である。12は口縁部付近の破片で、口縁に半截竹管による縦位の集合沈線が施されている。

6類 (7)

RとLの無節縄文で菱形縄文が構成される。

第44図 J3号土坑出土遺物

1 縄文時代の遺構と出土遺物

7類 (9)

0段3条RLとLRで菱形縄文が構成されるものと思われる。

5群土器 (13~30)

1類 (14~18・28・29)

15・16はRLの斜縄文を施した土器である。17はRLを縦横に施文して羽状縄文を構成している。18は0段多条RLとLRで羽状縄文が構成されている。14は口唇下にRLを施し、さらに無節Lを重複施文し、その下にLRを施している。28は胴部中程がくの字状に弱く折れ曲がり、胴部がやや張り、口縁部が直線的に開く平縁の深鉢形土器の大型破片である。約1/2周分の破片である。文様は縄文のみで、口唇下から縄文RLが施文される。29は胴部が張り、胴上半が括れて口縁部がやや外反しながら開く、平縁の深鉢形土器の大型破片である。約半周分が出土している。口唇部は凹凸が荒しく、丸みを持つ部分、平坦な部分、内削ぎ状の部分等がある。口縁部は折り返し状にやや肥厚する無文帯となっている。この無文帯は縄文施文後に粘土を貼り付けて形成されている。胴部には縄文RLを横位に施し、下半には縦位に施文して羽状を構成している。また、胴上半部にも一部に縦位施文している。なお、図には示さなかったが、口縁付近に補修孔が2つ認められる。

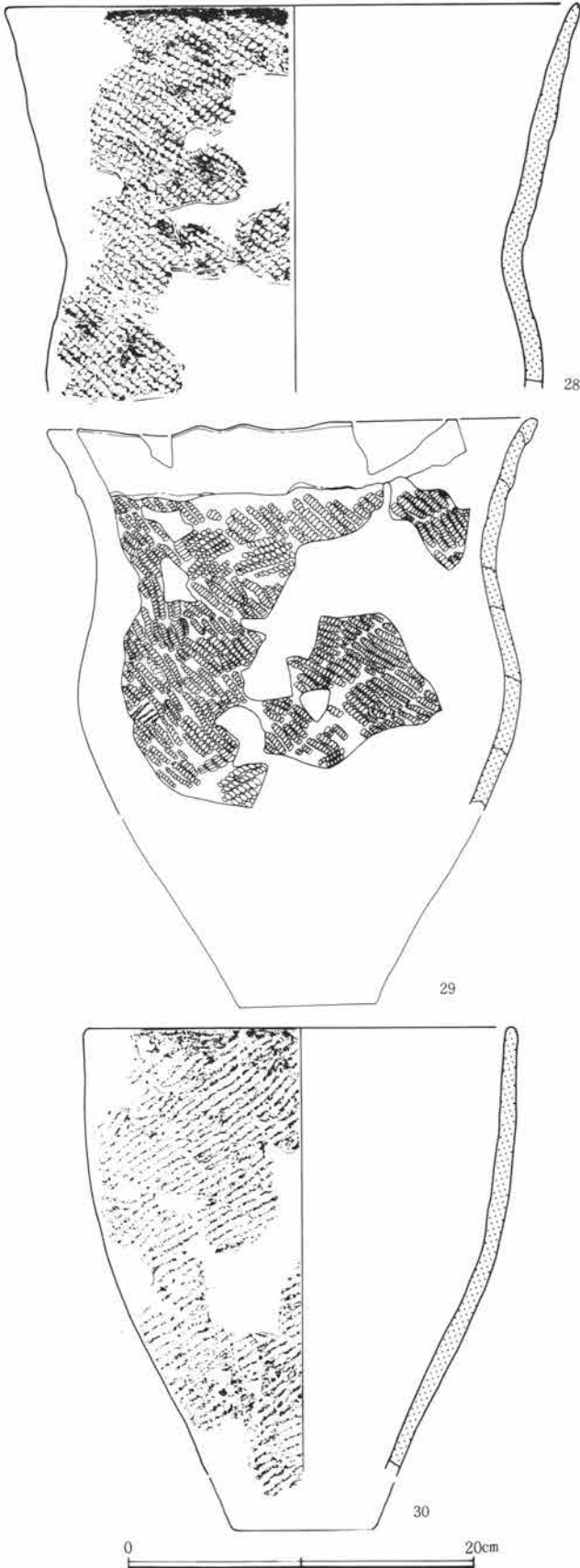
2類 (19・20・30)

19はRの無節縄文が施されている。20は無節縄文であるが、原体は直前段撚LR Rである。30は底部から内湾しながら開き、口縁がほぼ直立する平縁の深鉢形土器の大型破片である。胴上半部1/2周分・下半部1/2周分が出土している。全面に無節縄文Lが施されている。

4類 (21・22)

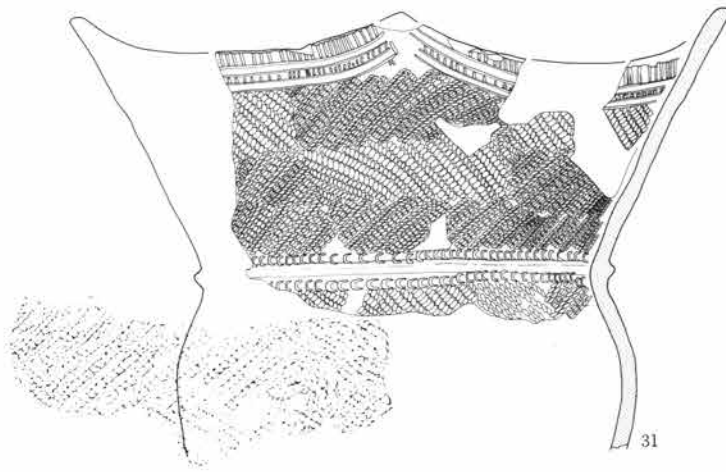
A (22) 軸縄RLにR縄2本を附加したRL + $\frac{R}{R}$ を縦位に、RLを横位に施文して羽状縄文を構成した土器である。

B (21) 底部破片で、R縄2本とL縄2本を



第45図J 3号土坑出土遺物

III 検出された遺構と遺物



0 20cm

第46図 土坑出土遺物

附加した2種類の原体で、菱形縄文が構成されている。

5類 (23・24)

23は胴屈曲部に隆帯をめぐるせた土器で、隆帯直上に平行沈線による波状文が施されている。縄文はRL。24は口縁部文様帯下を隆帯で区画する土器で、文様帯は平行沈線で構成され、胴部には0段3条LRが施される。

6類 (25~27)

24は口唇下に隆帯をめぐるせた土器で、隆帯の上下には爪形文が施されている。なお縄文RLは隆帯上から施されている。25は口唇下に爪形文を数条めぐるせた土器である。爪形文は幅広の施文具で密に施されている。27は胴部中程がくの字状に屈曲する土器で、胴上半部に斜位の爪形文を施し、屈曲部に同爪形文をめぐるして文様帯を区画している。地文はRLの縄文である。

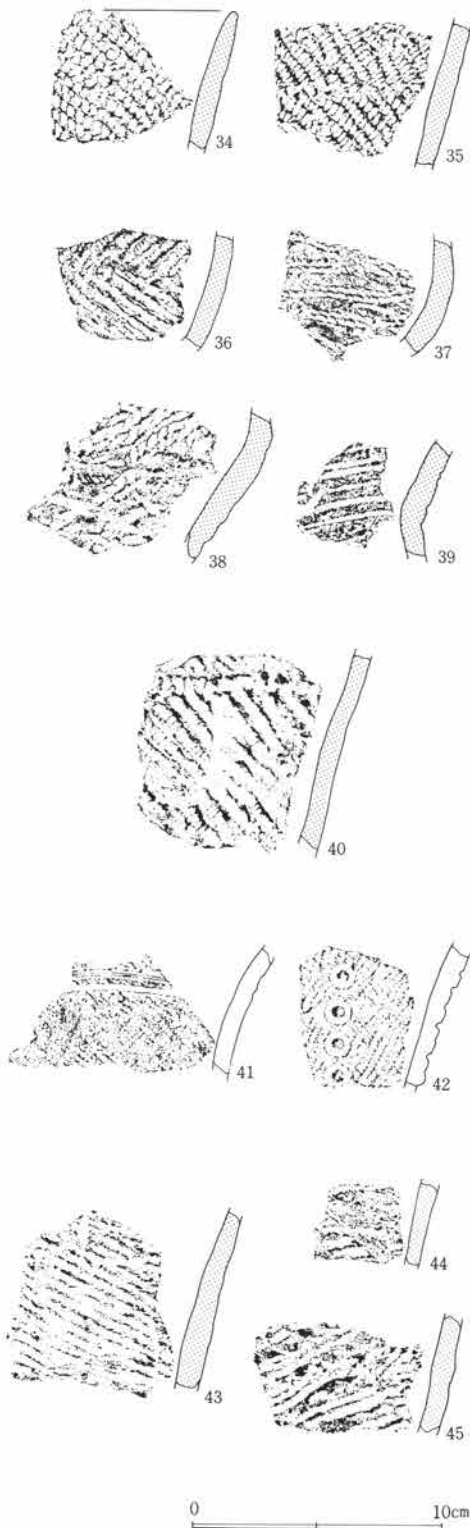
以上のように、出土土器は縄文のみを施文されたものが主体となっているため時期決定は難しいが、強いて言うならば、附加条が施された土器、頸部がくの字状に折れ曲がり隆帯が施された土器、幅広爪形文を密に施文した土器が伴出していることから、黒浜期の中頃としたい。

J4号土坑 (第46図)

全て5群土器で、深鉢形土器2個体の大型破片と土器片12点、およびチャート片1点が出土している。

32は1類である。胴部中程が括れ、口縁部が直立する平縁の深鉢形土器である。口縁上端が外傾し、口唇部は平坦面をなしている。縄文は同一原体で、上半部は横位、下半部には縦位に施文して、羽状を構成している。原体は1段4条LRで、太い条が3本おきに認められる。

1 縄文時代の遺構と出土遺物



第47図 土坑出土遺物

31は5類である。爪形文も施されているが、口縁部を重視した。胴部中程が強く括れ、口縁部がやや反外しながら大きく開く、4単位波状口縁の深鉢形土器である。口唇部は平坦である。口縁波頂部には、J1号竪穴状遺構12と同様の棒状貼付文が施されるが、2ヶ所とも剝落している。文様は、口唇直下に縦位沈線を施し、その下に半截竹管による2条の平行縄文をめぐらして口縁部文様を構成し、胴括れ部に断面三角形の隆帯をめぐらし、その両側に爪形文を施して胴部縄文を区画している。胴部には附加条第1種 $RL + L \cdot L$ と附加条第2種 $RL + \frac{L}{L}$ で羽状縄文が構成される。羽状縄文の変換部分では菱形を呈するが、一部に羽状とならない部分もある。口縁部文様は、1本づつ引かれた縦位沈線→縄文→平行沈線→棒状貼付文の順に施文されている。また、胴部爪形文は施文具が器面に直行するようにして施されている。器面は内外面とも入念に調整されており、内面には擦痕が認められる。

以上の土器の特徴から、本土坑の時期は黒浜期の古い段階にあたるものと思われる。

J9号土坑 (第47図 34~39)

5群土器小片46点、小礫4点が出土した。

34~36は1類である。34はRL、35は0段4条RL、36は0段多条RLとLRで羽状縄文が施される。また、35には縄文部の結び目が認められる。

37・38は4類である。37はL縄2本を附加した原体が施されている。38はR縄2本を附加した原体と、L縄1本の附加条第3種原体が施された土器である。

39は5類である。胴部中程が強く括れる土器で、幅広の半截竹管による平行沈線が斜位に施される。

以上の土器から、本土坑の時期は黒浜期中頃と思われる。

J10号土坑 (第47図 40)

4群土器1点と礫1点が出土したのみである。土器は流れ込んだものと思われ、摩耗が著しい。0段多条RLのループ縄文が施されている。

J12号土坑 (第47図 41・42)

5群土器2点、6群土器11点、礫1点が出土している。41・42は諸磯a式土器(6群1類)である。41は横位の平行縄文、42は竹管による円形刺突文が施された土器で、縄文は41がRL、42がLRである。

Ⅲ 検出された遺構と遺物

J 13号土壇 (第47図 43~45)

3点とも黒浜式土器で、43は2類で、原体はLである。44・45は4類Bである。44は軸縄LにL縄4本を附加したもので、附加条第2種L + $\frac{L}{L}$ 。45はL縄2本を右巻きで附加したもので、軸縄は見えない。

J 14号土壇 (第46図 33)

胴部中程がくの字状に弱く折れ曲り、口縁部がやや内湾しながら開く、平縁の深鉢形土器の大型破片である。無節縄文LとRを、中央を境に各々横位施文して、縦位の羽条としている。なお、縄文は太いもの2本と細いもの1本が交互に見られることから、3条縄と思われる。比較的薄手の土器で、器内面は丁寧に調整され、研磨が施されている。

(4) 遺構外出土遺物

土器 (第48図~第52図・第53図1~7)

1群から11群の土器が出土しているが、総量はいたって少なかった。これは、遺構の底面にまでおよぶ耕作等による攪乱を受けていること、攪乱層を重機で削平していること、などによるものと思われる。群別に見ていくと、当然のことながら5群土器が主体を占めており、6群土器がこれについているが、点数は少ない。その他の土器群は数点ずつの出土であった。

1群土器 (第48図1・2)

条痕文土器である。1は内面に斜位の条痕を施し、外面斜位の擦痕を残す土器である。器面には凹凸が認められる。2は外面に横位の擦痕を残す土器で、内面に条痕は認められず、荒れている。2点とも胎土に多量の繊維と砂粒を含む。焼成は良好で、色調は外面が黄褐色、外面は黒褐色を呈す。

2群土器 (第48図 3)

遺構からは1類が出土しているが、遺構外では認められなかった。

2類 (4)

縄文の条を継位に施した尖底部である。底部はやや突出ぎみに作り出され、厚くなる。器面には0段多条RLを弱く斜位施文されている。胎土に繊維を多量に含み、器面調整はやや荒い。焼成は良好で、色調は外面が黄褐色、内面は灰褐色を呈す。

3群土器 (第48図 4~6・21)

いずれも口縁部の破片である。4・21は燃糸圧痕文が施された口縁部破片で、原体は4が0段3条L、5はRとLを合わせた矢羽根状燃糸文である。5は口唇部が外削ぎ状を呈し、0段多条RLとLRで羽状縄文が施されている。また、両原体の端部を結んだ細い燃糸が認められる。6は口唇部が先細りで丸く、器面には0段3条RLとLRで羽状縄文が施される。5・6はともに短い原体を使用している。胎土には多量の繊維を含み、器面調整は良好である。焼成良好で、色調は4・5が黄白色、6が黒褐色、21が黄褐色を呈する。

4群土器 (第48図 7~10・19~22)

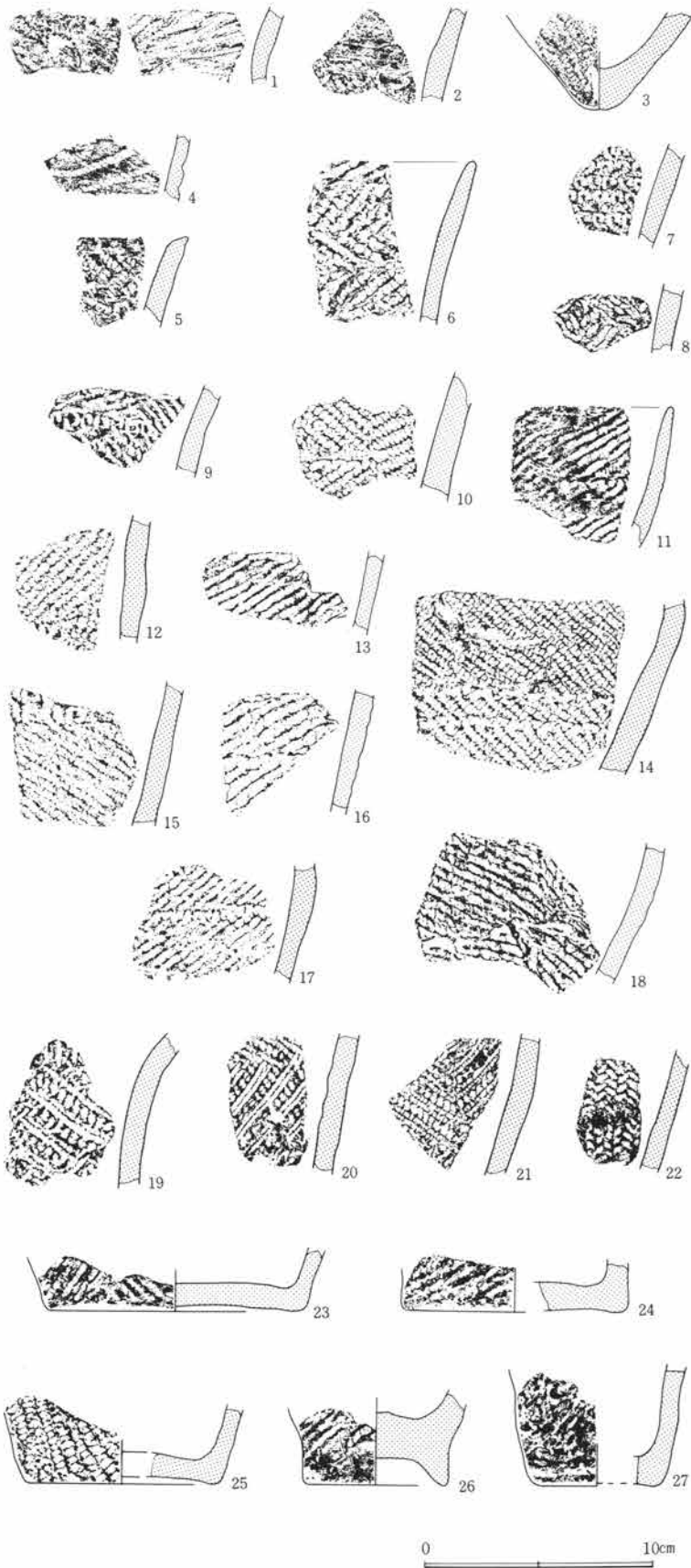
胎土に繊維を多量に含み、器面は丁寧に調整され、内面は研磨が施されているものが多い。縄文はきちんと燃られた原体で、丁寧に施されている。

2類 (8)

LとRの2本の縄による結節第1種が施されている。

3類 (7・9・10)

7はループ部分を重畳施文された土器である。9・10は羽状縄文が施された土器である。原体は、いずれ



第48図 遺構外出土土器

1 縄文時代の遺構と出土遺物

も0段多条RLとLRのループ縄文。

4類 (19~21)

正反の合が施された土器である。

原体はいずれも0段多条R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \end{array} \right\}$

と $L \left\{ \begin{array}{l} R \\ L \end{array} \right\}$ で、菱形状に構成される

ものと思われる。19は口縁部の破片で、口唇部を欠損しているが、口縁部に縦位の沈線が施されている。

5類 (22)

LLRRの組紐が施された土器である。

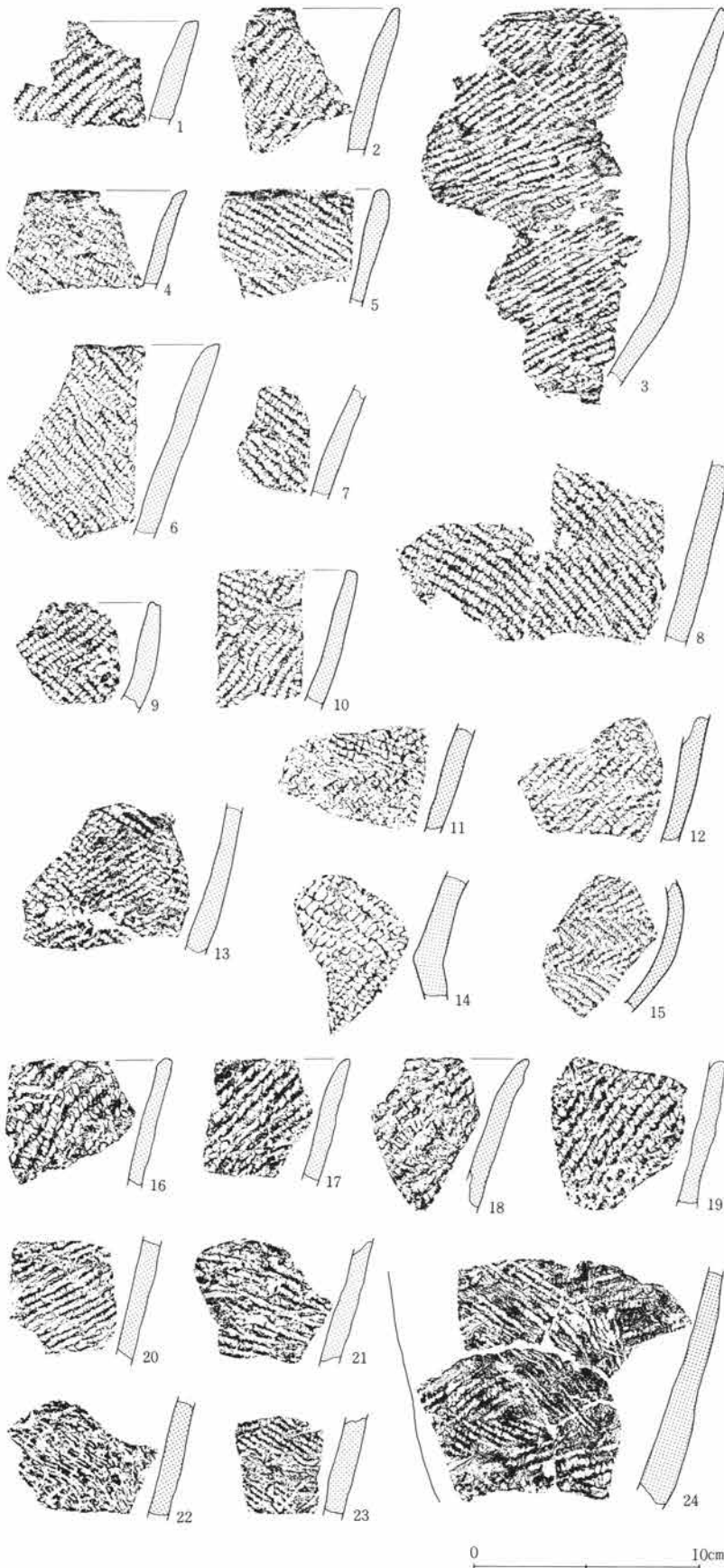
第5群土器 (第48図10~18・23~27、第49図~第51図、第52図1~10)

本遺跡の主体を占める土器群である。胎土に多量の繊維を含み、器面調整は丁寧に研磨が施されるものもあるが、かなり荒いものも多い。縄文の撚りや施文は、4類に較べると粗雑である。口唇部形態は、内削ぎ状、縦削ぎ状、丸いもの、平坦なもの、先細り等様々であるが、器形との関連である程度の傾向が見られるようである。なお、以下の分類は便宜的なものであり、当然のことながら1~4類は5~8類等の胴部の可能性があることを付記しておきたい。

1類 (第49図1~19・16・17、第48図23~26)

0段2条縄のものが多いが、3条縄のものも比較的多く、4条縄もまれに認められる。また、羽条あるいは菱形状に構成されるものも多く、その場合撚りの異なる2種類の原体で構成されるのが大半である。

III 検出された遺構と遺物



第49図 遺構外出土土器

1・2・16・17はLR、3～8はRLの斜縄文が施された土器である。3は全面継位に施文されている。なお、1・2・4～6・7は0段3条、7は0段4条、3は0段多条である。

9～14は羽条あるいは菱形状に構成された土器である。13はRLを縦横に施文して菱形状に構成しているが、その他はRLとLRで構成している。10は0段3条、11は0段多条である。

第48図23～26は底部破片である。僅かに上げ底状を呈するものが多いが、26のように著しい上げ底もある。縄文は24・26はLR、25はRLの斜縄文、23はRLとLRで羽条が構成される。

2類 (第49図18～24・第48図27)

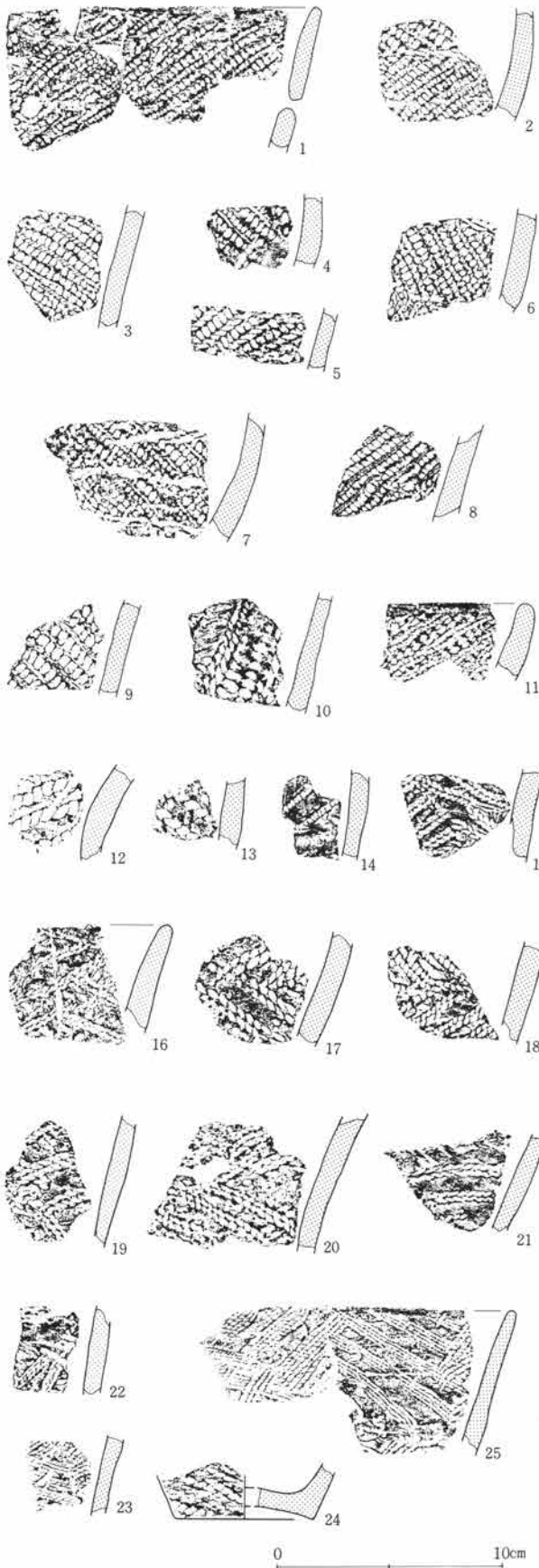
無節縄文が施された土器で、1類と同様な構成、施文がなされるものと思われる。0段多条は判読できなかった。

18～20はL、21・23はR、22は直前段反捲りRR Lの斜縄文、24はRとLで菱形状に構成されている。第48図は27はLが施された底部破片である。

3類 (第49図11～18、第48図18)

ループ縄文が施された土器である。単節と無節のものがあり、羽状を呈するものはない。また、ループ部分を重畳施文するものはまれである(15)。原体は11～13はLR、14・15はRL、

1 縄文時代の遺構と出土遺物



第50図 遺構外出土土器

16・17はL、18はRである。また、14は0段3条、
・0 他は不明。

4類 (第50図、第51図1~3)

附加条縄文が施された土器である。本群土器に特徴的な縄文があり、バラエティは豊富である。圧痕が軸縄の間に細い紐が附加された様を呈するもの(A)と、附加された縄の圧痕のみで、軸縄がほとんど見えないもの(B)とがあり、附加される縄はAでは1~2本、Bでは1~4本までが認められる。A・Bとも撚りの異なった2種類の原体で羽状あるいは菱形に構成されるものが多く、Bでは口縁部文様帯を構成するものもしばしば認められる。

A (第50図1~11) 1~10は附加条第1程、11は附加第2程である。原体は1がLR+R、2がRQ+L、3・6・7がRL+R、4がRL+L、5がLR+L・L、8・10がLR+ $\frac{R}{R}$ 、9がRL+R、11がRL+ $\frac{L}{L}$ である。1は左端に補修孔が1つ認められる。2は同原体を縦横に施文して羽状をなしている。5は軸縄と附加された縄が交互に現われ、一見組紐あるいは束の紙のように見える。

B (第50図12~24、第51図1~3)

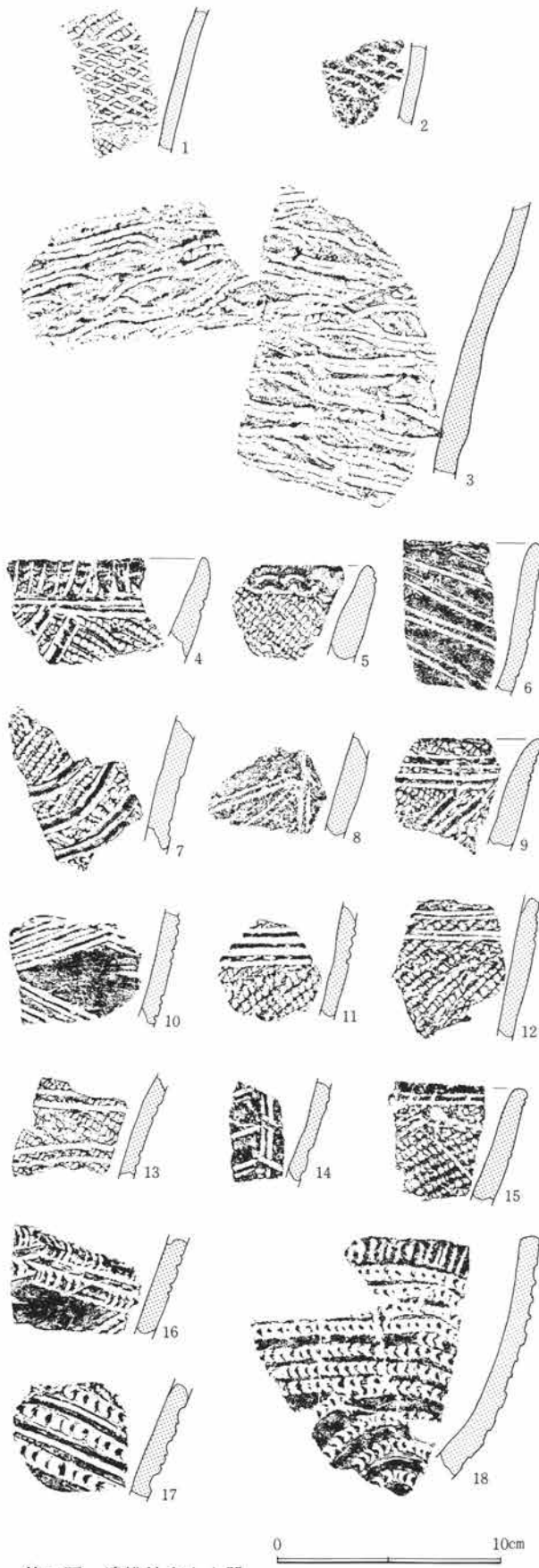
従来、撚糸文とされていた縄であるが、軸縄の認められるものがあることから、附加条Bとした。附加される縄は1~4本までのバラエティが認められるが、2本単位のものが多い。軸縄は無節を多用しており、附加条を軸縄の撚りの方向と反対に巻きつけた第2種が大半であろうと思われる。

第50図12~25は、右巻、左巻した2つの原体で菱形縄文を構成する土器である。

12~14は1本単位のもので、附加条は12・13が太いR、14は0段多条RとLである。

15~21・25は2本単位のもので、15は左巻の $\frac{L}{L}$ と右巻の $\frac{L}{R}$ 、16は左巻きの $R+\frac{R}{R}$ と右巻きの $L+\frac{L}{L}$ 、17は左巻の $\frac{R}{R}$ と右巻の $\frac{L}{L}$ 、18は巻巻の $R+\frac{L}{L}$ と左巻の $\frac{R}{R}$ 、19は左巻の $\frac{L}{L}$ と右巻の $\frac{R}{R}$ 、20.左巻の $R+\frac{L}{L}$ と右巻の $L+\frac{L}{L}$ 、21は $\frac{R}{L}$ 、25は右巻の $\frac{R}{R}$ である。16・18・20は軸縄が判読できた。15・21は

III 検出された遺構と遺物



第51図 遺構外出土土器

矢羽根状の附加条 ($\begin{smallmatrix} R \\ L \end{smallmatrix}$) が使用されている。

22・23は3本単位のもので、22は $\begin{smallmatrix} R \\ R \\ R \end{smallmatrix}$ 、23は右巻の $\begin{smallmatrix} R \\ L \\ L \end{smallmatrix}$ と左巻の $\begin{smallmatrix} L \\ L \\ L \end{smallmatrix}$ である。

24は4本単位のもので、本遺跡出土のなかでは最多である。附加条は $\begin{smallmatrix} R \\ R \\ R \\ R \end{smallmatrix}$ の右巻と $\begin{smallmatrix} L \\ L \\ L \\ L \end{smallmatrix}$ の左巻である。なお、この原体は単軸絡条体第1A類の手法で作成されており、図の下端に幅約1cmの結び目が認められる。原体の長さは少なくとも10cm以上と思われる。軸は硬質なものが見込まれる。原体は1つであろう。

第51図1・2はいわゆる細目状燃糸文が施された土器で、同一個体と思われる。燃糸はLで、施文帯の両端はつながっており、一本の原体をクロスしながら巻き付けているのであろう。単軸絡条体5類であろうか。施文部上方にLR、下方にRLの縄文が施されている。やや薄手の堅固な土器で、胎土に砂粒を多量に含み、繊維はごく僅かである。

第51図3はR縄2本を附加した原体で、波状の文様を施した土器である。原体は不明。

5類 (第51図4~14)

半載竹管による平行線文で文様を施すものを一括した。4・7は同一個体である。口唇直下に縦位沈線を1本ずつ施し、下端を平行沈線で区画以下に3条の平行沈線で文様が施されている。地文は附加条第1種(A) $RL + \begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}$ と $LR + \begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}$ による菱形縄文である。5は口唇下にコンパス文を施し、以下に附加条第1種(A) $RL + L$ を施している。6・14は肋骨文が構成される土器であろう。9は4・7と同様の文様が構成されると思われるが、口唇下の縦位沈線は施されない。地文は附加条 R $L + \begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}$ 。10は2~3条の平行沈線で蓋形文を構成する土器である。11~13は平行沈線を横位に数条施された土器で、地文は11が複節 LR 、12が0段3条 LR 、13が RL である。

6類 (第51図15~18、第52図1~4)

爪形文を一括した。

第51図16~18は幅広の爪形文で菱形文を構成する土器である。16は爪形文のたち消えが見られる。

1 縄文時代の遺構と出土遺物

17は爪形文間に平行線文が施されている。
18は口唇下に縦位沈線が施された土器で、
菱形区画内には渦巻状の文様が施されてい
る。

第51図15、第52図1～4は細い爪形文で
文様が施された土器である。15・1～3は、
施文具を立てるようきして、間隔をあけて
爪形文を施した土器である。15決胴部に平
行沈線による文様が施されている。地文は
縄文RL。4は密に施した爪形文で区画文
が構成される土器で、地文はRLとLRに
よる菱形縄文である。

7類 (第52図8)

口縁が直接的に開く沈線を施したもの。
薄手の土器で、口唇下に2条の沈線をめぐ
らし、その間に刺突を施している。

8類 (第52図10)

櫛歯文を施したもの。繊細な櫛状施文具
で横位の波状文が施された土器である。

10類 (第52図5～7・9)

その他のものを一括した。

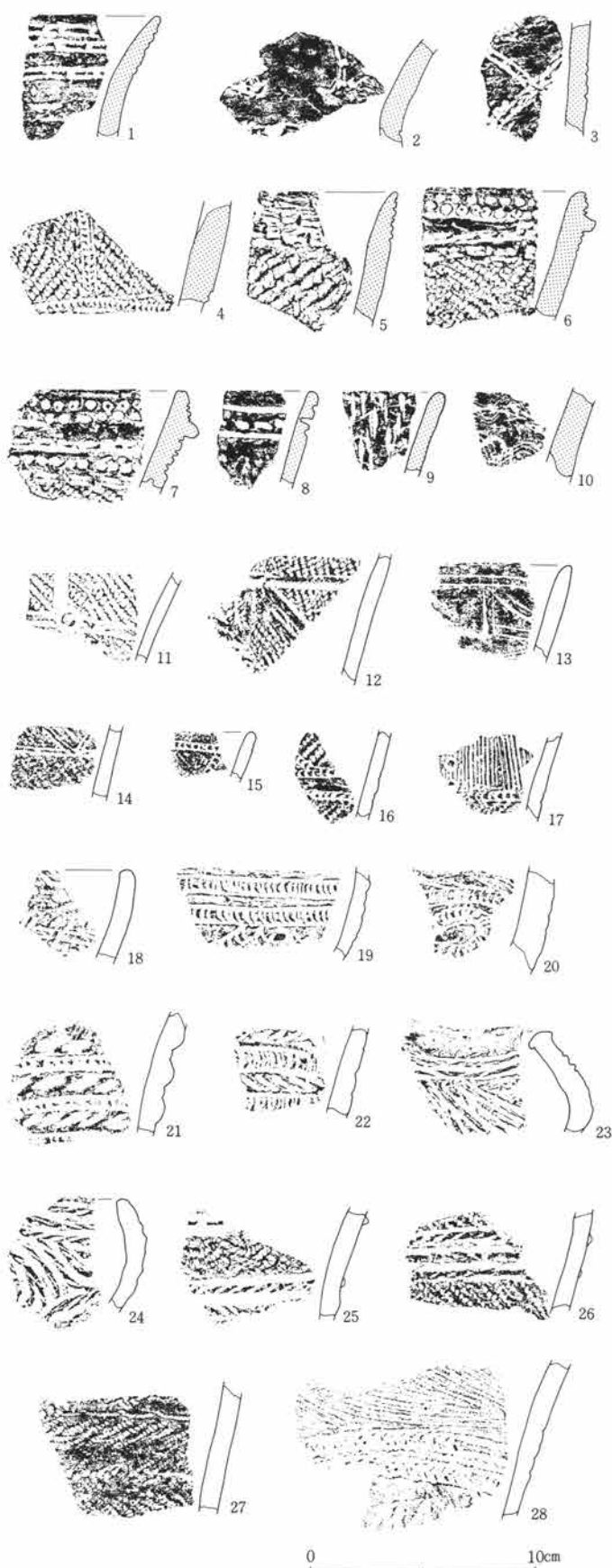
5は口唇下に半截竹管を押し引き施文し
た結節沈線を3条めぐらし、以下に無節L
を施文している。6・7は口縁部に隆帯を
めぐらした土器で、口唇下に竹管による円
形刺突文を2条めぐらし、隆帯下には、5
と同様の結節沈線を2条施して口縁部文様
帯を構成し、以下に0段3条RLとLRに
よる菱形縄文を施している。なお、結節沈
線間にも円形刺突文が施される。9は先端
の尖った施文具で切ったような短沈線が施
された土器である。

6群土器 (第52図11～27)

諸磯式土器を一括した。

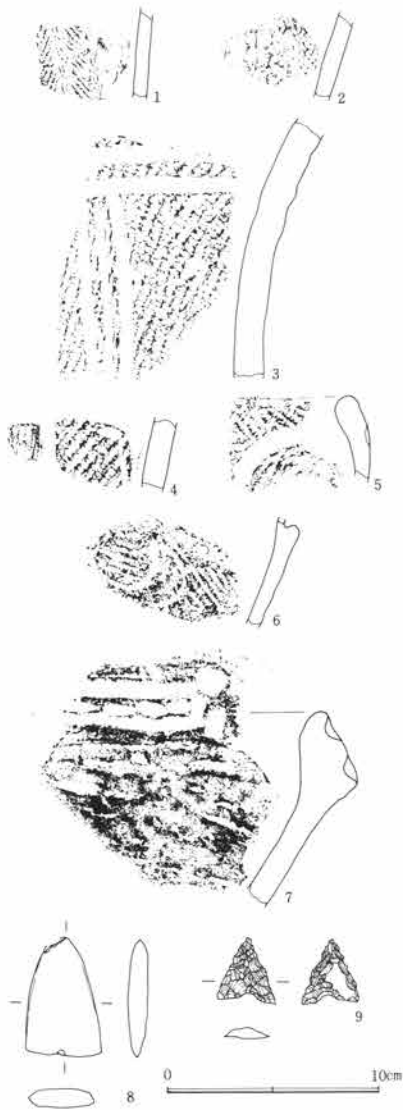
1類 (11～17)

諸磯a式土器である。11～14は平行線文
で文様が施された土器で、11・12は区画文
が構成される土器である。11は平行沈線の



第52図 遺構外出土土器

III 検出された遺構と遺物



第53図 遺構外出土遺物

交点に円形刺突文が施されている。地文はいずれもRL。15・16は爪形文で区画文を構成する土器である。地文は15がRL、16がLRの縄文で、爪形文間の縄文は磨り消されている。17は櫛歯文を格位に施したもので、下端を爪形文で区画し、以下に縄文LRが施される。また櫛歯文中には縦位に円形刺突文が配されている。

2類 (18~27)

諸磯b式土器である。18は平行沈線による格格子文が施された口縁部破片である。地文は縄文LRで、口唇直下にRの結節縄文が施されている。19~23は幅広の瓜形文で文相が施された土器である。爪形文は密に施文され、20~22は爪形文間に斜位の刻みが施されている。23は浮線文土器の文様を平行沈線で施文した土器で、口縁部はくの字状に内湾する。地文は縄文。24~26は浮線文で文様が施された土器である。地文は24・26がRL、25はLR。なお、25にはR縄による結節縄文が施されている。27はRLとLRで結束第1種羽状縄文を施した胴部破片である。上方に原体端部を結んだ圧痕が認められる。

7群土器 (第52図28)

浮島式土器である。胴部破片で、胴上半部に半截竹管による集合沈線で菱形状の文様を構成し、下端に鋸歯状爪形文を2条めぐらして文様帯を区画し、下半部には貝殻腹縁による波状文を施している。胎土には多量の細砂粒を含む。

9群土器 (第531・2)

五領ヶ台式土器である。2点ともRLとLRによる結束第2種羽状縄文が縦位に施された胴部の破片である。縄文は若干の

無文部をおきながら施文されており、施文帯側縁に原体端部を結んだ圧痕が認められる。

10群土器 (第53図3~5)

加曾利E式土器を一括した。3は加曾利E2式土器で、頸部に2条の沈線をめぐらし、そこから3本の沈線を垂下されている。4・5は加曾利E3式土器である。4は磨消縄文帯を垂下させた胴部破片、5はアーチ状の沈線区画文が施された口縁部破片である。地文はいずれもRLの縄文で、5では口唇下のみ横位施文して、羽状をなしている。

11群土器 (第53図6・7)

堀之内1式土器である。6は波状口縁を呈し、波頂部に突起をもつが欠損している。文様は、口唇下に刺突文をめぐらし、波頂下にJ字状文が施される。縄文はRL。7は唇部がくの字状に屈曲する口縁部破片で、口唇直下に烈点を伴う2条の沈線が施されている。

石器 (第53図8・9)

8は蛇紋岩製の小型磨製石斧、9は黒耀石製の石鎌である。遺構外からは、これらの他に打製石斧1点、磨石3点、石皿片1点、剥片石器1点が出土している。

2 古墳時代の遺構と出土遺物

2号住居址▶出土遺物P.72・73、第64図

本遺構で確認された土師器使用住居址の中で、最も古い段階に属するものである。台地の南東縁辺部近くに位置している。東方約3mに隣接する4号住居址は、ほぼ同時期のものである。西側が平安時代の1号住居址と重複している。

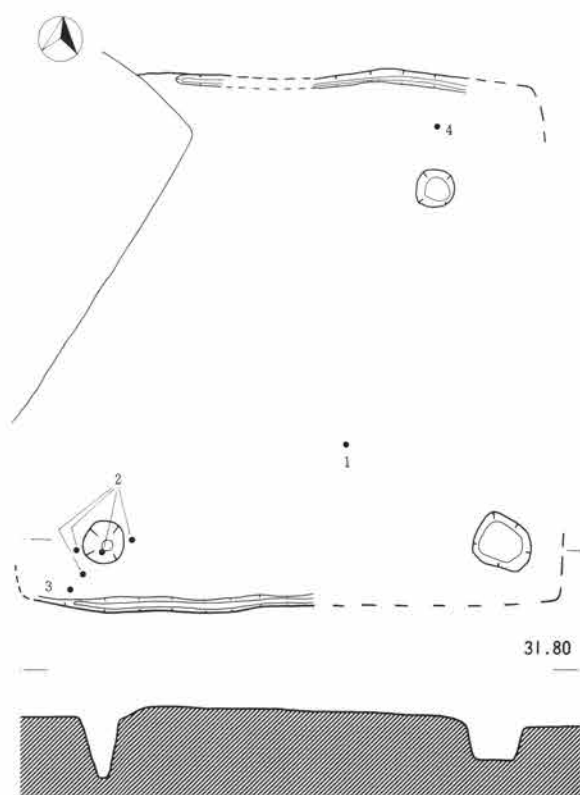
付近は、調査前、畑作物の栽培のため、ひどい攪乱をうけており、また、現地表より遺構面が浅いため、遺構の遺存状態もよくない。

部分的に残る壁周溝および床面から、一辺6mのほぼ方形プランであることが確認できた。住居址の平面プランの各辺は、ほぼ東西南北の方位に沿っている。

住居址の東南隅よりの床面には焼土が確認されており、炉に伴うものとも考えられる。

主柱穴と思われるピットが3個確認されており、深さは床面より約40~70cmをはかる。

南西隅の主柱穴の中および周囲に集中して土器が出土している。



第54図 2号住居址実測図

4号住居址▶出土遺物P.72・73、第64図

2号住居址とほぼ同時期の住居址である。

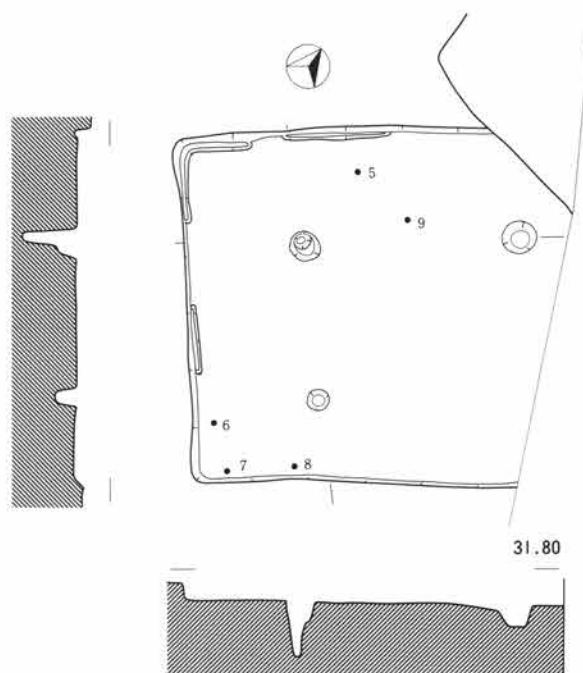
台地縁辺にあたる発掘区の東端で検出された。住居址の遺存状況は比較的よい。北東側は部分的に調査区域外になっているため調査していない。住居址の北隅で平安時代の3号住居址と重複している。

住居址の対角線方向をほぼ方位にとっており、短辺3.7m(東南-北西)、長辺4.9mの長方形プランを呈する。

主柱穴3個が確認されており、深さ30~60cmを有している。壁周溝は、部分的に存しており、幅10cm、深さ5cmである。

現状では炉等の施設は確認されていない。

遺物は、南東隅と西壁側に集中して、床面直上に出土している。



第55図 4号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

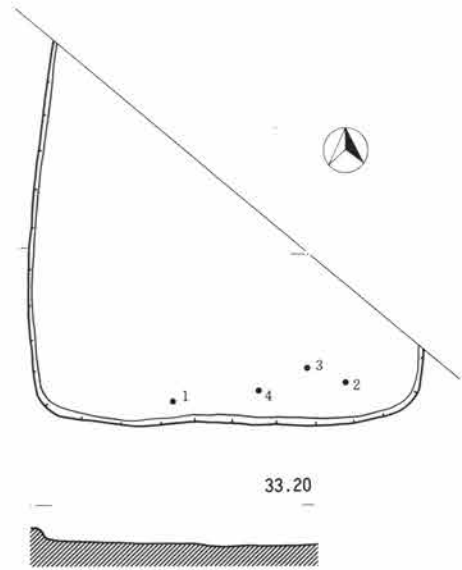
9号住居址▶出土遺物P.73・74、第65図

2号住居址の北約6mに位置する。住居址が調査地外にまたがるため、全体の約半分の調査であった。

東西4.3m、南北4m強のほぼ方形に近いプランを呈している。床面は堅くしまっていた。支柱穴は検出できなかった。

遺物は、完形あるいはそれに近い甑形土器や甕形土器、杯形土器が南東隅に集中して、床面直上より出土した。

出土遺物の型式観からすると、2号、4号住居址より新しく、明らかにカマドを有している時期のものである。本住居の場合、カマドは調査区域外となっている北側壁または東側壁に遺存しているものと思われる。床面上の出土土器は、南東よりに集中する傾向がある。このことが、カマドに近いための出土状態とするならば、カマドは東壁に付設されていた可能性があり、主軸を東西にしたものと考えられる。



第56図 9号住居址実測図

10号住居址▶出土遺物P.74・75、第65図

9号住居址の西約6mに位置する。住居址の対角線方向に方位をとり、主軸を北東から南西とする。

住居址南東側部分の破壊が著しいが、一辺3.9mのほぼ方形プランを呈するものと思われる。壁高は10cm前後の残存である。支柱穴は明確にとらえられなかった。

北東壁の中心より南西側に80cm偏してカマドが付設されている。かろうじて袖部の下部を残すのみであり、燃烧部幅40cm、奥行50cmを有している。袖部の用材としては、やや粗悪な粘土を使用している。

全体に破壊が著しく、出土遺物は少ないが、比較的カマド付近に集中して出土している。カマド左袖部に近い位置から、小型の甑形土器1個体分が出土している。

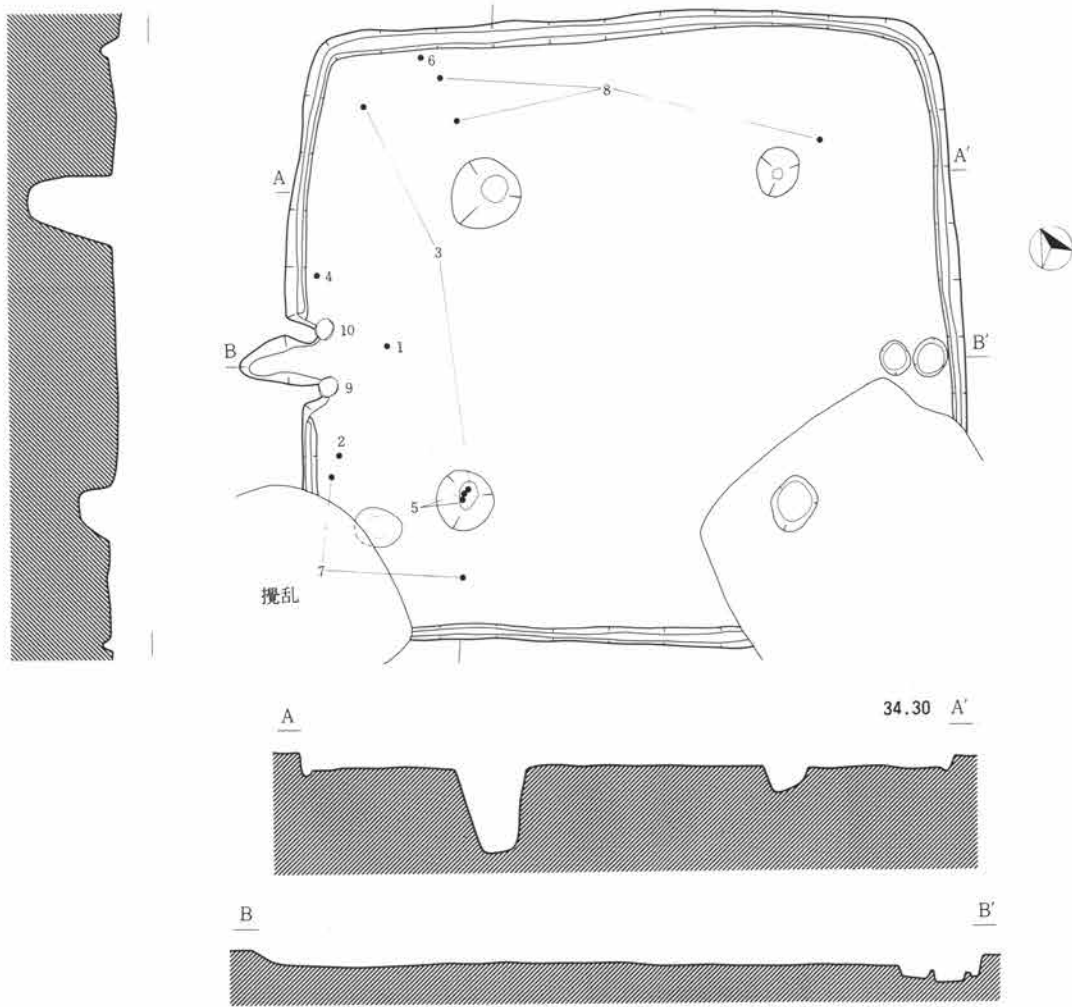


第57図 10号住居址実測図

15号住居址▶出土遺物P.76~78、第67図

台地縁辺部より西方へ120mの、奥まった部分に位置している。ほぼ本住居址と同時期と思われる2号、3号溝の東側約2.5mにある。前述の4軒の住居址とは別の住居址群である。南および西の隅は後の攪乱により破壊されている。

主軸をほぼ東西にとり、東西方向で6.8~7.2m、南北方向で6.8mの平面規模であり、やや台形に近い方形



第58図 15号住居址実測図

プランを呈している。残存状況のよい部分（西側壁）で壁高15cmの深さまで遺存している。住居址南側部分は床面近くまで破壊がおよんでいる。床面よりの深さ8～15cm、幅15～20cmの壁周溝が明瞭に掘られ、全周している。

支柱穴4個が確認されている。壁際より1.6m前後の位置であり、柱穴をむすぶと、住居址プランの台形ぎみのプランとほぼ相似形になる位置に掘られている。

カマドは、西壁の中心よりやや南に寄った位置に付設されている。袖部は壁面より内側に30cmほど張り出しており、端部は、長胴形の甕形土器を正立させて設置している。胴部下半が、袖用材とともに残存していた。袖は用材として、やや質の悪い白色粘土を使用している。

カマドの位置から壁際にそって南へ1.4mの住居址南西コーナーよりには、貯蔵穴状のピットが確認されている。

カマドの位置する西壁と相対する東壁の、ちょうどカマドと対称の位置に、径35cm、深さ15cmの円形ピット2個が確認されている。そのうち、外側のピットには、こぶし大の河原石が3個入っていた。

III 検出された遺構と遺物

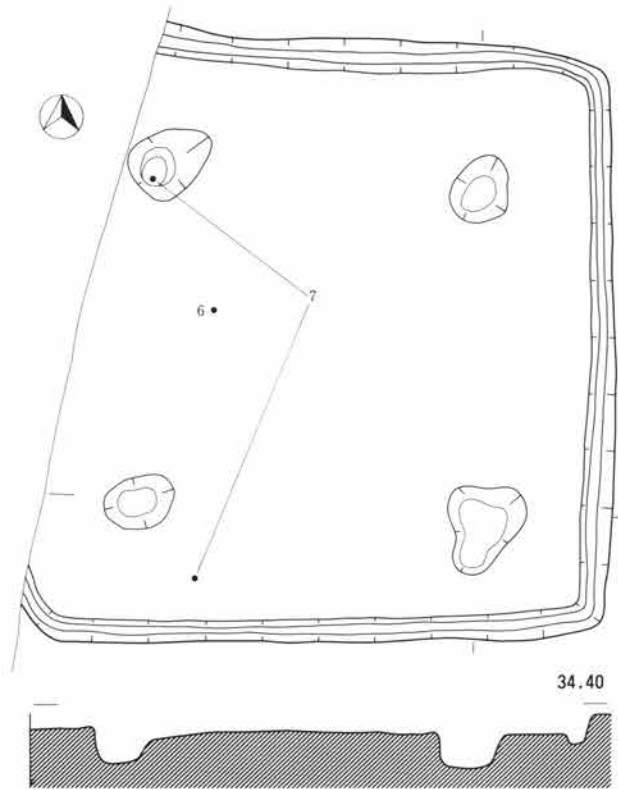
18号住居址▶出土遺物P.74・75、第65図

2、3号溝の西8.5mに位置しており、16号住居址と重複する。切り合い関係から本住居址に16号住居址が後出する。

出土遺物、住居址プランの形状からすると、明らかにカマドを有する時期のものである。西壁側のみ未調査で、他の3壁ではカマドが確認されないところから、主軸を東西にとり、西壁にカマドを付設していることが推測される。

一辺約6.4mのほぼ方形プランを呈するが、北西コーナーよりやや外側へ張り出しきみである。支柱穴4個が確認されているが、いずれも、壁際より150cm前後の位置であり、ピットを結んだ形状は、住居址プランとほぼ相似形をなす。床面は堅くしまっていた。

本住居址は壁高15cm前後と比較的遺存状況のよい住居であったが、伴なう土器等の遺物は破片が数点のみであった。



第59図 18号住居址実測図

27号住居址▶出土遺物P.74・75、第65図

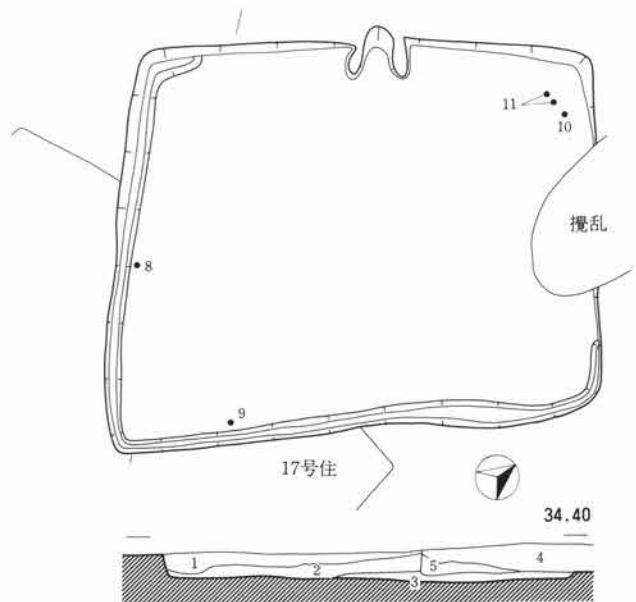
18号住居址の東側に隣接している。时期的に後出する16号住居址、17号住居址と重複しているため、削平部分が多く、伴出遺物も少ない。

住居址の方向は、対角線に方位をあわせている。長辺5.2m、短辺4.2mの長方形プランを呈しており、長辺たる北西壁中央にカマドが付設されている。壁高は最もよく残る北西壁で25cmを有している。

東南壁から南西壁にかけて壁周溝が明瞭に認められる。北東壁は後世の攪乱が著しいため、本来の存在の有無を断定できないが、カマドが付設されている北西壁に沿って壁周溝は存在しない。

カマドは、北西壁のほぼ中央部に付設されている。質の悪い粘土でつくった袖部が住居内に30cm張り出し、焚口部での幅40cmである。煙出しの部分は削平されてしまっている。

支柱穴は検出できなかった。



1. 焼土粒と白色軽石を含む黒色土。
2. ローム粒、炭化物粒、焼土粒と少量の白色軽石を含む黒褐色土。
3. ロームブロックを含む黒褐色土。
4. ローム粒、焼土粒と少量の白色軽石を含む黒褐色土。
5. 焼土粒と白色軽石を含む黒色土。

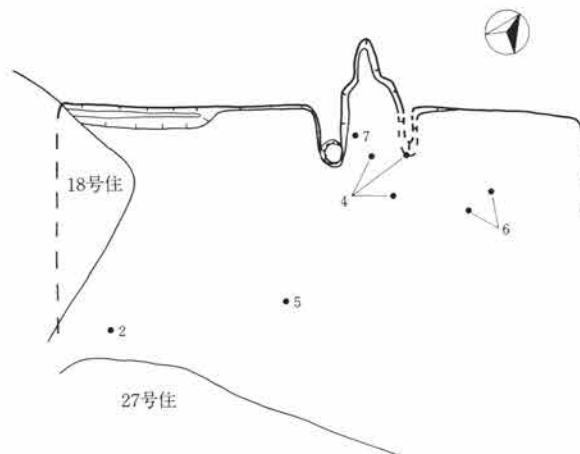
第60図 27号住居址実測図

16号住居址▶出土遺物P.75・76、第66図

本住居址は18号住居址、27号住居址を切り、17号住居址に切られている。

主軸を北西から東南にとり、北西壁にカマドが付設されている。住居址北東側で範囲が不明確であるが、主軸方向で2m、それと直交する方向で2.8mの長方形プランを呈するものと推測される。

カマドは北西壁の中央より、北東に偏して付設されている。住居壁より内側へ32cm張り出している白色粘土による袖部の端部は、長胴形の甕形土器を倒立させて設置している。向かって右袖部は破壊を受けており、明らかでないが、左袖部と同じ形状と推される。燃燒部は焚口部での幅38cm、奥行40cmで、奥より半分は壁外となり、その先に幅12cm、奥行32cmの煙り出し部分がとりついている。遺物はカマド周辺に集中して出土している。



第61図 16号住居址実測図

2・3号溝▶出土遺物P.78～82、第68・69図

台地縁辺部から西へ mの地点に位置している。ほぼ同時期と考えられる15号住居址の西側7mに隣接している。2条の溝状を呈するもので、部分的に重複している。3号溝が2号溝に時期的に先行している。

両者ともほぼ南北の走向を示しているが、直線状を呈してはいない。検出された範囲では、北側寄りでは、3号溝は西へやや膨らむ弧状をなすのに対し、2号溝は、同じ部分で東へやや膨らむ弧状を呈している。溝の規模は、3号溝が幅、上端で1.2～1.4m、下端で1～1.1m、深さは50cmである。2号溝は、幅は3号溝と同規模であるが、深さは30cmと浅い。いずれも底面は、ほぼフラットであり、断面形状は台形を呈している。

溝の埋没状態には、水の流れた痕跡は、両者とも認められない。また底面のレベルは不規則である。

溝内の遺物の出土状況には、両者で顕著な差違が認められた。3号溝では、埋土中から土器を中心として多くの遺物が出土している。その出土のしかたは、溝全体に均一的に出土するのではなく、一定の範囲に集中する傾向である。調査地の中央よりはまばらであり、両端よりでは密である。破片は大きく、完形のものもある。2号溝では、きわめて少なく、また小破片である。

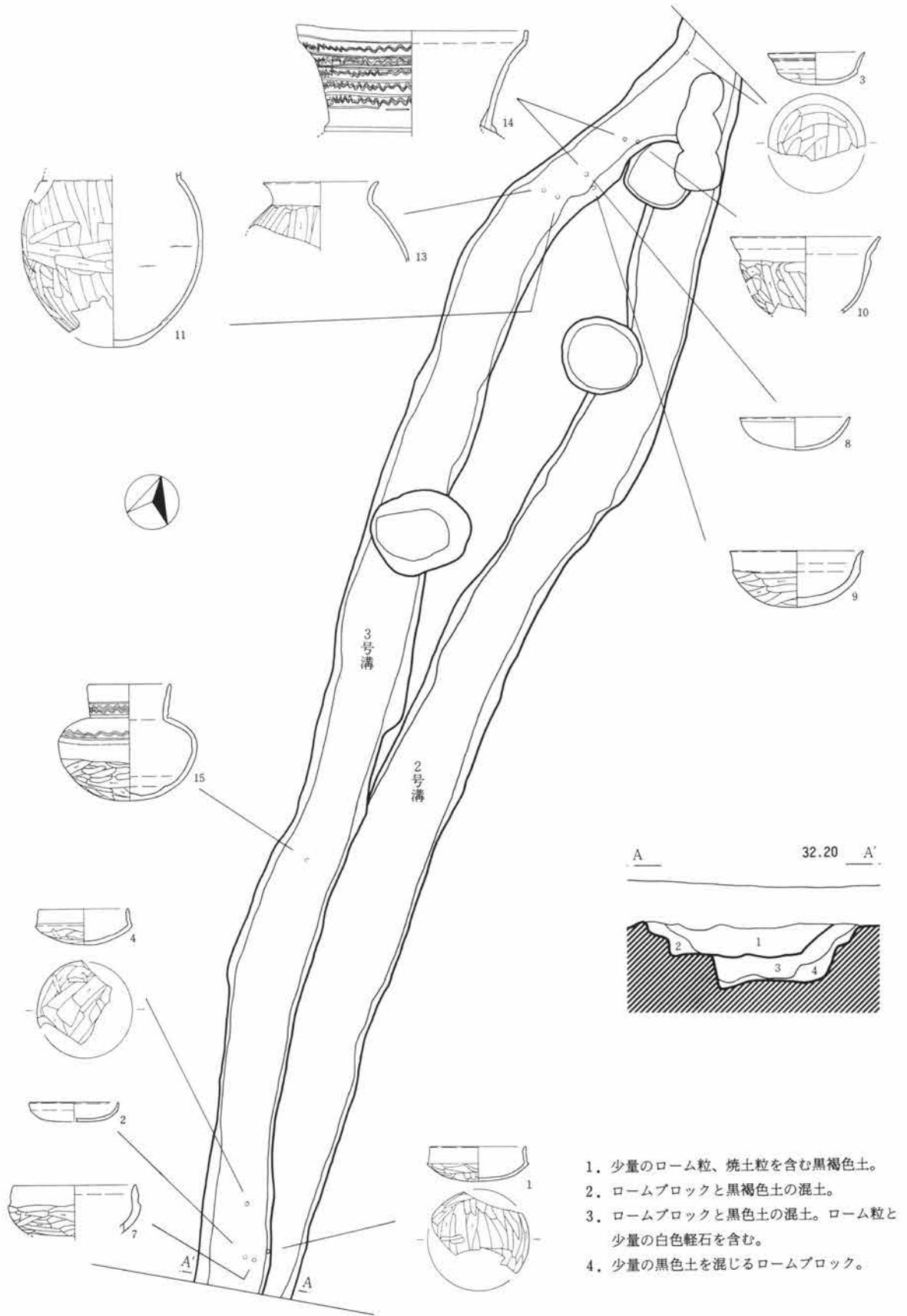
2号溝は、3号溝が埋没により機能しなくなった段階に、掘りなおしとしてつくられたことが、規模、走向から窺われる。遺物の出土状態、溝の深さからして、掘りなおしの2号溝は、3号溝に比べ短期間の機能であったと考えられる。

7号溝▶出土遺物P.81・82、第70図

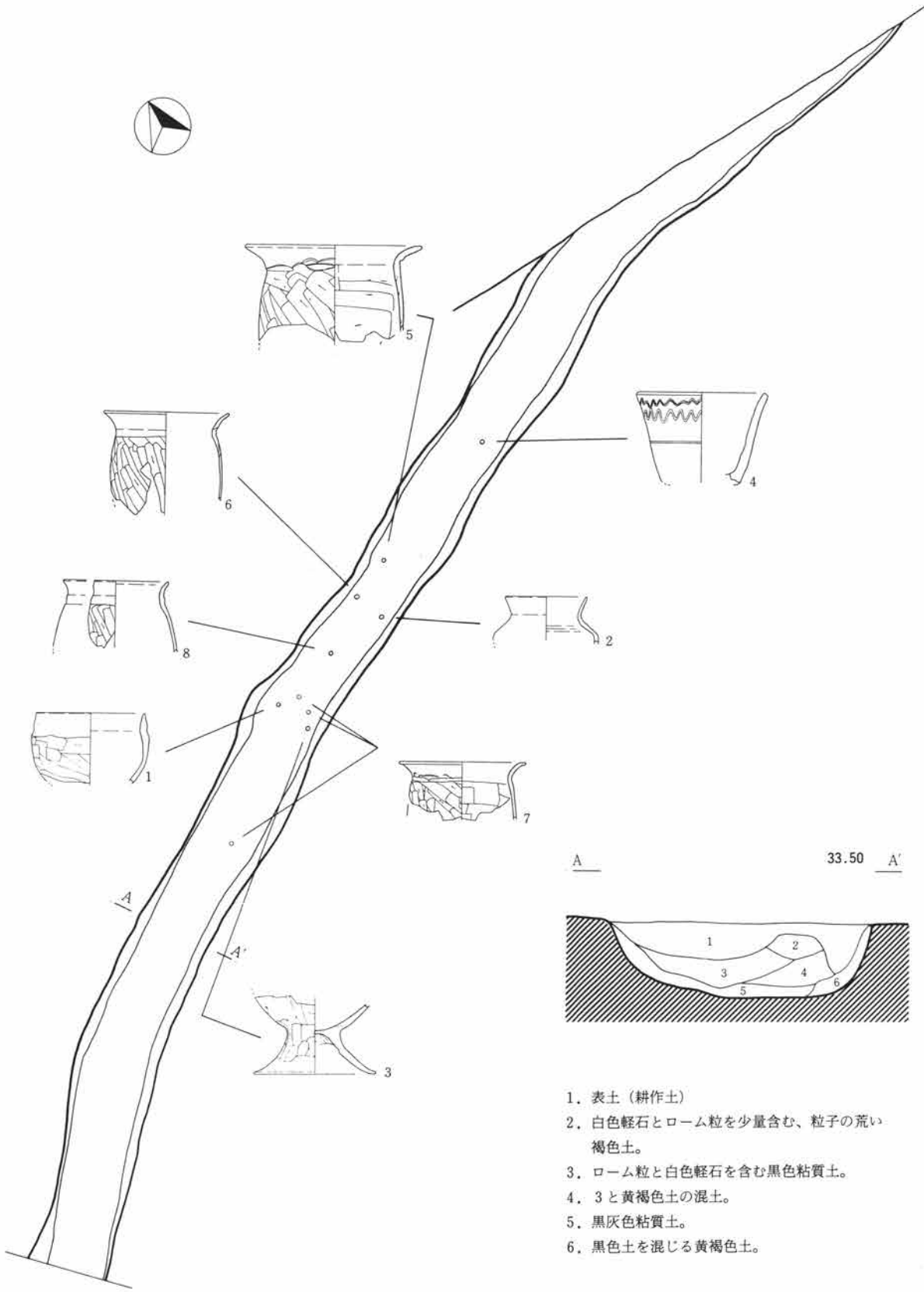
平安時代の溝状遺構である6号溝の西側に位置する古墳時代後期後半の溝状遺構である。

溝の走向は、ほぼ南西から北東にとるが、直線をなさず、北西にややふくらむ弧状を呈している。幅、上端で1.2m、下端で0.9m、深さ30cmの規模を有している。たちあがりには、前の2、3号溝にくらべると、直立ぎみである。底面はほぼフラットである。埋土の埋没状態からするならば、水の流れた痕跡は認められなかった。

III 検出された遺構と遺物



第62図 2号溝・3号溝実測図

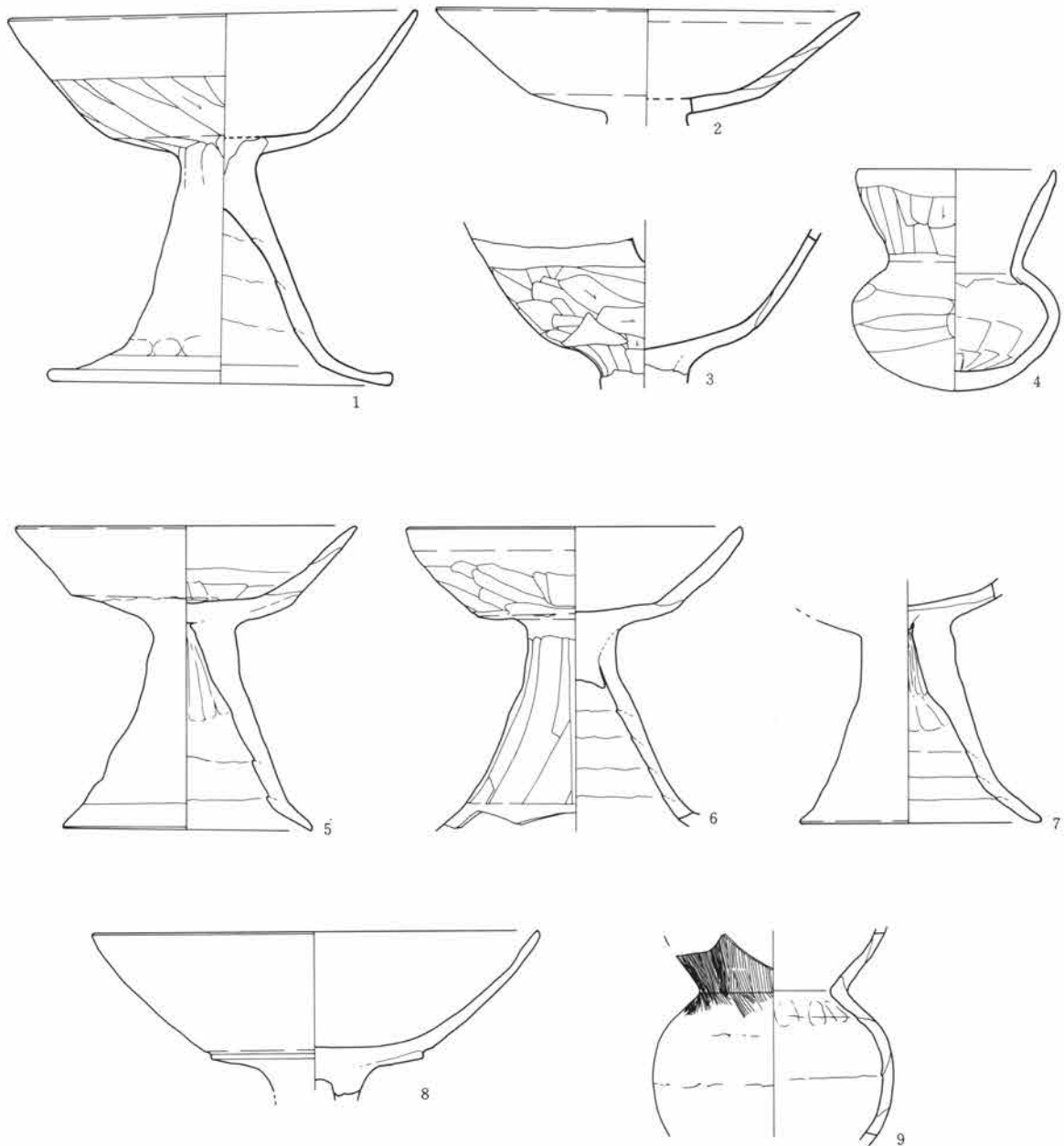


第63図 7号溝実測図

III 検出された遺構と遺物

出土遺物は、埋土中より出土のものが大半であり、比較的少量の出土であった。位置的には、検出されたうちの中心よりの一定の範囲に集中的に出土している。大部分は土器であり、大きな破片も多いが、完形に復せるものは出土していない。一定の場所に、破損した土器を投棄したものであろう。

規模、埋没状態等からすると、この7号溝は、前の2、3号溝と類似している。走向からすると、直接的に関連をするものではないようであるが、形状の類似、時期的にほぼ同時期である点等からして、機能的には同じものと考えられる。



2号住居址出土遺物(1~4)
第64図 4号住居址出土遺物(5~9)

2 古墳時代の遺構と出土遺物

2号住居址出土遺物観察表 (第64図・P L27) ▶本文 P. 65・第54図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	高杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 16.0cm。 口 18.0cm。 底 15.2cm。	柱穴中および 柱穴脇床面上	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色 (黒斑)	脚部粘土紐まきあげ整形。 外面 杯部斜方向篋削り。脚部ナデ。接合部縦方向 篋押え。脚部下端指押え。口縁部横ナデ。 内面 脚部下半篋削り。脚部端部横ナデ。杯部ナデ。 口縁部横ナデ。
2	高杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ 。 口 (19.2cm)	柱穴脇。 床面直上。	①砂粒・雲母粒混。 ②赤褐色。	外面 杯部篋削りの後ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部放射状のナデ。口縁部横ナデ。
3	高杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ 。 口縁部欠損	壁際。 床面直上。	①砂粒・雲母粒混。 ②橙褐色。	外面 杯部斜方向篋削り。接合部縦方向篋ナデ。 内面 杯部篋磨き。口縁部横ナデ。
4	罎 (土師器)	ほぼ完形。 高 9.6cm。 口 8.8cm。 頸 5.8cm。	床面直上。	①砂粒・雲母・長石 を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部下半篋削りの後ナデ。口縁部縦方向篋削 り。頸部縦方向の細かい篋磨き。胴部上半横方向篋 磨き。口縁部端部横ナデ。 内面 胴部下半篋ナデ。口縁部横ナデ。

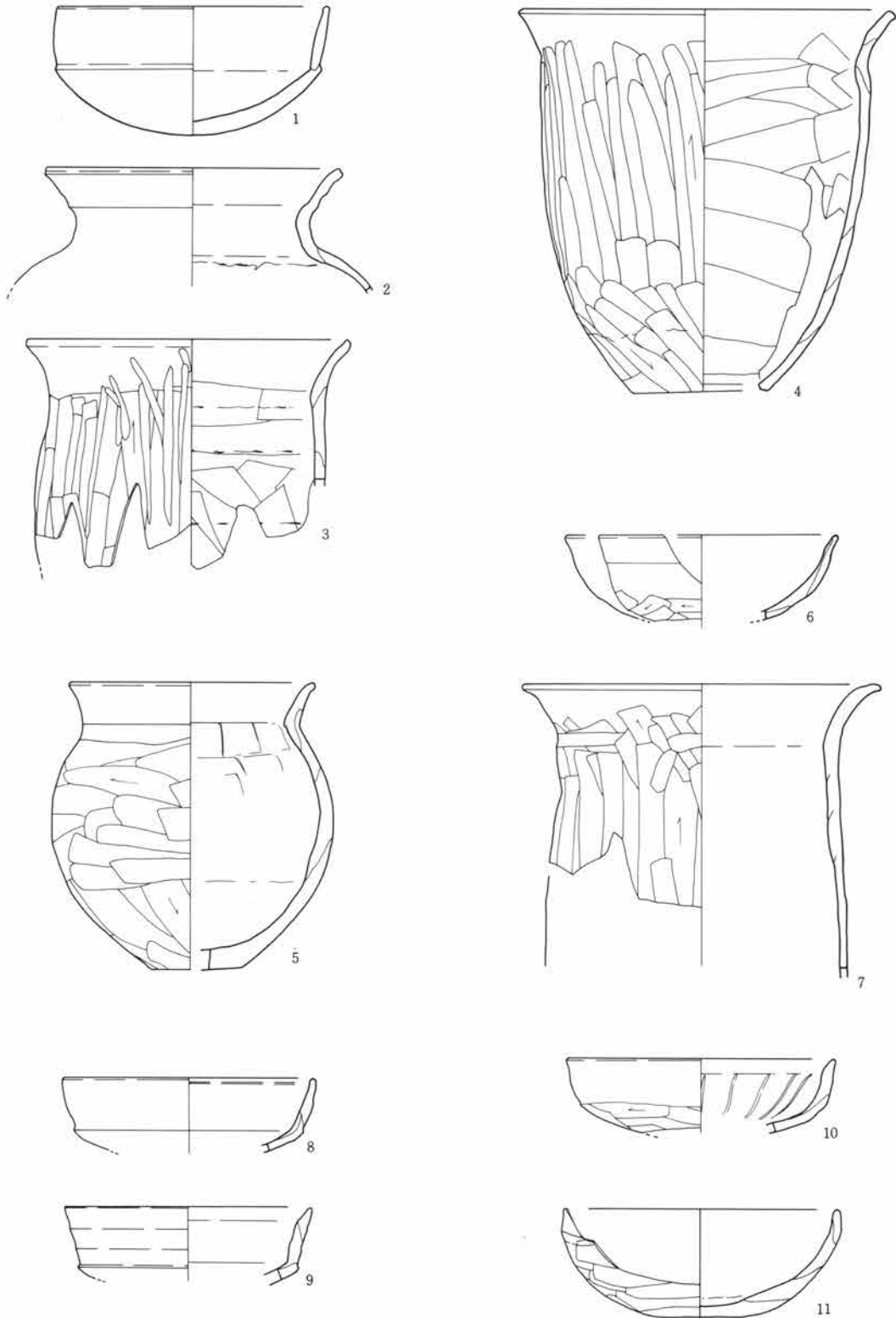
4号住居址出土遺物観察表 (第64図・P L27) ▶本文 P. 65・第55図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	高杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 13.0cm。 口 15.0cm。 底 11.0cm	壁際。 床面直上。	①砂粒を含む。 ②赤褐色・黒斑。	外面 杯部～脚部ナデ。脚部指押え。脚部端部横ナデ。 口縁部横ナデ。 内面 脚部端部横ナデ。杯部篋ナデ。口縁部横ナデ。
6	高杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ ・脚部端部 欠損。 口 4.7cm。	南隅。 床面直上。	①砂粒を混じる。 ②赤褐色 3黒斑。	外面 杯部斜方向篋ナデ。杯部下部ナデ。後部横方 向細かい篋磨き。脚部縦方向篋ナデ。口縁部および 脚部端部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部および脚部端部横ナデ。
7	高杯 (土師器)	脚部残存。 底1.5cm。	南隅。 床面直上。	①砂粒と少量の雲母 を混じる。 ②茶褐色。	外面 脚部ナデ。脚部端部横ナデ。 内面 脚部指押え。脚部端部横ナデ。
8	高杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (19.6cm)	壁際。 床面直上。	①砂粒と金雲母を含 む。②灰褐色。	内外面 篋削りの後横ナデ。口縁部横ナデ。
9	罎 (土師器)	口・底部欠損	床面上2cm。	①細砂粒を混じる。 ②灰褐色。	外面 口縁部～頸部縦方向ハケ目。胴部ナデ。 内面 頸部指押え。胴部ナデ。口縁部ナデ。

9号住居址出土遺物観察表 (第65図・P L27) ▶本文 P. 66・第56図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	完形。 器高 6.0cm。 口径 12.8cm。	壁際。 床面上5cm。	①砂粒・石英粒を多 く含む。②橙褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部丁寧な横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。口唇部やや肥厚。
2	甕 (土師器)	口縁部～肩部残 口径 12.8cm。 頸径 14.7cm。	壁際。 床面上3cm。	①砂粒・石英粒を多 く含む。②茶褐色	外面 胴部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
3	甕 (土師器)	口～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存 口 (20.5cm) 頸 (17.6cm)	床面上9cm。	①砂粒を多量に含 む。②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。頸部縦方向篋磨き。口縁 部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



9号住居址出土遺物(1、2~4-¼)
 10号住居址出土遺物(5)
 18号住居址出土遺物(6、7-¼)
 第65図 27号住居址出土遺物(8~11)

2 古墳時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
4	甗 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。	壁際。 床面直上。	①砂粒・石英を多く含む。②灰褐色。	外面 胴部上半縦方向篋削り。下半方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。口縁部横ナデ。

10号住居址出土遺物観察表 (第65図・P L27) ▶本文 P. 66・第57図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	小型甗 (土師器)	口縁部・底部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 17.9cm。	カマド前。 床面直上。	①砂粒・石英・雲母を含む。②黄褐色～橙褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。

18号住居址出土遺物観察表 (第65図・P L27) ▶本文 P. 68・第59図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
6	杯 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 4.7cm。 口 (13.0cm)。	柱穴埋土中。	①砂粒・雲母を含む。②橙褐色。	外面 杯部下半斜方向篋削り。上半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
7	甗 (土師器)	口縁～肩部残存 口 17.0cm。 頸 13.6cm。	柱穴埋土中。	①砂粒・雲母を多量に含む。②茶褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。頸部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

27号住居址出土遺物観察表 (第65図・P L27) ▶本文 P. 68・第60図

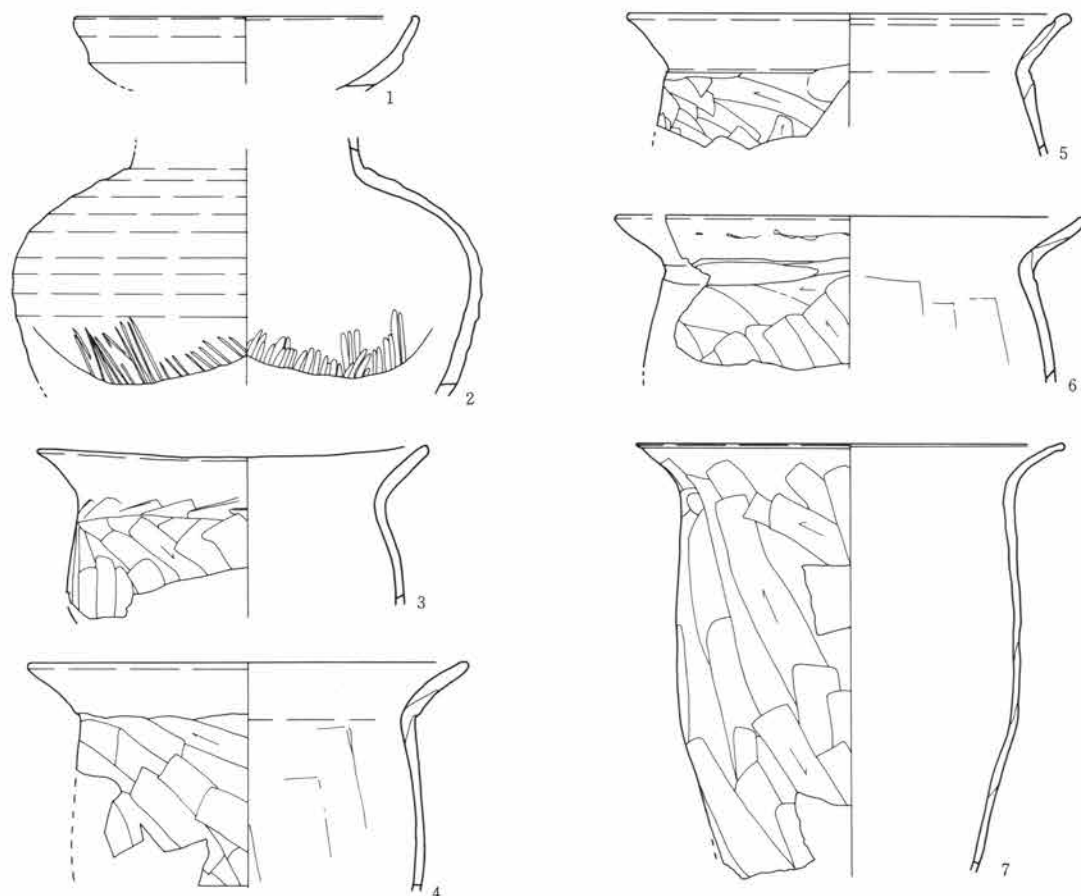
No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
8	杯 (土師器)	口縁～杯部 $\frac{1}{2}$ 残 口 (12.0cm)	北隅。 床面上8cm。	①極細砂を含む。②黒褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
9	杯 (土師器)	口縁～杯部 $\frac{1}{2}$ 残 口 (11.6cm)	床面上4cm。	①極細砂・石英を含む。②黒褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
10	杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 12.6cm。	北隅。 床面上10cm。	①細砂・雲母・石英を含む。②灰白褐色。	外面 杯部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデの後、放射状篋磨き。口縁部横ナデ。
11	椀 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残 高 5.1cm。 口 13.0cm。 底 4.3cm。	北隅。 床面上10cm。	①細砂・雲母・石英を含む。②灰褐色。	外面 体部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 体部ナデ。口縁部横ナデ。

16号住居址出土遺物観察表 (第66図・P L28) ▶本文 P. 69・第61図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁～杯部 $\frac{1}{2}$ 残 口 13.6cm。	床面直上。	①細砂を含む。②灰褐色。	外面 杯部弱い篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	短頸壺 (須恵器)	胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存 頸 (12.1cm) 胴 (25.0cm)	床面上2cm。	①細砂・白色鈹物粒を含む。②黒灰色。	右回転クロコ成形。回転横ナデ。 内外面とも、胴部下半には平行タキ目。
3	甗 (土師器)	口縁～肩部残存 口 20.6cm。 頸 16.5cm。	カマド左袖。	①細砂・雲母・長石を多量に含む。②赤褐色。	外面 肩部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
4	甕 (土師器)	口縁～肩部残存 口 23.6cm。 頸 18.0cm。 胴 19.0cm。	カマド右袖。	①細砂・雲母を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。
5	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残 口 (23.6cm) 頸 (19.2cm)	床面上 4 cm。	①細砂・雲母を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部篋ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残 口 (25.0cm) 頸 (19.7cm)	カマド前。 床面直上。	①細砂・雲母を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 肩部斜方向篋削り。頸部強い篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
7	甕 (土師器)	口縁～胴下位残 口 22.8cm。 頸 17.8cm。	カマド 燃 焼 部。	①細砂・石英・長石・雲母を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 胴部上半縦方向篋削り。下半縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

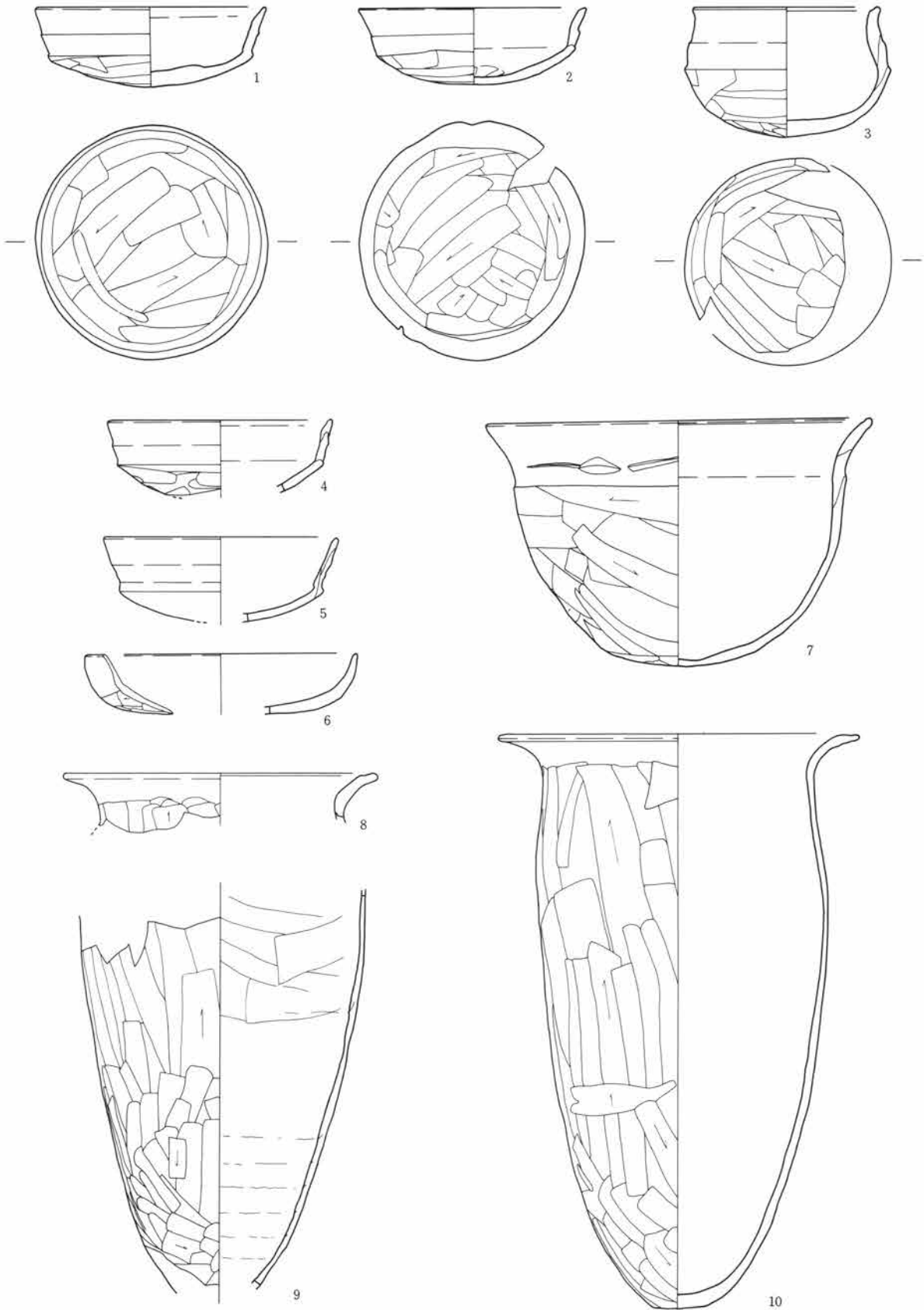


第66図 16号住居址出土遺物 (2～7- $\frac{1}{4}$)

15号住居址出土遺物観察表 (第67図・P L27) ▶本文 P. 66・第58図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	完形。 高 4.2cm。 口 11.9cm。	カマド前。 床面上 4 cm。	①砂粒・長石・石英・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 底中央部3方向篋削り。後周縁9単位の篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。

2 古墳時代の遺構と出土遺物



第67図 15号住居址出土遺物（8～10-¼）

III 検出された遺構と遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 3.9cm。 口 11.8cm。	カマド脇。 床面上2cm。	①細砂粒を多く含む。②黒褐色。	外面 底中央部3方向篋削り。後周縁を2方向に篋削り。口縁部横ナデ。 内面 放射状の篋ナデ。口縁部横ナデ。
3	椀 (土師器)	ほぼ $\frac{1}{3}$ 残存。 高 6.7cm。 口 (9.6cm)	壁際。 床面上10cm。	①長石・石英・雲母を含む。②灰褐色。	外面 底中央部3方向の篋削り。後周縁を数単位に分け篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
4	杯 (土師器)	$\frac{1}{3}$ 残存。 高 3.6cm。 口 (11.4cm)	カマド脇。 床面直上。	①細砂・石英・雲母を含む。②黒褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
5	杯 (土師器)	半欠。底部欠損。 高 4.3cm。 口 12.0cm。	柱穴内。	①細砂・石英・雲母を含む。②赤褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
6	杯 (土師器)	$\frac{1}{6}$ 残存。 口 (14.0)	壁際。 床面直上。	①砂粒・石英を含む。②赤褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
7	鉢 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 12.5cm。 口 20.0cm。	カマド脇。 床面上2cm。	①長石・石英・雲母を含む。②橙褐色。	外面 胴部下半斜方向篋削り。上半横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
8	甕 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 21.6cm。	カマド前。 床面直上。	①砂粒・石英・雲母を多含。②橙褐色。	外面 頸部縦方向篋削り。外面 内面 口縁部横ナデ。
9	甕 (土師器)	胴部下半残存。	カマド袖。	①砂粒・長石・石英の細粒含。②	外面 胴部中位縦方向篋削り。下位斜方向篋削り。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
10	甕 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 39.2cm。 口 24.8cm。 頸 18.6cm。 底 3.7cm。	カマド袖。	①砂粒・石英・雲母を含む。②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。下位斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

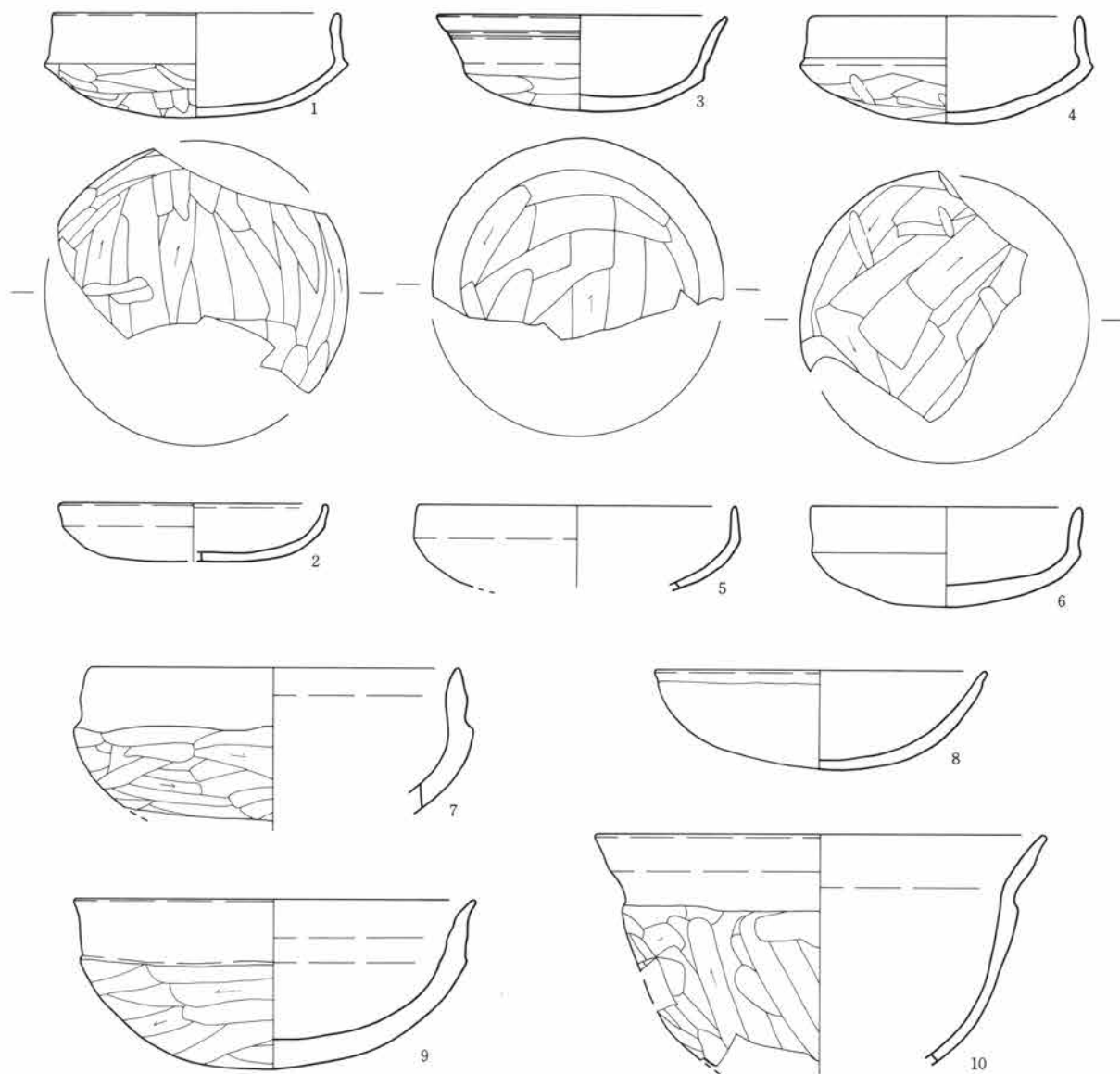
2号溝出土遺物観察表 (第68図・P L28) ▶本文 P. 69・第62図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 4.5cm。 口 12.5cm。	溝底上4cm。	①砂粒・雲母を含むが、緻密な胎土。②灰褐色。	外面 底部1方向篋削り。周縁ぐるりと篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	$\frac{1}{6}$ 残存。 高 2.5cm。 口 11.6cm。	溝底上4cm。	①砂粒・雲母を含む。②茶褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。

3号溝出土遺物観察表 (第68・69図・P L28) ▶本文 P. 69・第62図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	杯 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 4.1cm。 口 12.6cm。	溝底上10cm。	①細砂・長石・石英を含む。②灰褐色。	外面 底部2方向篋削り。周縁ぐるりと篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
4	杯 (土師器)	$\frac{1}{3}$ 残存。 高 4.6cm。 口 11.6cm。	溝底上17cm。	①細砂・雲母を含む。②灰褐色。	外面 底部篋削り後、部分的にナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。

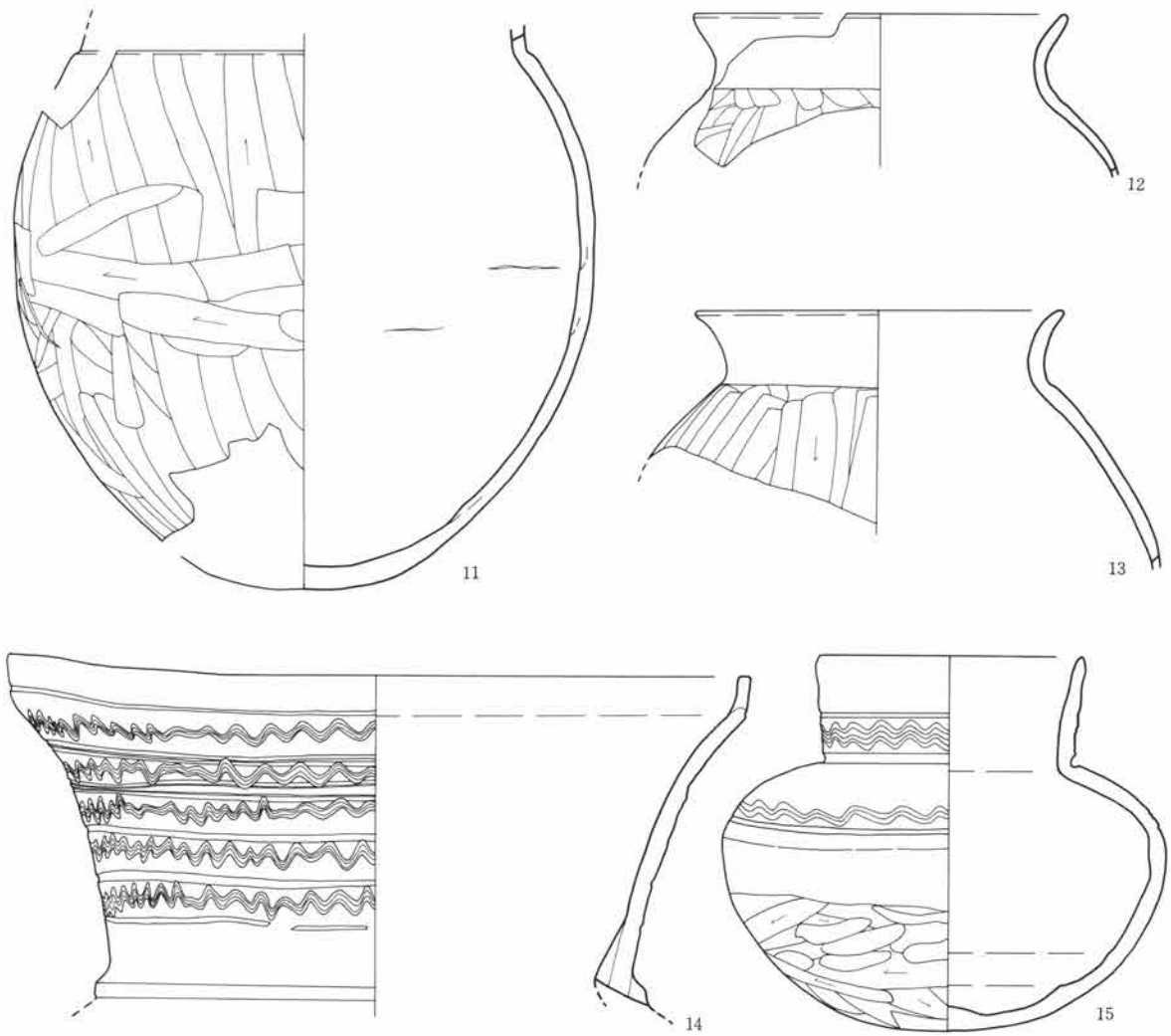
2 古墳時代の遺構と出土遺物



2号溝出土遺物(2) (1、2)
第68図 3号溝出土遺物(1) (3~10)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	杯 (土師器)	1/4残存。底部欠 口 13.8cm。	溝底上17cm。	①細砂を含むが緻密な胎土。 ②灰白褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
6	杯 (土師器)	1/4残存。 高 4.3cm。 口 11.6cm。	溝底上10cm。	①細砂・雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
7	鉢 (土師器)	口縁～体部下位 1/4残存。 口 18.0cm。	溝底直上。	①細砂・長石・雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 体部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

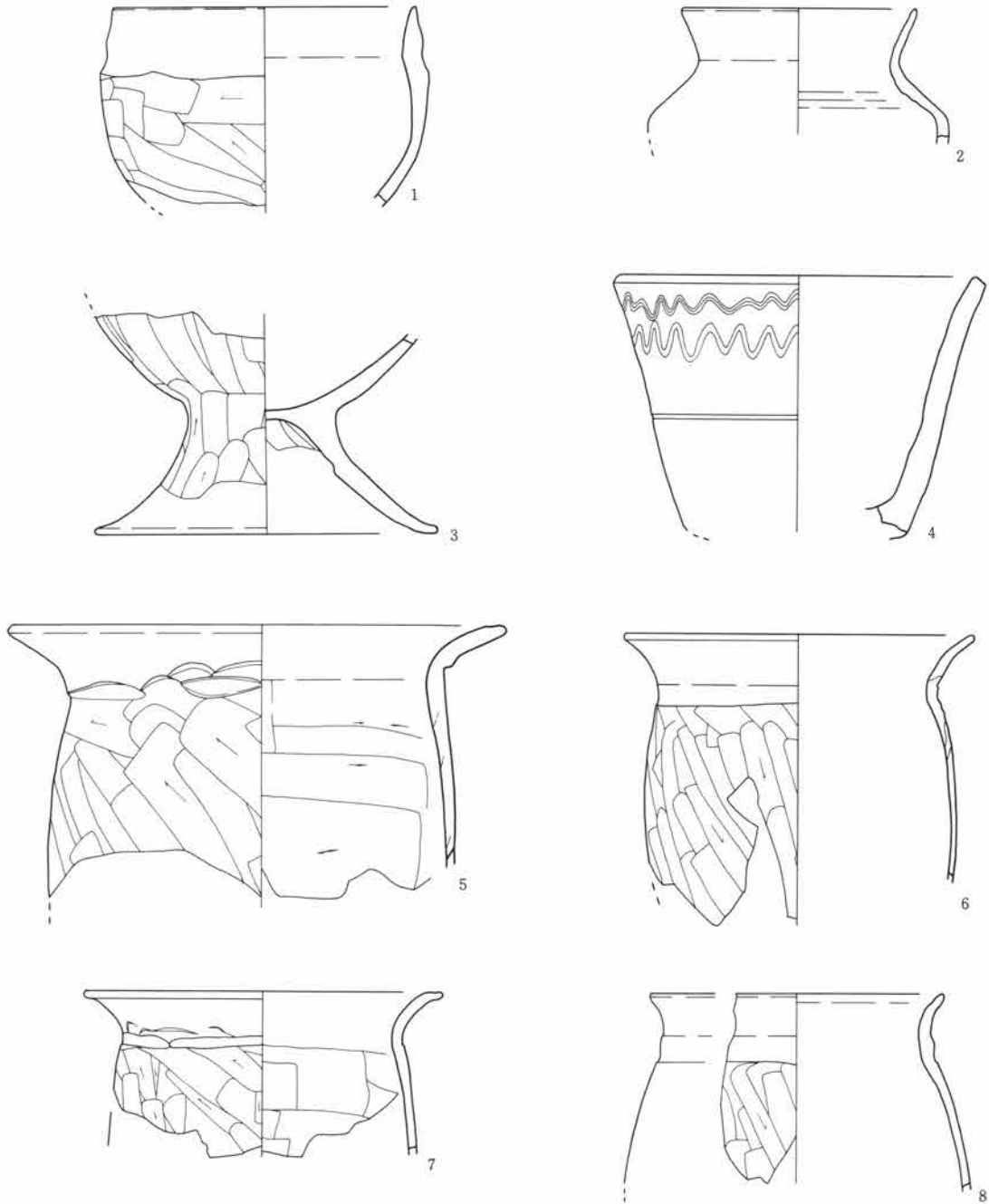


第69図 3号溝出土遺物2) (11~14-1/4、15)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
8	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 4.3cm。 口 14.4cm。	溝底上10cm。	①砂粒・雲母・石英を含む。②橙褐色。	外面 底部篋削り。杯部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
9	鉢 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 7.2cm。 口 17.4cm。	溝底上5cm。	①細砂・雲母を含む。②灰褐色。	外面 底部篋削り。杯部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
10	鉢 (土師器)	口縁～体部下位 $\frac{1}{4}$ 残存。 高 9.9cm。 口 19.4cm。	溝底上12cm。	①細砂・雲母・石英を含む。②茶褐色。	外面 体部縦方向篋削り。上端指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
11	壺 (土師器)	頸～底部 $\frac{1}{4}$ 残存	溝底上10cm。	①細砂・雲母を含む。②赤褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。後中位をぐるりと横方向篋削り。 内面 ナデ。

2 古墳時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
12	壺 (土師器)	口縁～肩部残存 口 20.0cm。 頸 17.8cm。	溝底上20cm。	①砂粒・石英・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
13	壺 (土師器)	口縁～肩部残存 口 19.8cm。 頸 17.1cm。	溝底上2m。	①砂粒・石英・雲母を含む。 ②暖褐色。	外面 肩部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。



第70図 7号溝出土遺物(1～5、6～8-¼)

III 検出された遺構と遺物

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
14	甕 (須恵器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 39.8cm。	溝底上1cm。	①細砂・白色鉱物粒子を含む。②灰色。	口縁部内外面横ナデ。 外面に、1～2条の沈線と3本櫛歯の波状文が交互に、5段に施文されている。
15	壺 (須恵器)	胴部一部欠損。 高 15.0cm。 口 10.5cm。	溝底上12cm。	①砂粒・長石・黒色鉱物粒子を含む。 ②灰白色。	外面 胴部下位～底部横方向篋削り。後に、部分的にナデ。胴部上半回転ナデ。口縁部内外面横ナデ。 口縁部下半に、1条の沈線。沈線と頸部との間に4本櫛歯の波状文が一段施されている。また、胴部最大径直上に、2本櫛歯の波状文と1条の弱い沈線。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

7号溝出土遺物観察表 (第70図・P L28) ▶本文 P. 69・第63図

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	鉢 (土師器)	口縁～体部下位 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (13.4cm)	溝底上28cm。	①砂粒・石英・雲母を含む。②灰褐色。	外面 体部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 体部横方向篋削り。口縁部横ナデ。
2	短頸壺 (須恵器)	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (10.4cm) 頸 (8.8cm)	溝底上29cm。	①砂粒・黒色鉱物粒子を含む。②灰色。	外面 口縁～肩部回転ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
3	台付甕 (土師器)	体部下位～台部 $\frac{2}{3}$ 残存。 底 15.2cm。	溝底上10cm。	①砂粒・長石・石英を含む。②橙褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。台部縦方向篋削り。台部端部横ナデ。 内面 胴部ナデ。台部指押え。
4	鉢 (須恵器)	口縁～体部下位 $\frac{1}{4}$ 残存。 高 (11.5cm) 口 15.8cm。 底 9.8cm。	溝底上15cm。	①細砂粒を多く含む。②青灰色。	右回転ロクロ成形。 内外面 回転ナデ。 口縁部外面に、単沈線の波状文と3本櫛歯による波状文が施されている。
5	甕 (土師器)	口縁～肩部残存。 口 21.5cm。 頸 16.6cm。	溝底上10cm。	①砂粒・長石・石英を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。頸部篋押え。胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～体部中位 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 20.6cm。 頸 16.5cm。	溝底上10cm。	①砂粒・長石・石英を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。頸部ナデ。胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
7	甕 (土師器)	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 21.0cm。 頸 16.5cm。	溝底上28cm。	①砂粒・長石・石英・雲母を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 肩部斜方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋削り。口縁部横ナデ。
8	甕 (土師器)	口縁～胴部上半の破片。 口 (17.2cm) 頸 (15.8cm)	溝底上15cm。	①砂粒・長石・石英を含む。 ②赤褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋削り。口縁部横ナデ。

3 奈良時代の遺構と出土遺物

17号住居跡▶出土遺物P.87 第78図

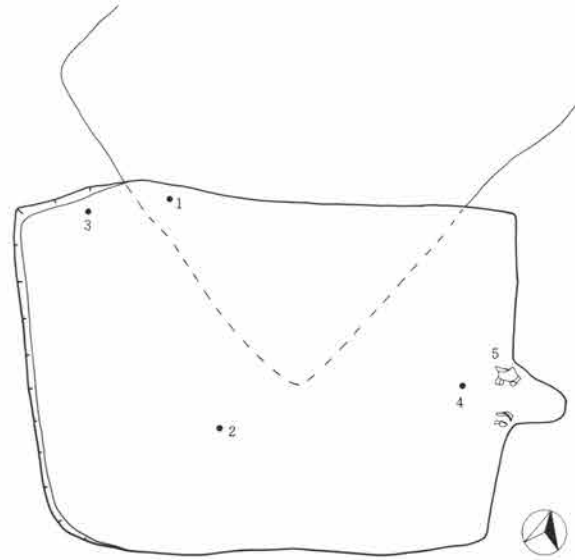
16号住居址と北側で重複し、切り合い関係から16号住居址より後出する住居址である。

遺構の遺存状況は悪く、特に東半分は床面付近をかろうじて残すまでに削平、攪乱を受けている。

主軸を東西にとり、東西2.7m、南北2mの主軸方向に長い長方形プランである。

カマドは東壁の中央部に付設されており、焼成部がすべて壁外となるものである。焚口部の両側には、器壁が薄く胴部にふくらみを有する甕形土器を正立に設置している。燃烧部は、焚口部で幅35cm、奥行40cmの規模を有している。

遺物は、カマドに使用されている甕形土器以外きわめてわずかである。



第71図 17号住居址実測図

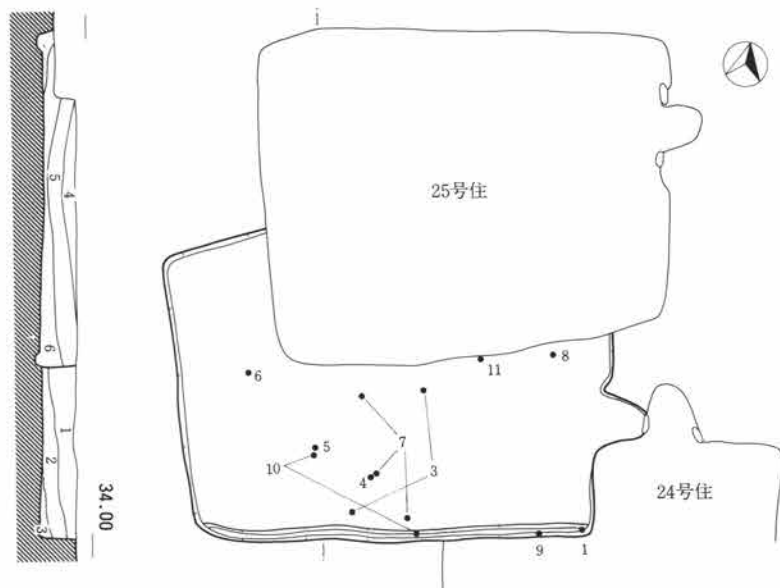
26号住居址▶出土遺物P.88・89 第79図

平安時代の東西の大溝・1号溝の北側に位置している。24号住居址、25号住居址と重複しており、これらが本住居に後出する。

東西に長い長方形プランを呈しており、東壁にカマドを付設している。東西2.3m、南北1.8mの規模を有しており、壁高22cmまで残存していた。南壁のみに沿って、幅約15cm、深さ8cmの壁周溝を検出した。

カマドは、東壁の中央よりやや南に偏して付設されており、燃烧部が壁外に出る形状である。焚き口部での幅24cm、奥行30cmであるが、最奥部は24号住居址により切られている。

1. ローム小ブロックと黒褐色土の混土
2. 炭化物粒、ローム粒と少量の白色軽石を含む黒褐色土。
3. 焼土粒、炭化物粒、ローム粒を含む黒褐色土。
4. ロームブロックと褐色土の混土。
5. 炭化物粒、ローム粒と少量の白色軽石を含む褐色土。
6. 大きな焼土粒、炭化物粒、ローム小ブロックを含む黒褐色土。
7. ロームブロックと褐色土の混土。



第72図 26号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

遺物は、10数点出土しているが、破片が多く、床面からも浮いているものが目立つ。

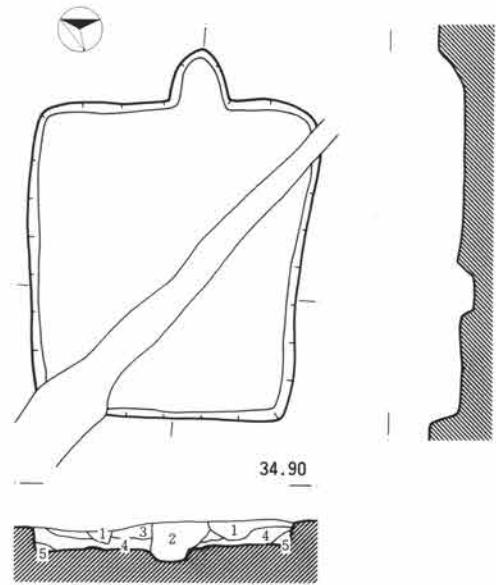
30号住居址▶出土遺物P. 89・90 第80図

台地の縁辺部から西へ最も奥まった地点に位置している。壁高30cmを有するきわめて遺存状況のようものであるが、幅60cm、深さ40cmの溝状の掘り込み（近年の耕作に伴なうもの）が、住居を斜めに通り抜け、破壊している。

主軸をほぼ東西とし、東西3.35m、南北2.9mの小型な規模であり、やや東西に長い長方形のプランを呈している。

カマドは、東壁の中心より20cm南に偏して付設されている。燃焼部が壁外に出る形態で、焚口部で幅50cm、奥行55cmの規模である。燃焼部中心部には甕形土器ほぼ1個体部が出土しており、煮沸に供されたものであろう。

住居全体に須恵大甕の破片が濃密に散乱している。同一個体の破片と思われるが、完形に復するには量的にかなり足りないようである。出土状態からすると、住居廃絶後、竪穴部分に投棄されたものと考えられる。



1. 耕作による攪乱。
2. 後世の溝埋土。
3. ローム粒、白色軽石、焼土粒を含む黒褐色土。
4. ロームブロック、白色軽石、焼土粒を含む黒褐色土。
5. ロームブロックと黒色土の混土。

第73図 30号住居址実測図

32号住居址▶出土遺物P. 90・91 第80図

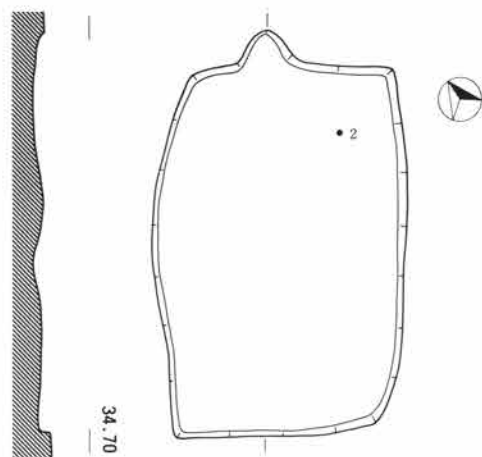
調査地の最北西端に位置しており、台地縁辺部からは170mほどの西の奥まった部分となっている。この付近は調査前、農家の宅地部分であった所で、それに原因すると思われる著しい破壊がおよんでいる。本住居址の場合も、住居址の存在をかりうじて確認できるといった程度の遺存状況であり、不明な点も多い。

主軸を北東から南西にとり、北東壁にカマドを付設している。主軸方向に長い長方形プランを呈しており、長辺2m、短辺1.4mの規模を有している。

カマドは、東北壁の中央よりやや北西に偏した位置に付設されている。所在を確認できる程度で、構造等は明らかでない。

本来的に住居に伴なうと思われる遺物はほとんどない。

床面は、後の攪乱により、凹凸が激しく平らでない。壁周溝および支柱穴は確認できなかった。



第74図 32号住居址実測図

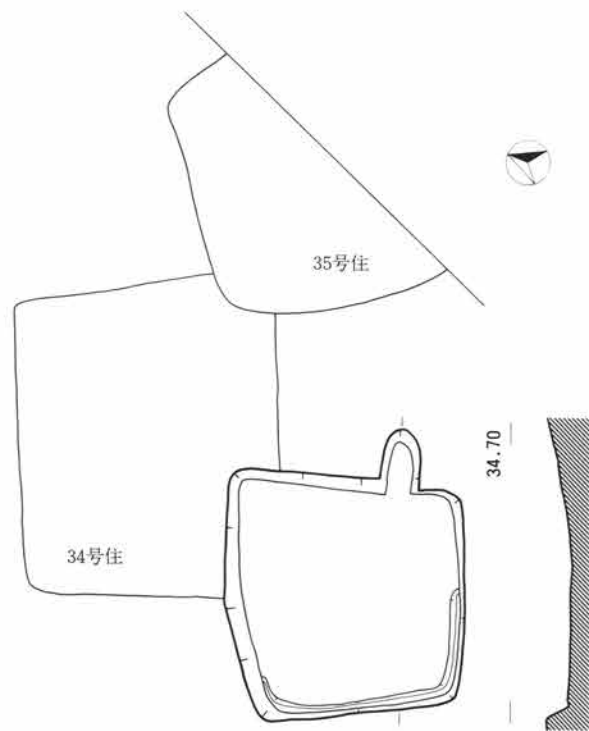
33号住居址▶出土遺物P. 90・91 第80図

32号住居址の東側に隣接する小型の住居址である。34号住居址と北側で一部重複しているが、新旧関係は明らかでない。

主軸をほぼ東西にとり、東壁にカマドを付設している。南壁沿いで1.1m、北壁沿いで2m、南北1.3mのやや台形に近いプランを呈している。壁高は15cmを有し、遺存状況のよい部類に属する。南壁の中央から西壁に沿って幅5～10cm、深さ8cmの壁周溝が認められる。

カマドは東壁の中央より0.8m南に偏して付設されている。燃焼部が壁外に出る形状であり、焚口部で幅24cm、奥行30cmを有する。燃焼部からは煮沸に使用されていたと考えられる甕形土器が出土している。

全体的には、住居址に直接伴う遺物は少なく、また床面は凹凸が激しく、しっかり踏み固められたものではない。



第75図 33号住居址実測図

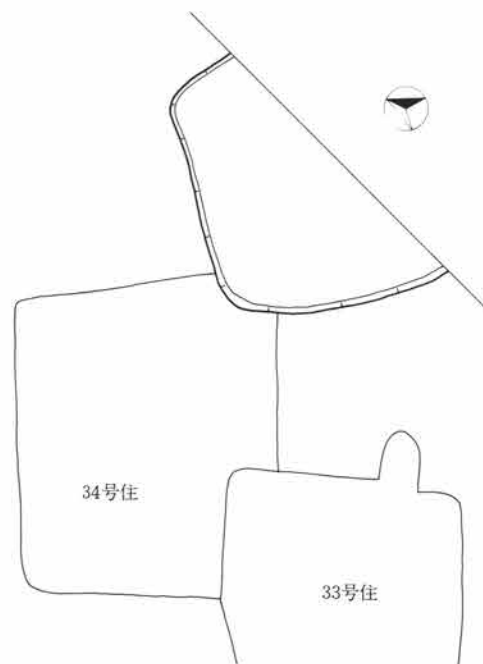
35号住居址▶出土遺物P. 90・91 第80図

台地の最も奥まった地点に所在する住居址である。遺構確認面より床面までの深さが5cm前後ときわめて浅く、また後世の耕作も床面までおよび遺存状況は悪い。北西隅で後出する34号住居址と重複している。33号住居址との新旧関係を把握するデータは得られなかった。

本住居址は、南半分が、近年移転した民家の宅地部分にかかっていたため破壊されている。東西2.8m、南北2.3m強である。確認できた北および西壁にはカマドが存しないことから、失われた壁に付設されていたと考えられる。

直接伴うと思われる遺物はほとんどみられなかった。

また支柱穴、壁周溝も検出されなかった。



第76図 35号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

36号住居址▶出土遺物P90・91 第80図

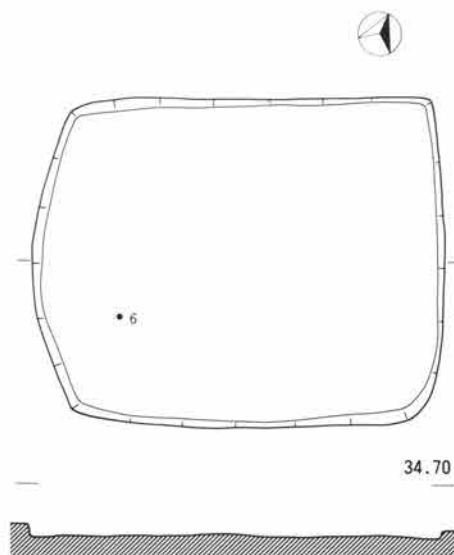
台地縁辺部から最奥部に位置するものである。付近一帯は調査前宅地であったことと、宅地移転の際大きく土取りの行なわれた部分が多いこと等により、本住居址のような遺構確認面からの深さがわずかしかないものでは、破壊が著しい。近接する34号住居址等も同様である。

壁高5～10cmと遺存状況がわるく、破壊は部分的に床面にまでおよんでいる。かろうじて東西に長い長方形プランを確認したのみであり、東西4～4.4m、南北3.5mの規模を有している。

わずかに埋土中に認められた破片から考えれば平安時代に位置づけられる。

カマドの遺存を見ず、痕跡もない。後世の破壊により消滅したと思われるが、住居址として認定するには適度な規模と方向をもった長方形区画であるという以外は積極的な証拠に欠けるといえよう。

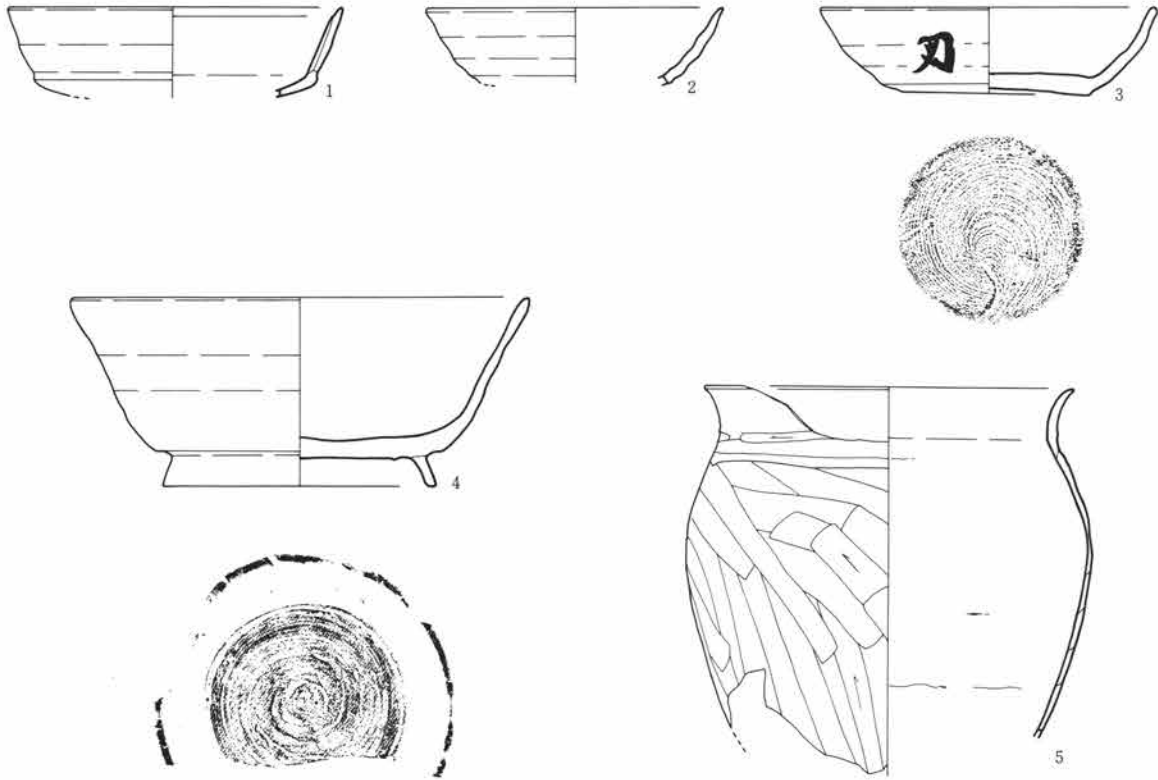
遺物は数片の破片のみであり、直接遺構に伴うと思われるものはきわめて少ない。



第77図 36号住居址実測図

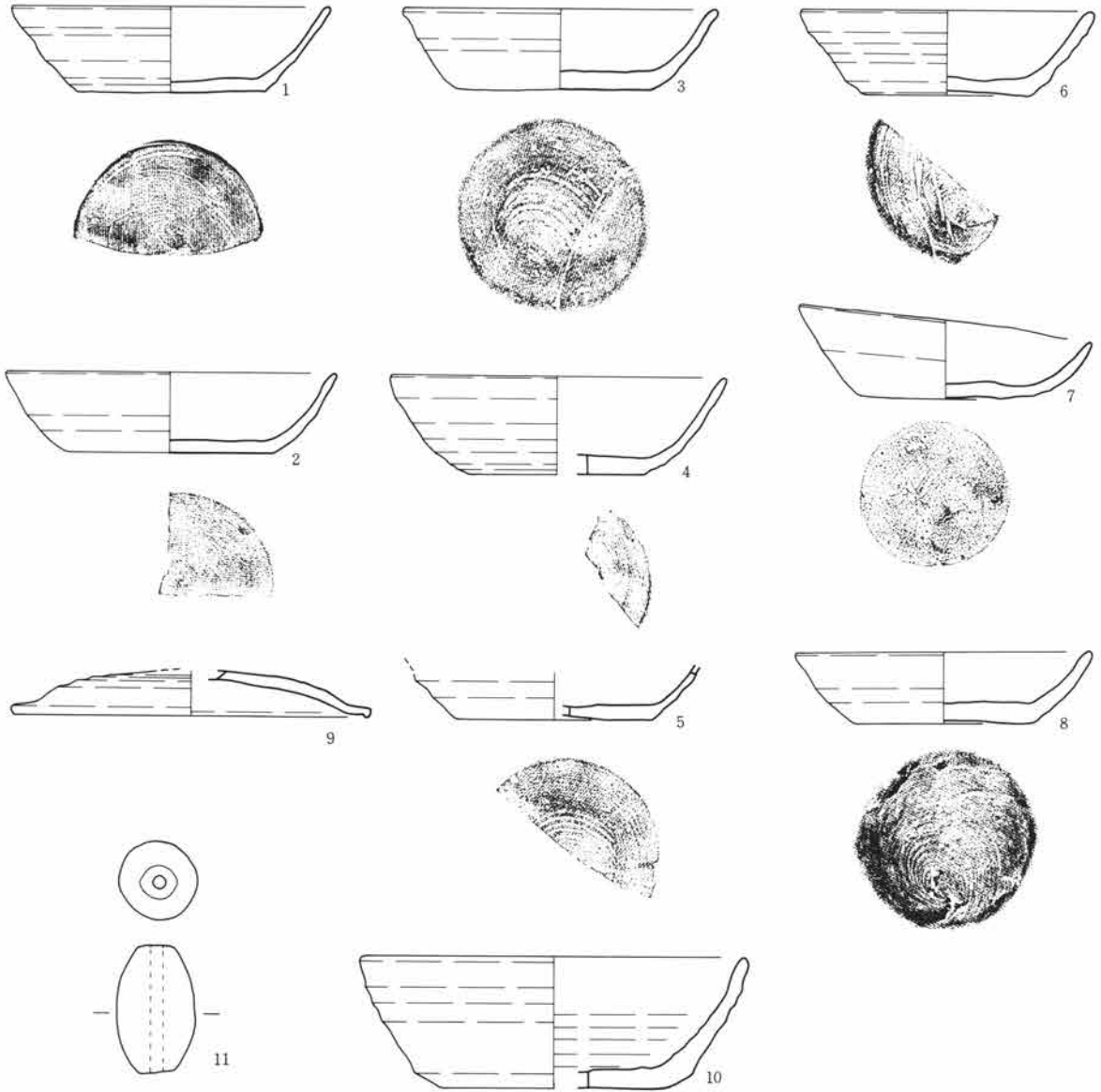
17号住居址出土遺物観察表（第78図・P L29）▶本文 P. 83・第71図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯（土師器）	口縁～杯部残存 口 13.4cm。	壁際。 床面直上。	①砂粒・雲母細片を含む。 ②黒褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯（須恵器）	口縁～杯部 $\frac{1}{3}$ 残 口 12.0cm。	底面上13cm。	①細砂を少量含む。 ②青黒灰色。	右回転ロクロ成形。 口縁～杯部内面回転によるナデ。
3	杯（土師器）	ほぼ完形。 高 3.5cm。 口 13.5cm。	壁際。 床面上6cm。	①石英粒・砂粒を混。 ②内外面とも灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内面 口縁部回転によるナデ。墨書「刃」がある。 内面 回転によるナデ。
4	碗（土師器）	杯部 $\frac{1}{3}$ 欠損。 高 7.5cm。 口 18.4cm。 底 11.0cm。	カマド前。 床面上3cm。	①細砂・雲母細片を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。 外面 底部周縁篋削り。
5	甕（土師器）	胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存 口（19.8cm） 頸（18.0cm） 胴（21.6cm）	カマド袖。	①砂粒と雲母細片を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。肩部斜方向篋削り。 頸部外面篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。



第78図 17号住居址出土遺物（5-¼）

III 検出された遺構と遺物



第79図 26号住居址出土遺物

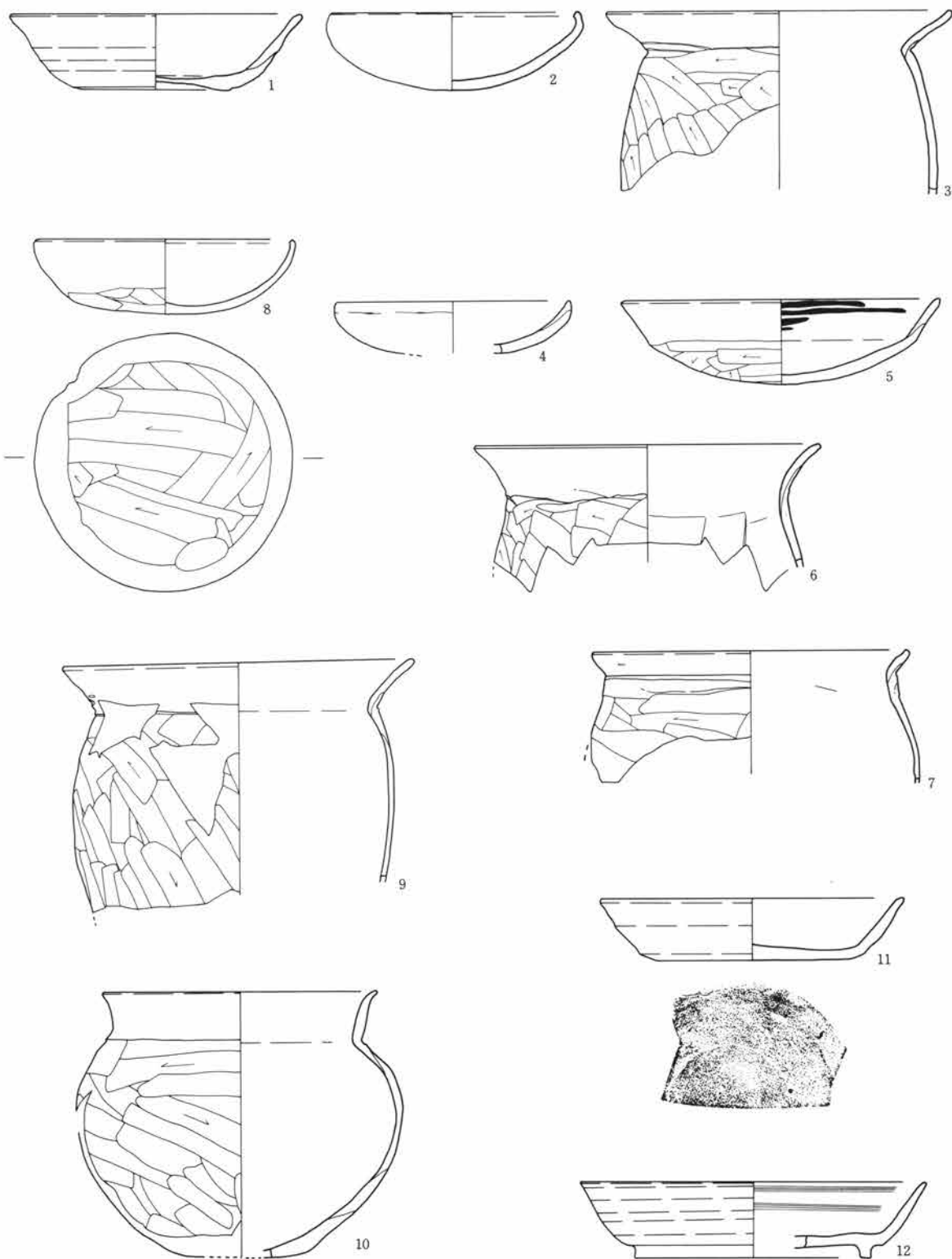
26号住居址出土遺物観察表 (第79図・P L29) ▶本文 P. 83・第72図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (須恵器)	1/3残存。 高 3.6cm。 口 (13.7cm) 底 (8.1cm)	東南隅周溝内	①砂粒・長石を含む。 ②青灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部回転によるナデ。底部周縁を回転篋削り調整。 内面 杯部回転によるナデ。
2	杯 (須恵器)	1/3残存。 高 3.4cm。 口 (14.2cm) 底 (8.8cm)	埋土中。	①砂粒・長石を含む。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。 外面 杯部回転によるナデ。口縁部横ナデ。底部全面回転篋削り調整。 内面 杯部回転によるナデ。

3 奈良時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	杯 (須恵器)	ほぼ完形。 高 3.4cm。 口 13.5cm。 底 8.2cm。	壁際。 床面上 2 cm。	①細砂を含む。 ②灰色	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部回転によるナデ。底部周縁を回転篋削り調整。 内面 杯部回転によるナデ。
4	杯 (須恵器)	1/4残存。 高 4.2cm。 口 (14.4cm) 底 (7.4cm)	床面上 7 cm。	①砂粒・長石・黒色 鉱物粒子を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部回転によるナデ。底部周縁を回転篋削り調整。 内面 杯部回転によるナデ。
5	杯 (須恵器)	底部1/2残存。 底 8.4cm。	床面上 6 cm。	①砂粒・長石・青黒 色粒子を含む。②灰 色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部回転によるナデ。底部周縁を回転篋削り調整。 内面 杯部回転によるナデ。
6	杯 (須恵器)	1/4残存。 高 3.5cm。 口 (12.6cm) 底 (7.0cm)	床面上 4 cm。	①小石・砂粒・長石 を含む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部回転によるナデ。底部周縁を手持ち篋削り調整。 内面 杯部回転によるナデ。
7	杯 (須恵器)	1/4欠損。 高 3.0cm前後 口 12.4cm。 底 6.5cm。	壁際。 床面上 1 cm。	①細砂・長石を含む。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部回転によるナデ。底部周縁を手持ち篋削り調整。 内面 杯部回転によるナデ。
8	杯 (須恵器)	完形。 高 3.0cm。 口 12.2cm。 底 7.4cm	床面上16cm。	①細砂と長石を含 む。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内外面杯部、回転によるナデ。
9	蓋 (須恵器)	1/4残存。 口 (15.4cm)	南壁周溝内。	①細砂・長石・雲母 を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。 外面 回転篋削り調整。縁横ナデ。 内面 回転ナデ。縁横ナデ。
10	椀 (須恵器)	3/4残存。 高 5.7cm。 口 16.6cm。 底 9.6cm。	床面上14cm。	①細砂・長石を多く 含む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法磨耗により不明。 内外面 椀部回転によるナデ。口縁部横ナデ。
11	土 錘 (土製品)	完形。 長 5.3cm。 径 2.3cm。	床面上 8 cm。	①細砂・雲母・長石 を含む。 ②灰褐色。	手握ね成形。 外面 縦方向のナデ。両端は切断されたかのように 平滑である。

III 検出された遺構と遺物



30号住居址出土遺物 (1、2、3-¼)
 32号住居址出土遺物 (4、5、6・7-¼)
 33号住居址出土遺物 (8、9・10-¼)
 35号住居址出土遺物 (11)
 36号住居址出土遺物 (12)

第80図

3 奈良時代の遺構と出土遺物

32号住居址出土遺物観察表 (第80図・P L 29) ▶本文 P. 84・第74図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
4	杯 (土師器)	口縁～杯部 $\frac{1}{2}$ 残 口 11.4cm。	床面直上 1cm。	①細砂と雲母細片を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 篋磨き。口縁部横ナデ。
5	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残 高 4.2cm。 口 (15.6)	壁際。 床面上 5cm。	①細片・石英・雲母細片を含む。 ②茶褐色～黒褐色。	外面 杯部中央部→周縁部の順でヘラケズリ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残 口 22.8cm。 頸 18.6cm。	壁際。 床面直上。	①細砂と雲母細片を含む。 ②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。口唇部に面をとるようになでている。 内面 肩部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
7	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残 口 20.6cm。 頸 19.1cm。	壁際。 床面直上。	①細砂・石英・雲母細片を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。

33号住居址出土遺物観察表 (第80図・P L 29) ▶本文 P. 85・第75図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
8	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 3.7cm。 口 12.9cm。	壁際。 床面上 5cm。	①細砂・雲母細片・石英を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
9	甕 (土師器)	口縁及び胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 23.2cm。 頸 (18.6cm) 胴 (20.0cm)	カマド燃焼部。	①細砂・雲母細片を多量に含む。 ②灰褐色～橙褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
10	小型甕 (土師器)	底部欠損。 口 13.5cm。 頸 12.2cm。 胴 16.0cm。	カマド前。 床面上 2cm。	①細砂・石英粒・雲母細片を含む。 ②黒褐色。	外面 胴部下半斜方向篋削り。肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。

35号住居址出土遺物観察表 (第80図・P L 29) ▶本文 P. 85・第76図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
11	杯 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 3.2cm。 口 (15.0cm) 底 (9.5cm)	床面直上。	①砂粒・石英を含む。 ②灰白褐色。	左回転ロクロ成形。切り離し技法不明。 外面 杯部回転ナデ。底部全面回転篋削り調整。 内面 杯部回転ナデ。

36号住居址出土遺物観察表 (第80図・P L 29) ▶本文 P. 86・第77図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
12	高台付椀 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 3.8cm。 口 (17.0cm) 底 (11.6cm)	床面上 5cm。	①細砂を含むが緻密な胎土である。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。付高台。 椀部内外面、高台接合部とも、回転によるナデ。

III 検出された遺構と遺物

4 平安時代の遺構と出土遺物

1号住居址▶出土遺物P.120 第129図

台地縁辺部近くに位置しており、東側で2号住居址（古墳時代）と一部重複している。

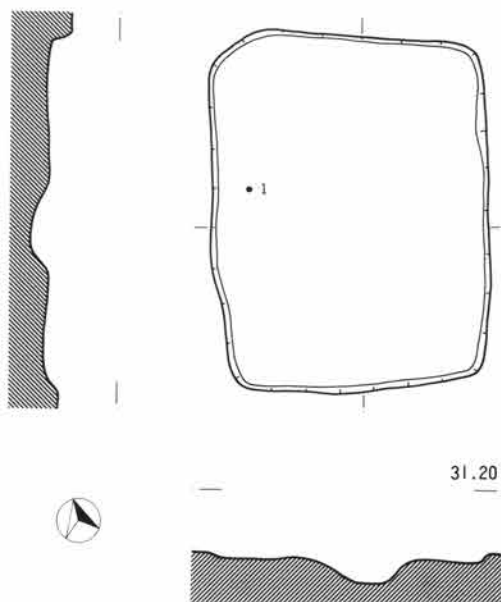
現在までの畑地耕作により住居址は深く攪乱を受けており、旧状をとどめる部分はわずかである。かろうじて床面のひろがりを手がかりとして、住居址の輪郭をつかむことができた。

主軸を東西にとり、東西1.5m、南北2mの長方形プランを呈する。

カマドは削平により失なっているが、焼土や炭化物のかすかな広がりから、東壁南よりの付設が推せられた。

遺物は、わずかな破片が散乱するが、明らかに住居に伴なうものは少ない。

壁周溝、支柱穴は検出されなかった。



第81図 1号住居址実測図

5号住居址▶出土遺物P.120 第129図

1号住居址の北西4mの、やはり台地の縁辺部に近い位置にある。

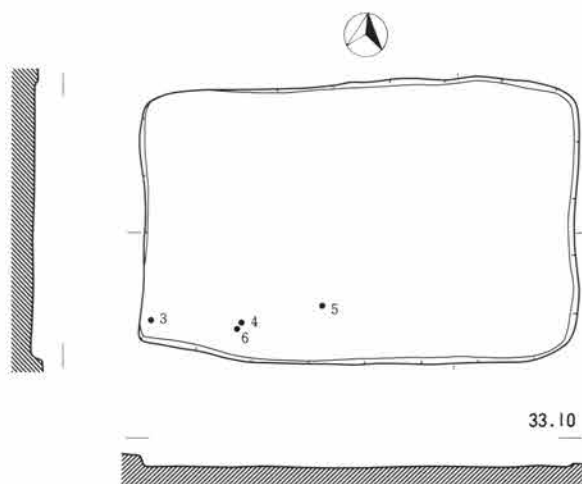
畑地耕作に伴なう破壊により、遺構の遺存状況はきわめて悪い。

床面の残存部分をつなぎ、東西2.4m、南北1.5mの長方形プランを呈することをかろうじてつかみ得た。

住居址の推定時期からして、カマドを伴なうものであるが、破壊がいちじるしく、位置を想定する手がかりさえない。本遺跡通例の同時期の住居址からすれば、東壁に存した可能性が高い。

遺物は、破片が多く認められたが、攪乱状態であり、原位置の可能性は低い。

壁周溝および支柱穴は検出できなかった。



第82図 5号住居址実測図

6・7号住居址▶出土遺物P.121・122 第130図

調査した住居址の中では最も台地の縁辺部に近く位置している。住居址の半分ほどを重複させており、6号住居址が後出する。床面のレベルは、7号住居址が低く、20cmのレベル差がある。

6号住居址は、長軸を南北とする長方形プランを呈している。長辺2.4m、短辺1.6mを有し、壁高15cmまで遺存している。調査方法の失敗のため、7号住居址に重複する部分では、床面および住居壁の把握が不十分であり、土層断面図からの図上復元である。

カマドの付設箇所については、東壁の中心より南より部分が推定されるが、明確には遺存していなかったため、断定はできない。

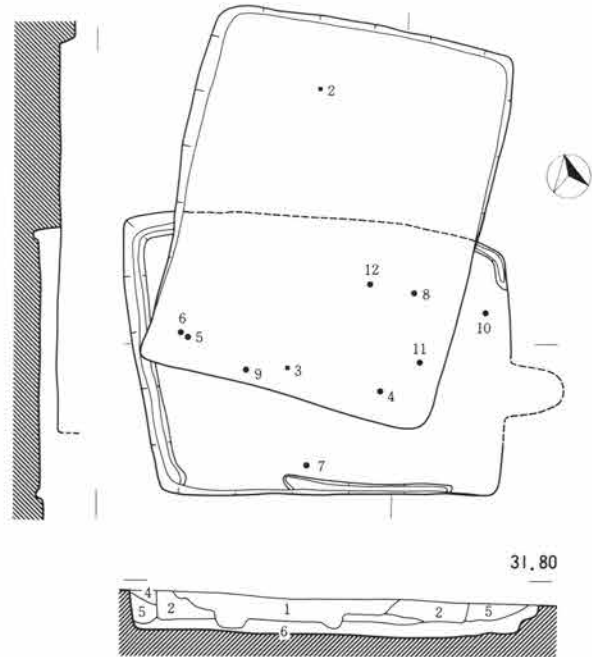
出土遺物は全体に散在的に認められるが、東壁から南壁ぞいにやや集中する傾向が見られ、推定するカマド付設箇所に関連しての結果と考えられる。

7号住居址は、壁高45cmまで遺存しており、当遺跡の住居址の中では、最も遺存状況の良好な部類に属するものである。

主軸を東西とし、主軸方向に長い長方形プランを呈する。痕跡からカマドの付設が推測される東壁部分は、耕作に伴う掘り込みで削り取られ、住居の東側輪郭およびカマド構造は明らかでない。東西約2m、南1.5mの規模であったと考えられる。

旧状の明らかでない東壁と、南壁の一部を除き、壁周溝が確認されている。

出土遺物は、杯類を中心に豊富であり、カマド前と考えられる東壁周辺と、南壁中心よりの部分の2ヶ所に集中する傾向が見られる。



1. 耕作によるかくらん土。
2. 炭化物と、少量の焼土粒、黄褐色土粒を含む黒褐色土。
3. 底面に灰層をもつ黒褐色土。
4. 黄褐色粘質土の小粒を含む黒色土。
5. 黄褐色粘質土粒・焼土粒と少量の炭化物を含む黒褐色土。
6. 黄褐色粘質土粒を多量に含む黒褐色土。

第83図 6・7号住居址実測図

11・12号住居址▶出土遺物P.123~125 第131・132図

11号住居址は、1号溝の北約16mの台地の奥まった部分に位置する大型の住居址である。主軸を東西とし、カマドを東壁に付設する不整形プランを呈している。西側で一部12号住居址と重複している。12号住居址は、時期的には11号住居址に先行するものであるが、全く遺物が存しないことから詳細は不明である。住居規模(1.8m四方くらい)、形態等からして、平安時代に属するものと考えられている。

11号住居址は、東西6.0m、南北6.4mの方形に近いプランに、東壁のカマド部分の北側に隣接して、1.2m×3.2mの張り出し部分を取り付けている。当初2軒の住居址の重複かと考えたが、壁面および壁周溝が連続することや、埋土に区分別がないことから、明らかにこの張り出し部分も含めて一軒の住居空間である。

カマドは東壁の中心よりやや南に偏して付設されている。燃焼部が壁外に出る形状であり、焚口部で幅88

III 検出された遺構と遺物

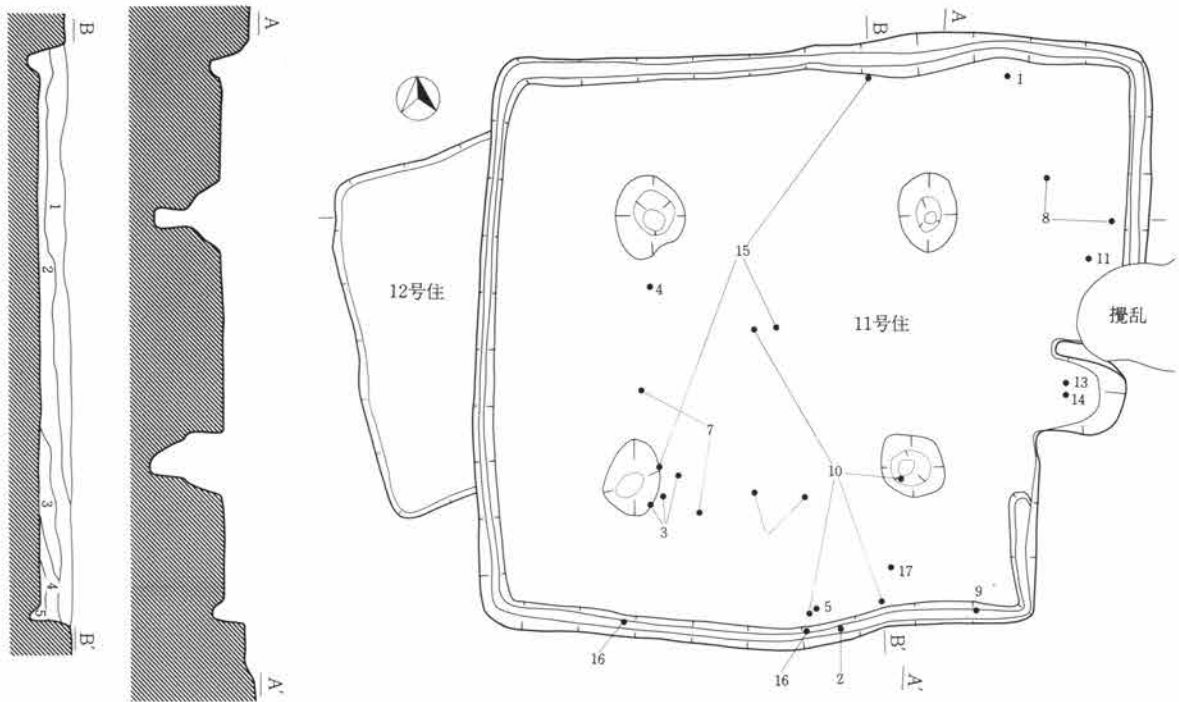
cm、奥行104cmと比較的大型である。燃焼部には、支脚に使用したと思われる棒状の川原石と煮沸に使用されたとと思われる甕形土器が出土している。

主柱穴は、住居プランと相似形をなす位置に深くしっかりとした穴が穿たれており、上屋構造の大きさを窺わせる。

住居壁に沿って全体に幅20~24cm、深さ約15cmのきわめてしっかりとした壁周溝が全周している。

本住居址に直接伴う遺物は、主としてカマド付近および、南壁沿いに集中する傾向がある。特に西壁付近には全くない。出土土器の中では、杯類の多さおよび「吳」字の墨書土器2点が注意される。

本住居址は、賀茂遺跡の平安時代に属する住居址にあつては、通例の住居址とは一線を画する性格のものと考えられる。



1. 焼土粒、ごく少量の白色軽石を含む褐色土。
2. 焼土粒、白色粘土粒、ロームブロックを含む褐色土。
3. ロームブロック（径5cm）を含む褐色土。
4. 比較的2層に近く、炭化物粒を少量含む。
5. しまりのない褐色土。



34.30

12号住居址実測図
第84図 11号住居址実測図

14号住居址▶出土遺物P. 128～130 第134・135図

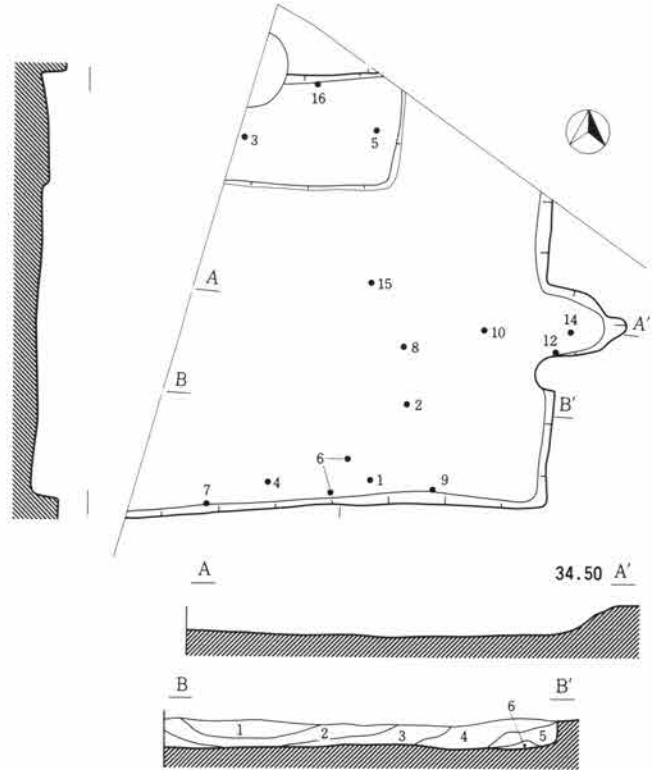
11号住居址の北西1.2mに近接し、同住居址と、ほぼ同時期の住居址である。一部調査区域外となるため全掘はできなかった。

主軸を東西とし、東壁にカマドを付設している。住居の規模は、測定し得る南北で4.5mをはかる。東西については西壁を検出していないが、東西セクションの埋没状況からして、南北長に近いものと推測され、方形プランを呈していたと考えられる。

カマドは東壁の中心より約50cm南に偏して付設されている。燃烧部が壁外に出る形態で、焚口部で幅88cm、奥行104cmと、比較的大型の規模である。燃烧部の中心には、脚部の欠損した脚付壺形土器を倒立して設置し、支脚に転用している。

北壁の中央部には、壁に接して南北1.1m、東西1.8m以上、床面よりの高さ12cmの長方形のベッド状遺構が付設されている。

住居等に伴う出土遺物は、カマドを中心として、その前面に集中する傾向が見られる。出土土器中に「吳」（3点）、「大」、「夫」（各1点）の墨書土器があり、11号住居との密接な結びつきを窺わせた。



1. 黄褐色粘質土ブロックを多量に含む褐色土。
2. 黄褐色粘質土粒、焼土粒を含む黒褐色土。
3. しまりのない黒褐色土。
4. 焼土を含む褐色土。
5. 焼土粒・炭化物粒・黄褐色粘質土粒を混じる褐色土。
6. 灰層。

第85図 14号住居址実測図

19号住居址▶出土遺物P. 126 第133図

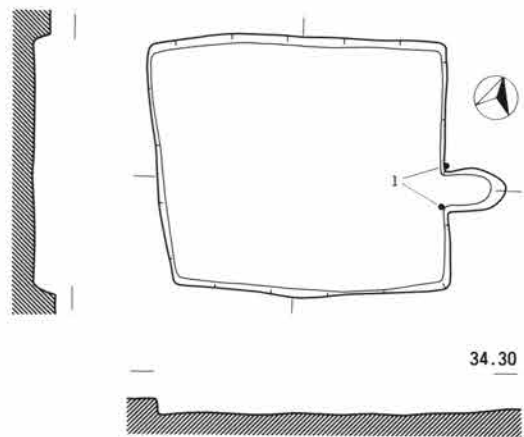
11号住居址の北2.8mに隣接する小型の住居址である。

主軸を東西とし、東壁にカマドを付設している。東西にやや長い長方形プランを呈し、長辺3.0m～3.2m短辺2.8mの規模を有する。

カマドは、東壁の中心よりやや南に偏して付設されている。燃烧部が壁外に出る形態で、焚口部で幅40cm奥行72cmである。

壁高20cm前後と比較的遺存状況の良好な住居址であるが、直接住居址に伴うと思われる遺物は、何片かの破片を除くと全く存しない。

壁周溝および支柱穴は検出できなかった。



第86図 19号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

23号住居址▶出土遺物P.127・131 第136図

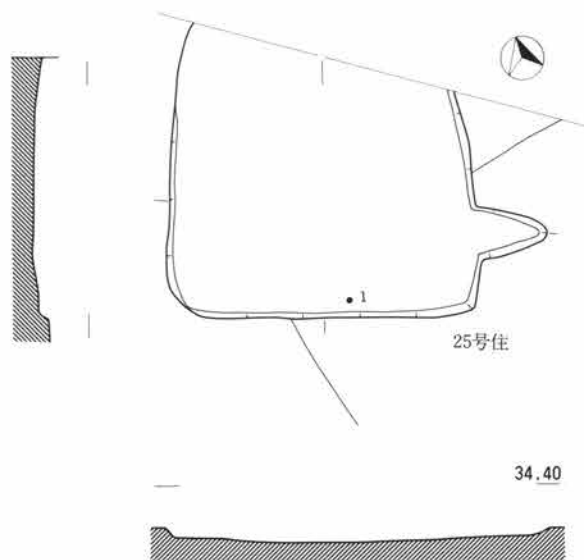
1号溝の北6mに位置している。住居址北側を一部調査区域外としている。時期的に先行する25号住居址と南東側で重複している。

主軸をほぼ東西とし、東壁にカマドを付設している。住居址の規模は北壁よりで東西3m、南壁よりで3.4m、南北の長さについては北壁部分を検出していないが、壁の走行から類推して、4m前後の規模であり、幾分台形を呈する形状である。

カマドは、東壁の中心部より約1m南に偏して付設されている。燃焼部が壁外に出る形態であり、焚口部で幅64cm、奥行80cmである。

壁周溝および支柱穴は検出されなかった。床面は堅くしまっており、25号住居址との重複部分に貼り床が施こされている。

住居址に直接伴う遺物はきわめて少なく、しかも散在的である。



第87図 23号住居址実測図

24号住居址▶出土遺物P.130～132 第136図

1号溝の北4mに近接する。時期的に先行する26号住居址と北側で一部重複している。

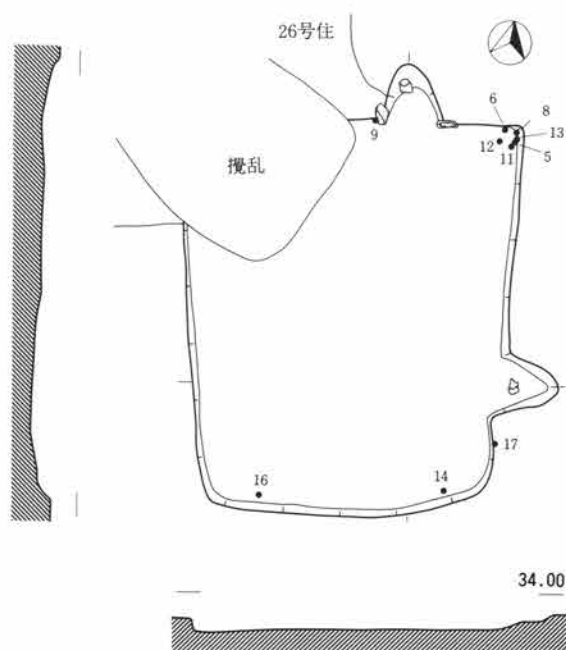
南北に長い長方形プランを呈し、南北4.2m、東西3.6mの規模である。

東壁および北壁の2ヶ所でカマドが確認されており、東壁のものが古く付設され、倒壊後北壁に新たに付設されたようである。

東壁のカマドは中心より0.5m南に偏して付設されており、燃焼部が壁外にくる。焚口部での幅64cm、奥行64cmを有する。

北壁のカマドは、中心より0.7m東に偏して付設されており、燃焼部は壁外である。焚口部での幅64cm、奥行64cmである。袖石および支脚に棒状の川原石を使用しており、3石とも原位置に遺存していた。

支柱穴および壁周溝は検出されなかった。



第88図 24号住居址実測図

25号住居址▶出土遺物P.132・133 第137図

台地の縁辺部から奥まった1号溝の北5mに位置している。時期的に先行する本住居址と同形同大の26号住居址と南側で重複している。また北西側では、時期的に後出する23号住居址と重複する。壁高20cmほどを残し、遺存状況は良好である。

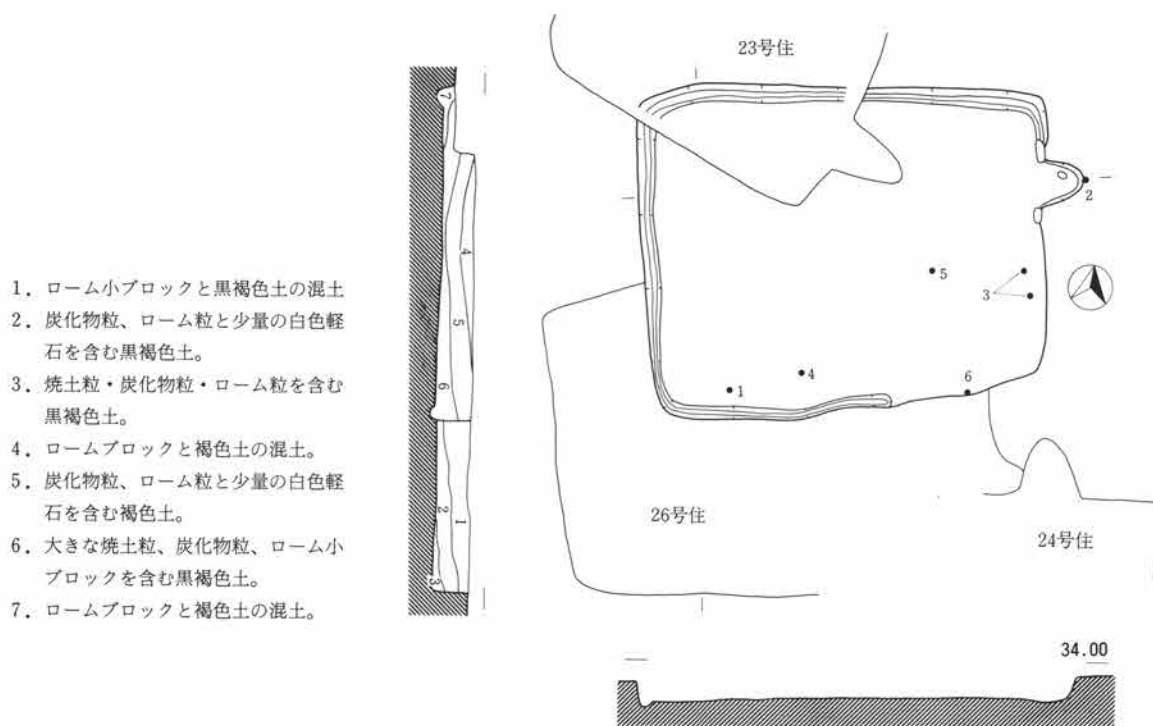
主軸を東西とし、東西4.3m、南北3.4mの東西に長い長方形プランを呈している。

カマドは、東壁の中心より50cm北に偏して付設されている。燃焼部が壁外に出る形態であり、焚口部で幅45cm、奥行45cmの規模である。両袖部は、やや扁平な縦長に裾えられており、また燃焼部中心よりには支脚に使用されたとと思われる棒状の川原石が埋め込まれている。

住居南東隅周辺を除いて、全体に幅15cm、深さ4cmの壁周溝がめぐっている。

出土遺物は少なく、住居に直接伴うと思われるものは、散在的にきわめて少量分布するのみである。

本住居とその南側に重複する26号住居との間では、住居の向き、床面レベルが同一であり、しかも住居プランがほぼ同形同大であることが注意される。26号住居の廃絶後、その継続で25号住居が建てられた可能性が強い。



第89図 25号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

21号住居址▶出土遺物P.127・128 第133図

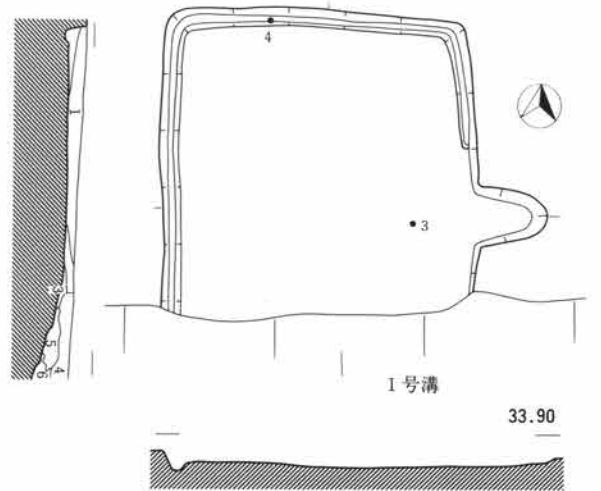
主軸を東西とする住居で、南側で一部1号溝と重複している。切り合い関係から1号溝が後出することが明らかである。東西3.4m、南北3.2m以上である。残存する部分の住居形状から類推すると1号溝により切り取られた部分は南北1m前後であり、南北に長い長方形プランを呈していたものと思われる。

東壁のほぼ中心かと思われる位置にカマドが付設されており、燃烧部が壁外に出る形態である。焚口部で幅64cm、奥行80cmを有する。

幅20~25cm、深さ8~10cmの壁周溝がほぼ全周している。

出土遺物は、カマド前に甕形土器（完形ではない）が確認されている以外は、数片の破片が出土しているにすぎない。壁高20cmと住居址の遺存状況もよいことから、廃棄された住居と考えられる。

主柱穴は検出されなかった。



1. ローム粒・焼土粒を含む黒褐色土。しまりがいい。
2. ロームブロックを含む黒褐色土。
3. ロームブロックを主とする黄褐色土。
4. 焼土粒・炭化物を含む黒色土。
5. ロームブロックと④の混土。 1号溝埋土
6. ローム粒を含む褐色土。

第90図 21号住居址実測図

28号住居址▶出土遺物P.133・134 第138図

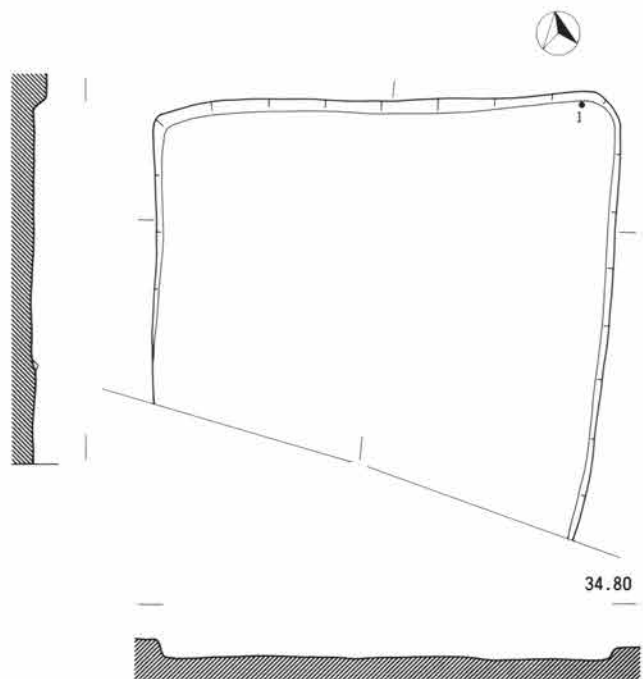
台地の最も奥まった地点に位置する。壁高15~20cmと比較的遺存状況はよいが、畑の深耕により住居床面はかなり攪乱を受けている。南側部分は調査区域外となっているが、形状からして全掘に近い。

東西4.9m、南北4.8m強の規模を有し、やや東西に長い長方形プランを呈するものと思われる。

検出できた3壁にはカマドが確認できないのであるが、本遺跡の他事例からして南壁にカマドを付設している可能性は低い。

出土遺物は、埋土中の破片が4点ほどであり、直接住居に伴うとはいえない。器壁の薄い甕形土器の破片と、回転糸切り痕のある杯形土器の破片が埋土中から出土している。

主柱穴、壁周溝は検出されなかった。



第91図 28号住居址実測図

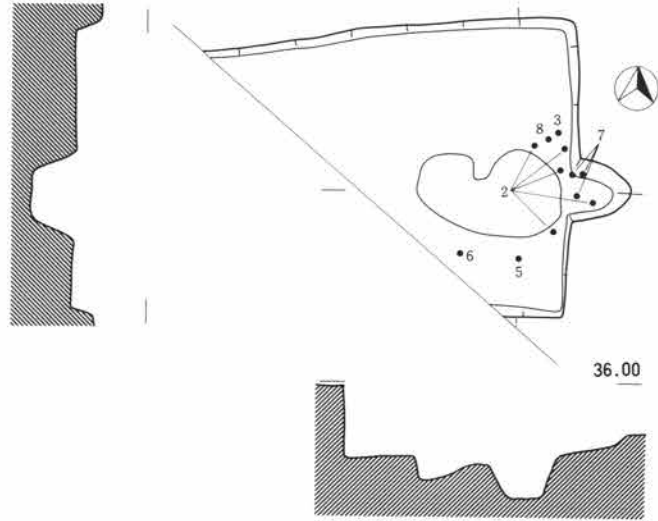
29号住居址▶出土遺物P.134・135 第138図

28号住居址の西に隣接する台地の最も奥まった位置に所在する。住居の南西より $\frac{1}{3}$ は調査区域外のため未調査である。

主軸を東西とし、南北3.2m、東西4.2m強の東西に長い長方形プランを呈している。壁高約30cmと遺存状況は良好である。カマド前は床面下まで達する最近の掘り込みにより破壊されている。

カマドは東壁の中心よりやや南に偏して付設されている。燃烧部が壁外となる形態で、焚口部のほぼ中心と思われる位置から煮沸用の甕形土器が出土している。

住居に直接伴う遺物は、比較的多く、カマドとカマドの周辺に杯形土器を中心として集中する傾向にあり、他の部分は散在的でしかも破片である。



第92図 29号住居址実測図

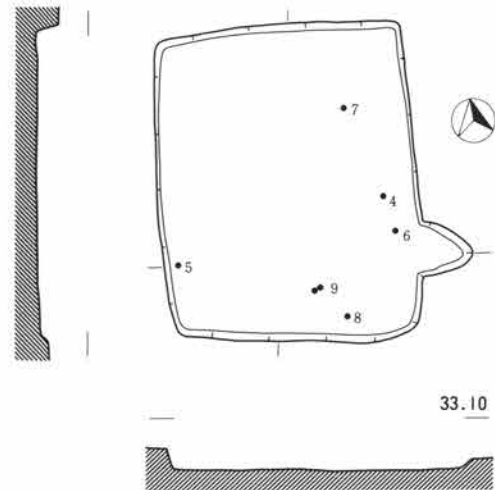
38号住居址▶出土遺物P.135~138 第139図

台地の縁辺部より70mに位置する小型の住居址である。ほぼ同時期と思われるいく分大型の37号住居址の南に隣接している。

主軸を東西とし、東西2.8m、南北3.4mの長方形プランを呈している。壁高10cm前後のわりには、全体に遺存状況はよい。

カマドは、東壁の中心より0.8m南に偏した、住居南東隅に近い部分に付設されている。燃烧部が壁外に出る形態で、焚口部で幅56cm、奥行60cmを有する。カマド前にはカマド支脚に使用していたと推される棒状の川原石（8×20cm）が床面上から出土している。

遺物は、多くはないが、住居の南壁よりを中心に出土している。しかし、完形に復せるものは1点も認められなかった。また、床面直上のものは、住居北側部分では全く出土していない。



第93図 38号住居址実測図

37号住居址▶出土遺物P.137~143、第140~143図

平安時代の住居密集地帯の東よりに位置している。本遺跡調査住居址の中で、明らかに焼失家屋とわかる

III 検出された遺構と遺物

唯一例である。壁高40cmを残し、最も遺存状態のよい部類に属する住居址であった。

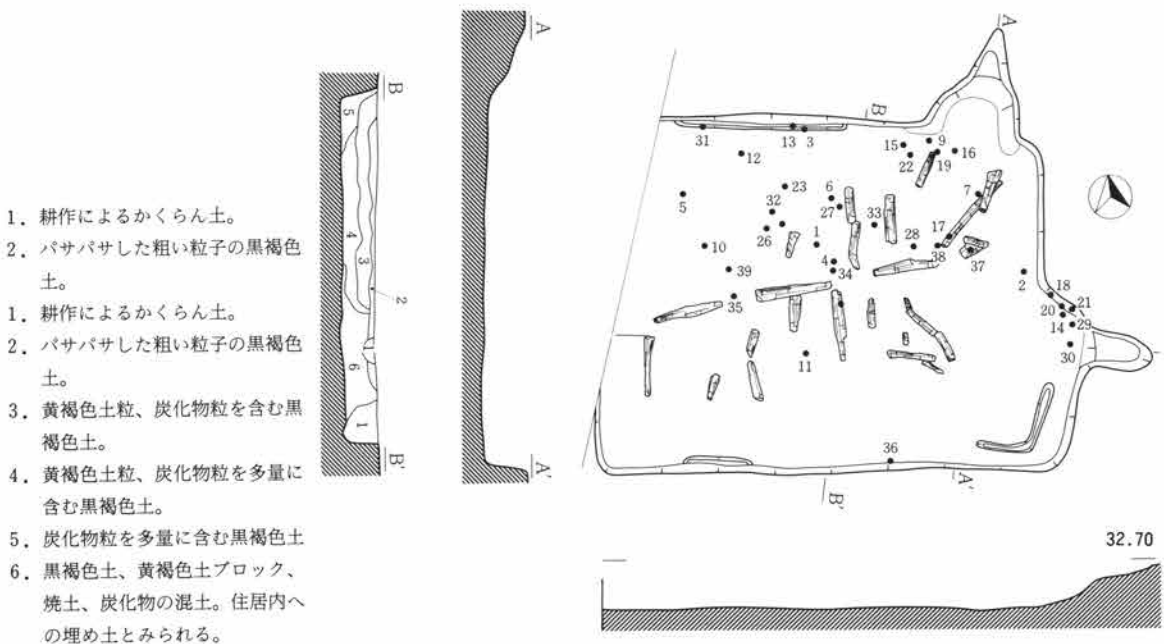
東壁と北壁の2カ所にカマドが認められ、東壁カマドから北壁カマドへの時期的推移が確認されている。東壁カマドの段階では、東西5.1m、南北3.7mの規模であったものを、北壁カマドの段階では、東西4.7m、南北3.7mの規模に改築していることが推される。

床面上を中心として、家屋の主要材が炭化した状態で検出されている。住居の中心に東西走行で最も太い材が認められ、この材に直交する方向で左右に派生する、前者より細い材が認められた。また、東西走行の材の東端（東壁より1.1m内側の地点）からは、住居北東および南東隅へ向かう走行の材が認められている。調査結果からすると、本住居は東西を棟方向とする入母屋あるいは寄棟造の家屋であったと思われる。この家屋が火災に伴ない焼失し、母屋部分が棟方向を西からやや西南西にねじれて倒れたものと推される。

東壁カマドは、中心より南へ1.1m偏して付設された大型のものである。燃焼部が壁外に出る形態で、焚口部で幅90cm、奥行50cmに、幅30cm、奥行70cmの煙道がとりつく。北壁カマドは、東壁カマドとほぼ同形同大で、北壁のほぼ東隅に偏して付設されている。燃焼部が壁外に出る形態で、焚口部で幅90cm、奥行50cmに、幅30cm、奥行50cmの煙道がとりつく。

出土遺物は完形土器を中心に、住居址埋土中、床面上ともにきわめて多量である。埋土中のは、住居北側に集中して認められており、住居廃絶後、北側から投棄されたものであろう。

住居に直接伴うと思われるものは、東壁カマド周辺、北壁カマド周辺、および住居北西隅にきわめて限定的に認められ、具体的に一住居の共伴遺物の様相を物語っている好例である。東壁カマドの燃焼部左側には、7個体の完形の高台付の杯形土器がまとまって出土し、北壁カマドの燃焼部に接する左手前からは、甕形土器が出土している。また、北壁沿いの西より部分から灰釉陶器類の出土を見ている。焼失直前の段階では、東壁カマド付近を食器の置場所として利用し、北壁カマドをカマドとして使用し、また、住居北西よりは、調理、食事、寝起等以外の特別な空間として利用されていたのではなかろうか。



第94図 37号住居址実測図

39号住居址▶出土遺物P.136・137、第139図

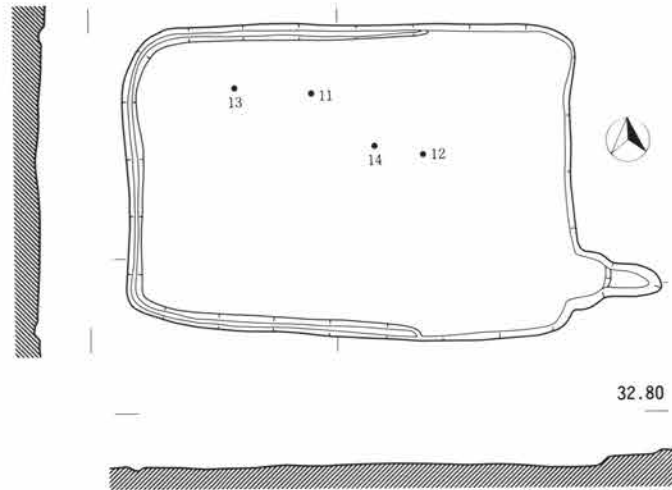
37号住居址の東5.5mに近接し、同形同大の46号住居址の北側に隣接している。

付近は近年の畑地耕作により、著しく攪乱をうけており、本住居址についても、輪郭は把握されるものの、床面、住居壁の損壊は激しい。

主軸を東西とし、主軸方向に長い長方形プランを呈している。東西2.3m、南北1.6mの規模である。東壁を除く3壁に沿っては、幅10～15cm、深さ15cmの明瞭な壁周溝が繞っている。

カマドは、東壁の南端に偏して付設されており、住居南東隅にほぼ近い位置である。燃焼部が壁外に出る形態であり、焚口部で幅56cm、奥行40cmに、幅30cm、奥行56cmの煙道が取りつく。燃焼部にはカマド支脚として使用されていたと思われる棒状の川原石が、壁に倒れかかって出土している。

床面の破壊が著しいこともあってか、住居に直接つく遺物は少ない。



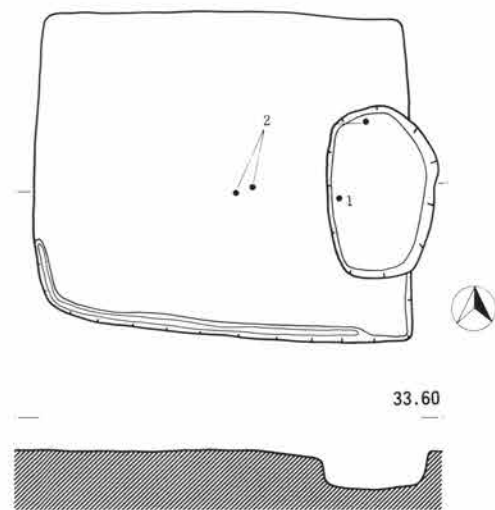
第95図 39号住居址実測図

40号住居址▶出土遺物P.144、第144図

台地縁辺部から西へ100mほどの位置にあり、周囲に近接する住居址は見られず、最も近接するもので、10m南にある44号住居址である。近年の畑地耕作により著しく破壊されており、部分的に認められる壁周溝および、床面のひろがりから範囲を確定し得た。東西4m、南北3.4mの規模を有する。

東壁にカマドは付設されていたものと推されるが、この部分には、東西1.8m、南北1.1mの長方形プランで、深さ50cmの时期的に後出する土壇が重複するため消失したものと考えられる。

この長方形土壇は、出土遺物から平安時代後期に位置づけられる。底面はフラットであり、調査不十分であるが、埋土は人為的な埋め戻しが窺われ、あるいは墓址等の可能性もある。



第96図 40号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

41号住居址

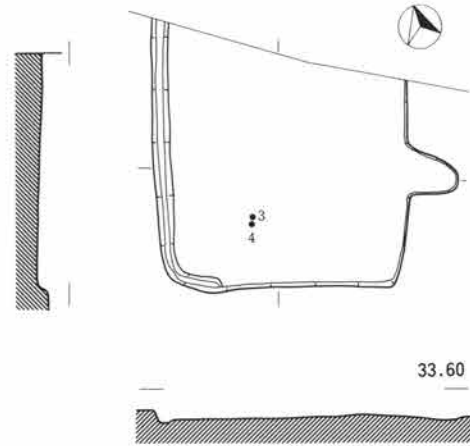
39号住居址の北東に隣接している。北壁よりは調査予定地外となっていたため遺構の破壊が著しく、かろうじて住居の形状、範囲を確認した。

主軸をほぼ東西とし、東西3.4m、南北2.8m強と南北に長い長方形プランを呈する。検出した形状から西壁を北へ50cmほどで北西隅になるものと思われる。

カマドの付設されている位置は東壁で、中心より幾分南に偏している。燃烧部の壁外に出る形態であるが、底面まで削平されているため詳細は明らかでない。

西壁に沿っては壁周溝が確認でき、南壁に沿っても存在の痕跡が認められる。支柱穴は検出されなかった。

遺物は住居範囲内に破片が何片か認められるが、直接住居に伴うものは少ない。



第97図 41号住居址実測図

46号住居址

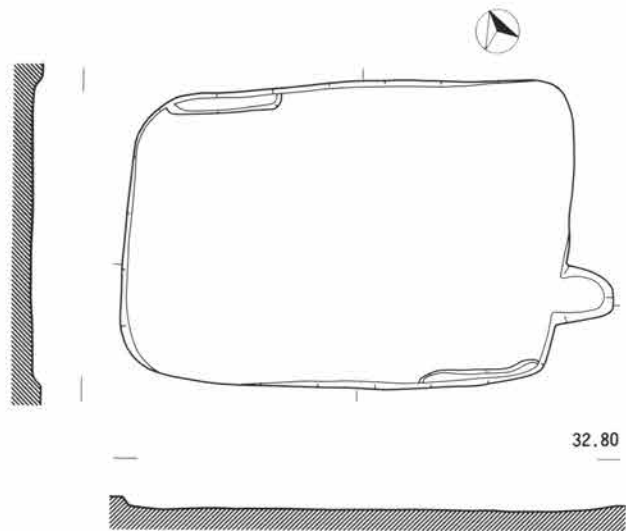
39号住居址の南に隣接している。近年の畑地耕作により著しく破壊しつくされており、床面はほとんど失なわれている。断続的に残る住居壁をつなぐことにより、住居址形状および規模を確認できた。

主軸を南北に近くとり、南北3.3m、東西4.8mの長方形プランを呈する。

カマドは東壁の中心より0.8m南に偏して付設されており、燃烧部の壁外に出る形態である。

北西隅と南東隅に壁周溝の一部が検出された。他の部分は破壊され明確でないが、全周するものと思われる。

支柱穴も検出できなかった。



第98図 46号住居址実測図

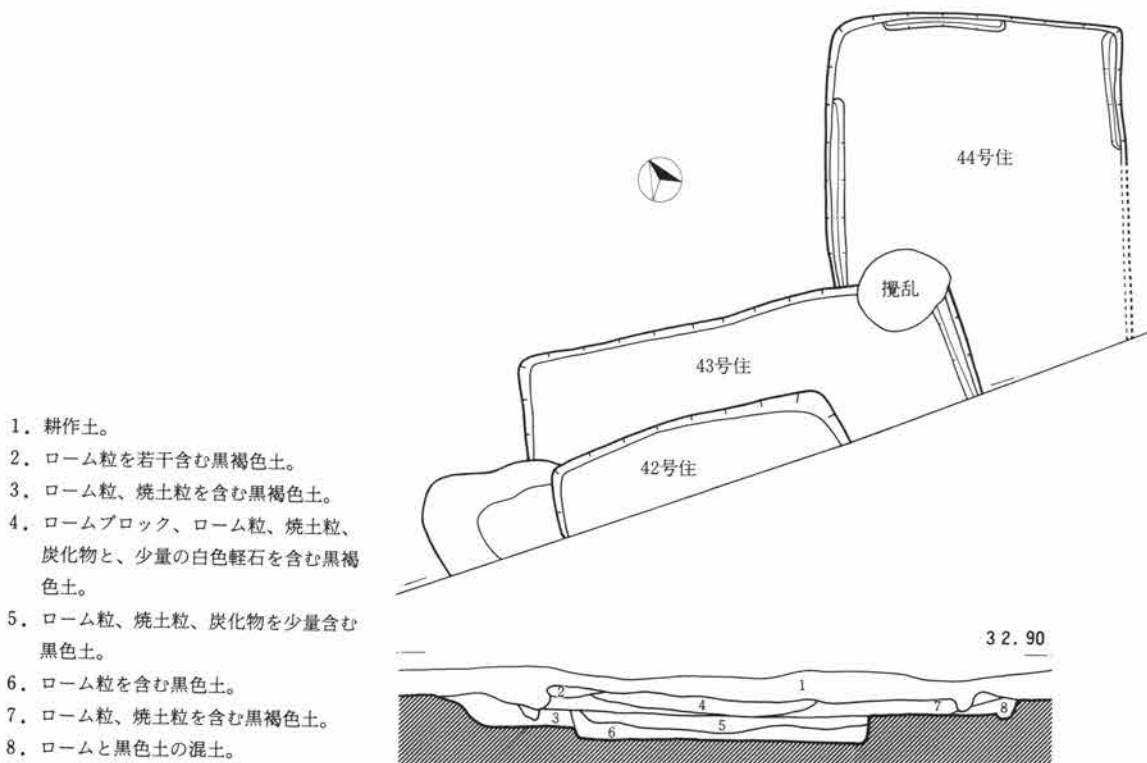
42・43・44号住居址▶出土遺物P.144・145、第144図

台地の縁辺部から60mほど入った地点に位置して、3軒の平安時代に属する住居址が重複している。古い順から44号住居址、43号住居址、42号住居址である。調査区域外に接した部分であったため、44号住居址については一部、43・42号住居址については前後が未調査である。

44号住居址は、南壁よりを除いて完掘された。部分的に壁高5cm前後をかるうじて残すが大半は床面近くまで近年の削平がおよんでいる。壁周溝の存在により、形状および輪郭が確認できた。東西3.2m、南北4.0m強の南北に長い長方形プランを呈している。カマドが付設されていたと推測される東壁側は破壊が床面下まで達しているため確認されていない。遺物は数片の土器が散在するのみで、直接住居につくものではない。

43号住居址は住居址の南側半分ほどが未調査である。壁高10cmほどで遺存状況はよくない。東西4.8mを測り、おそらく東西に長い長方形プランが推定される。カマドは、北壁にないことから、東壁に付設されている可能性が高い。住居址の北東隅からは、完形に近い脚付甕形土器2個体分が出土している。この土器の出土部分は、住居床面から径40cm、深さ8cmの不整形な掘り込みの中である。

42号住居址の西側に重複して、42号住居址より古く、43号住居址より新しい、幅約1.6m、深さ25cmほどの土坑状を呈する掘り込みがあるが、平安期の所産であるという以外、性格を明らかにできなかった。底面はフラットでなく、壁の走向は凹凸のある曲線をなしている。



第99図 42・43・44号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

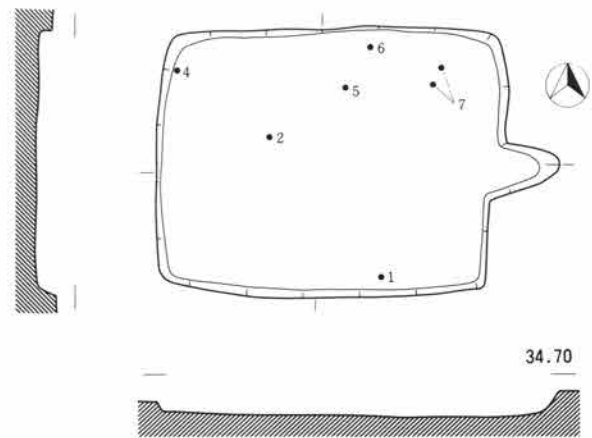
47号住居址▶出土遺物P.145・146、第145図

4号溝の南5mに位置している。周辺では本住居の北西35mに21号住居址、東34mに50号住居址と、隣接する住居との間には、かなり距離がある。調査区域外となっている本住居址の南側部分に同時期の住居址が近接して存在しているのかもしれない。住居の壁高15~20cmまでであり、遺存状況は良好である。

主軸を東西とし、東西に長い長方形プランを呈している。東西3.6m、南北2.9mの規模である。

カマドは、東壁のほぼ中心に付設されており、燃烧部が壁外に出る形態である。焚口部で幅48cm、奥行72cmを有している。

住居に伴う遺物は、比較的多く、カマド周辺および、住居北側半分に集中する傾向にある。



第100図 47号住居址実測図

48号住居址▶出土遺物P.148、第146図

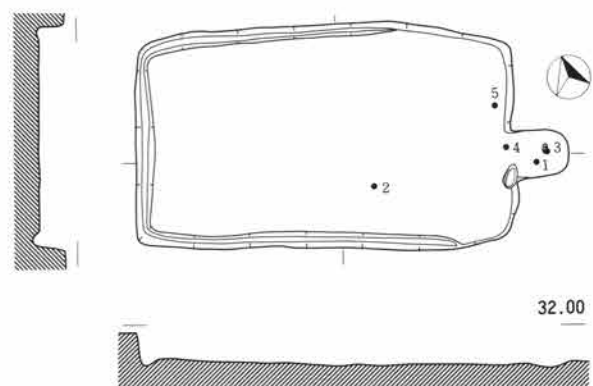
台地縁辺部より、約150mの奥まった部分に20軒ほどの平安時代の住居址の密集部分がある。本住居址は、その西端部分に位置している。

全体には壁高30cmを測る。きわめて遺存状況のよいものであるが、東壁部分のみは、近年の耕作等に伴う掘り込みにより、床面近くまで削平がおよんでいる。

主軸をほぼ東西とし、東西4m、南北2.4mと、平安期の通例の住居址に比較して、異例に長大な長方形プランを呈している。東壁を除く住居壁にそって幅10cm、深さ5cmの壁周溝が繞る。

カマドは東壁のほぼ中心に付設されている。燃烧部が壁外に出る形態である。後世の攪乱により床面近くまで削られている。右袖部にあたる部分には、20×25cmで厚さ15cmの川原石が据えられ、また燃烧部中心よりには棒状の川原石を立てカマド支脚としている。この石の上には高台付椀が伏せてのせられている。煮沸用土器をカマドに掛ける際のすわりをよくするための配慮であろうか。

遺物は、カマド周辺に多く出土しており、完形に近いものも多い。



第101図 48号住居址実測図

49号住居址▶出土遺物P.147・148、第147図

48号住居址の北側に隣接している。壁高40cmを測るきわめて遺存状態の良好なものである。

中心で東西3.8m、南北3.2mを有する。東西壁は、壁際にくらべ、中心よりで外側へふくらみを有している。

東壁および北壁の中心の2カ所にカマドが確認されているが、生活最終時点では東壁カマドが使用されていたことがわかる。

北壁カマドは、カマド天井部を欠く以外は、遺存状態がきわめて良好である。用材として質のあまりよくない白色粘土を利用している。燃焼部は住居内であり、幅15cm、長さ30cmほどの袖部が、住居内に張り出している。焚口部での幅60cm、奥行50cmであり、その先に幅20cm、奥行50cmの煙道がつく。カマド前は80×50cmほどの範囲で周囲の床面より5～10cm低い舟底状になっている。

カマドの位置する部分を除くと壁周溝がほぼ全周している。

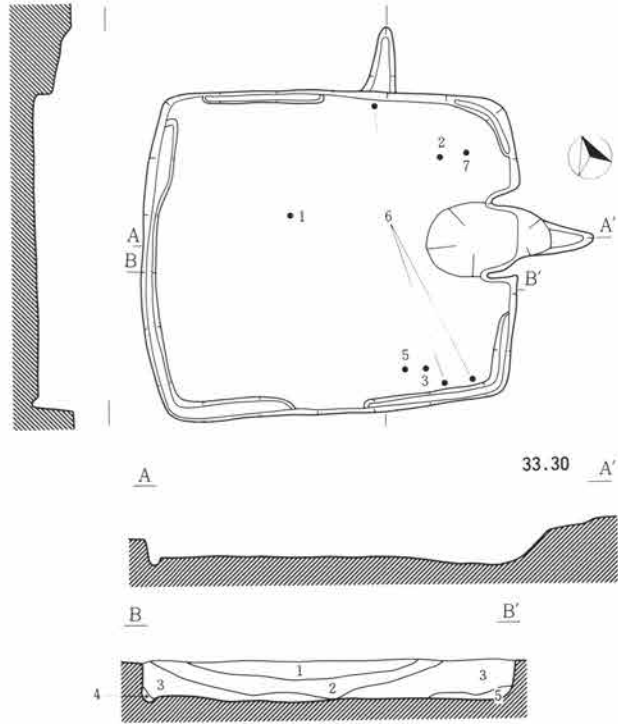
遺物は、住居に直接伴なわない埋土中のものが多く、住居につくものは破片が中心であり、量も少ない。東壁カマドの向かって右側にあたる部分に比較的、土器の集中した箇所が見られる。

31号住居址▶出土遺物P.135・136、第139図

台地の縁辺部から西へ最も奥まった地点にある。30号住居址の北西に隣接している。もと農家の宅地であったため、樹木、納屋の破壊により、北西半分を欠いている。また、残存部分についても、溝状掘り込み等による破壊がおよんでいる。

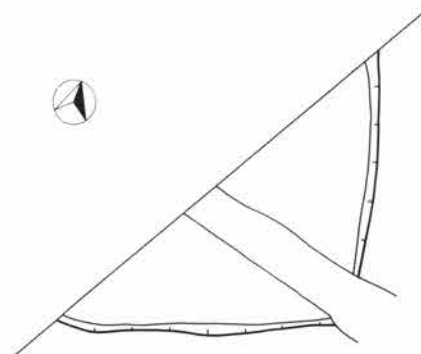
主軸を東西とし、東西3.1m強である。南北は2.9m以上を有する。

出土遺物が東壁沿いで多く出土しているが、確認されていないカマドの位置を暗示しているかもしれない。



1. 少量の焼土粒・黄褐色粘質土粒と白色軽石を含む黒色土。
2. 少量の黄褐色砂質土、同粘質土の粒・ブロックと、小粒の焼土・炭化物粒を少量含む黒色土。
3. 黄褐色砂質土、同粘質土の粒・ブロックと、焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土。
4. 黄褐色粘質土ブロックと黄褐色粘質土の混土。
5. 黄褐色粘質土ブロックと焼土を含む黒褐色土。

第102図 49号住居址実測図



第103図 31号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

50号住居址▶出土遺物P.148・149、第148図

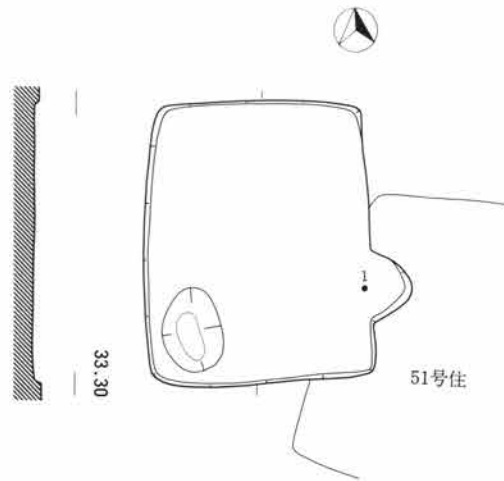
平安時代の住居密集地帯の北西端に位置する小型の住居址である。東側で、時期的に先行する51号住居址と重複する。壁高は5cm前後であり、遺存状態はあまりよくない。

南北に長い長方形プランを呈し、東西2.4m、南北3.0mの規模である。

カマドは東壁の中心より25cm南に偏して付設されている。燃烧部の壁外に出る形態である。

カマドと相対する住居南西隅に接して90×65cm、深さ20cmの長円形の貯蔵穴状のピットが確認されている。

遺物はカマド部分および南壁沿いから少量認められたのみである。



第104図 50号住居址実測図

52号住居址▶出土遺物P.149・150、第148図

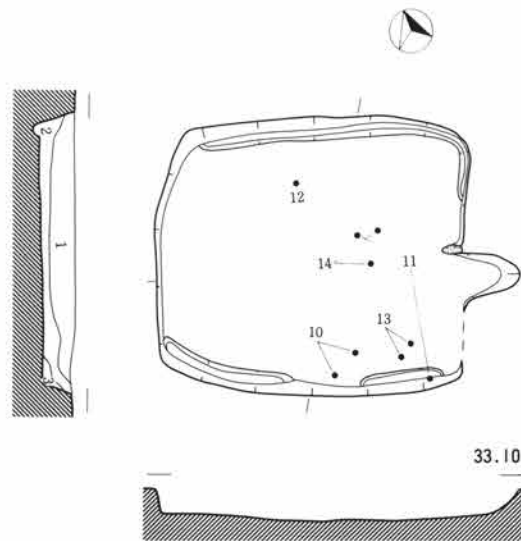
49号住居址の北に隣接している。壁高40cmと遺存状況の良好な住居である。

主軸を東西とし、東西3.3m、南北3mの規模で、やや東西に長い長方形プランを呈している。住居の隅角をつないだ線よりは、壁の中心よりは外側へ張り出しきみである。

カマドは、東壁の中心よりやや南に寄った位置に付設されている。カマド右側部分は新しい掘り込みにより破壊されている。この袖部分は、長方形板状の切石（粘土塊を焼成したものの可能性もある）によっている。なお、右袖部分は、住居壁の内側か外側にかかる形態で、焚口部で幅47cm、奥行85cmを有している。

西壁を除き壁周溝が繞っている。

出土遺物の量は多いが、住居埋土中のものが大半であり、住居に直接伴うものは、カマド前右側に出土し、破片が多い。



1. 黄褐色粘質土粒、ブロックを含む黒褐色土。
2. 黄褐色粘質土粒を含む褐色土。
3. 黄褐色粘質土と黒色土の混土。

第105図 52号住居址実測図

51号住居址▶出土遺物P.149・150、第148図

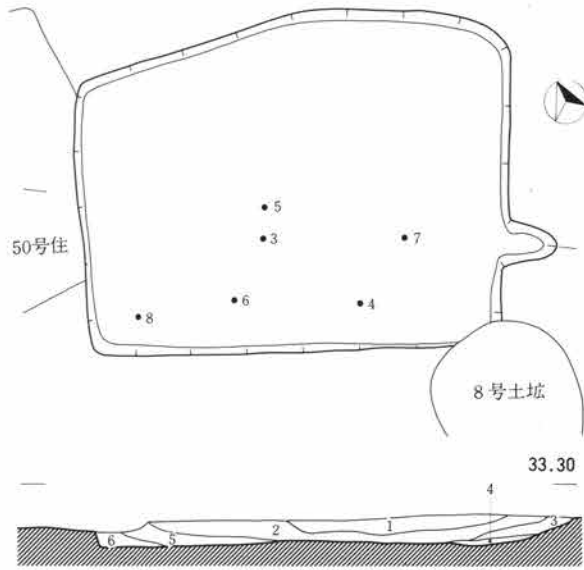
台地縁辺部より150m奥の住居密集部分の北よりに位置している。時期的に後出する50号住居址と西側で一部重複している。また、本住居址の下には、ほぼ相似形で、規模の一まわり小さい69号住居址がある。一方住居址南東隅は、中世の墓址かと思われる円形土壇と重複している。

壁高は25cm前後を残しており、遺存状況は、住居北よりの一部を除くと良好である。

主軸をほぼ東西とし、東西4.6m、南北3.6mの規模を有する。東壁より西壁の長さが短い不整形な主軸方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の中心より0.7m南に偏して付設されている。燃焼部が壁外となる形態で、焚口部で幅48cm、奥行56cmの規模を有している。

住居に直接伴う遺物には、完形に近く復せる土器が比較的多く、その出土位置は、カマド前面から右側にかけて集中している。



1. 焼土粒・ローム粒を含む粒子の細かい褐色土。
2. ローム粒を多量に含む褐色土。
3. 焼土と褐色土の混土。炭化物を少量含む。
4. 焼土と炭化物。
5. 粒子の細かい黒褐色土。
6. 褐色土とロームの混土。

第106図 51号住居址実測図

69号住居址

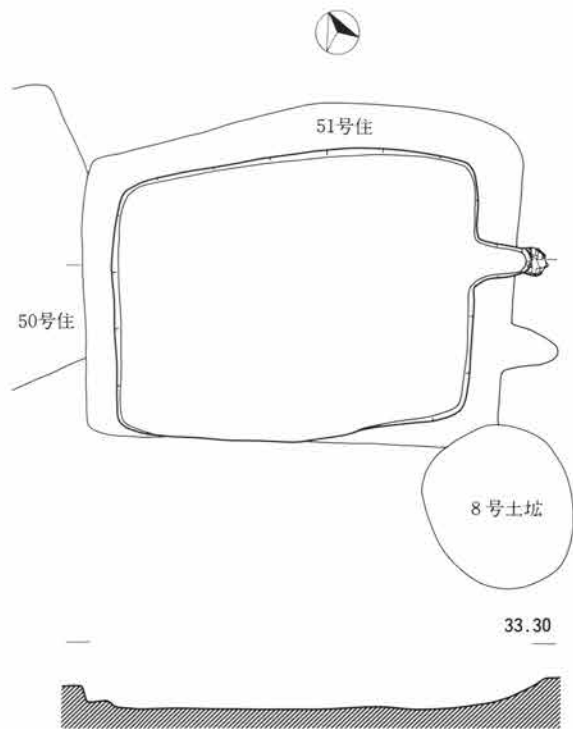
51号住居址の下にあり、規模の一まわり小さい、ほぼ相似形のものである。時期的には、51号住居址に先行する。

住居址の方位を51号住居址と同一にとり、東西3.8m、南北3.1mの規模を有している。51号住居址との間で東、北、西壁は平行し、南壁は一部共有している。床面は51号住居址より約10cm低い。

カマドは東壁の中心より30cm北に偏して付設されている。燃焼部が壁外に出る形態で、焚口部で幅44cm、奥行50cmを有し、その先には、土師甕形土器を横位にさせて、煙道部分としている。

住居に直接伴う遺物はきわめて少ない。しかもすべて破片である。

51号住居址が本住居址の形状をトレースしてつくられている可能性が高い。遺物がまったく存しないこと、時期的にきわめて近接していることからして、本住居に住んでいた人により、51号住居が拡張的に建て替えられたと思われる。



第107図 69号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

53号住居址▶出土遺物P.149、第148図

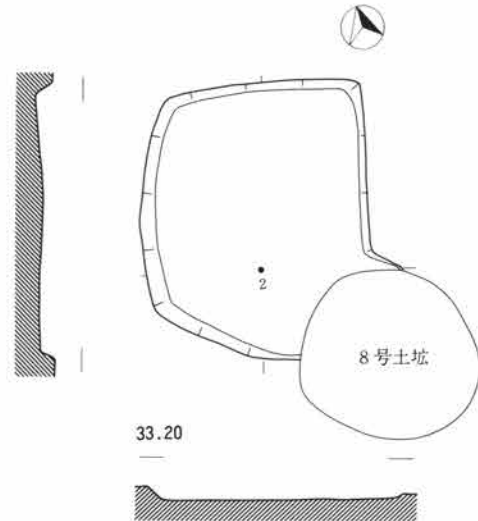
51号住居址の西側に隣接して位置する小型の住居址である。南東隅は中世のものと考えられる円形土壇と重複している。

主軸をほぼ東西とし、東西2.4m、南北2.9mで、南西隅は角のとれた隅丸形状である。本遺跡調査住居址中では最も規模の小さいものの1つである。壁高20cmほど残存している。

カマドは、東壁の中心より70cmほど南に偏して付設されている。向かって右側半分は、中世の円形土壇のため失っている。焼成部が壁外に出る形状であるが、詳細は明らかでない。

出土遺物は、住居埋土中の土器片1点のみである。直接住居に伴うものは、住居の遺存状況が比較的良好にもかかわらず、全く存しない。

支柱穴や壁周溝等は検出されなかった。



第108図 53号住居址実測図

54号住居址

37号住居址の西側に隣接する小型の住居址である。この付近は、近接する民家のゴミ捨場になっていたため、長年にわたり繰り返しゴミ穴が掘られ、本住居址も何か所もその破壊がおよんでいる。特にカマドの位置する東壁よりを中心とした部分がひどい。

主軸をほぼ東西とし、東西2.4~2.6m、南北3.2mとやや南北に長い長方形プランを呈している。

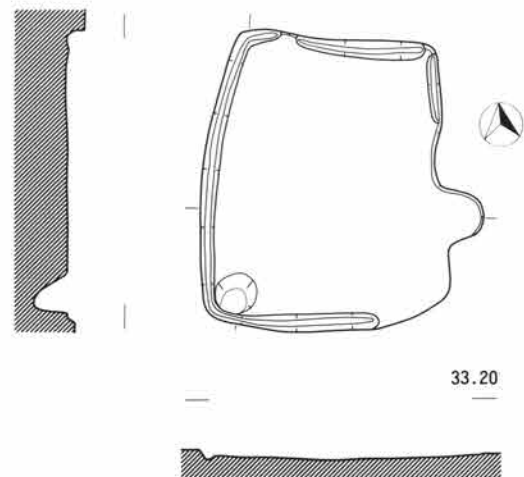
カマドは東壁の中心よりやや南に偏して付設されている。底面近くまで削平がおよんでいるため詳細は不明である。焼成部は壁外に出る形態である。

削平をうけている部分を除くと全体に壁周溝が繞っている。

住居の南西隅には、径30cm、深さ30cmほどの円形に近いピットがあり、貯蔵穴的な施設とも考えられる。

支柱穴は検出されなかった。

住居に伴う遺物は、カマド周辺にわずかにみられるが、すべて破片である。



第109図 54号住居址実測図

56号住居址▶出土遺物P.152、第150図

55号住居址と同じ住居址群の南西端に位置している。時期的に先行する58号住居址と東側で一部重複している。住居床面までの深さが浅く、遺存状況はあまりよくない。

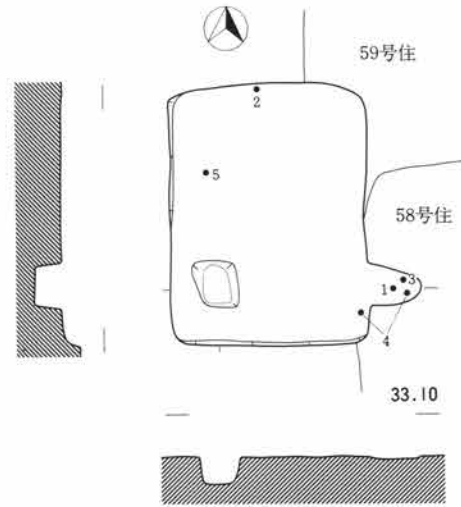
主軸を東西とし、東西2.1m、南北2.8mの南北に長い長方形プランを呈しており、最も小型な規模の部類に属する。

カマドは東壁の中心より0.8m南に偏し、住居南東隅にきわめて近接して付設されている。燃烧部が壁外に出る形態である。左袖部分には、割石による袖石が残り、また、住居内には、カマドに使用されたと思われる、割石、川原石が散乱している。燃烧部の奥部には原位置に近いと思われる羽釜土器が出土している。

カマドと相対して、住居南西隅には、40×50cm、深さ30cmの貯蔵穴状のピットがある。

出土遺物はカマドおよび貯蔵穴状ピットのある南よりに多く認められる。

本住居の南西隅に接して、100×50cm、深さ20cmの土塚状の掘り込みが確認されている。ほぼ底面に接して完形の杯形土器が2個体出土している。調査時点では、後世の掘り込みへの流れ込みと考え、詳細な調査を実施していないが、出土土器からするならば56号住居に伴う施設、56号住居とは別個の平安期の土塚の可能性も考慮しなければならないと現在は考えている。



第110図 56号住居址実測図

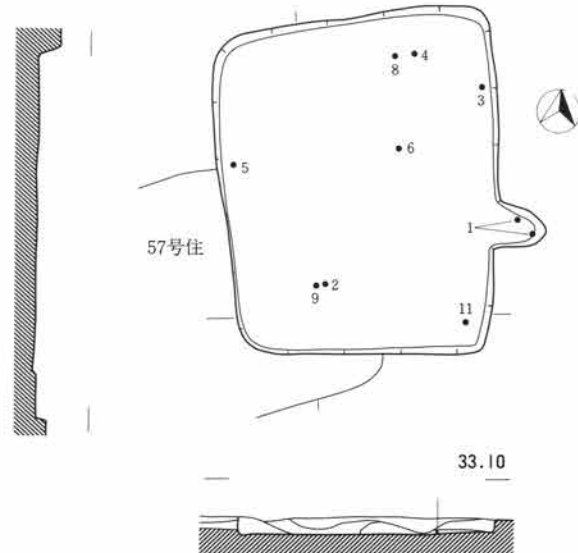
55号住居址▶出土遺物P.150・151、第149図

54号住居址の北西側に隣接し、5軒の住居址(55～59住居址)が重複して所在している。本住居址はこの住居址群の北東端に位置し、時期的に先行する57号住居址と南西側で一部重複している。壁高20cm前後を残しており遺存状況は比較的良好。

主軸をほぼ東西とし、東西3.0m、南北3.6mの規模を有し、南北に長い長方形プランを呈している。

カマドは、東壁の中心より80cm南に偏して付設されている。燃烧部が壁外となる形態で、焚口部で幅48cm、奥行60cmを有している。

出土遺物は、住居埋土中のもものも含め、比較的豊富である。直接住居址に伴うと思われるものは、カマドを基準として、南側に多く、ほぼ完形に復されるものも多い。



1. ローム粒と少量の焼土粒を含むしまりのない褐色土。
2. 褐色土を少量含むロームブロック。
3. ロームの小ブロックと褐色土の混土。
4. ローム粒を含む褐色土。
5. ローム粒・焼土粒、少量の炭化物粒を含む黒褐色土。
6. 灰と焼土を多量に含む黒色土。

第111図 55号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

58号住居址▶出土遺物P.153・154、第151図

時期的に後出する56号住居址の東側に重複し、北側は時期的に先行する59号住居址と重複している。

主軸をほぼ東西にとり、東西3.1m、南北4.0mの南北に長い長方形プランを呈する。近年の破壊が深くおよんでいるため、遺存状況はあまりよくない。とりわけ南西側は、近年の大きなゴミ穴により、大きく床面下まで掘り取られている。

カマドは東壁の中心より60cmほど南に偏して付設されている。底面近くまで削平されており、燃烧部が壁外にくることがわかるほか詳細は明らかでない。

南、北壁に沿っては壁周溝が確認されているが、他は破壊のため存否は不明である。

住居に直接伴うと思われる遺物は、カマド周辺に多く認められるが、完形に復せるものは少ない。

支柱穴は、検出されなかった。

57号住居址▶出土遺物P.152・153、第150図

重複する5軒の住居址のうち最も古い住居址である。東側を55号住居址、西側を59号住居址により切られており、残存しているのは、全体の $\frac{1}{2}$ ほどである。

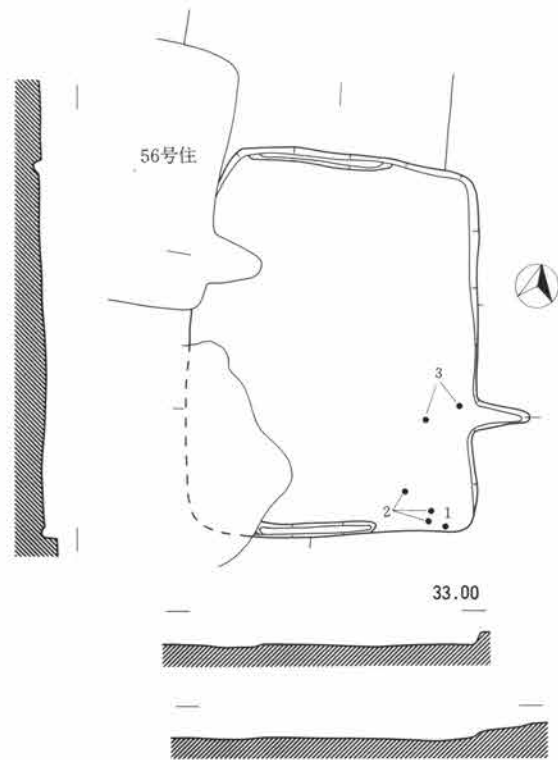
東西2.7m、南北3.6m(復元)の規模で、南北に長い長方形プランを呈している。

カマドは、住居壁面の確認された南壁および北壁の一部では確認できない。おそらく東壁に付設されており、55号住居址により破壊されたものと思われる。

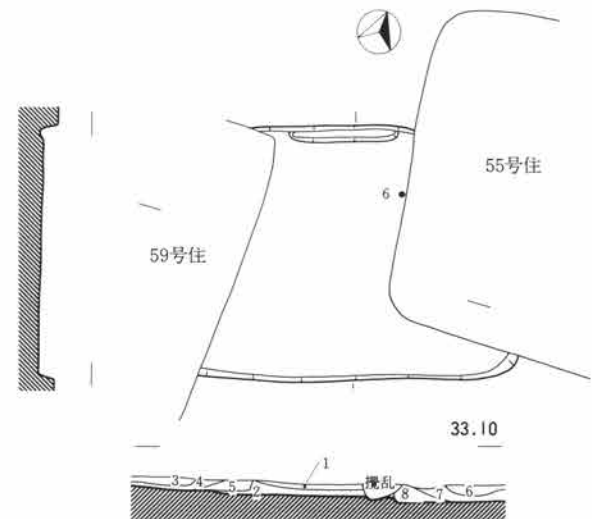
北壁沿いにのみ長さ1.2mにわたり、幅15cm、深さ約10cmの壁周溝が検出できた。

支柱穴は検出されていない。

出土遺物はきわめて少ないが、カマド周辺を欠くこと、住居壁が10cm前後の遺存であることを考慮すると、本来的に少ないとは断定しがたい。



第112図 58号住居址実測図



1. ローム粒子を少量含むやや粘質の黒色土。
2. ロームの小ブロックと焼土を含む黒褐色土。
3. ローム粒と焼土を含む黒褐色土。
4. ローム粒を若干含むしまりのない黒褐色土。 59号埋土
5. ロームと褐色土の混土。
6. ローム粒と少量の焼土粒を含む褐色土。
7. ロームの小ブロックと褐色土の混土。 55号埋土
8. ローム粒を含む褐色土。

第113図 57号住居址実測図

59号住居址▶出土遺物P.153・154、第151図

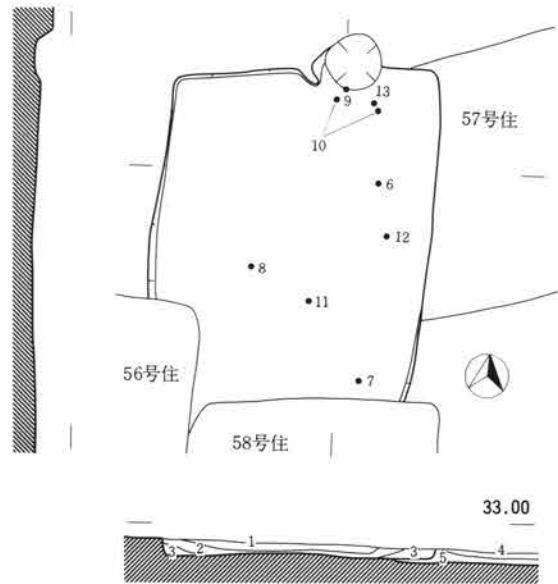
重複する5軒の住居址の中央に位置している。南側で時期的に後出する56・58号住居址と重複し、北東側で先行する57号住居址と重複している。

主軸を南北とし、南北3.7m強(形状からしてこれをあまり超えない)、東西3.0mの規模を有し、南北に長い長方形プランを呈している。

カマドは北壁のほぼ中心に付設されているが、ちょうどカマドにかかって現代のゴミ穴が掘られ、大半が破壊されていた。

壁周溝および支柱穴は検出されていない。

出土遺物は多いが、埋土中のものが大半である。住居に直接伴うものは少なく、住居址東側を中心に散在的に出土している。カマドに近接して甕形土器が多く認められる。



1. ローム粒と焼土粒を含む黒褐色土。
2. ローム粒を少量含むしまりのない黒褐色土。
3. ロームと褐色土の混土。
4. ローム粒を少量含むやや粘質の黒色土。
5. ロームの小ブロックと焼土を含む黒褐色土。

第114図 59号住居址実測図

62号住居址▶出土遺物P.155・156 第152図

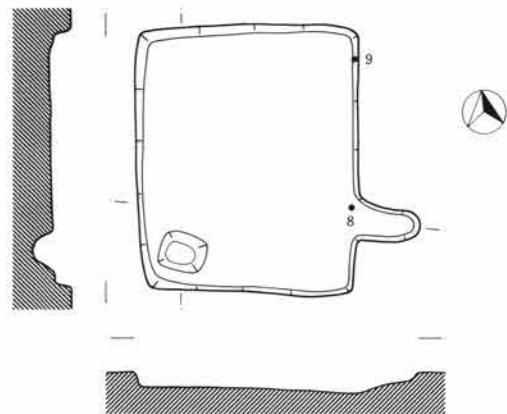
平安時代の住居密集地帯のほぼ中央に位置している。東3mに隣接する61号住居址を除くと、周囲の住居からはやや離れて、独立的な占地を示している。

主軸をほぼ東西とし、東西2.4m、南北2.8mの規模で、南北に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の中心より70cm南の、住居南東隅に近接した位置に付設されている。燃焼部の壁外に出る形態で、焚口部で幅38cm、奥行74cm(復元)を測る。焚口部分の底面に接して羽釜土器が奥よりから倒れたような状態で出土している。

住居南西隅には40×50cm、深さ15cmの東西に長い長方形の貯蔵穴状のピットが確認されている。

出土遺物は、カマド部分で出土した羽釜土器以外は、きわめてわずかな土器片であり、壁高10~15cmと左程遺存状況がわるくないことを考慮すると、住居最終時点の状況と考えられる。



第115図 62号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

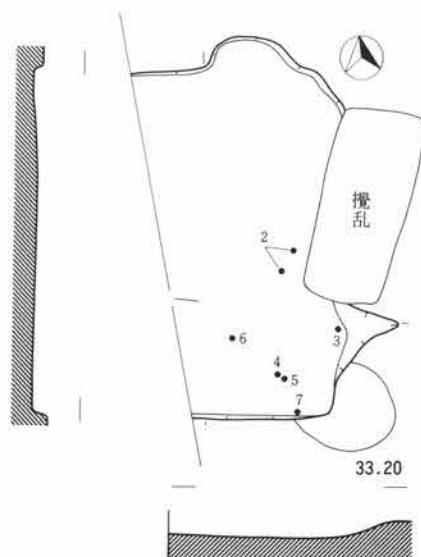
63号住居址▶出土遺物P. 156・157 第153図

平安時代の住居密集地帯のほぼ中心に位置している。62号住居址の南側に、65号住居址の東側に隣接している。住居の西側半分は、調査区域外となっていたため未調査である。付近は近年の掘り込みが、数次にわたり入っているため、遺構は著しく損壊をうけ、遺存状況はわるい。

主軸を東西とし、南北3.7mを有する。検出部分の形状からすると、東西に長い長方形プランを呈しているものと推される。

カマドは東壁の中心より0.6m南に偏して付設されている。燃燒部が壁外に出る形態である。燃燒部の中心底面に接して高台付椀が伏せた状態で出土している。支脚として使用されていたものと思われる。近接して羽釜土器が出土している。

出土遺物は、カマド周辺を中心に、住居南側に比較的集中して出土している。



第116図 63号住居址実測図

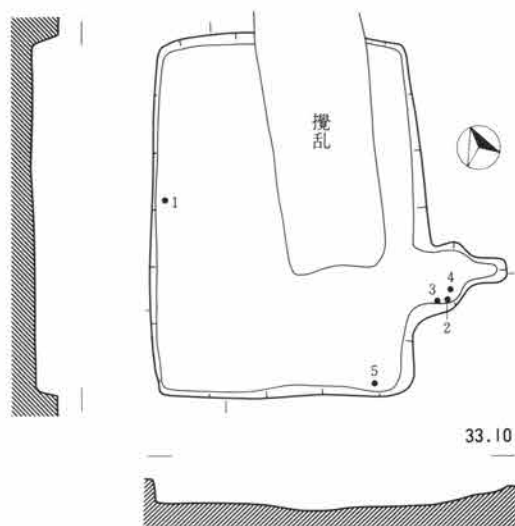
64号住居址▶出土遺物P. 156~158 第153図

平安期の住居密集地帯の北端よりに位置している。53号住居址に近接して隣接するが、東および南側は、隣接する住居址との間があく。後世の掘り込みにより住居北側および南側で床面下まで達する欠落部分があり、遺存状態はあまりよくない。

主軸を東西とし、東西3.0m、南北3.9mの規模を有し、南北に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の中心より0.4m南に偏して付設されている。燃燒部が壁外に出る形態で、焚口部で幅70cm、奥行55cmに、幅28cm、奥行40cmの煙道がつく比較的大型のものである。右袖部のみは、棒状の川原石による袖石が残る。

住居に直接伴なうと思われる遺物は比較的多く、カマドを中心とした周辺にやや集中している。



第117図 64号住居址実測図

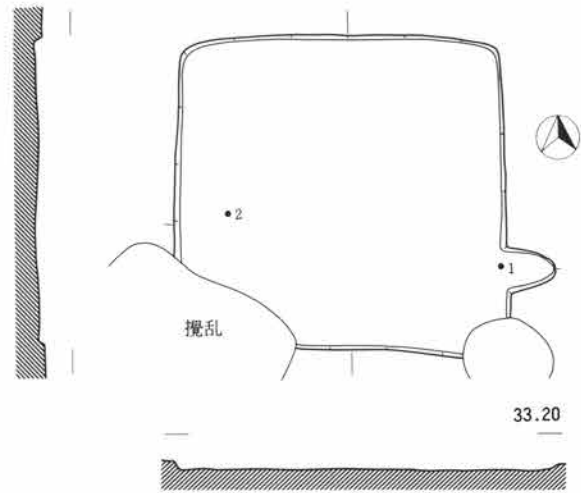
65号住居址▶ 出土遺物P.158・159 第154図

平安時代の住居密集地帯の中ほどにあり、62号住居址の南西6mに位置している。

主軸を東西とし、東西3.5m、南北3・3mの規模を有し、東西にやや長い長方形プランを呈している。住居址の東南および南西隅は、近年のゴミ穴により掘りとられている。壁高は10cm未満であり、遺存状況はよくない。

カマドは東壁の中心より0.5m南に偏した、住居南東壁に近接した位置に付設されている。燃烧部が壁外に出る形態で、焚口部で幅50cm、奥行50cmの規模である。

出土遺物はきわめて少なく、カマド付近を中心として散在的に破片が確認された程度である。



第118図 65号住居址実測図

66・67号住居址▶ 出土遺物P.158・159 第154図

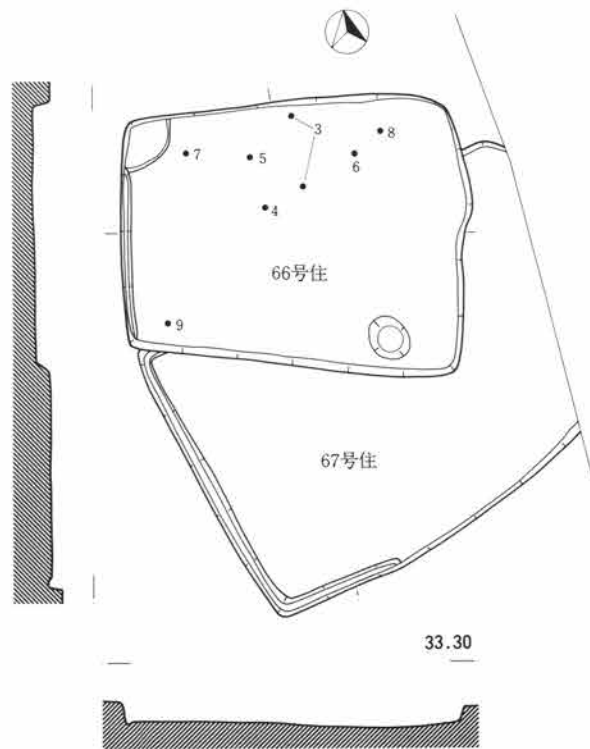
65号住居址の南側に隣接する2軒の住居址であり、重複している。北側が66号住居址、南側が67号住居址である。67号住居址が時期的に先行する。たび重なる近年の掘り込みにより、住居址の遺存状況はわるい。

67号住居址は、東西4.1m強、南北3.2mの長方形プランを呈している。東壁よりは調査区域外のため未調査である。カマドの付設箇所はこの東壁側が推測される。出土遺物は全く認められなかった。

66号住居址は、67号住居址より床面のレベルで15cmほど低く、遺存状況は比較的よい。東西3.6m、南北2.8mの規模を有し、東西に長い長方形プランを呈している。

カマドは、住居の4壁がほぼ検出できたが、明確には確認できない。該期の住居例からするならば、東カマドが一般である。本住居の場合、壁部分の攪乱を考慮すると、削平された可能性が強い。

出土遺物は比較的多く、住居に直接つくと思われるものは、北側よりに集中している。南側よりにまったくないことは、遺構の後世の攪乱とも関係するものであろう。



第119図 66・67号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

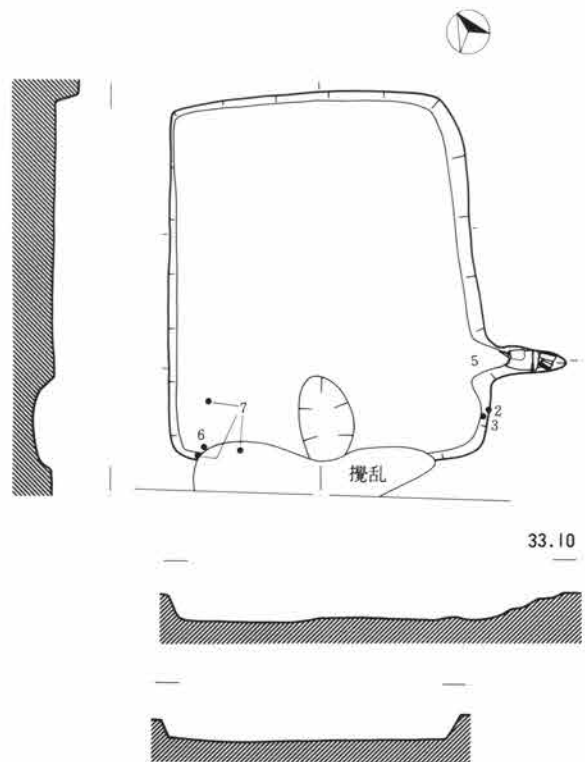
68号住居址▶出土遺物P.159・160 第154図

平安時代の住居密集地帯の南西端よりに位置しており、66・67号住居址の西側に隣接する。壁高25cm前後を有しているが、所々に後世の掘り込みによる攪乱が入っているため、遺存状況はあまりよくない。

主軸を東西とし、東西3.3m、南北4.3mの南北に長い長方形プランを呈している。

カマドは、東壁の中心より1m南に偏して付設されている。燃烧部の壁外に出る形態で、焚口部で幅36cm、奥行40cmに、幅15cm、奥行60cmの煙道がとりつく。この煙道部分は、円筒埴輪を半截したものを天井部に使用し、その下に埴輪および土師器甕形土器の破片を組みあわせて、煙道側壁としている特異なものである。

本住居址以外に埴輪が確認されたものに、40号住居址、58号住居址がある。いずれも平安時代に属する住居であり、近在する古墳の破壊に伴ない得られた埴輪を集落へ持ち込み、転用したものと考えられる。

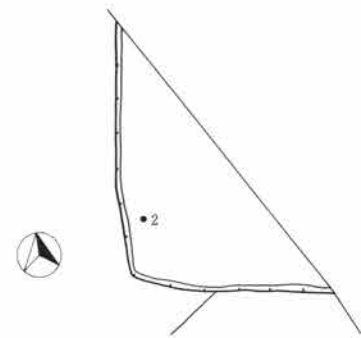


第120図 68号住居址実測図

3号住居址▶出土遺物P.120 第129図

台地縁辺部である調査地東南端に位置している。時期的に先行する4号住居址と南側で一部重複している。南側には6・7号住居址が隣接している。大半が調査区域外となっているため、住居南西部隅を中心とした一部の調査であった。

住居の向きをほぼ方位にあわせていることはわかるが、規模等については不明である。



第121図 3号住居址実測図

45号住居址▶出土遺物P.144・145 第144図

44号住居址の東8mの台地の縁辺部からやや入った地点である。周辺の平安時代の住居の分布は比較的まばらである。住居壁をほとんど残さないほどまでに削平されているため、床面のひろがり、カマド底面の残存から住居の様相を部分的に把握できた。カマドを中心とした部分の遺存であり、西側 $\frac{2}{3}$ を欠いている。主軸を東西とし、南北3.4m、の規模を有している。カマドは東壁のほぼ中央に付設されており、燃烧部が壁外に出る形態である。住居の遺存状況に比して、カマド手前より完形の須恵器杯形土器2個体が出土している。

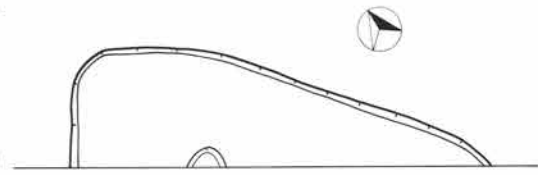


第122図 45号住居址実測図

13号住居址

大型の11号住居址の南10mに位置している。住居の大半が調査区域外となっていたため、住居北東壁よりを中心としたきわめて部分的な遺構検出であり、不確定部分が多い。

住居対角線方向がほぼ方位に合う向きである。住居北隅から内側へ1.5mの位置には径30cm、深さ26cmの柱穴状のピットが確認されている。

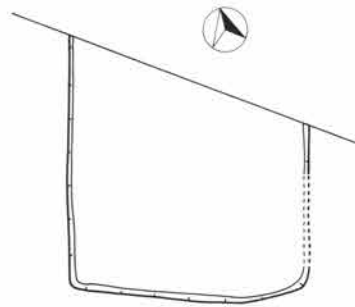


第123図 13号住居址実測図

61号住居址▶出土遺物P. 154・155 第152図

62号住居址の東2.7mに隣接している。住居中心部分の遺存状況は良好であるが、住居壁に沿った東の一部および北壁は後世の破壊により失っている。東西2.5m、南北3.7m（復元値）の規模を有しており、南北に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の南よりの部分に、住居床面下まで達する近年の円形掘り込みが、この部分に位置していた可能性が強い。この部分に近接して、カマドの用材と思われる遺物は、比較的豊富であり、完形に復せるものが多い。



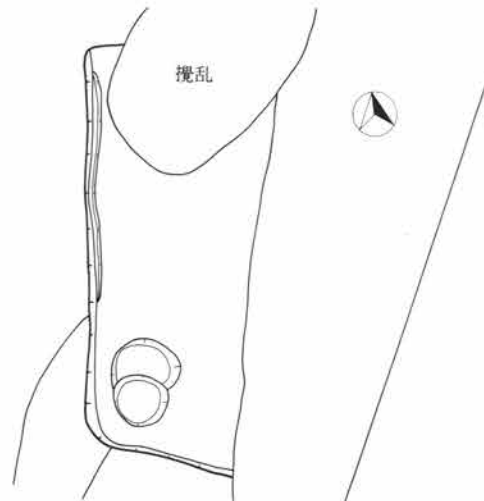
第124図 61号住居址実測図

60号住居址

重複する5軒の住居（55～59号住居址）の東側に隣接している。付近は、後世の溝、掘り込み、道等により著しく破壊を受けており、かろうじて住居跡の存在を確認できるほどの遺存状況であった。検出されたのは、住居南西よりを中心とした $\frac{1}{2}$ ほどの部分である。

南北4.2mの長さからして、南北に長い長方形プランを呈し、東壁部分にカマドを付設する住居であったと推される。

住居の南西隅に接して径50cm、深さ50cmの円形に近い貯蔵穴状のピットが確認されている。



第125図 60号住居址実測図

22号住居址▶出土遺物P. 126・127 第133図

1号溝の北30mで、11号住居址の北東に隣接している。付近は近年の耕作に伴う削平、攪乱が著しく、かろうじて残る床面、焼土（カマド）、出土遺物の広がりから住居址の存在がつかめたものである。

やや南北に長い長方形プランを呈し、東壁の中心よりやや南に偏してカマドが付設されていたようである。遺物は主としてカマドの推定位置周辺に集中して出土している。

III 検出された遺構と遺物

34号住居址

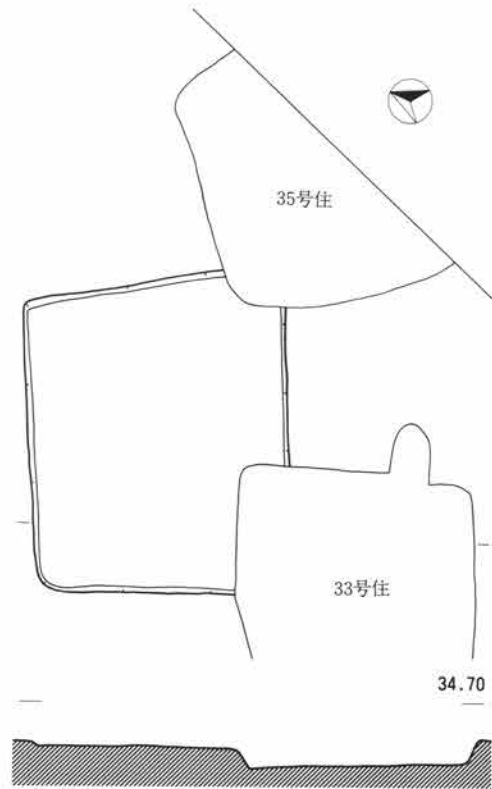
台地の最も奥まった地点に所在する住居址である。遺構確認面より床面までの深さが5cm前後ときわめて浅く、また後世の耕作も床面までおよび遺存状態はわるい。

北東隅で奈良時代の遺物を出土した35号住居址と、南西隅で同じく奈良時代の33号住居址と重複しているが、本住居址の遺存状態が悪いため、重複部分の床面は明確にし得なかった。

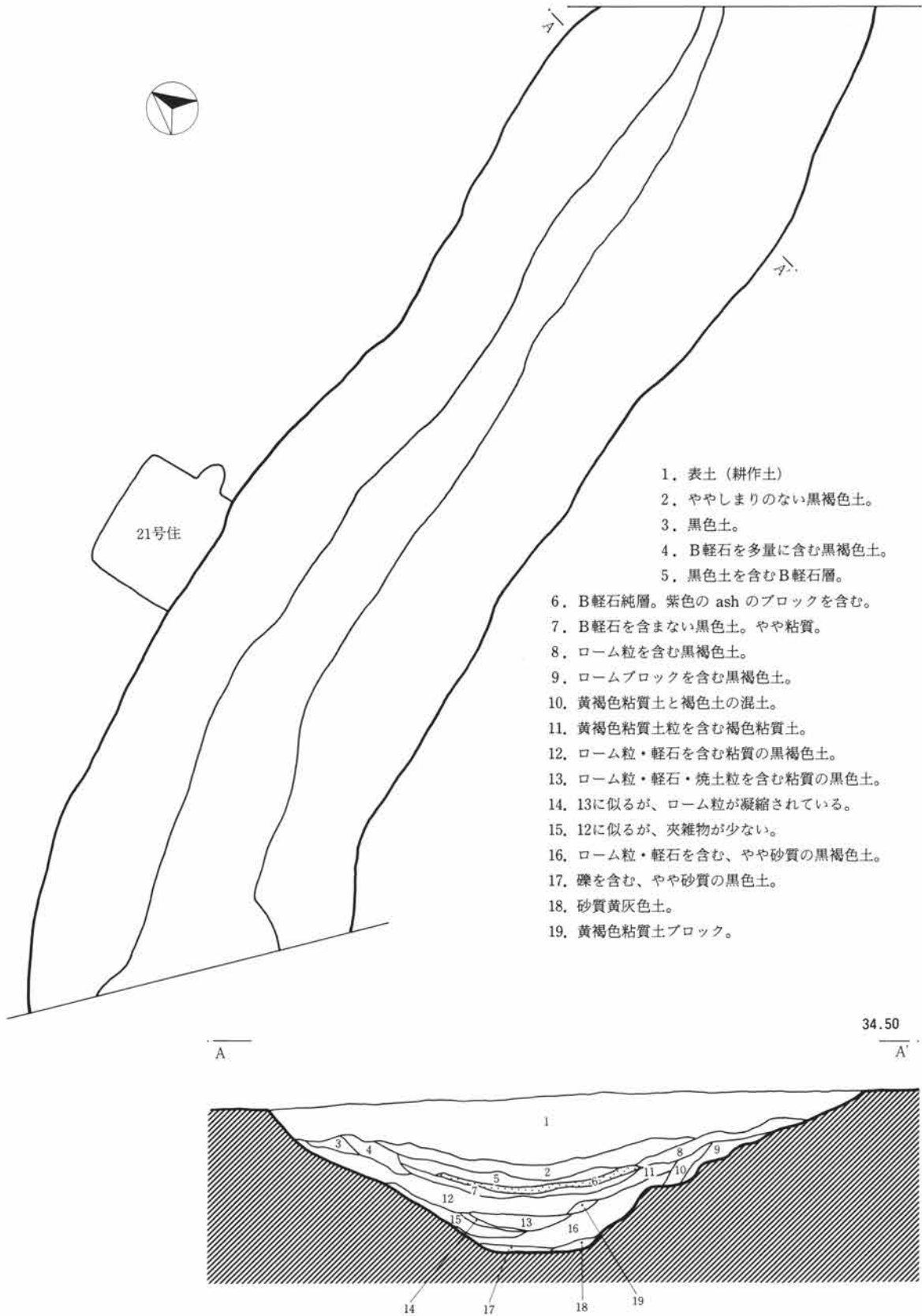
本住居址は、東西3.3m～3.1m、南北2.7mの東西に長い長方形プランを呈する。住居址の全貌が現われているにもかかわらず、カマドを欠いている。遺存状態の悪さからすれば削平されたものと考えられる。

本住居址に直接伴なうと思われる実測可能な遺物はほとんどみられなかった。小破片から考えれば、平安時代の遺構と考えられる。

なお、支柱穴、壁周溝は検出されなかった。



第126図 34号住居址実測図



第127図 1号溝実測図

III 検出された遺構と遺物

1号溝

台地の縁辺部から約200m西で、ほぼ東西走向のきわめて大型の溝状遺構である。平安時代の21号住居址と一部重複しており、溝が住居址に後出する。規模の大型であるのに比して検出し得たのは、30mの長さである。わずかの調査データから、溝総体の性格について明らかにすることには無理があるかもしれない。

検出した範囲では、ほぼ南北走向を示すが、西よりではやや南西よりにまがっていく傾向がある。東側部分では、直線的に東へと向かっていく傾向がある。上端での幅8m、下端での幅2m、深さ2.2mときわめて大型の規模である。断面形状は、ゆるやかに開く葉研状を呈している。

溝への埋土の埋没状態は、床面より約1.5mまでは、レンズ状態をなして自然の埋没を示しているが、それより上は、均一の黒褐色土が厚くあり、人為的な埋め戻しを想定させる。底面より80cm上には、幅10cmの軽石層の堆積が見られる。この軽石層は浅間山噴出のB軽石層である。溝の中ばまで埋没し、その機能をやや果さなくなった段階にB軽石の降下があったといえよう。

溝の底面付近は、地山の崩落による砂利および礫層であり、溝への埋土の埋没状態ともあわせ、水が流れていたたり、水をたたえていた痕跡は見られない。

溝底面には、平安時代の土器が散在的に見られる。その大半は小破片である。

本溝との関連で、調査地外である周辺地域について検討してみると、溝の走向にほぼ重なるような状態で、枝道および農地の境界が連なっている。西側へは350mの長さで枝道が東西に連なり、東側では、約100m畑地の地境が東西走向で連なり、一段下がった沖積地面となっている。全体の長さは、約550mである。このすべてが、1号溝の東西の長さとも一致する積極的な証拠はないが、少なくとも調査区域外の東西に一定の長さでのびていたことだけは明らかであり、またその延びの可能性としては考えられよう。

6号溝▶ 出土遺物P.160・161 第155図

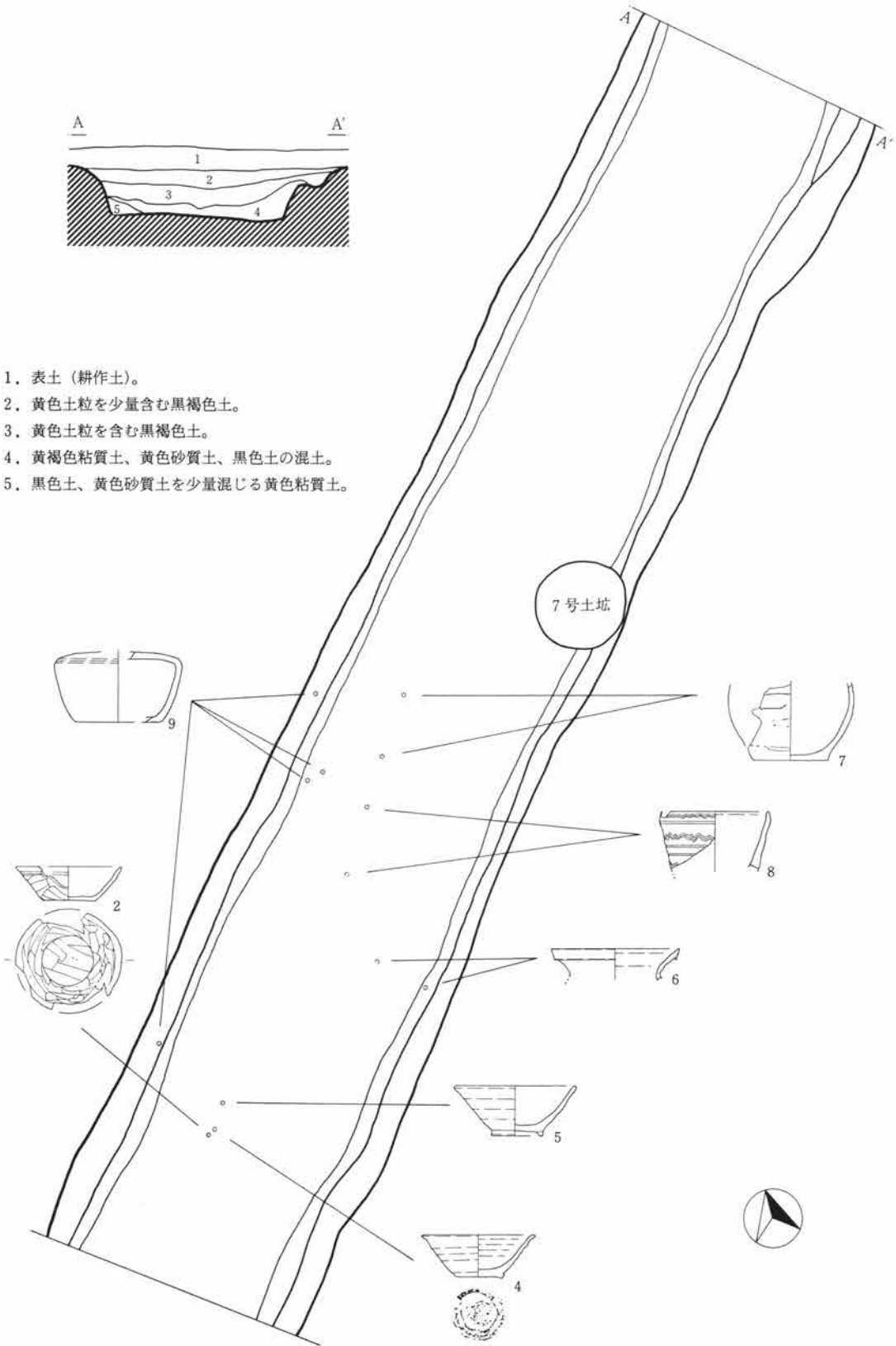
1号溝の南東40mに位置し、北東から西南に向けて直線的にのびる溝状遺構である。溝の中央部分で、时期的に後出する7号土坑（中世）と重複している。

溝の断面形状は台形を呈しており、幅、上端で4～4.4m、下端で3～3.3m、深さ約80cmの規模を有している。底面はほぼフラットであり、溝への埋土の埋没状態からは、水が流れていたたり、水をたたえていた痕跡は見られない。

溝内よりの出土遺物は比較的多量であった。大半は破片であり、全体的には、溝の北側に寄って出土している。北西側から、損壊した土器を投棄したものであろうか。

本溝は長さ21mまで検出したが、その両端では、溝が終息する痕跡は見られないことから、調査区域外にもある程度延びていることが予測される。

出土遺物からは、1号溝より时期的に先行するものと考えられる。



第128図 6号溝実測図

III 検出された遺構と遺物

1号住居址出土遺物観察表 (第129図・P L 29) ▶本文 P. 91・第81図

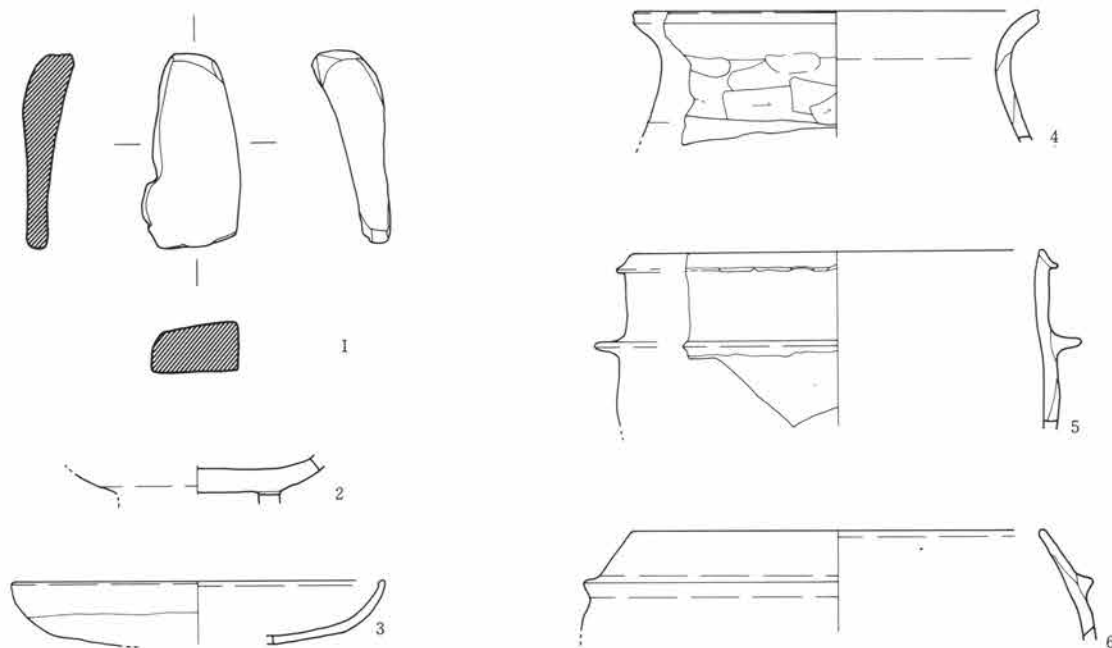
No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	砥石(石製品)	半欠。 長 7.2cm。 幅 3.5cm。	床面上1cm。	①変質安山岩?。	砥石として2面ついている。

3号住居址出土遺物観察表 (第129図・P L) ▶本文 P. 114・第121図

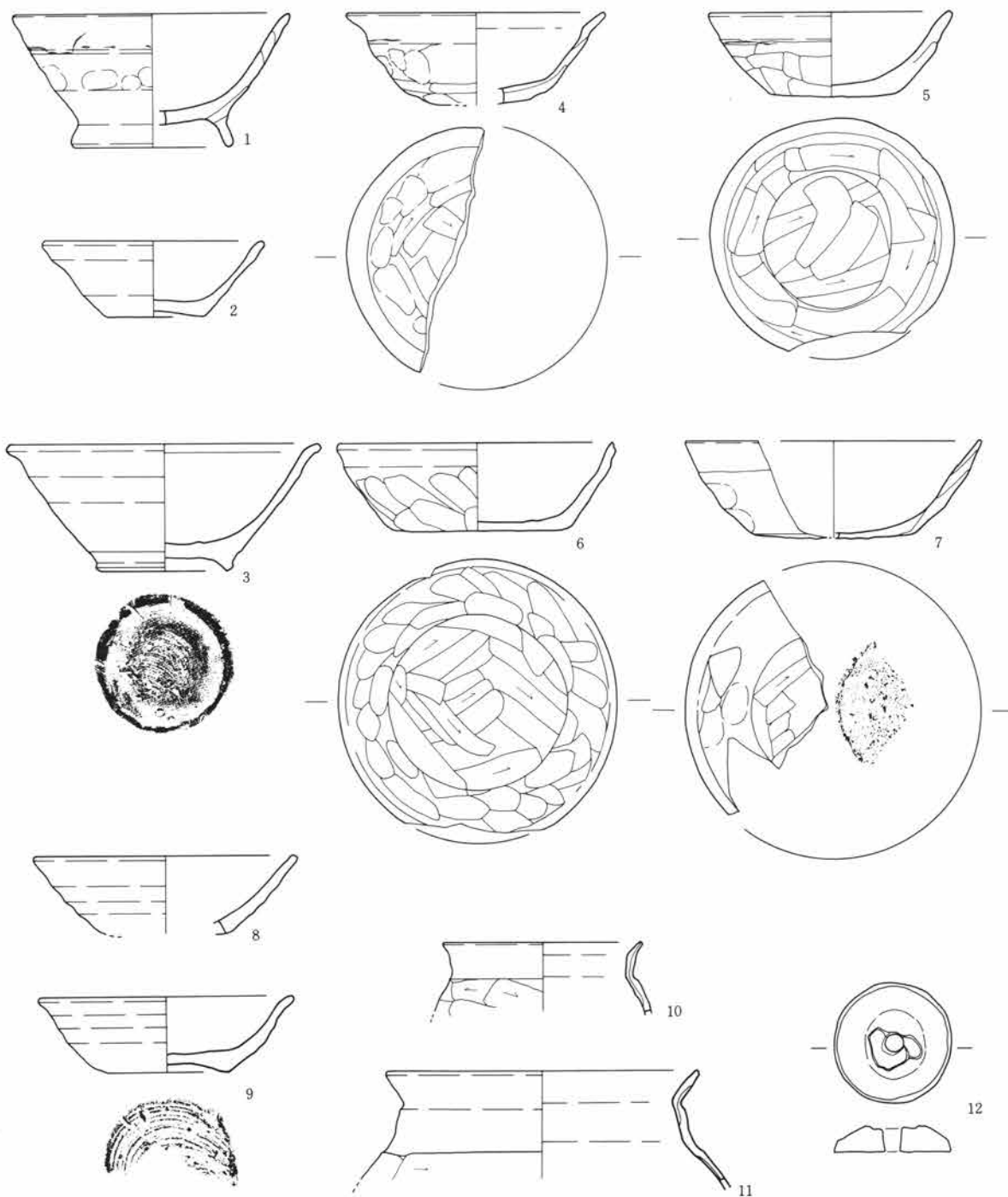
No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	高台付碗 (須恵器)	底部 $\frac{1}{2}$ 残存。	壁際。 床面上2cm。	①細砂粒・石英を混。 ②黒灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 碗部内面、高台接合部分回転によるナデ。

5号住居址出土遺物観察表 (第129図・P L 29) ▶本文 P. 92・第82図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	杯(土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口(15.0cm)	壁際。 床面上1cm。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。
4	甕(土師器)	口縁部破片。 口(16.2cm)	床面上3cm。	①砂粒・雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 頸部横方向篋削りの後ナデ。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
5	羽釜(＊)	口縁部破片。	床面上10cm。	①細砂・雲母を含む。 ②菊灰褐色。	外面 横方向のナデ。 内面 横方向のナデ。
6	羽釜(＊)	口縁部破片。 口(22.2cm)	床面上3cm。	①砂粒・石英・雲母を含む。②黄褐色。	外面 横方向のナデ。 内面 横方向のナデ。



1号住居址出土遺物(1)
3号住居址出土遺物(2)
第129図 5号遺物址出土遺物(3・4~6- $\frac{1}{4}$)



6号住居址出土遺物（1、4、5、7）
 第130図 7号住居址出土遺物（2、3、7、6、10～12）

6号住居址出土遺物観察表（第130図・P L29）▶本文 P. 93・第83図

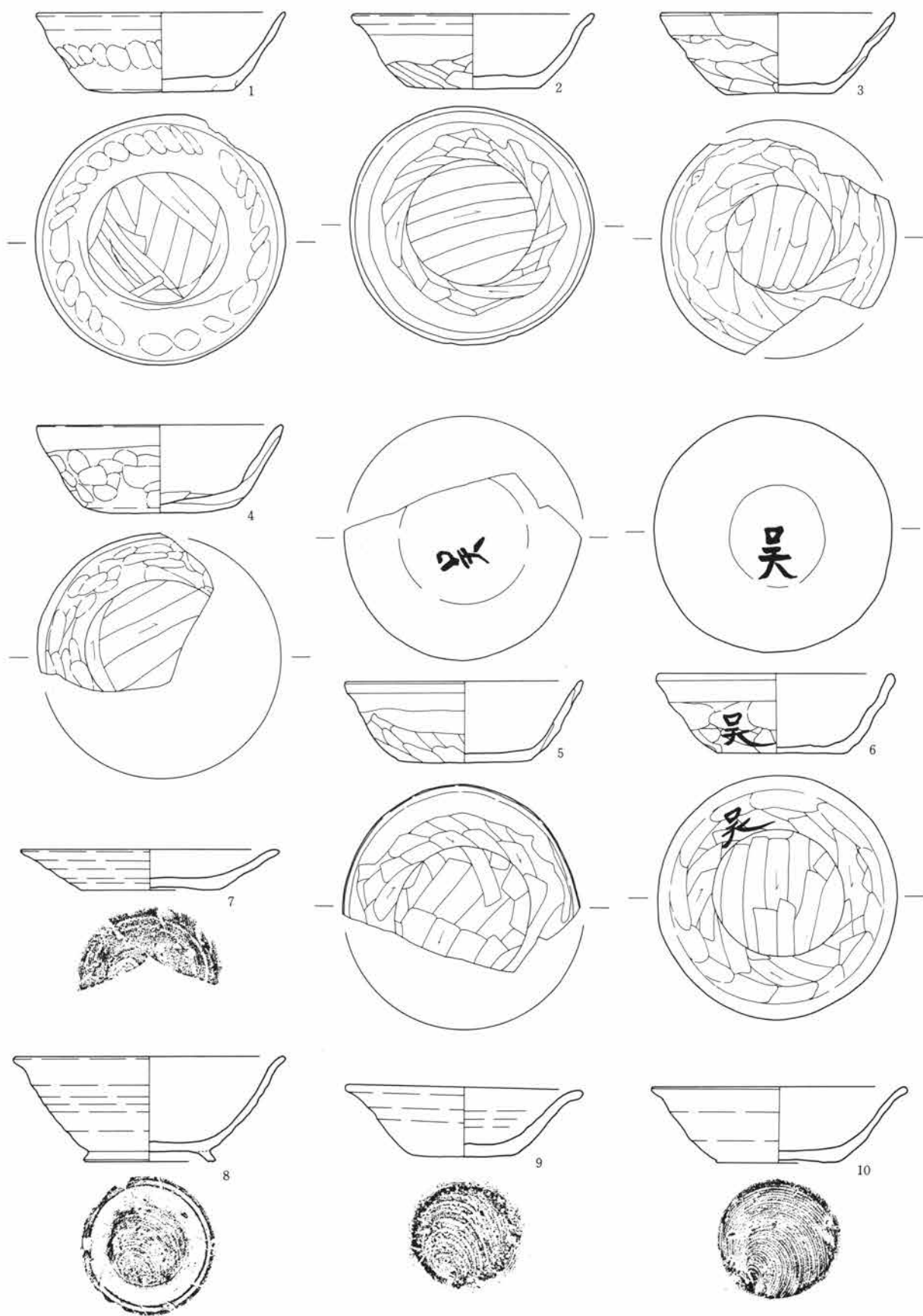
No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	高台付碗 (土師器)	1/3残存。 高 6.2cm。 口 (13.0cm) 底 (7.6cm)	壁際。 床面直上。	①細砂を少量含む。 ②黄褐色。	外面 腕部ナデ。底部～高台部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	杯 (*)	1/3残存。 高 3.5cm。 口 (10.4cm) 底 (4.6cm)	床面上 6 cm。	①細砂粒を含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 全面とも回転によるナデ。
3	高台付椀 (須恵器)	1/3残存。 高 5.9cm。 口 14.8cm。 底 7.4cm。	床面直上。	①細砂を多量に含む。 ②灰色～灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 高台接合部横ナデ。椀部内外面ナデ。

7号住居址出土遺物観察表 (第130図・P.L29) ▶本文 P.93・第83図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
4	杯 (土師器)	1/2残存。 高 (4.4cm) 口 (12.2)	床面上 1 cm。	①細砂と小石を含む。 ②灰褐色。	外面 杯部横方向篋削り後上半指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
5	杯 (土師器)	完形。 高 4.0cm。 口 11.4cm。 底 6.0cm。	床面直上。	①細砂を多量に含む。 ②黄褐色。	外面 杯部、底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。
6	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 4.1cm。 口 13.1cm。 底 8.2cm。	床面直上。	①細砂を少量含む。 ②黄橙色。	外面 底部篋削り。杯部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
7	杯 (土師器)	1/3残存。 高 4.5cm。 口 (13.8cm) 底 (7.4cm)	床面上 1 cm。	①砂粒・雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 底部周縁のみ篋削り。杯部外面篋削りの後点押え。口縁部横ナデ。砂底。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
8	杯 (須恵器)	1/3残存。 底部欠損。 口 (12.4cm)	床面上 1 cm。	①小石を少量含む。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。 内外面とも回転によるナデ。
9	杯 (須恵器)	1/3残存。 高 3.5cm。 口 (12.0cm) 底 (5.7cm)	床面直上。	①細砂を少量含む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内外面とも回転によるナデ。
10	甕 (土師器)	口縁破片。 口 (9.4cm) 頸 (8.6cm)	カマド脇。床 面上 2 cm。	①細砂を少量含む。 ②黒褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。
11	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (14.7cm)	カマド前。 床面上 5 cm。	①細砂を多量に含む。 ②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。
12	紡輪 (石製品)	完形。 口 5.6cm。 厚 1.3cm。 穿孔径 1.0cm。	床面直上。	①安山岩。	底面はよく擦れている。

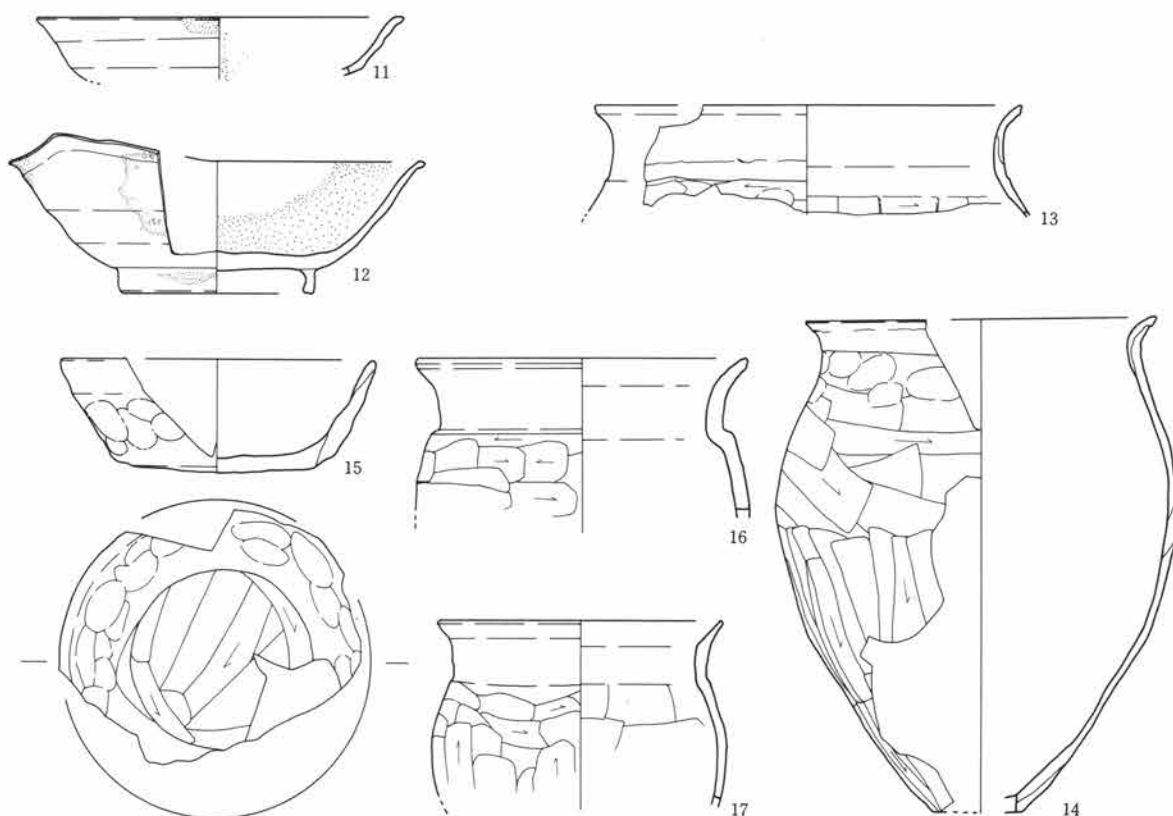


第131図 11号住居址出土遺物(1)

III 検出された遺構と遺物

11号住居址出土遺物観察表 (第131・132図・P L30) ▶本文 P. 93・第84図

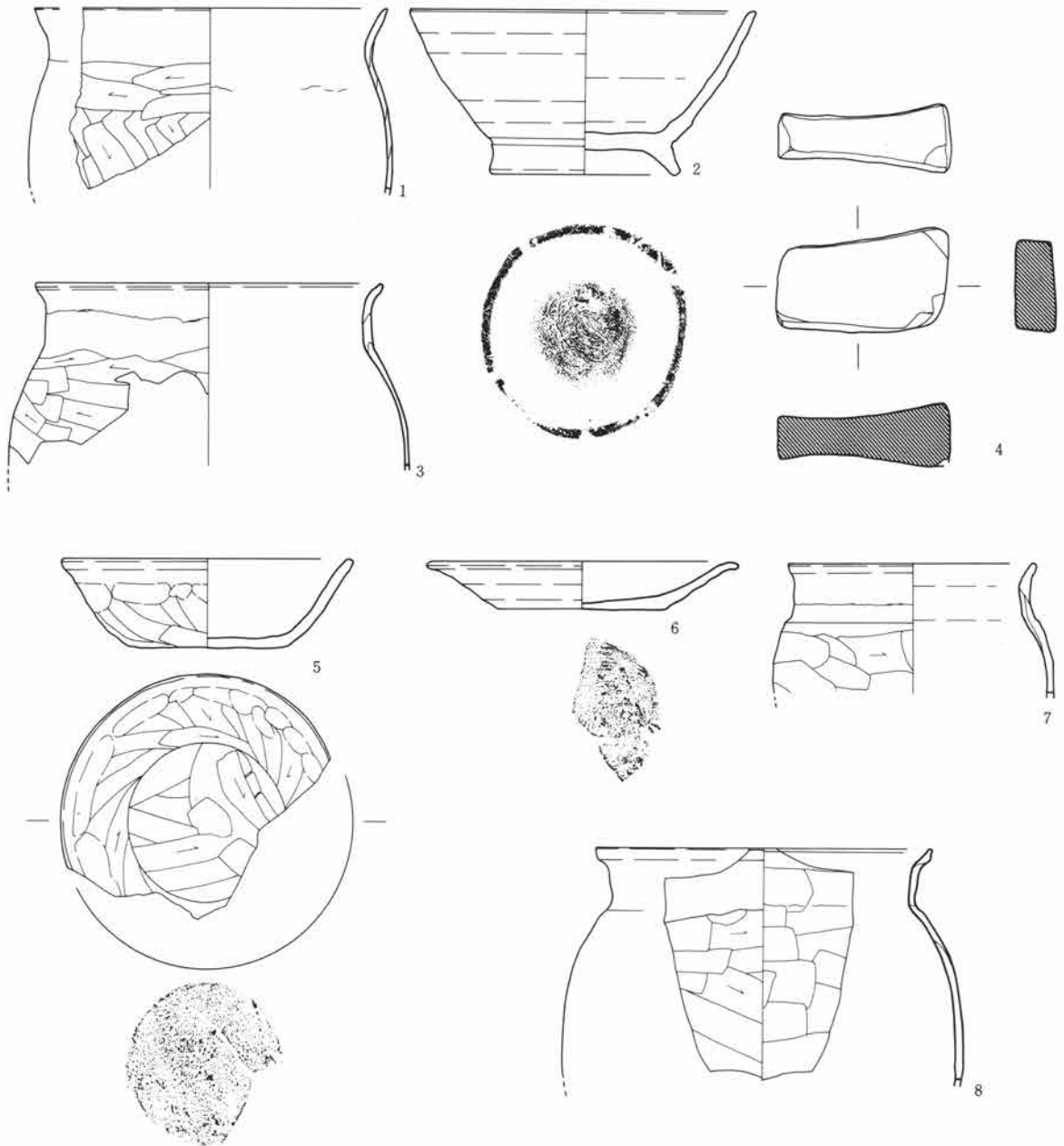
No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 4.2cm。 口 13.2cm。 底 7.7cm。	同溝脇。 床面直上。	①砂粒・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部下半篔削りの後、指ナデ。底部篔削り。 口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	完形。 高 4.0cm。 口 12.9cm。 底 6.8cm。	壁際。 床面上10cm。	①砂粒・石英・黒雲母を含む。②橙褐色。	外面 杯部斜め方向篔削り。上半指ナデ。底部篔削り。 口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯 (土師器)	3/5残存。 高 4.3cm。 口 12.4cm。 底 5.7cm。	柱穴脇。 床面直上。	①砂粒・長石・雲母を含む。②橙褐色。	外面 杯部斜め方向篔削り。上半指押え。底部篔削り。 口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
4	杯 (土師器)	1/5残存。 高 4.6cm。 口 (13.0cm) 底 (8.1cm)	柱穴脇。 床面上5cm。	①長石・石英・雲母を混じる。②橙褐色。	外面 杯部指押え。底部篔削り。周縁ナデ。中央部は篔削りナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部横ナデ。口縁部横ナデ。
5	杯 (土師器)	完形。 高 4.3cm。 口 12.7cm。 底 7.0cm。	壁際。 床面上10cm。 すべり落ちたような状態。	①細砂・雲母を含む。 ②黄褐色。	外面 杯部斜め方向篔削り。上半指ナデ。底部篔削り。 口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。 杯部内面中央に墨書「吳」。
6	杯 (土師器)	完形。 高 4.2cm。 口 12.6cm。 底 6.7cm。	壁際。 床面直上。	①細砂・石英・雲母を含む。②橙褐色。	外面 杯部篔削り。上半指押え。底部篔削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。 杯部内面中央、杯部外面下半に墨書「吳」。
7	皿 (須恵器)	1/5残存。 高 2.1cm。 口 (13.7cm) 底 (7.2cm)	床面直上。	①細砂を多量に含む。②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。回転によるナデ。
8	高台付椀 (須恵器)	3/5残存。 高 5.5cm。 口 14.4cm。 底 7.0cm。	東隅壁際。 床面直上。	①長石を多量に含む。②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。口縁部回転によるナデ。
9	杯 (須恵器)	完形。 高 3.7cm。 口 12.5cm。 底 5.3cm。	東南隅周溝内。	①砂粒を多く含む。②青灰色～灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。杯部上半回転によるナデ。
10	杯 (須恵器)	1/5残存。 高 4.1cm。 口 18.5cm。	柱穴中。 底 6.2cm。	①長石を多く含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部上半回転によるナデ。 内面 杯部回転によるナデ。
11	椀 (灰釉陶器)	口縁部3/5残存。 口 14.6cm。	カマド脇。 床面上5cm。	①砂粒・黒色粒子を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。 外面 口縁部回転によるナデ。 内面 口縁部回転によるナデ。
12	高台付椀 (灰釉陶器)	底部1・椀部1/4残。 高 5.2cm。 口 (16.7cm)	床面上3cm。	①細砂・黒色粒子を含む。②灰白色、釉は灰褐色。	右回転ロクロ成形。付高台。切り離し技法不明。口縁部に歪みがある。 外面 杯部回転によるナデ。底部回転篔削り。高台接合部ナデ。 内面 杯部回転によるナデ。



11号住居址出土遺物(2) (13、14-¼)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
13	甕 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{3}$ 残存。 口 (22.9cm)。 頸 (21.0cm)	カマド埋土。	①長石・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋削り口縁部横ナデ。
14	甕 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{3}$ 体部 $\frac{1}{4}$ 残。 高 26.3cm。 口 18.7cm。 頸 17.0cm。 胴 21.4cm。	カマド埋土。	①砂粒・長石・雲母を含む。②黄褐色。	胴部上半横方向篋削り。下半縦方向篋削り 外面 頸部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
15	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残 高 4.5cm。 口 12.6cm。 底 7.3cm。	床面上10cm。	①細砂・長石・石英・雲母を含む。②橙褐色。	外面 杯部篋削り。上半指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
16	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残 口 13.4cm。 頸 11.4cm。	床面上15cm。	①細砂を少量含む。 ②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
17	甕 (土師器)	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残 口 (11.5cm) 頸 (10.1cm)	床面上10cm。	①細砂を少量含む。 ②黒褐色。	外面 肩部横方向篋削り。胴部下半縦方向篋削り。 頸部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



19号住居址出土遺物 (1-¼)
 20号住居址出土遺物 (2)
 21号住居址出土遺物 (3-¼, 4)
 第133図 22号住居址出土遺物 (8-¼)

19号住居址出土遺物観察表 (第133図・P L31) ▶本文 P. 95・第86図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	甕 (土師器)	口縁部～肩部⅓ 残存。 □ 20.8cm。	カマド燃焼部。灰面上。	①砂粒・長石・雲母を少量含む。 ②橙褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部篋ナデ。口縁部横ナデ。

4 平安時代の遺構と出土遺物

20号住居址出土遺物観察表 (第133図・P L31) ▶本文 P. 第9図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	高台付椀 (須恵器)	椀部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 7.2cm。 口 15.3cm。 底 8.4cm。	床面直上。	①砂粒・長石・石英を混じる。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付け高台椀部内外面回転ナデ。高台接合部ナデ。

21号住居址出土遺物観察表 (第133図・P L31) ▶本文 P. 99・第96図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	甕 (土師器)	口縁部～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 20.4cm。 頸 19.2cm。	カマド前。 床面上6cm。	①砂粒・石英・雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 胴部横方向篋削り。頸部横方向篋削り。頸部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。口縁部横ナデ。口唇に凹線。
4	砥石 (石製品)	完形。 長 7.7cm。 幅 4.0cm。	北壁周溝内。	①流紋岩。	使用面2面。

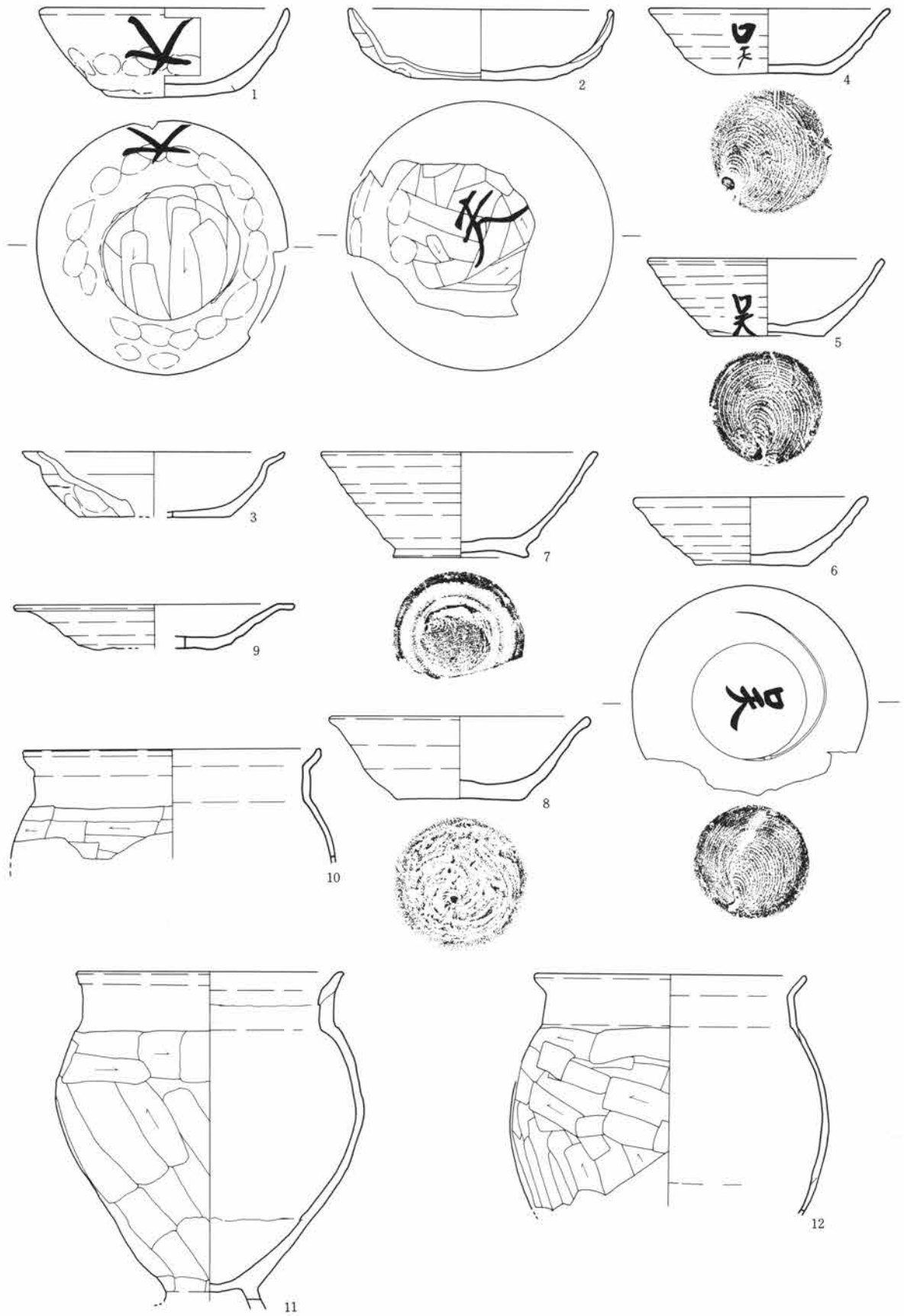
22号住居址出土遺物観察表 (第133図・P L31) ▶本文 P. 116・第9図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	杯 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 3.9cm。 口 (12.9cm)	埋土中。 底 (7.0cm)	①細砂を多量に含む。②黒褐色。	外面 杯部斜方向篋削り。上半のみ指押え。底部周縁篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
6	皿 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 2.1cm。 口 13.8cm。 底 7.4cm。	埋土中。	①細砂と長石を多量に含む。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内外面、回転によるナデ。
7	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (11.0cm)	埋土中。	①細砂を多量に含む。②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向ナデ。口縁部横ナデ。
8	甕 (土師器)	口縁部～胴部中位破片。 口 (19.8cm)	床面とした面直上。 頸 (17.8cm)	①細砂・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部横方向篋削り。頸部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。口縁部横ナデ。

23号住居址出土遺物観察表 (第136図・P L31) ▶本文 P. 96・第87図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	高台付椀 (\ast)	ほぼ完形。 高 5.0cm。 口 11.4cm。	カマド煙道部。崩壊土中。 底 7.5cm。	①細砂・雲母を含む。 ②赤褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付け高台。椀部内外面及び、高台接合部回転によるナデ。口縁部横ナデ。
2	高台付椀 (\ast)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (12.2cm)	壁際。 床面上5cm。	①細砂・雲母を多く含む。 ②灰白褐色。	右回転ロクロ成形。 椀部外面下半回転篋削り。椀部外面上半および内面、回転によるナデ。口縁部内外面横ナデ。
3	杯 (土師器)	底部割存。 底 4.9cm。	床面上1cm。	①砂粒・長石・雲母を含む。 ②黒褐色。	外面 底部篋削り。杯部横方向篋削り後、上半を指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
4	羽釜 (\ast)	口縁部破片。 口 (18.2cm)	床面上13cm。	①砂粒を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部指ナデ。口縁部～つば接合部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。

III 検出された遺構と遺物

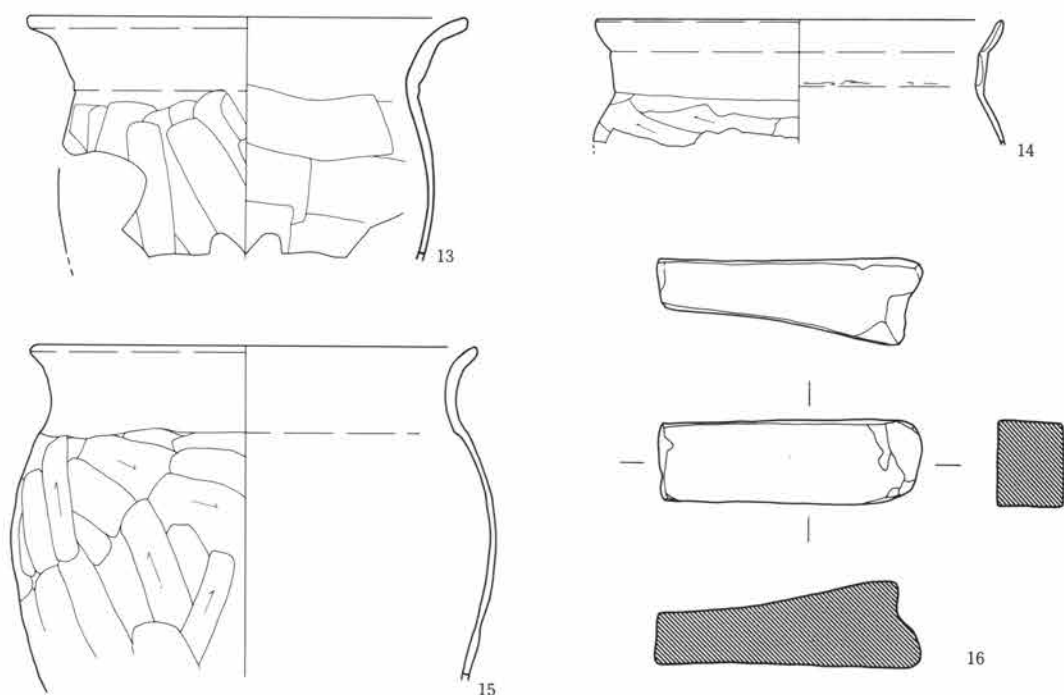


第134図 14号住居址出土遺物(1) (10、12-¼)

14号住居址出土遺物観察表 (第134・135図・P L 30) ▶本文 P. 95・第85図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 4.7cm。 口 13.2cm。 底 6.9cm。	壁際。 床面上 5 cm。	①砂粒・長石・雲母を含む。②橙褐色。	外面 底部篋削り。杯部指押え。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。 杯部外面に墨書「大」。
2	杯 (土師器)	1/4残存。 高 3.5cm。 口 (14.0cm)。 底 (6.8cm)。	床面上 5 cm。	①長石・雲母を含む。 ②茶褐色。	外面 底部篋削り。杯部指ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯 (土師器)	1/4残存。 高 3.5cm。 口 (13.8cm)。 底 (8.0cm)。	床面上 6 cm。	①砂粒・長石・雲母を含む。②橙褐色。	外面 底部篋削り。杯部指ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
4	杯 (須恵器)	1/4欠損。 高 3.4cm。 口 12.7cm。 底 6.4cm。	6.3 cm。	①砂粒・長石・石英を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。 杯部外面に墨書「吳」。
5	杯 (須恵器)	完形。 高 4.1cm。 口 12.5cm。 底 5.9cm。	床面上 1 cm。	①砂粒・長石を多量に含む。②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。 杯部外面に墨書「吳」。
6	杯 (須恵器)	口縁部1/2欠損。 高 3.5cm。 口 12.3cm。 底 6.0cm。	床面上 7 cm。	①細砂・長石を多く含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。 底部外面に墨書「吳」。
7	高台付椀 (須恵器)	1/4残存。 高 5.5cm。 口 (14.6cm)。 底 (7.2cm)。	壁際。 床面上 3 cm。	①細砂・雲母・石英を含む。②灰色。底部に黒斑。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 外面 椀部、高台接合部、回転によるナデ。口縁部横ナデ。 内面 椀部、高台接合部、回転によるナデ。口縁部横ナデ。
8	椀 (須恵器)	ほぼ完形。 高 4.3cm。 口 13.8cm。 底 6.8cm。	床面上 2 cm。	①砂粒・石英を含む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 椀部回転によるナデ。 内面 椀部回転によるナデ。
9	皿 (須恵器)	1/4残存。 口 (14.8cm)。	壁際。 床面上 5 cm。	①細砂・長石粒を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。 外面 回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。
10	壺 (土師器)	口縁部残存。 口 21.0cm。 頸 17.4cm。	カマド前。 床面上 2 cm。	①砂粒・石英を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横篋削り。頸部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋削り。口縁部横ナデ。
11	台付壺 (土師器)	台部欠損。 口 13.9cm。 頸 13.1cm。	カマド灰層中。到置。 支脚として使われていた。	①砂粒・長石・石英・雲母を含む。②橙褐色。	外面 胴部斜め方向及び縦方向への篋削り。肩部横方向篋削り。台部接合部横方向ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。
12	壺 (土師器)	口縁部胴中位1/2残 口 19.0cm。 頸 17.4cm。 胴 22.0cm。	壁際。 床面上 5 cm。	①砂粒・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。同上半横方向篋削り。 口縁部～頸部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部～頸部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



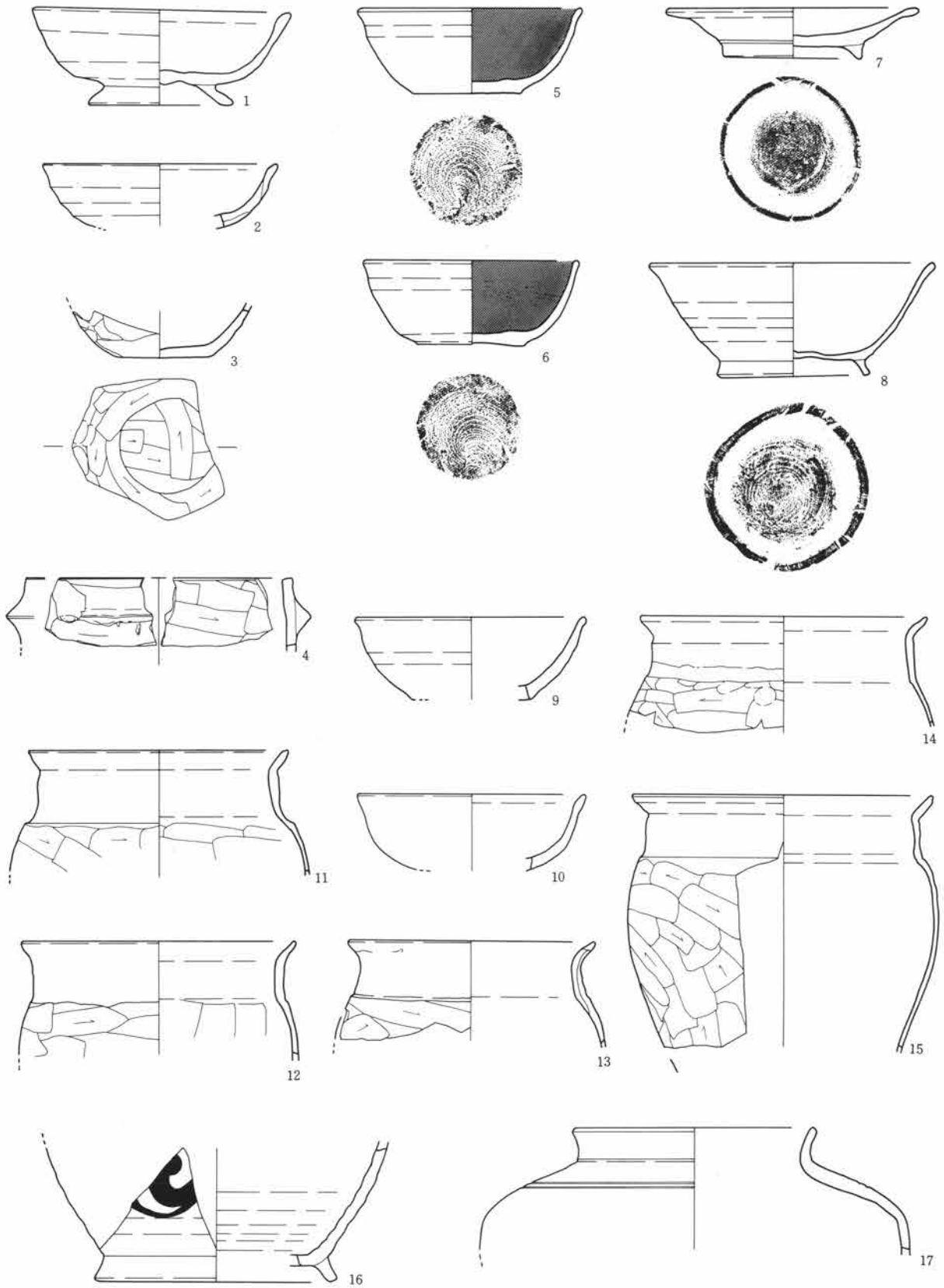
第135図 14号住居址出土遺物(2) (13~15-1/4)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
13	甕 (土師器)	口縁~肩部1/2残 口 (19.6cm)。 頸 (13.8cm)。	埋土中。	面砂粒・長石・雲母を含む。②灰白色。	外面 肩部縦方向へ笥削り。口縁部横ナデ。 内面 横方向笥ナデ。口縁部横ナデ。
14	甕 (土師器)	口縁部1/2残存。 口 (22.0cm)。	カマド燃焼部。崩壊土層中。	①細砂・長石・雲母を含む。②橙褐色。	外面 肩部横方向笥削り。頸部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。
15	甕 (土師器)	口縁~胴中位残 口 (23.9cm)。	床面上 2 cm。	①砂粒・長石を多く含む。②橙褐色。	外面 胴部下半縦方向笥削り。上半斜め方向笥削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
16	砥石 (石製器)	完形。 長 10.6cm。 幅 3.2cm。	壁際。 床面上 2 cm。	①流紋岩。	

24号住居址出土遺物観察表 (第136図・P L31) ▶本文 P. 96・第88図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	碗 (*)	1/3残存。 高 4.4cm。 口 11.5cm。 底 5.6cm。	壁際。 床面上 2 cm。	①ごく細かい砂粒を含む。 ②黄褐色。内面黒色処理。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 碗部外面、回転によるナデ。内面は、底部は一方、碗部は横方向。四単位に細かい丁寧な笥磨きがされている。
6	碗 (*)	1/2残存。 高 4.4cm。 口 11.2cm。 底 5.5cm。	壁際。 床面上 2 cm。	①細砂を少量含む。 ②黄褐色。内面黒色処理。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 碗部外面、回転によるナデ。内面は底部は斜格子、碗部は横方向に細かい丁寧な笥磨きがされている。

4 平安時代の遺構と出土遺物



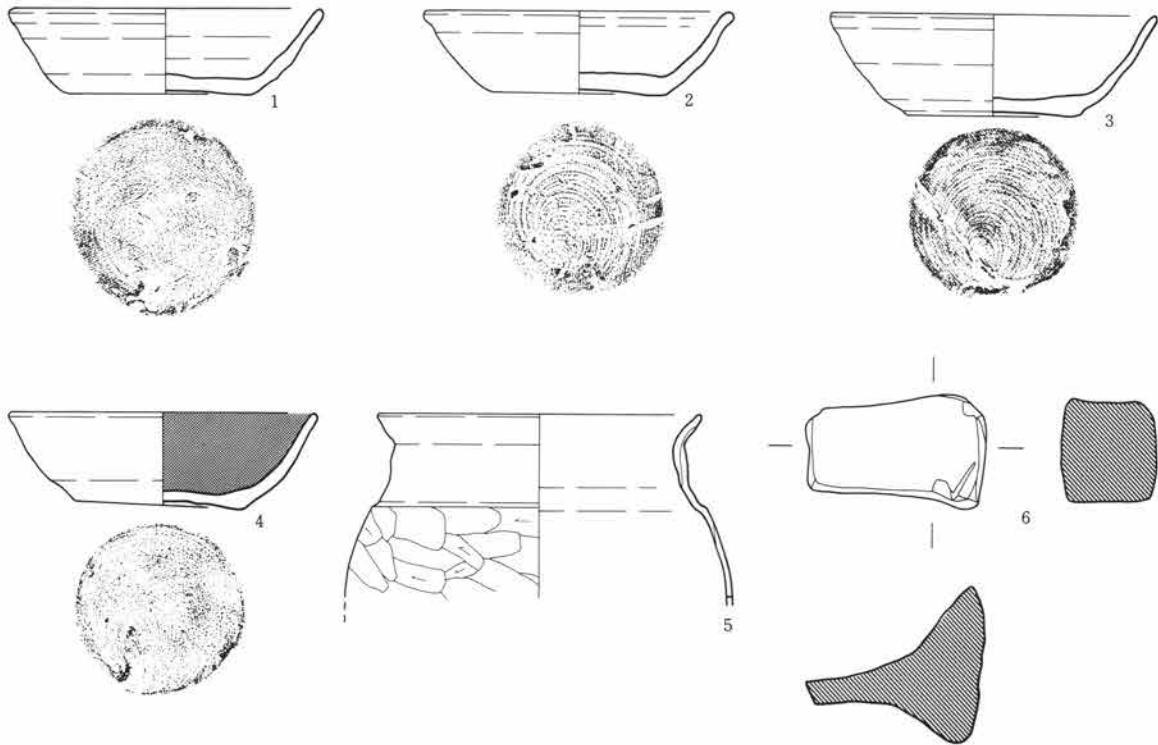
23号住居址出土遺物 (1~3・4-¼)
 第136図 24号住居址出土遺物 (5~10、11~15-¼、16、17)

III 検出された遺構と遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
7	高台付皿 (須恵器)	完形。 高 2.6cm。 口 13.0cm。 底 7.1cm。	東壁のすぐ外側。床面からは1cm浮いた状態。	①細かい長石を含む。②黒灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面、回転によるナデ。高台接合部ナデ。口縁部横ナデ。
8	高台付椀 (須恵器)	$\frac{2}{3}$ 残存。 高 5.8cm。 口 14.7cm。 底 7.8cm。	壁際。床面上4cm。	①砂粒を多く含む。②外面、黒褐色。内面、茶褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。椀部内面及び高台付接合部、回転によるナデ。
9	椀 (須恵器)	口縁部破片。 口 (21.0cm)。	カマド脇。	①砂粒と、白い繊維のようなものを含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。内外面とも、回転によるナデ。
10	椀 (*)	口縁部破片。 口 (11.8cm)。	壁際。床面上2cm。	①砂粒・石英・雲母を含む。②橙褐色。	右回転ロクロ成形。椀部内外面とも、回転によるナデ。口縁部横ナデ。
11	甕 (土師器)	口縁部～肩部 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (13.4cm)。	壁際。床面上2cm。	①細砂・雲母を含む。②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部～頸部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。口縁部～頸部横ナデ。
12	甕 (土師器)	口縁部～肩部 $\frac{1}{5}$ 残存。 口 (14.2cm)。	壁際。床面上1cm。	①細砂・石英を含む。②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。頸部横ナデ。口縁部横ナデ。
13	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (12.9cm)。	壁際。床面上2cm。	①細砂を含む。②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。頸部ナデ。口縁部横ナデ。
14	甕 (土師器)	口縁部～肩部 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (19.6cm)。	壁際。床面上2cm。	①細砂を多く含む。②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。頸部ナデ。口縁部横ナデ。
15	甕 (土師器)	口縁部～胴部下位 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 20.7cm。	壁際。床面上2cm。	①細砂を多量に含む。②茶褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半斜方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。頸部ナデ。口縁部横ナデ。
16	椀 (須恵器)	椀部～底部破片 底 (12.4cm)。	壁際。床面直上。	①細砂・石英を含む。②外面、灰色。内面、橙褐色。	ロクロ成形 (回転方向不明)。付け高台。内外面、回転によるナデ。椀部外面に渦巻状の墨書がみられる。
17	短頸壺 (須恵器)	口縁部～肩部 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (12.2cm)。 頸 (9.9cm)。	壁際。床面直上。	①細砂を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。肩部外面、回転によるナデ。口縁部内外面横ナデ。肩部外面に2条の沈線が施されている。

25号住居址出土遺物観察表 (第137図・P L 32) ▶本文 P. 97・第89図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (須恵器)	杯部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 3.4cm。 口 12.6cm。 底 7.4cm。	壁際。床面上10cm。	①長石・細砂粒を多量に含む。②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。杯部内外面、回転によるナデ。



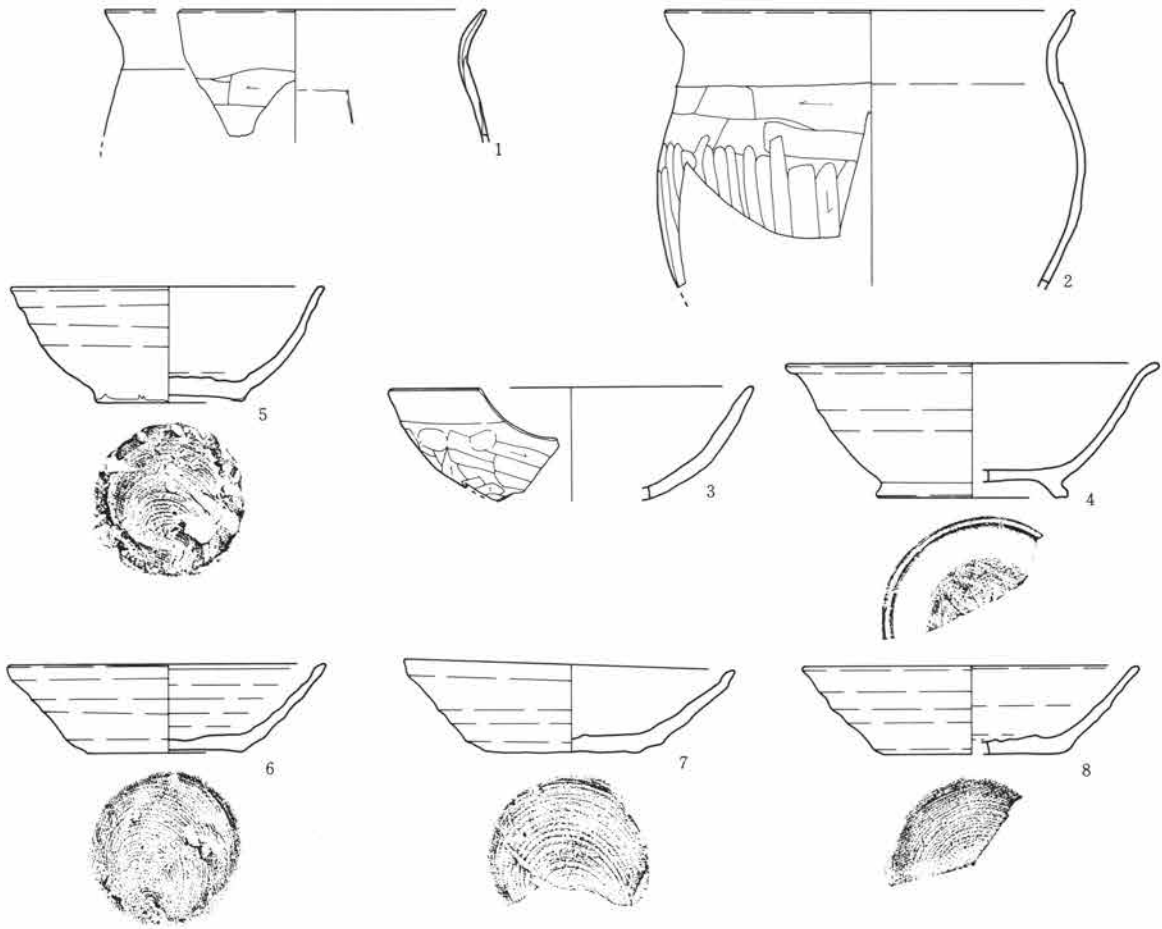
第137図 25号住居址出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	杯 (須恵器)	完形。 高 3.3cm。 口 12.5cm。 底 7.0cm。	カマド燃烧部 灰面上1cm。 底 7.0cm。	①細砂を多量に含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内面および、口縁部外面、回転によるナデ。
3	椀 (須恵器)	ほぼ完形。 高 4.1cm。 口 13.1cm。 底 7.0cm。	壁際。 床面上3cm。 底 7.0cm。	①長石・砂粒を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部、回転によるナデ。
4	椀 (*)	椀部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 4.3cm。 口 12.4cm。 底 6.8cm。	壁際。 床面上15cm。	①細砂・長石・石英を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 椀部外面、回転によるナデ。椀部内面、中央は一方 向の細かい篋磨き。椀部は横方向細かい篋磨き。
5	甕 (土師器)	口縁部～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (13.0cm)	床面上2cm。	①細砂・長石・石英 を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向ナデ。口縁部横ナデ。
6	砥石 (石製品)	完形。 長 7.2cm。 幅 4.5cm。	壁際。 床面上8cm。	流紋岩。	

28号住居址出土遺物観察表 (第138図・P.L) ▶本文 P. 98・第91図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	甕 (土師器)	口縁部～胴上 半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 22.0cm。 頸 20.0cm。	カマド脇。 床面直上。	①細砂・石英を含む。 ②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。胴部縦方向篋削り。口縁 部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



28号住居址出土遺物 (1-1/4)
第138図 29号住居址出土遺物 (2-1/4、3~8)

29号住居址出土遺物観察表 (第138図・P L32) ▶本文 P. 99・第92図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	甕 (土師器)	口縁部~胴部上半 1/4残存。 口 22.0cm。 頸 20.0cm。	カマド脇。 床面直上。	①細砂・石英を含む。 ②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯 (土師器)	口縁部破片。 口 (14.6cm)。	カマド脇。 床面上20cm。	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。	外面 杯部横方向篋削り。上半指押え。 内面 口縁部~杯部横ナデ。
4	高台付碗 (須恵器)	1/4残存。 高 5.4cm。 口 (15.0cm)。底 7.6cm。	カマド燃烧部	①細砂を多く含み、 φ2~5mmの小石も混じる。②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 口縁部及び、高台接合部、回転による横ナデ。
5	碗 (須恵器)	ほぼ完形。 高 4.6cm。 口 12.6cm。底 6.0cm。	床面直上。	①φ5mmぐらいの小石と黒色鉱物粒子を含む。②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部及び碗部内面、回転による横ナデ。
6	杯 (須恵器)	口縁部、一部欠損。 高 3.5cm。 口 12.8cm。底 6.3cm。	床面直上。	①砂粒・長石粒を含む。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部内外面、回転によるナデ。口唇部外面に面とりし、内湾する印象。

4 平安時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
7	杯 (須恵器)	1/3残存。 高 3.5cm。 口 13.3cm。 底 6.3cm。	カマド燃焼部 灰面上 6 cm。	①細砂を多く含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部横ナデ。口縁部内面、丸く肥厚する。
8	杯 (須恵器)	1/3残存。 高 3.5cm。 口 13.6cm。 底 7.2cm。	カマド脇。 床面上 20cm。	①砂粒・長石・黒色 鉱物粒子を含む。 ②黒灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部内外面横ナデ。

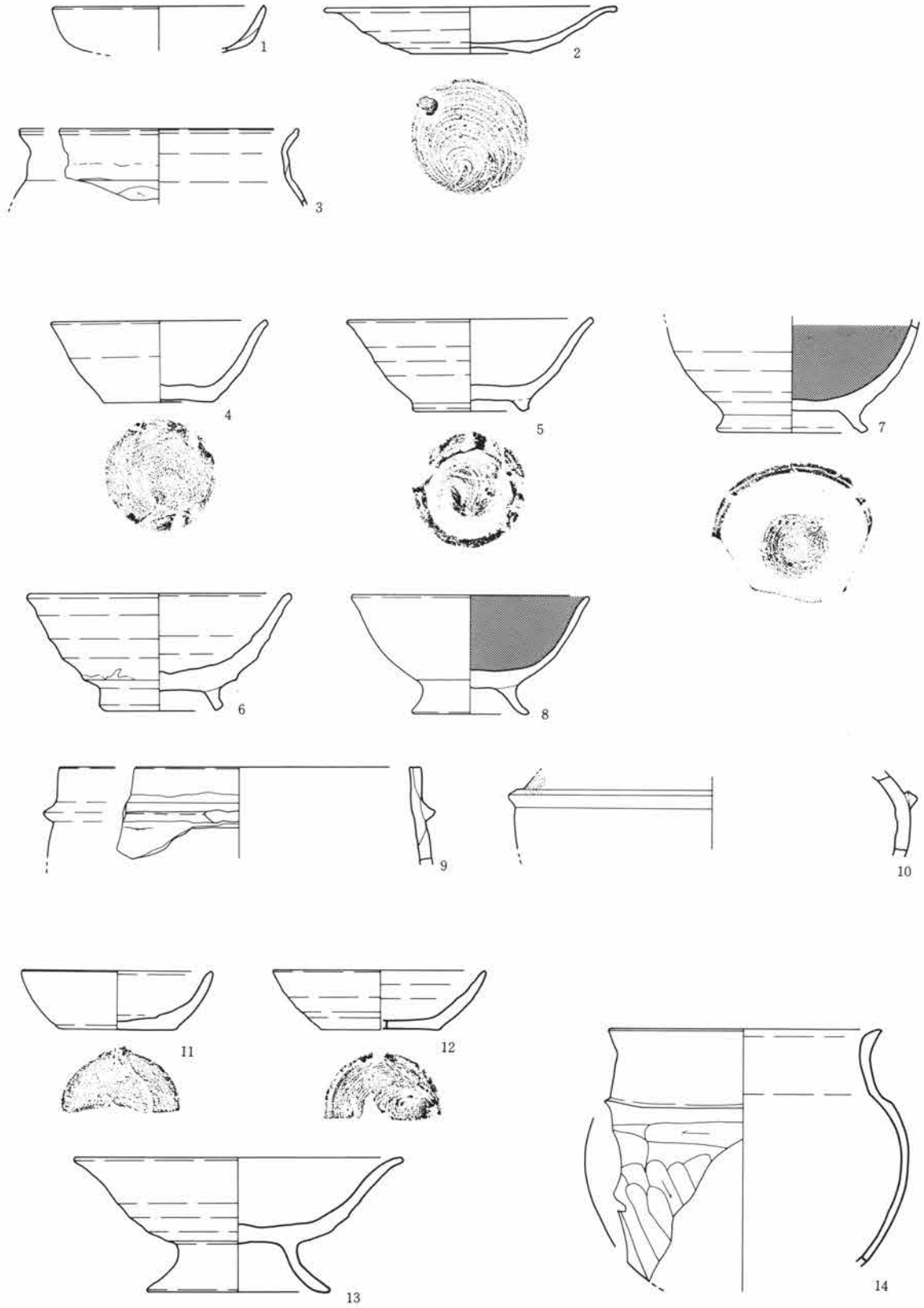
31号住居址出土遺物観察表 (第139図・P L 32) ▶本文 P. 105・第103図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁部破片。 口 (10.6cm)。	壁際。 床面上 7 cm。	①砂粒・長石・少量 の雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部寛削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	皿 (須恵器)	口縁部1/3欠損。 高 2.3cm。 口 14.6cm。 底 6.0cm。	壁際。 床面上 12cm。	① ϕ 3~5 mmの砂粒 を含む。 ②乳灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部内外面、回転による横ナデ。口唇部は丸く肥厚して、大きく外反する。
3	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (18.6cm)。	壁際。 床面上 7 cm。	①砂粒・長石を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向寛削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。

38号住居址出土遺物観察表 (第139図・P L 34) ▶本文 P. 99・第93図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
4	椀 (*)	1/2残存。 高 4.0cm。 口 10.8cm。 底 5.5cm。	カマド脇。 床面上 2 cm。	①細砂を多量に含 む。②茶褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部~椀部内面、回転による横ナデ。
5	高台付椀 (*)	高台部欠損。 高 4.5cm。 口 12.4cm。 底 5.8cm。	壁際。 床面上 1 cm。	①細砂を多量に含 む。②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 口縁部、椀部内面及び高台接合部、回転による横ナ デ。
6	高台付椀 (*)	1/2残存。 高 5.7cm。 口 13.4cm。 底 6.1cm。	カマド前。 床面上 3 cm。	①砂粒・石英・雲母 を含む。 ②灰白褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付け高台。 内外面とも、回転によるナデ。高台接合部やや強い ナデ。
7	高台付椀 (*)	口縁部欠損。1/3 残存。 底 7.6cm。	床面上 7 cm。	①細砂・石英・雲母 を含む。 ②黒褐色。内面黒色 処理。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 椀部外面、回転によるナデ。高台接合部ナデ。椀部 内面、中央部格子状の篋磨き。周縁部、5単位の横 方向篋磨き。
8	高台付椀 (*)	1/2残存。 高 5.9cm。 口 11.9cm。 底 5.9cm。	壁際。 床面上 2 cm。	①細砂を多量に含 む。②茶褐色。内面 黒色処理。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付け高台。 椀部外面及び高台接合部、ナデ。椀部内面、中央部 一方向の細かい篋磨き。周縁部は横方向の篋磨き。
9	羽釜 (*)	口縁部破片。 口 (24.2cm)。	床面上 6 cm。	①砂粒を含む。 橙褐色。	外面 横ナデ。 内面 横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



31号住居址出土遺物 (1~3)
 38号住居址出土遺物 (4~8、9、10-¼)
 第139図 39号住居址出土遺物 (11~14)

4 平安時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
10	羽釜(須恵器)	胴部破片。	床面上6cm。	①細砂・石英を少量含む。②青灰色。	ロクロ整形。 胴部上半の一部に自然釉。

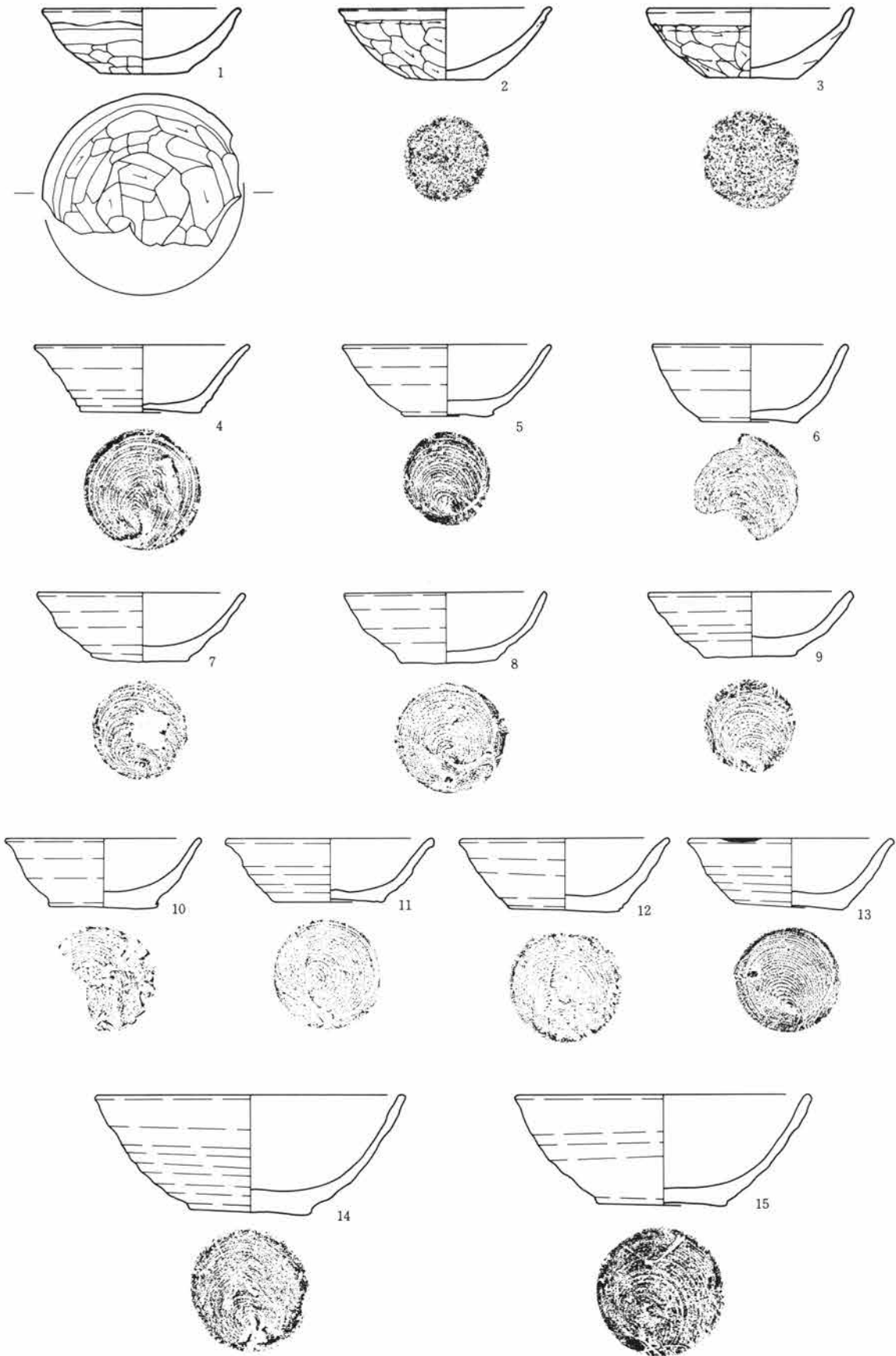
39号住居址出土遺物観察表(第139図・P L 34) ▶本文 P. 101・第95図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
11	杯(※)	1/2残存。 高 3.0cm。 口 9.6cm。 底 6.0cm。	カマド。 灰面上2cm。	①細砂・雲母を多量に含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内外面とも、回転によるナデ。
12	杯(※)	1/2残存。 高 3.0cm。 口 10.6cm。 底 6.0cm。	カマド燃焼部。 灰面直上。	①砂粒・長石を多く含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内外面とも、回転によるナデ。
13	高台付椀(※)	椀部1/4残存。 高台部残存。 高 6.7cm。 口(16.5cm)。	床面上5cm。 底 9.2cm。	①砂粒を多量に含む。 ②赤褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。 椀部外面下半、回転篋削り、椀部外面上半～椀部内面、回転によるナデ。高台部接合部、高台内外面、回転ナデ。
14	小型甕(土師器)	口縁部完存。 胴部1/2残存。 口 13.6cm。 頸 12.6cm。	床面上2cm。 胴 16.2cm。	①細砂・雲母・長石を多く含む。 ②茶褐色。	外面 胴部上半横方向篋削り。下半縦方向篋削り。 口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

37号住居址出土遺物観察表(第140～143図・P L 32～34) ▶本文 P. 100・第94図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯(土師器)	1/2残存。 高 3.3cm。 口 10.2cm。 底 4.6cm。	床面上20cm。	①砂粒を含む。 ②黒色。	外面 杯部横方向篋削り。底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯(土師器)	完形。 高 3.7cm。 口 10.9cm。 底 4.0cm。	壁際。 床面直上。	①細砂と小石を少量含む。 ②黄褐色。	外面 杯部横方向、斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 底部に砂粒圧痕がみられる。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯(土師器)	完形。 高 3.5cm。 口 10.6cm。 底 4.7cm。	床面上11cm。	①細砂と小石を含む。 ②黄褐色。	外面 杯部横方向、斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 底部に砂粒圧痕がみられる。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
4	杯(※)	1/2残存。 高 3.5cm。 口 11.1cm。 底 6.2cm。	床面上8cm。 底 6.2cm。	①細砂を含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面、回転によるナデ。口縁部は外反する。
5	杯(※)	1/3残存。 高 3.6cm。 口 10.7cm。	床面上10cm。 底 4.8cm。	①細砂を少量含む。 ②黒褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面、回転によるナデ。
6	椀(※)	1/2残存。 高 3.9cm。 口 10.1cm。	床面上30cm。 底 4.9cm。	①小石を少量含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 椀部内外面、回転によるナデ。

III 検出された遺構と遺物

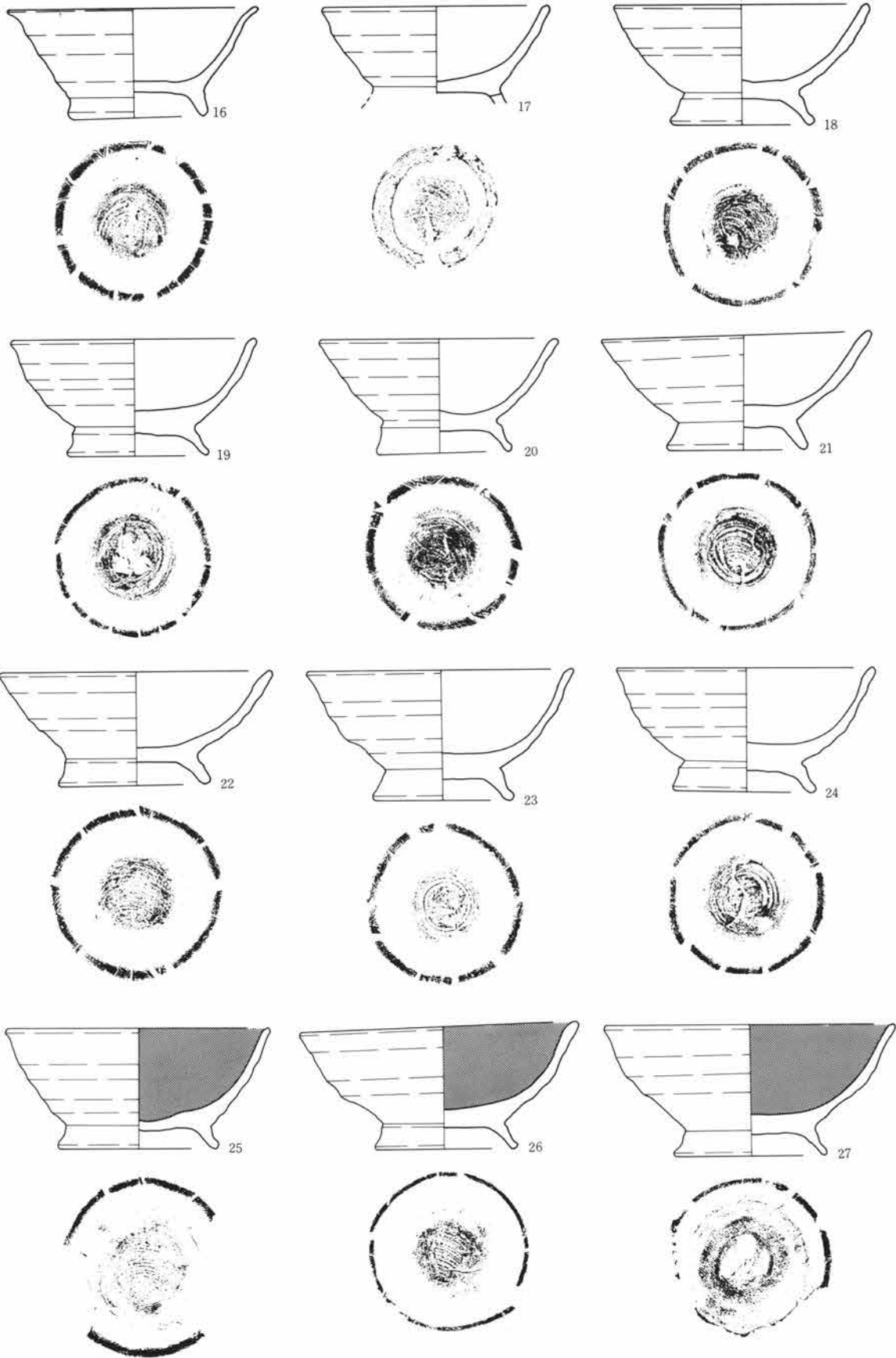


第140図 37号住居址出土遺物(1)

4 平安時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
7	杯 (*)	2/3残存。 高 3.5cm。 口 10.7cm。 底 4.4cm。	カマド前。 灰面直上。	①細砂を少量含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面、回転によるナデ。
8	杯 (*)	1/2残存。 高 3.6cm。 口 10.4cm。 底 4.8cm。	埋土中。	①細砂と雲母細片を含む。 ②灰黄色。底部内外面黒色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。
9	杯 (*)	ほぼ完形。 高 3.4cm。 口10.5cm。 底 4.7cm。	北カマド左脇。	①小石を少量含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面、回転によるナデ。
10	杯 (*)	1/2残存。 高 3.5cm。 口 10.1cm。底 5.6cm。	床面上25cm。	①細砂を少量含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面、回転によるナデ。杯部下位に強いナデがあてられている。
11	杯 (*)	完形。 高 3.2cm。 口 10.7cm。底 5.6cm。	床面上7cm。	①細砂を含む。 ②黄灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面、回転によるナデ。口縁部は、肥厚して外反する。
12	杯 (*)	完形。 高 3.7cm。 口 10.8cm。底 5.7cm。	床面上3cm。	①細砂と小石を含む。②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面、回転によるナデ。底部外面に、切り離した後、粘土を貼りつけた痕がある。
13	杯 (*)	ほぼ完形。 高 4.0cm。 口 10.6cm。 底 5.4cm。	壁際。 床面上11cm。	①細砂を含む。②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面、回転によるナデ。口唇部に炭化物付着。
14	椀 (*)	完形。 高 6.0cm。 口 15.9cm。 底 6.1cm。	旧カマド。床面直上。	①細砂と小石を多量に含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 椀部内外面、回転によるナデ。
15	椀 (*)	ほぼ完形。 高 5.6cm。 口 15.2cm。 底 6.4cm。	カマド脇。 床面上1cm。	①細砂と砂粒を多量に含み、ざらざらしている。 ②赤褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 椀部内外面、回転によるナデ。
16	高台付椀 (*)	ほぼ完形。 高 5.6cm。 口 12.9cm。 底 7.2cm。	カマド燃焼部。灰面直上。	①細砂を少量含む。 ②赤褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 椀部内外面、回転によるナデ。高台接合部内外面ナデ。
17	高台付椀 (*)	1/2残存。高台部欠損。 口 11.7cm。	床面上15cm。	①砂粒をあまり含まない。 ②黒色～灰黄色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付け高台。 椀部内外面、回転によるナデ。高台接合部ナデ。 椀部内面は、ナデの後、磨いている。
18	高台付椀 (*)	完形。 高 6.2cm。 口 13.1cm。 底 7.4cm。	旧カマド。壁際。 床面上10cm。	①砂粒を多く含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 椀部内外面、回転によるナデ。高台接合部ナデ。
19	高台付椀 (*)	2/3残存。 高 5.9cm。 口 12.6cm。底 7.3cm。	カマド燃焼部。灰面直上。	①細砂と小石を多量に含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。 椀部内外面、回転によるナデ。高台接合部ナデ。

III 検出された遺構と遺物

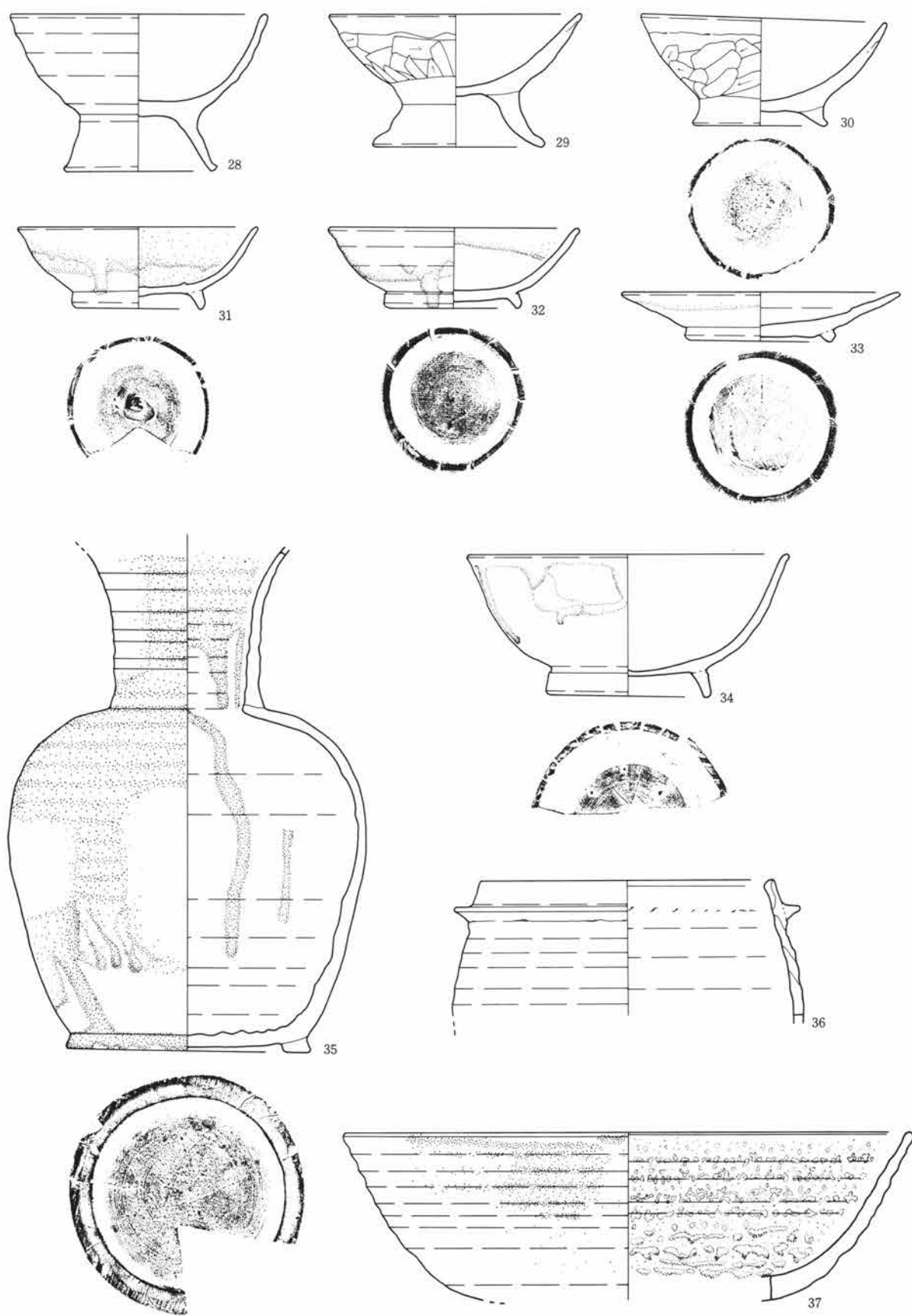


第141図 37号住居址出土遺物(2)

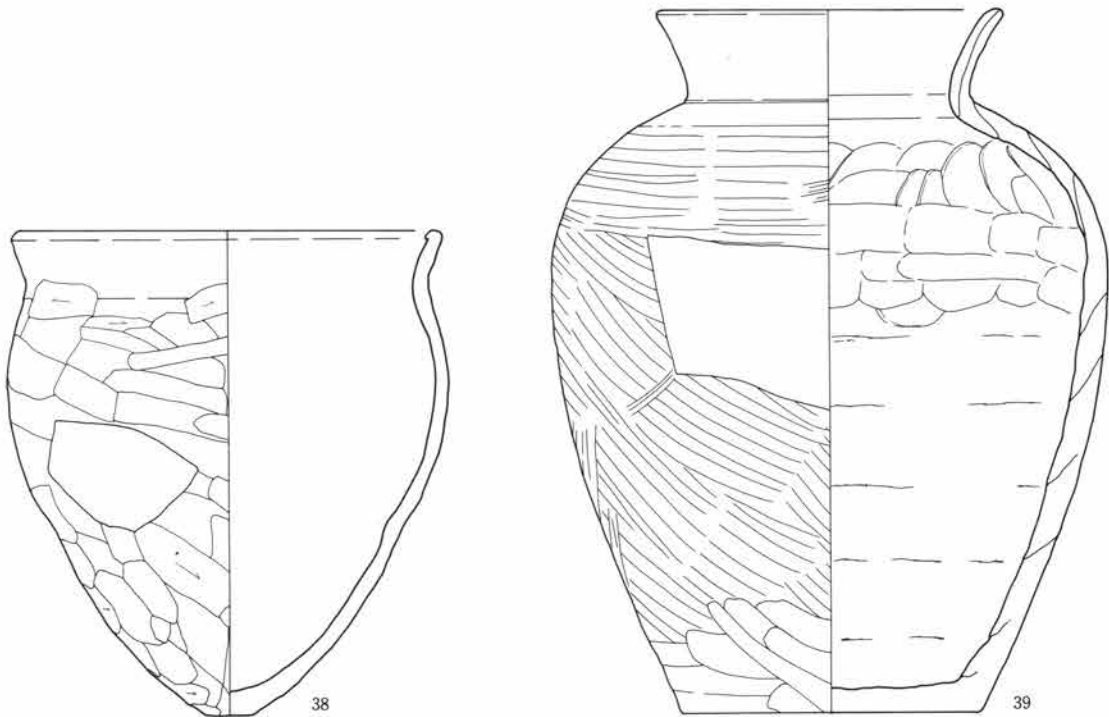
4 平安時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
20	高台付椀 (*)	完形。 高 6.8cm。 口 12.2cm。 底 6.9cm。	旧カマドの壁にへばりつくような形で出土。	①砂粒を多量に含む。②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。椀部内外面、回転によるナデ。高台接合部ナデ。
21	高台付椀 (*)	3/4残存。 高 5.9cm。 口 13.8cm。 底 7.2cm。	旧カマドの壁にへばりつくような形で出土。	①細砂と、大きな砂粒を多量に含む。②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。椀部内外面、回転によるナデ。高台接合部ナデ。
22	高台付椀 (*)	完形。 高 5.8cm。 口 14.0cm。	カマド脇。床面直上。底 7.8cm。	①多量の細砂と大きな砂粒も少量含む。②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。椀部内外面、回転によるナデ。口縁部横ナデ。高台接合部ナデ。
23	高台付椀 (*)	3/4残存。 高 6.6cm。 口 13.7cm。 底 7.2cm。	床面上3cm。	①細砂と大きな砂粒を多量に含む。②黄褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。高台接合部ナデ。椀部内外面、回転によるナデ。口縁部横ナデ。高台接合部ナデ。
24	高台付椀 (*)	完形。 高 6.3cm。 口 13.3cm。 底 7.3cm。	床面上5cm。	①細砂を多量に含む。雲母も少量含まれている。②黒灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。椀部内外面、回転によるナデ。口縁部横ナデ。高台接合部ナデ。
25	高台付椀 (*)	3/4残存。 高 6.1cm。 口 13.6cm。	床面上12cm。底 8.2cm。	①少量の砂粒を含む。②黒色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。椀部内外面ナデ、後、内面放射状の細かい篋磨き。高台接合部横ナデ。
27	高台付椀 (*)	ほぼ完形。 高 6.2cm。 口 14.3cm。 底 7.3cm。	床面上5cm。	①細砂と雲母を少量含む。②黄褐色。内面黒色処理。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。椀部内外面ナデ。高台接合部横ナデ。椀部内面、細かい篋磨き。
27	高台付椀 (*)	ほぼ完形。 高 6.7cm。 口 14.9cm。 底 7.8cm。	床面上18cm。	①細砂を少量含む。②黄褐色。内面黒色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。椀部内外面、回転ナデ。高台接合部横ナデ。椀部内面、細かい篋磨き。
28	高台付椀 (*)	ほぼ完形。 高 8.2cm。 口 13.6cm。	床面上8.0cm。底 8.0cm。	①砂粒を少量含む。②黒褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。椀部内外面、回転ナデ。口縁部および高台接合部横ナデ。
29	高台付椀 (土師器)	完形。 高 6.9cm。 口 13.3cm。 底 9.0cm。	東壁カマド前。床面直上。	①細砂及び砂粒と雲母を含む。②赤褐色。	付高台。 外面 椀部上半横方向篋削り。下半斜方向篋削り。口縁部横ナデ。高台接合部横ナデ。 内面 椀部ナデ。口縁部横ナデ。
30	高台付椀 (土師器)	完形。 高 5.7cm。 口 12.9cm。 底 7.1cm。	東壁カマド前。床面直上。	①砂粒を多く含む。②黄褐色。	付高台。 外面 椀部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。底部篋削り。高台部横ナデ。 内面 椀部ナデ。口縁部横ナデ。高台部横ナデ。
31	高台付椀 (灰釉陶器)	3/4残存。 高 4.3cm。 口 12.7cm。	床面直上。底 6.7cm。	①ややざらざらしている。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。施釉。内面刷毛塗り全面。外面口縁部のみ刷毛塗り。
32	高台付椀 (灰釉陶器)	ほぼ完形。 高 4.2cm。 口 13.2cm。	床面直上。底 7.2cm。	①白い砂粒を含み、ざらざらしている。②灰白色～黒色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。施釉。口縁部どぶづけ。

III 検出された遺構と遺物



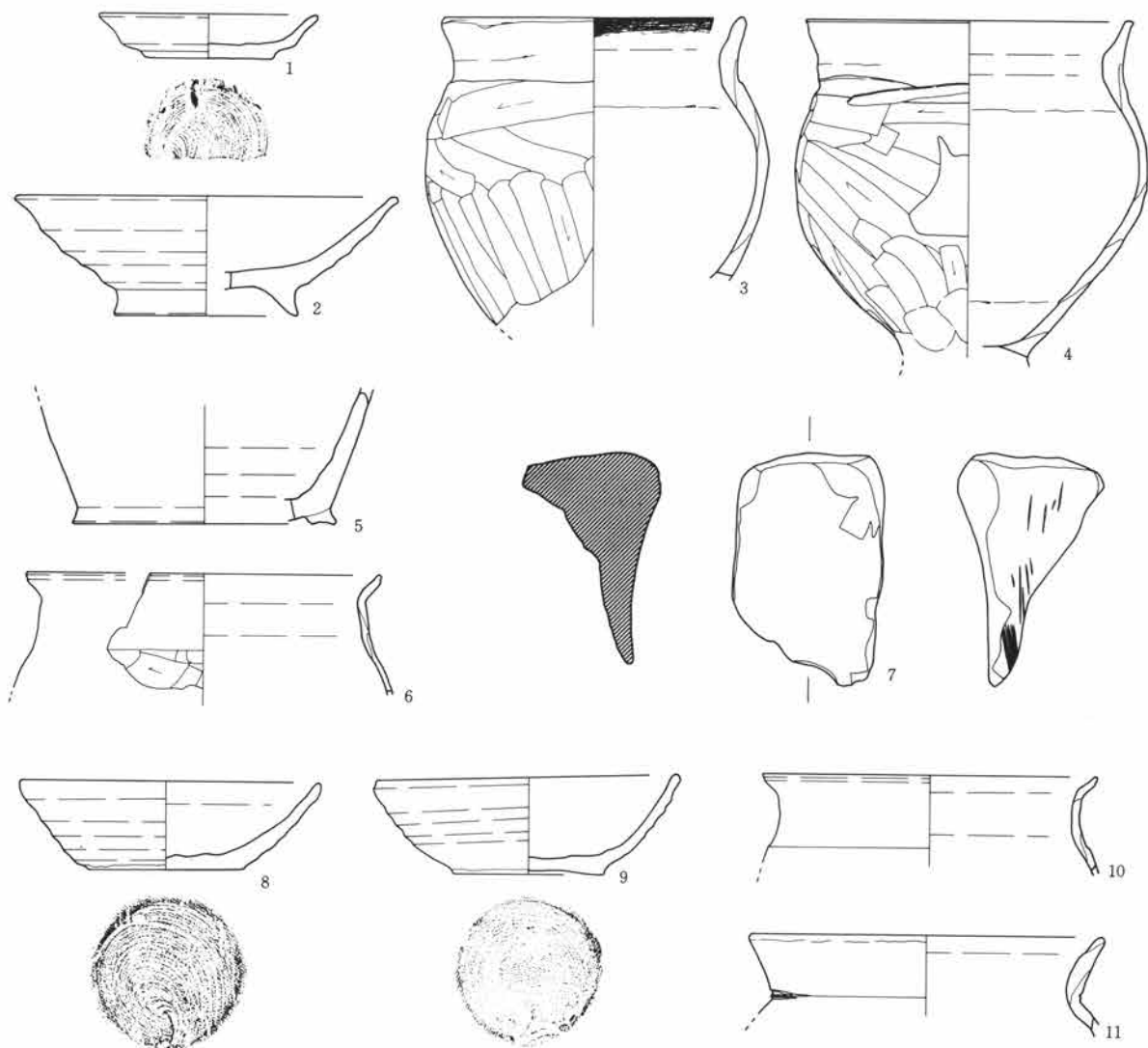
第142図 37号住居址出土遺物(3)



第143図 37号住居址出土遺物(4)－¼

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
33	高台付段皿 (灰釉陶器)	⅔残存。 高 2.6cm。 口 14.7cm。	床面上17cm。 底 8.0cm。	①白い砂粒を含むが緻密な胎土。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。内外面、回転によるナデ。高台接合部指ナデ。施釉。口縁部どぶづけ。
34	高台付椀 (灰釉陶器)	⅓残存。 高 7.4cm。 口 17.0cm。	床面上5cm。 底 8.7cm。	①白い砂粒を少量含む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。全面、回転ナデ。底部外面寛ナデ。高台接合部横ナデ。施釉。口縁部どぶづけ。
35	長頸壺 (灰釉陶器)	⅓残存。ただし口縁部欠損。 底 12.9cm。	北西隅。床面直上+床面上10cm。	①白い砂粒を含むが緻密な胎土。 ②灰白色。	付高台。外面 回転ナデ。底部回転寛削り。内面 回転ナデ。施釉。口縁部から肩部にかけてどぶづけ。又、底部内面に降灰釉。
36	羽釜(土師器)	口縁部～胴部上位破片。 口 (20.5cm)。	南辺壁際。床面上20cm。	①細砂を少量含むが緻密な胎土。 ②灰黄色。	外面 胴部回転ナデ。つば接合部ナデ。口縁部横ナデ。内面 胴部回転ナデ。口縁部横ナデ。
37	鉢(灰釉陶器)	⅓残存。底部欠損。 口 (30cm)。	床面上9cm。	①黒い細粒子を含む。②灰白色。	右回転ロクロ成形。内面施釉。
38	甕(土師器)	⅓残存。 高 25.7cm。 口 23.0cm。	床面上10cm。 底 2.5cm。	①砂粒多含。 ②橙灰褐色。	外面 胴部下半斜方向寛削り。上首横方向寛削り。口縁部横ナデ。内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
39	甕(須恵器)	⅓。 高 37.2cm。 口 18.4cm。	床面上20cm。 底 7.8cm。	①砂粒を含む。 ②灰色。	外面 胴部下半斜方向の細かい寛ナデ。上半横方向寛ナデ。口縁部～頸部横ナデ。胴部下部斜ナデ。内面 胴部上半指押え。下半丁寧なナデ。

III 検出された遺構と遺物



40号住居址出土遺物 (1、2)
 42号住居址出土遺物 (3、4)
 43号住居址出土遺物 (5、6-1/4、7)
 図144 45号住居址出土遺物 (8、9、10、11-1/4)

40号住居址出土遺物観察表 (第144図・P L35) ▶本文 P. 101・第96図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (*)	1/3残存。 高 1.8cm。 口 (9.2cm)。底 (5.4cm)。	床面上 6 cm。	①砂粒・長石・雲母を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 杯部内外面とも回転ナデ。
2	高台付椀 (*)	1/3残存。 高 4.9cm。 口 (15.8cm)。 底 (7.6cm)。	床面上 2 cm。	①黒色鉱物粒子を含むが、緻密な胎土である。 ②赤褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。 椀部内外面とも回転ナデ。高台接合部ナデ。

4 平安時代の遺構と出土遺物

42号住居址出土遺物観察表 (第144図・P L 35) ▶本文 P. 103・第99図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	小型甕 (土師器)	底部欠損。 口 12.8cm。 頸 11.8cm。 胴 14.3cm。	壁際。 床面上 7cm。	①砂粒を多量に含む。②黒褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半横方向篋削り。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
4	小型台付甕 (土師器)	底部・台部欠損。 口 13.6cm。 頸 12.5cm。 胴 14.6cm。	壁際。 床面上 7cm。	①砂粒・石英粒を含む。②茶褐色。	外面 胴部上半斜方向。下半縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。

43号住居址出土遺物観察表 (第144図・P L 35) ▶本文 P. 103・第99図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	高台付椀 (須恵器)	底部破片。 底 10.9cm。	壁際。 床面上 9cm。	①砂粒を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法下明。付高台。内外面回転ナデ。高台接合部ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 19.6cm。 頸 18.0cm。	床面上 4cm。	①細砂を多量に含む。②黄褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
7	砥石 (石製品)	完形。 長 10.5cm。 幅 6.2cm。	床面上 5cm。 厚 5.8cm。		片面使用。

45号住居址出土遺物観察表 (第144図・P L 35) ▶本文 P. 114・第122図

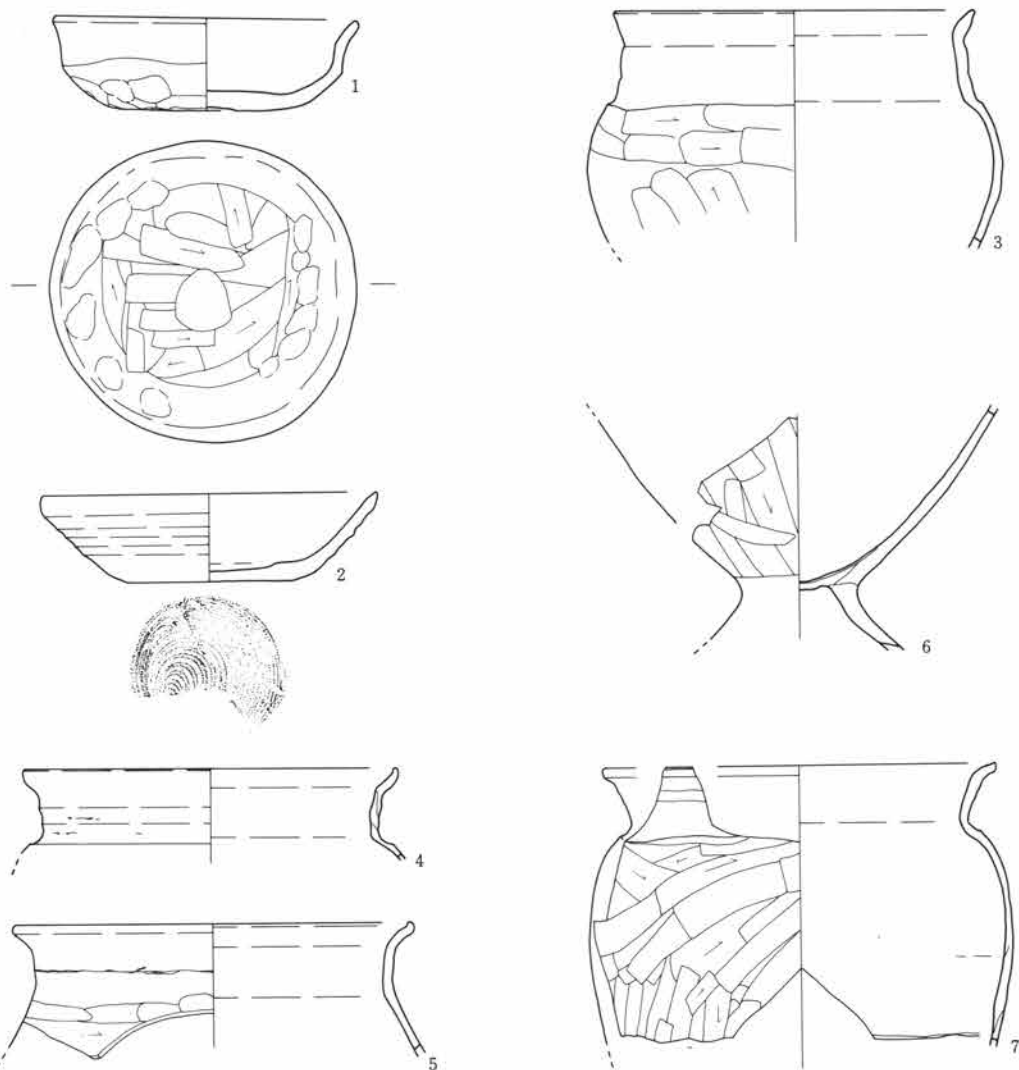
No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
8	杯 (須恵器)	ほぼ完形。 高 3.7cm。 口 12.4cm。	床面直上。 底 6.4cm。	①砂粒・石英を含む。②黄灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。杯部内外面、回転によるナデ。口縁部回転横ナデ。
9	杯 (須恵器)	完形。 高 4.0cm。 口 12.5cm。	床面直上。 底 6.2cm。	①細砂・長石を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。杯部内外面、回転によるナデ。口縁部横ナデ。
10	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 18.6cm。 頸 16.0cm。	床面直上。	①砂粒・長石・雲母を含む。②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
11	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 14.6cm。 頸 12.9cm。	埋土中。	①細砂・雲母を含む。②灰褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。

47号住居址出土遺物観察表 (第145図・P L 35) ▶本文 P. 104・第100図

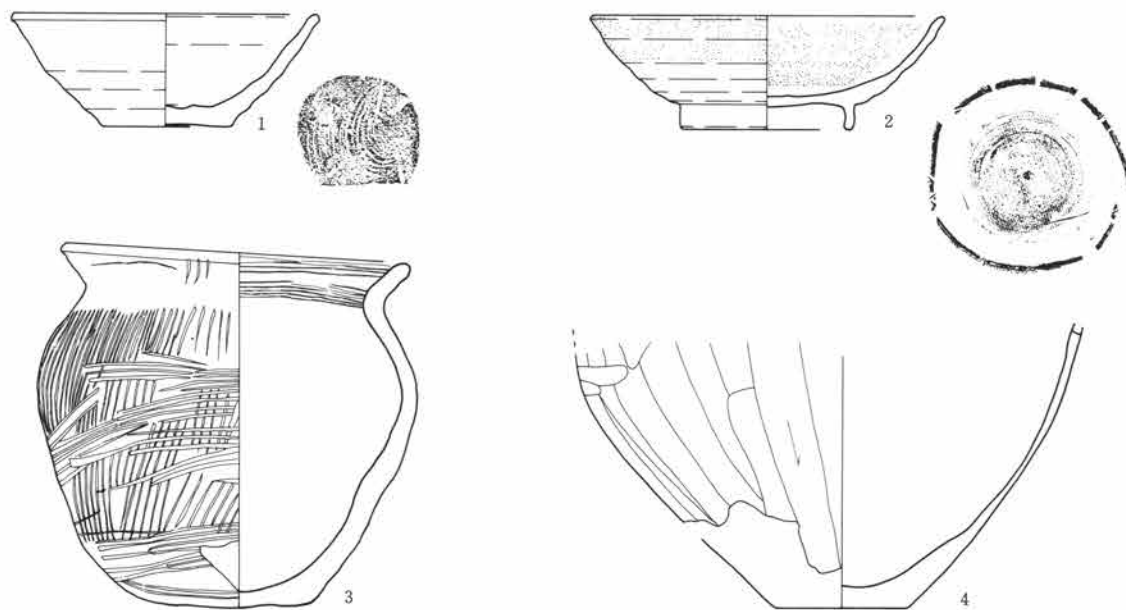
No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	完形。 高 3.8cm。 口 12.3cm。	壁際。 床面直上。 底 8.4cm。	①砂粒を含む。②青灰色。	外面 底～杯部篋削り。後杯部指押え。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (須恵器)	1/2残存。 高 3.5cm。 口 13.5cm。	床面上 2cm。 底 6.5cm。	①砂粒を含む。②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。杯部内外面、回転ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	台付甕（土師器）	胴部・台部下 欠損。 口 14.5cm。 頸 13.9cm。 胴 16.7cm。	壁際。床面上 4 cm。	①細砂を多量に含 み、ザラザラしてい る。 ②茶褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半横方向篋削り。 口縁部および台部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部および台部横ナデ。
4	甕（土師器）	口縁部破片。 口 20.2cm。 頸 18.0cm。	壁際。	①砂粒・雲母・石英 を含む。 ②橙褐色。	内外面 口縁部および頸部横ナデ。
5	甕（土師器）	口縁部破片。 口 (21.6cm)。	床面上 4 cm。	①砂粒・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。
6	台付甕（土師器）	胴下位～台部残 胴 4.6cm。	壁際。 床面上 4 cm。	①多量の砂粒と雲 母・石英を含む。② 茶褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。台部横ナデ。台部接合部 縦方向指ナデ。 内面 胴部ナデ。
7	甕（土師器）	口縁～胴部中位 1/3残存。 口 (21.2cm)。 胴 (22.4cm)。 頸 (18.0cm)。	床面上 2 cm。	①砂粒・雲母・石英 を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半斜方向篋削り。 口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。



第145図 47号住居址出土遺物（5～7-1/4）



第146図 48号住居址出土遺物

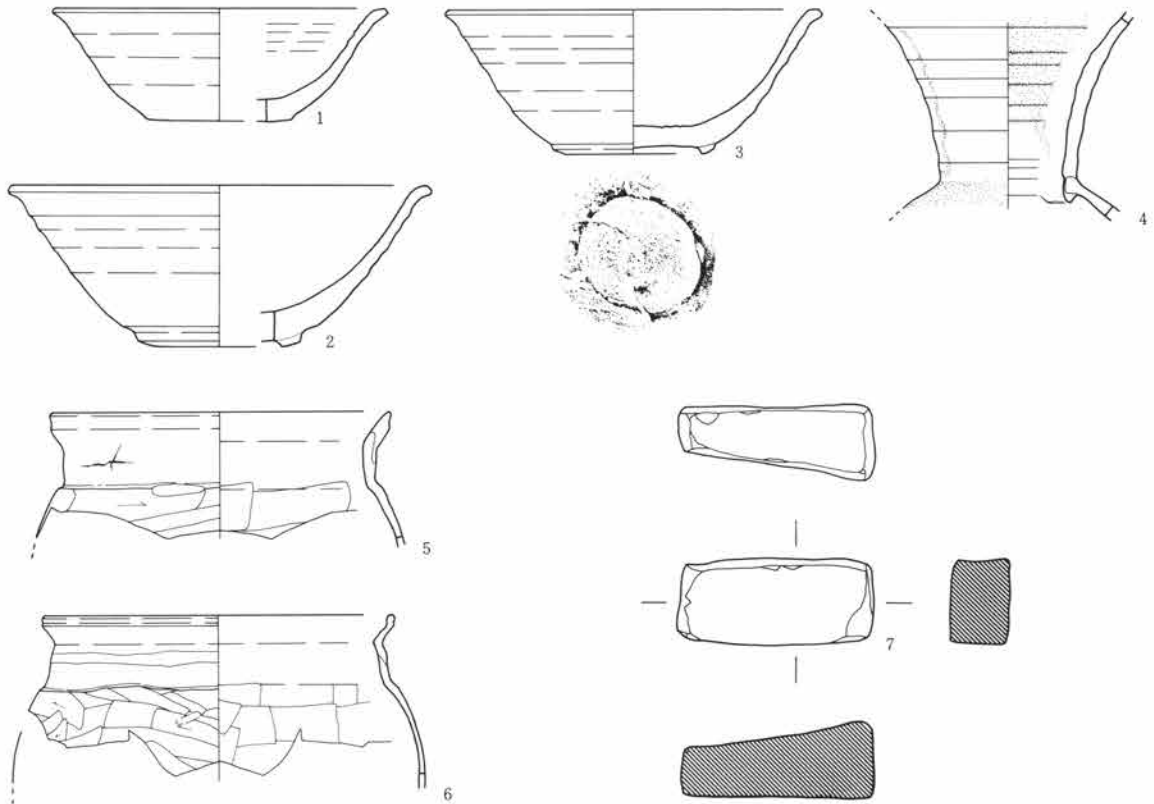
48号住居址出土遺物観察表 (第146図・P L 35) ▶本文 P. 104・第101図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (須恵器)	1/2残存。底完形。 高 4.5cm。 口 (12.4cm)。	カマド燃烧部 灰面上 5cm。	①砂粒・長石を含む。 ②黄灰褐色。	右回転クロロ成形。回転糸切り離し。 全面、回転ナデ。
2	高台付椀 (須恵器)	椀部1/10。高台部 残存。 高 4.6cm。 口 (14.2cm)。	床面直上。	①細砂・石英・雲母 細片を含む。 ②茶褐色。	底部貼りつけ。付高台。 内外面とも回転ナデ。
3	小型甕 (土師器)	体部1/4欠損。 高 14.3cm。 口 14.0cm。 胴 15.1cm。 頸 11.9cm。 底 7.0cm。	カマド左脇。 床面直上。	①砂粒・雲母を多量 に含む。 ②灰褐色～茶褐色。	外面 胴部縦方向のきわめて荒く強い刷毛目。後ほ ぼ3段に横方向の同様の刷毛目。頸部～口縁部ナデ。 内面 頸部横方向刷毛目。胴部横方向篋ナデ。
4	甕 (土師器)	体部下位～底部 1/2残存。 底 5.2cm。	カマドたき 口。灰面直上。	①砂粒を多量に含 む。②赤褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。 内面 ナデ。

49号住居址出土遺物観察表 (第147図・P L 35) ▶本文 P. 105・第102図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	椀 (須恵器)	1/2残存。 高 4.5cm。 口 (13.4cm)。 底 (5.8cm)。	床面上27cm。	①細砂を含む。 ②灰褐色。	右回転クロロ成形。回転糸切り離し。 内外面とも回転ナデ。
2	高台付椀 (須恵器)	1/2残存。 高 6.4cm。 口 (16.8cm)。 底 (6.6cm)。	壁際。 床面上20cm。	①細砂を若干含む。 ②黄灰褐色。	右回転クロロ成形。回転糸切り離し。付高台。内外 面とも回転ナデ。

III 検出された遺構と遺物

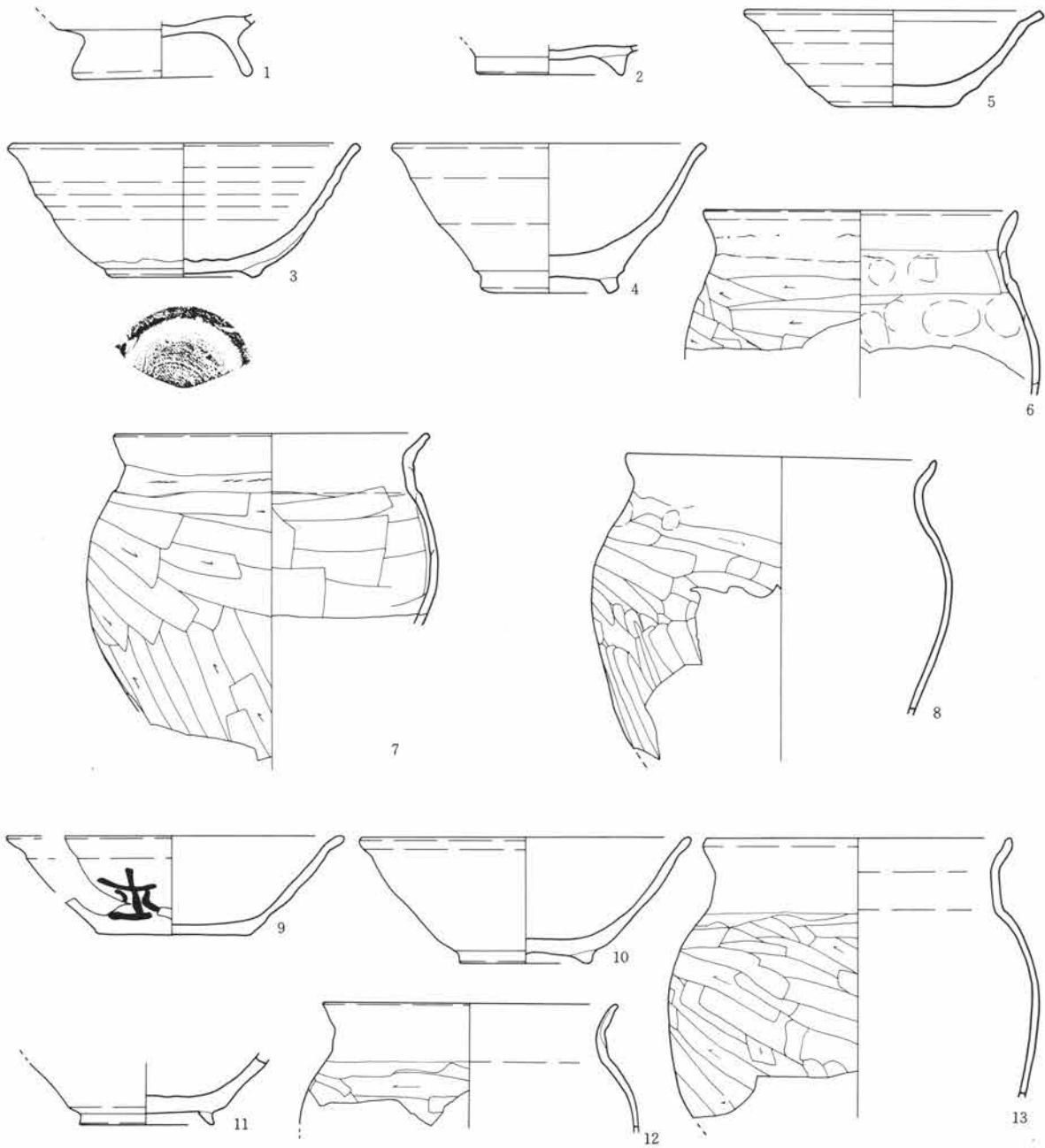


第147図 49号住居址出土遺物（5-1/4）

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	高台付椀 (須恵器)	2/3残存。 高 5.7cm。 口 (13.0cm)。底 (6.6cm)。	床面上 4 cm。	①砂粒・石英を含む。 ②黒灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切離し。付高台。
4	長頸壺 (灰釉陶器)	頸部1/3残存。 頸 (4.6cm)。	埋土中。	①細砂・黒色鉱物粒子を含む。 ②乳灰色。	内外面とも回転ナデ。 肩部および頸部内面に自然釉。
5	壺 (土師器)	口縁部1/2残存。 口 13.6cm。 頸 12.4cm。	床面上 4 cm。	①細砂・雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁～頸部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。
6	壺 (土師器)	口縁～肩部1/3残存。 口 (19.0cm) 頸 (17.6cm)。	壁際。 床面上 1 cm。	①砂粒・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部上半帯状に無整形。 口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
7	砥石 (石製品)	完形。	カマド脇。		

50号住居址出土遺物観察表 (第148図・P L) ▶本文 P. 106・第104図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	高台付椀 (*)	高台部残存。 底 8.2cm。	カマド燃成部。 灰面上 2 cm。	①砂粒・石英を含む。 ②茶褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。 全面、回転ナデ。



50号住居址出土遺物 (1)
 53号住居址出土遺物 (2)
 51号住居址出土遺物 (3~5、6~8-1/4)
 第148図 52号住居址出土遺物 (9~11、12、13-1/4)

53号住居址出土遺物観察表 (第148図・P.L) ▶本文 P. 108・第108図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	高台付碗 (*)	高台部破片。 底 6.7cm。	床面上6cm。	①砂粒・石英・雲母を含む。②黄褐色。	右回転クロロ成形。切り離し技法不明。付高台。高台接合部内面ぐるりと指ナデ。碗部回転ナデ。

III 検出された遺構と遺物

51号住居址出土遺物観察表 (第148図・P L 35) ▶本文 P. 107・第106図

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	高台付椀 (須恵器)	口縁～高台部 $\frac{1}{4}$ 残存。 高 6.0cm。 口 16.0cm。底 7.0cm。	床面上11cm。	①砂粒・石英を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。高台接合部ナデ。椀部内外面回転ナデ。
4	高台付椀 (須恵器)	口縁～高台部 $\frac{1}{4}$ 残存。 高 6.7cm。 口 14.4cm。底 7.0cm。	壁際。床面上2cm。	①細砂・雲母・石英を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。回転ナデ。
5	椀 (須恵器)	椀部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 4.3cm。 口 13.2cm。底 5.4cm。	床面上2cm。	①石英・長石・雲母を含む。 ②灰白色	右回転ロクロ成形。回転糸切り。回転ナデ。

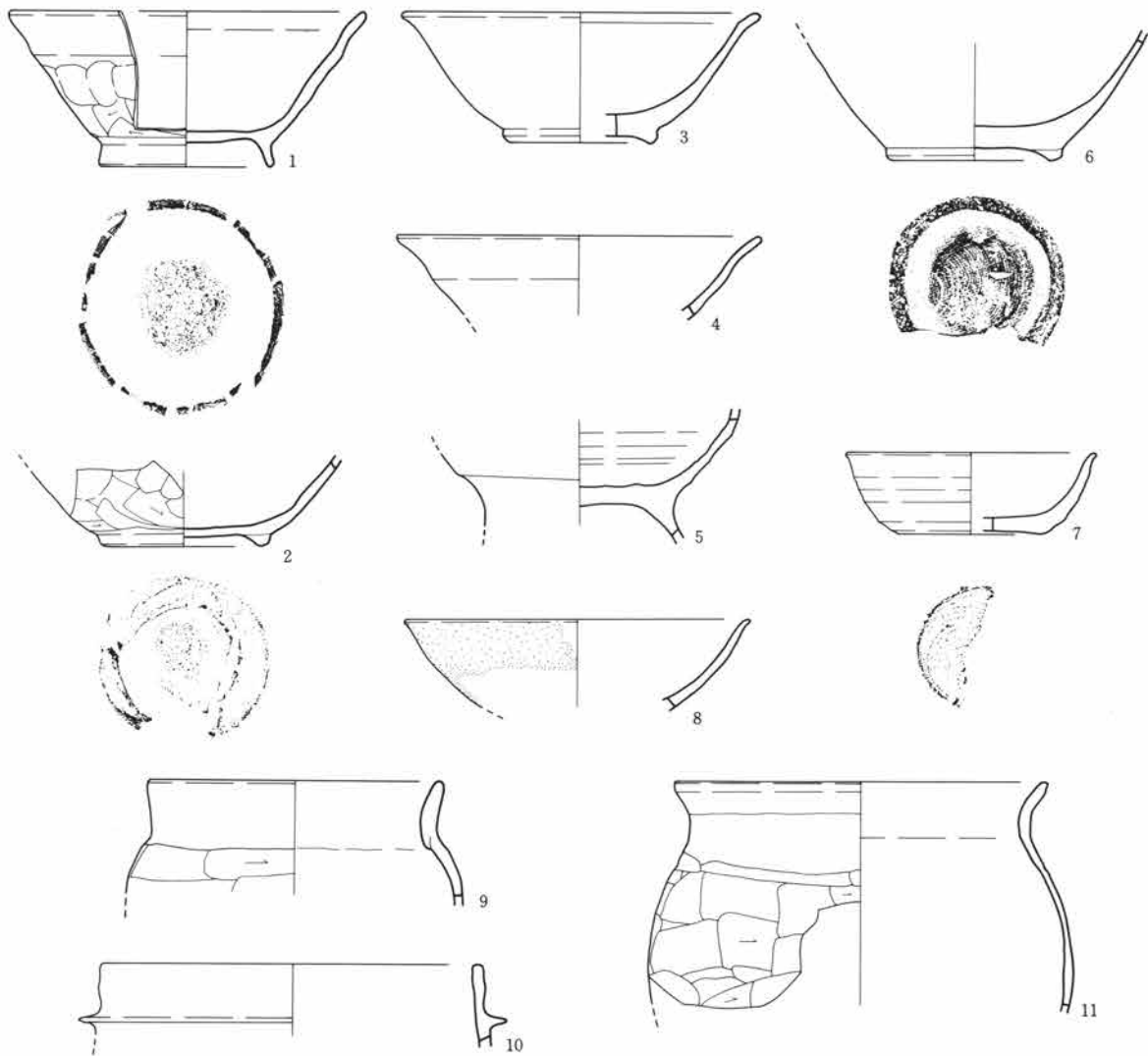
52号住居址出土遺物観察表 (第148図・P L 35) ▶本文 P. 106・第105図

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
9	杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 4.5cm。 口 (15.3cm)	床面直上。	①砂粒・石英を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部寛ナデおよび指押え。底部T字形に2方向篋削り。杯部墨書「㊗」 内面 口縁～杯部横ナデ。
10	高台付椀 (須恵器)	口縁～底部残存 高 5.6cm。 口 (15.0cm)。	南東隅壁際。周構脇。	①砂粒を多く含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。椀部回転ナデ。高台接合部ナデ。
11	高台付椀 (須恵器)	高台部のみ残存 底 6.0cm。	床面上25cm。	①細砂・雲母を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。椀部内外面回転ナデ。
12	甕 (土師器)	口縁～胴部半残 口 17.8cm。 頸 16.4cm。	床面上7cm。正立。	①長石・石英を含む。 黒褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
13	甕 (土師器)	口縁～胴上半残 口 18.4cm。 頸 17.2cm。	床面上7cm。倒立。	①砂粒・長石・石英を多く含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。胴部下半斜方向篋削り。口縁～頸部横ナデ。頸部下端指頭痕のような擦痕。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁～頸部横ナデ。

55号住居址出土遺物観察表 (第149図・P L 36) ▶本文 P. 109・第111図

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	高台付椀 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 6.3cm。 口 (14.6cm)。 底 7.0cm。	カマド燃焼部。 灰面上1cm。	①細砂と小石を少量含む。 ②茶褐色。	外面 椀部下半横方向篋削り。上半指押え。高台接合部横ナデ。 内面 椀部～口縁部横ナデ。
2	高台付椀 (土師器)	椀部下半残存。 底 3.4cm。	床面上1cm。	①石英・長石を含む。 ②黒褐色。	外面 椀部下半斜方向篋削り。上半指押え。高台接合部横ナデ。
3	高台付椀 (須恵器)	口縁～高台部 $\frac{1}{2}$ 残存。 高 5.3cm。 口 (14.7cm)。 底 6.3cm。	壁際。床面上7cm。	①細砂を多量に含む。 灰白色。	右回転ロクロ成形。付高台。内外面、回転ナデ。口縁部および高台接合部横ナデ。
4	椀 (須恵器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (15.0cm)。	床面上3cm。	①砂粒・長石を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。内外面回転ナデ。

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	高台付碗 (*)	碗下半破片。	壁際。 床面上6cm。	①砂粒・長石・黒雲母を含む。②茶褐色。	右回転ロクロ成形。付高台。切り離し技法不明。碗部回転ナデ。高台接合部回転ナデ。
6	高台付碗 (須恵器)	碗下半残存。 底 7.2cm。	床面上2cm。	①細砂・石英を含む。②黒灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。碗部内外面回転ナデ。高台接合部内外面ナデ。
7	杯(*)	1/2残存。 高 3.3cm。 口 10.2cm。	埋土中。	①細砂・雲母細片を含む。②黄灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。全面、回転ナデ。
8	碗 (灰釉陶器)	杯部上半残存。 口 14.2cm。	壁際。 床面上14cm。	①黒色粒子を含む。②灰白色。	右回転ロクロ成形。全面回転ナデ。
9	小型甕(土師器)	口縁部破片。 口 12.1cm。	床面上1cm。 頸(11.6cm)。	①砂粒を少量含む②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部篋ナデ。



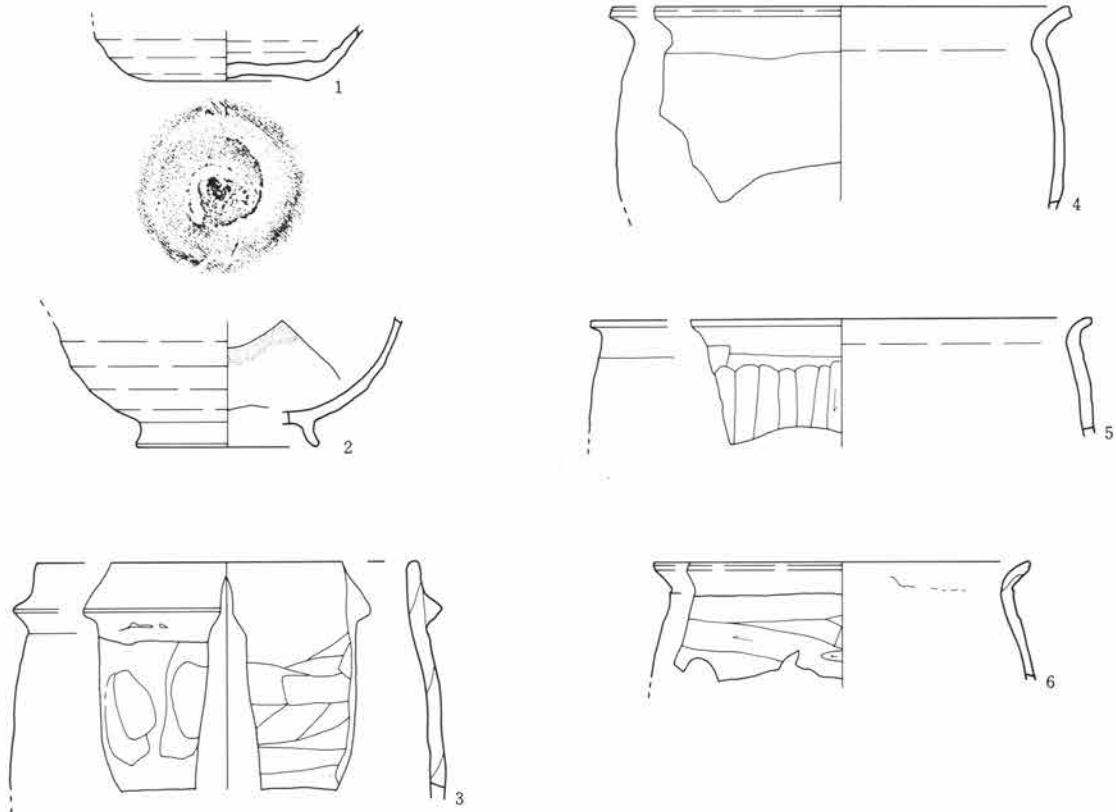
第149図 55号住居址出土遺物(10、11-1/4)

III 検出された遺構と遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
10	羽釜（土師器）	口縁部破片。 口 23.5cm	埋土中。	①砂粒、雲母細片を含む。②橙褐色。	
11	甕（土師器）	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残 口 20.3cm。 頸 8.7cm。	壁際。 床面上11cm。	①細砂を含む。 ②黄褐色。	外面 肩部横方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部篔ナデ。

56号住居址出土遺物観察表（第150図・P.L）▶本文 P. 108・第110図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯（須恵器）	底部残存。 底 6.4cm。	カマド焼成部 灰面上 6cm。	①細砂・小石を含む。 ②灰白褐色。	右回転ロクロ成形。回転ヘラ切り離し。 内面回転ナデ。
2	高台付椀 （灰釉陶器）	口縁・底部欠損	壁際。 床面直上。	①細かい黒色粒子を含む。②灰白色。	右回転ロクロ成形。全面回転ナデ。 内面 施釉。
3	羽釜（土師器）	口縁～体部中位 破片。 口 20.6cm	カマド焼成部 灰面上10cm。	①砂粒・石英粒を含む。②橙褐色。	外面 体部篔削り後指押え。口縁部および頸部横ナデ。 内面 体部横方向篔ナデ。
4	甕（土師器）	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残 口 24.5cm	カマド焼成部 灰面上10cm。	①細砂を含む。 ②橙褐色。	外面 体部篔削り後指押え。口縁部横ナデ。 内面 体部横方向篔ナデ。



56号住居址出土遺物（1、2、3～5- $\frac{1}{4}$ ）
第150図 57号住居址出土遺物（6- $\frac{1}{4}$ ）

4 平安時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	土釜(※)	口縁部破片。	床面上2cm。	①細砂を含む。 ②橙褐色。	外面 縦方向ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。

57号住居址出土遺物観察表(第150図)▶本文P.110・第113図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	甕(土師器)	口縁部破片。 口20.0cm。	床面上2cm。	①細砂・雲母細片を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。

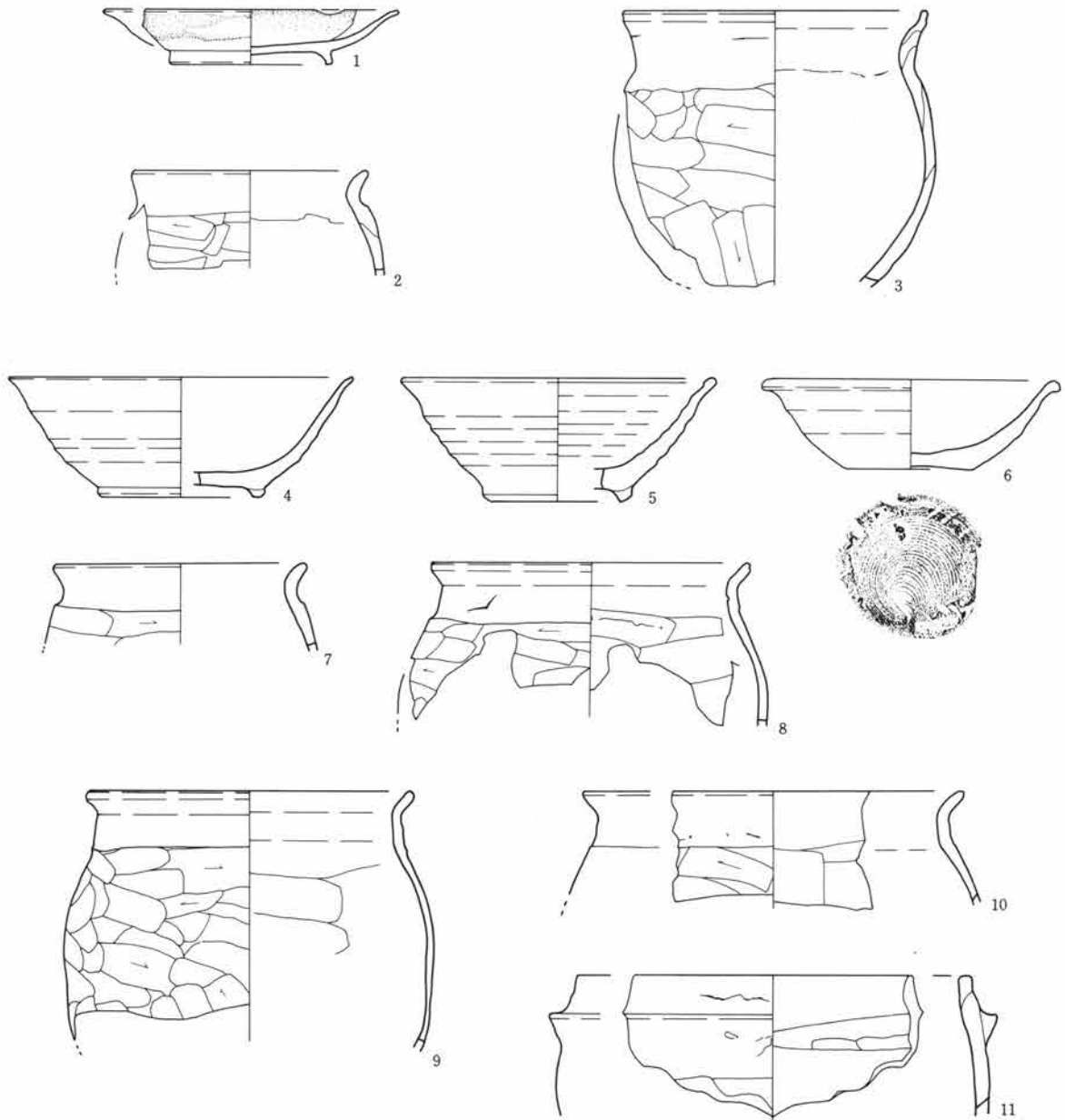
58号住居址出土遺物観察表(第151図・P.L36)▶本文P.110・第112図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	高台付皿 (灰釉陶器)	口縁～高台部 $\frac{1}{4}$ 残存。 高2.4cm。 口(12.9cm)。底7.0cm。	壁際。 床面上15cm。	①黒色粒子を含む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。底部外面回転篔削り調整。 施釉(どぶづけ)。
2	小型甕(土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口(10.3cm)。頸(9.7cm)。	床面上12cm。	①砂粒を少量含む。 ②茶褐色。	外面 肩部横方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
3	甕(土師器)	口縁～胴部下半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口(13.4cm)。頸(12.4cm)。	カマド前。 床面上2cm。	①砂粒・石英・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部上半横方向篔削り。下半縦方向篔削り。 口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篔削り。口縁部横ナデ。

59号住居址出土遺物観察表(第151図・P.L36)▶本文P.111・第114図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
4	高台付椀 (※)	底部欠損。 高5.2cm。 口13.2cm。底7.0cm。	床面上2cm。	①細砂を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。付高台。 全面回転ナデ。
5	高台付椀 (※)	底部欠損。 高5.4cm。 口14.0cm。底5.6cm。	壁際。 床面上6cm。 底5.6cm。	①細砂を少量含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。付高台。 全面回転ナデ。 口縁部内面に炭化物付義。
6	杯(須恵器)	$\frac{1}{2}$ 欠損。 高3.9cm。 口13.2cm。底5.6cm。	床面上8cm。 底5.6cm。	①細砂を少量含む。 ②黒灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。 全面回転ナデ。
7	小型甕(土師器)	口縁部破片。 口11.2cm。	カマド燃焼部。 灰面上2cm。	①細砂を少量含む② 黄褐色。	外面 肩部横方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 横ナデ。
8	甕(土師器)	口縁～胴上位残存。 口18.4cm。	カマド前。 灰面上2cm。	①砂粒・石英を多量に含む。 ②灰橙褐色。	外面 肩部横方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篔削り。口縁部横ナデ。
9	甕(土師器)	口縁～胴部中位 $\frac{1}{2}$ 残存。 口19.6cm。	床面上3cm。	①細砂を多量に含む。 ②黄褐色。	外面 胴部上半横方向篔削り。下半縦方向篔削り。 口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篔削り。口縁部横ナデ。
10	甕(土師器)	口縁部破片。 口22.2cm。	壁際。 床面上2cm。	①細砂・雲母細片を多量に含む。 ②黒褐色。	外面 肩部横方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篔削り。
11	羽釜(土師器)	口縁部破片。 口23.2cm。	カマド前。 床面上2cm。	①砂粒・石英を含む。 ②橙褐色。	外面 ナデ。胴部整形不明。 内面 ナデ。

III 検出された遺構と遺物



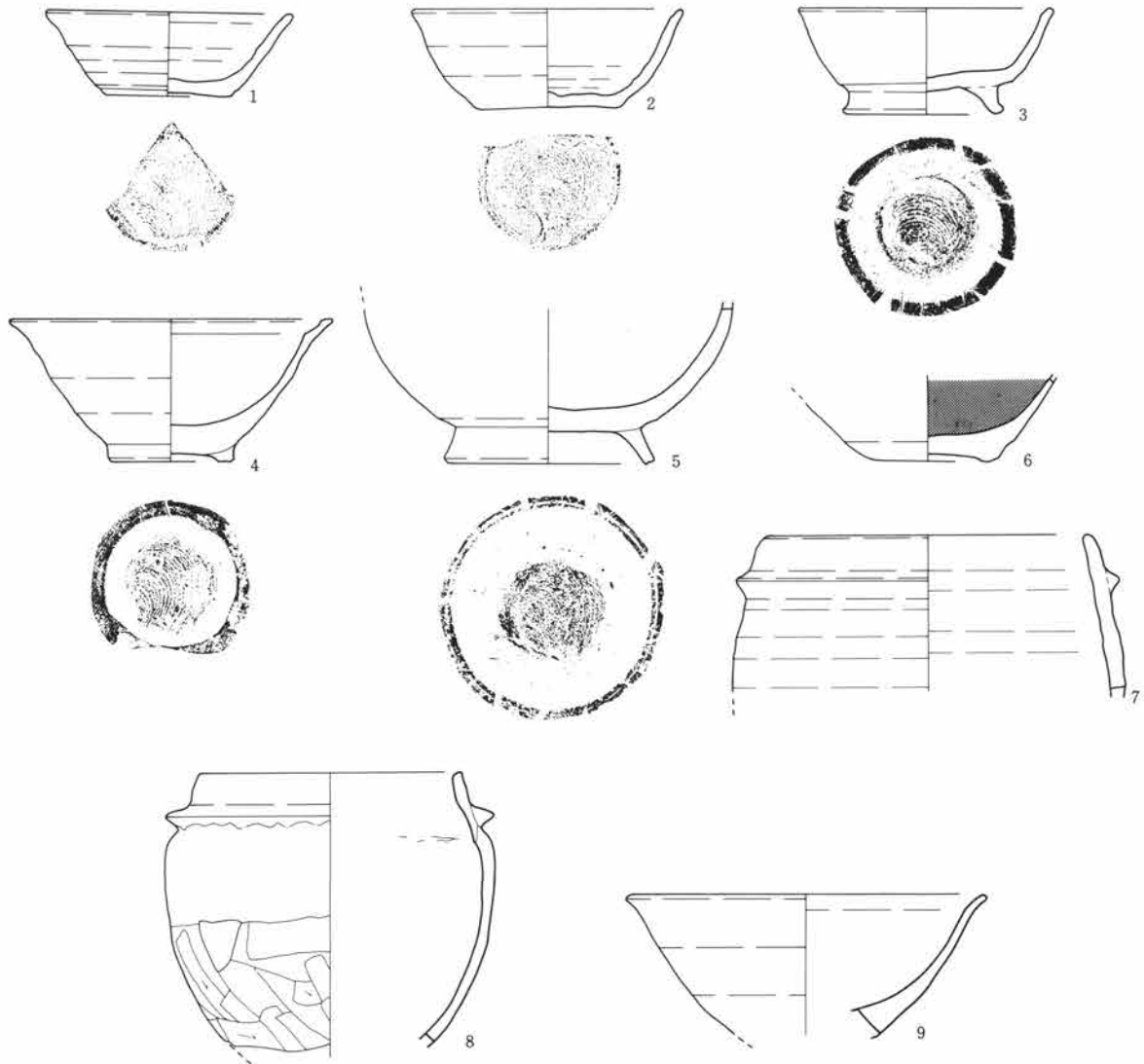
58号住居址出土遺物 (1~3)
 第151図 59号住居址出土遺物 (4~7、10~11-1/4)

61号住居址出土遺物観察表 (第152図・P.L36) ▶本文 P. 115・第124図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	椀 (*)	破片。 高 3.4cm。 口 (10.2cm)。	埋土中。	①細砂・石英を少量含む。 ②茶灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。全面、回転ナデ。
2	椀 (*)	1/2残存。 高 5.1cm。 口 11.2cm。	壁際。 床面直上。	①砂粒・長石粒・雲母を少量含む。 ②黄褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。全面、回転ナデ。

4 平安時代の遺構と出土遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	高台付椀 (*)	完形。 高 4.5cm。 口 10.5cm。 底 6.6cm。	床面直上。	①細砂・雲母を含む。 ②外面、灰白色。内面黒色(炭化物)	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。内外面回転ナデ。高台接合部横ナデ。
4	高台付椀 (須恵器)	椀部 $\frac{3}{4}$ 欠損。 高 5.8cm。 口 (13.2cm)。	埋土中。	①細砂粒・黒色粒子を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。全面、回転ナデ。口辺部は寧な横ナデ。高台接合部ナデ。
5	高台付椀 (*)	口縁部欠損。 椀部 $\frac{1}{2}$ 残存。 底 8.7cm。	埋土中。	①雲母・長石・細砂を含む。 ②内面黒色処理。外面茶褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。椀部内面中央篋磨き。方向、単位は磨耗により不明。
6	高台付椀 (*)	椀部下半 $\frac{1}{2}$ 残存 底 4.5cm。	床面上 3cm。	①細砂・長石粒・石英を含む。 ②外面灰褐色。内面黒色処理。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。椀部内面格子状の細かな篋磨き。高台接合部指ナデ。



61号住居址出土遺物 (1~6、7- $\frac{1}{4}$)
第152図 62号住居址出土遺物 (8、9)

III 検出された遺構と遺物

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
7	羽釜（土師器）	口縁部破片。 口（18.8cm）。	床面直上。	①細砂・石英・雲母を含む。緻密。 ②橙褐色。	外面 体部縦方向の篋削りの後、横方向篋ナデ。口縁部丁寧な横ナデ。 内面 体部、口縁部丁寧な横ナデ。

62号住居址出土遺物観察表（第152図・P L36）▶本文 P. 111・第115図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
8	羽釜（土師器）	口縁部～体部下位 $\frac{1}{2}$ 残存。 口（14.5cm）。 胴（16.2cm）。	カマド燃焼部。 灰面直上。	①砂粒・長石・石英粒を含む。ザラザラした感じの胎土。 ②黄褐色。	外面 胴部下半縦方向、斜方向篋削り。上半横方向指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向ナデ。口縁部横ナデ。
9	碗（*）	碗部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口（14.8cm）。	床面直上。	①砂粒、長石を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。底部欠損の為、切り離し技法不明。 内外面、回転ナデ。口辺部内面に稜をもつようにナデている。

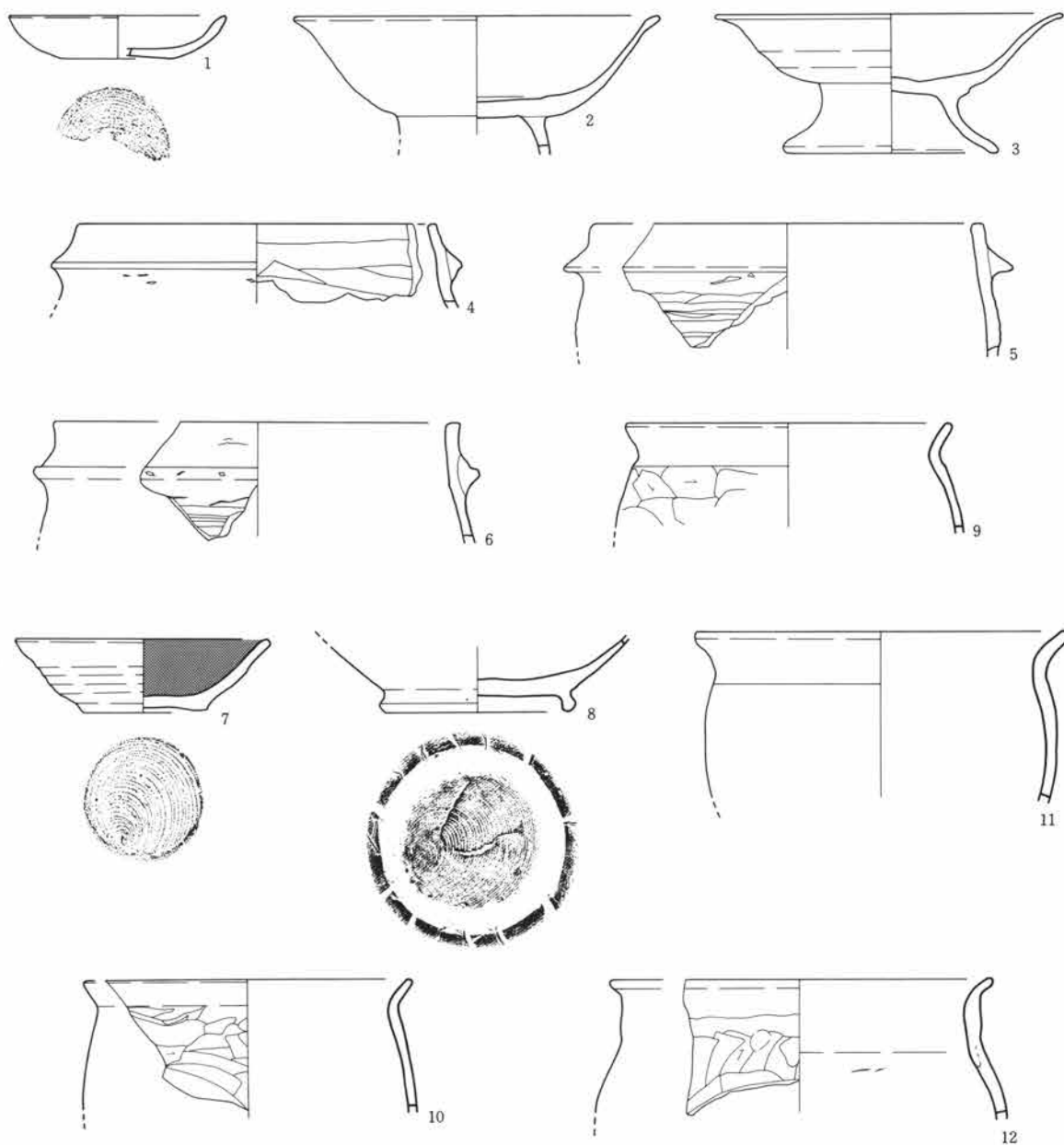
63号住居址出土遺物観察表（第153図・P L）▶本文 P. 112・第116図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯（*）	底部 $\frac{1}{2}$ 、杯部 $\frac{1}{2}$ 残存。 高 1.9cm。 口（9.6cm） 底（5.0cm）	埋土中。	①砂・長石・雲母を多く含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。 内外面ナデ。
2	高台付碗（*）	碗部 $\frac{1}{4}$ 、高台部先端欠損。 口（16.0cm）。	床面上2cm。	①砂粒・長石・雲母を含む。 ②茶褐色。	右回転ロクロ成形。付高台。 内外面ナデ。高台内面・底部ナデ。
3	高台付碗（*）	口縁部大部分欠高 6.0cm。 口（15.1cm）。 底（9.3cm）。	カマド前。 床面上5cm。	①砂粒・長石・雲母を含む。 ②赤褐色。	右回転ロクロ成形。付高台。 内外面回転ナデ。高台接合部ナデ。
4	羽釜（土師器）	口縁部破片。 口（20.8cm）。	床面直上。	①砂粒・雲母・石英を含む。 ②橙褐色。	外面 横ナデ。 内面 横ナデ。
5	羽釜（土師器）	口縁部破片。 口（22.6cm）。	床面直上。	①細砂・長石・石英を含む。 ②黄褐色。	外面 胴部幅の細い篋ナデ。口縁部横方向篋ナデ。 内面 胴部、口縁部横方向篋ナデ。
6	羽釜（土師器）	口縁部破片。 口（23.6cm）。	壁際。 床面上1cm。	①細砂・石英・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。

64号住居址出土遺物観察表（第153図・P L36）▶本文 P. 112・第117図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯（*）	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 3.2cm。 口 11.1cm。 底 5.4cm。	床面直上。	②外面、灰褐色。内面黒色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。 外面 回転ナデ。 内面 周縁部斜放射状の篋磨き。中央部一の字方向の篋磨き。

4 平安時代の遺構と出土遺物



63号住居址出土遺物 (1、2、3、4~6-1/4)
 第153図 64号住居址出土遺物 (7、8、9~12-1/4)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	高台付椀 (灰釉陶器)	底部残存。 底 8.0cm。	カマド前。 床面上 2 cm。	①少量の細砂を含む 緻密な胎土である。	右回転クロコ成形。回転糸切り離し。付高台。 内外面、回転ナデ。
3	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (19.0cm)。	カマド 燃 焼 部。 床面上 5 cm。	①細砂粒を少量含 む。②黒褐色。	外面 肩部横方向筥削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部筥ナデ。口縁部横ナデ。
4	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (19.2cm)。	カマド 燃 焼 部。 灰面上 2 cm。	①細砂・雲母を含む。 ②茶褐色。	外面 肩部横方向筥削り。口縁部横ナデ。頸部斜方 向筥による凹線。 内面 肩部筥ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
5	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (21.4cm)。	壁際。 床面上 4 cm。	①細砂・雲母・長石 を多量に含む。 ②橙褐色。	外面 肩部縦方向篋削りの後指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部、口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 22.3cm。	埋土中。	①細砂・黒雲母を多 く含む。 ②灰白色。	外面 肩部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。

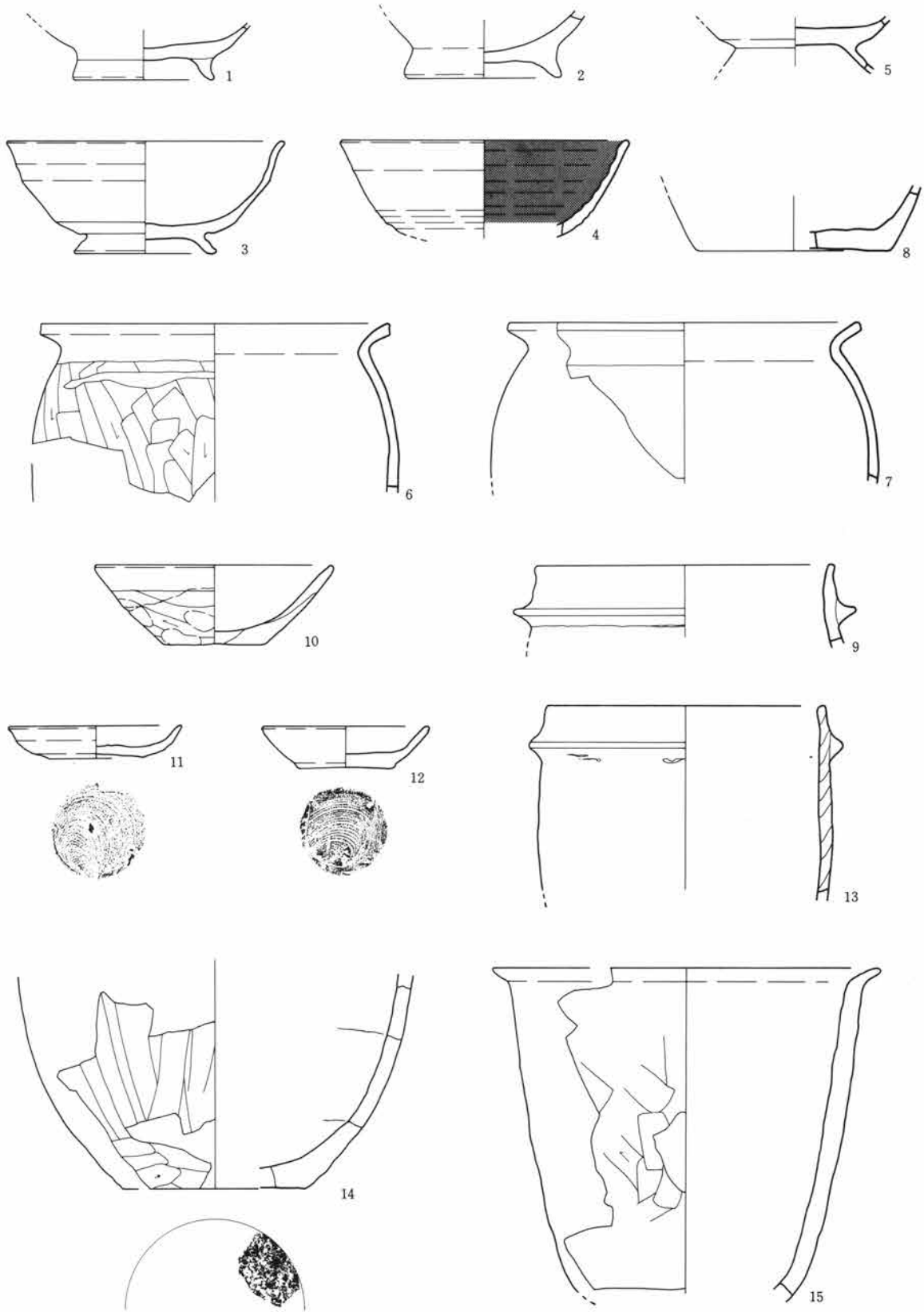
65号住居址出土遺物観察表 (第154図・P L) ▶本文 P. 113・第118図

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	高台付椀 (土師器)	高台部残存。 底 7.9cm。	カマド前。 床面上 2 cm。	①細砂・雲母を多く 含む。 ②黒褐色。	付高台。 外面 椀部下位横方向篋削り。椀部底一方向の篋削り。高台接合部横ナデ。 内面 椀部ナデ。
2	高台付椀 (土師器)	高台部残存。 底 7.9cm。	カマド前。 床面上 2 cm。	①細砂・雲母を多く 含む。 ②黒褐色。	付高台。 外面 椀部下位横方向篋削り。椀部底一方向篋削り。高台接合部横ナデ。 内面 椀部ナデ。

66号住居址出土遺物観察表 (第154図・P L 36) ▶本文 P. 113・第119図

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
3	高台付椀 (*)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.6cm。 口 14.0cm。 底 7.2cm。	床面上 3 cm。	①砂粒・石英粒を多 量に含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。 椀部下位外面回転篋削り。上位回転ナデ。高台接合部内外面横ナデ。椀部内面、細かな篋磨き。底部内面を格子状に磨いた後、椀部内面の周わ5分してヨコ方向、向かって左から右へ磨いている。
4	椀 (*)	椀部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (14.6cm)。	床面上 2 cm。	②外面橙褐色。内面 黒色。	右回転ロクロ成形。 椀部外面回転ナデ。内面、放射状の細かな篋磨き。
5	高台付椀 (*)	高台部残存。	床面上 2 cm。	①細砂・石英を多く 含む。 ②赤灰褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。 椀部下位外面回転篋削り。内面回転ナデ。高台接合部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁部～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (23.4cm)。頸 (20.7cm)。	床面上 9 cm。	①細砂・長石粒・雲 母を多く含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部は口唇部の稜をつくるため、丁寧な横ナデ。
7	甕 (土師器)	口縁部～肩部破 片。 口 (23.4cm)。	床面上 4 cm。	①細砂・長石・石英・ 雲母を含む。	外面 胴部縦方向篋削り後、指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
8	甕 (土師器)	底部 $\frac{1}{2}$ 残存。 底 (9.8cm)。	壁際。 床面上 1 cm。	①小石・砂粒・長石 粒を含む。 ②茶褐色。	外面 胴部横方向篋削り。底部指ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。底部指押え。
9	羽 釜 (土師器)	口縁部破片。 口 (20.2cm)。	壁際。 床面上 1 cm	①小石を含む。 ②茶褐色。	外面 口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。

4 平安時代の遺構と出土遺物



65号住居址出土遺物 (1、2)

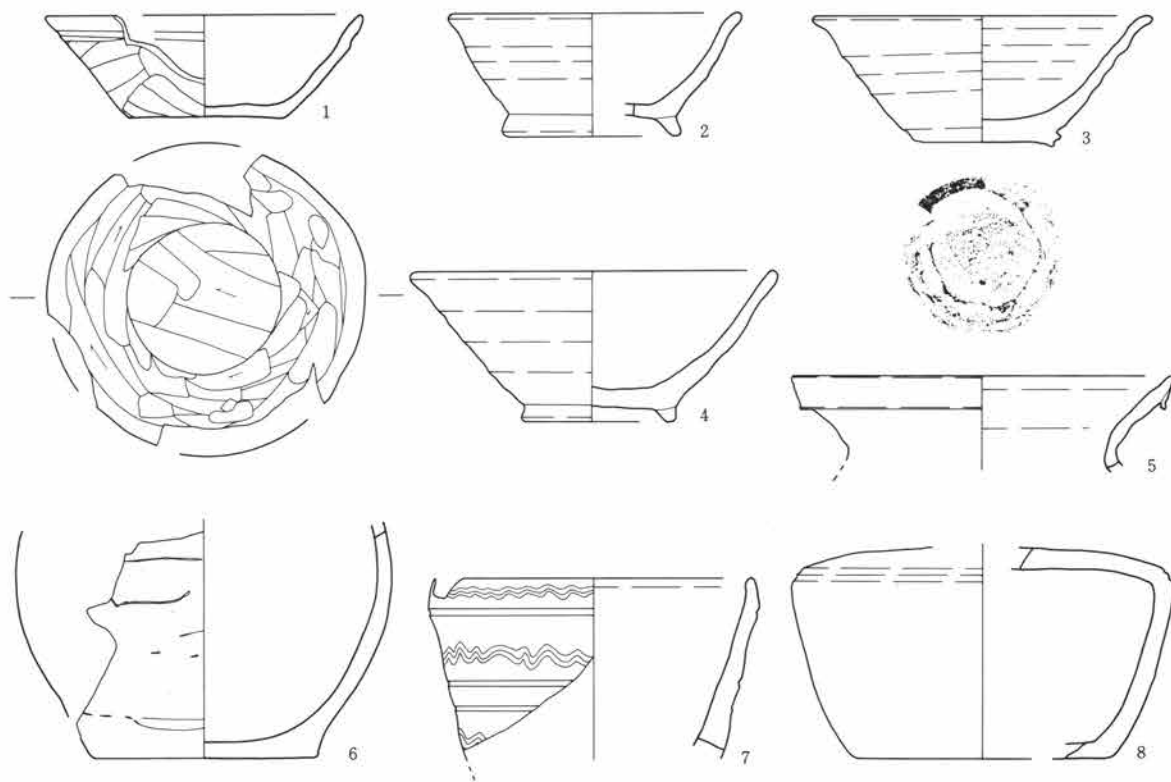
66号住居址出土遺物 (3~5、6、7~9-1/4)

第154図 68号住居址出土遺物 (10~12、13~15-1/4)

III 検出された遺構と遺物

68号住居址出土遺物観察表 (第154図・P L36) ▶本文 P. 114・第120図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	1/2残存。 高 5.0cm。 口 (11.9cm)。	埋土中。	①細砂含むが緻密。 ②橙褐色。	外面 杯部斜方向篋削り後指ナデ。口縁部横ナデ。 底部一方向篋削り。 内面 杯部篋ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (*)	1/2残存。 高 2.6cm 口 8.7cm。 底 5.6cm。	カマド脇壁際。床面上20cm。	①細砂・雲母を多く含む。 ②赤褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内外面回転ナデ。
3	杯 (*)	杯部1/4欠損。 高 2.1cm。 口 8.4cm。底 5.0cm。	埋土中。	①砂粒・小石を含む ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内外面回転ナデ。
4	羽釜 (土師器)	口縁部～体部中位破片。 口 (18.2cm)。	カマド煙道部施設。	①砂粒・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部篋削り後横方向篋ナデ。口縁部は丁寧な横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部は丁寧な横ナデ。
5	土釜 (土師器)	口縁部～体部下位破片。 口 (26.0cm)。	壁際。床面上5cm。	①小石・雲母を少量に含む。 ②茶褐色。下半は黄褐色。	外面 胴部縦及び斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向ナデ。口縁部横ナデ。
6	土釜 (*)	底部破片。	埋土中。	①小石・雲母を少量に含む。 ②茶褐色。下半は黄褐色。	砂底 外面 縦篋削り。 内面 ナデ。



第155図 6号溝出土遺物 (1~6、8、7-1/4)

6号溝址出土遺物観察表 (第155図・P L37) ▶本文 P. 118・第128図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.2cm。 口 12.9cm。 底 5.9cm。	溝底上7cm。	①砂粒・石英を含む。 ②灰褐色。	外面 杯部横方向篋削り。中位に指ナデ。口縁部横ナデ。底部篋削り。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。杯部に炭化物の付着がある。
2	高台付椀 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 4.9cm。 口 (12.0cm)。 底 6.8cm。	溝底直上。	①小石・砂粒・石英・雲母を含む。 ②橙褐色。	杯回転糸切り離し。付高台。 内外面ナデ。口縁部横ナデ。
3	高台付椀 (須恵器)	高台部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.1cm。 口 13.8cm。 底 (6.0cm)。	埋土中。	①細砂・長石・石英を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。 全面、回転ナデ。
4	高台付椀 (須恵器)	杯部 $\frac{1}{4}$ 、高台部 $\frac{3}{4}$ 欠損。 高 6.0cm。 口 14.7cm。底 6.1cm。	溝底直上。	①細砂を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。 回転ナデ。
5	壺 (須恵器)	口縁部 $\frac{1}{3}$ 残存。 口 (25.6cm)。	溝底上22cm。	①白色の細粒子を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。 回転ナデ。 口縁部は丁寧なナデ。
6	壺 (土師器)	胴部下半 $\frac{1}{3}$ 残存 底 9.3cm。	溝底直上。	①細砂・雲母を多量に含む。 ②黄褐色。	底部外面に木葉痕。 外面 胴部荒い指ナデ。 内面 ナデ。
7	鉢 (須恵器)	口縁～胴中位 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (13.2cm)。	溝直上10cm。	①細砂・白色粒子を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。 内外面とも回転ナデ。 外面に4本櫛歯の波状文と1条の沈線文が交互に6段施されている。
8	壺 (須恵器)	肩部～胴部下位 $\frac{1}{2}$ 残存。 底 (13.6cm)。	溝直上10cm。	①細砂・白色粒子を含む。 ②灰色。	ロクロ成形。 肩部～胴部内外面回転ナデ。

5 中世の遺構と出土遺物

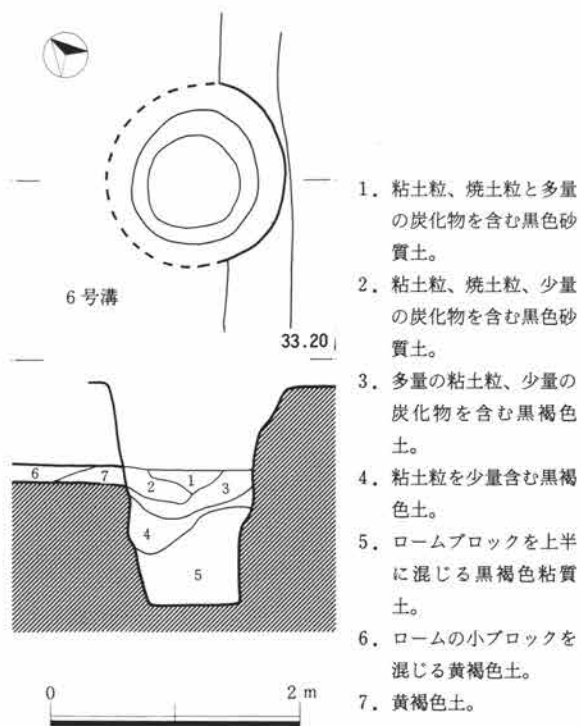
7号土壇

7号土壇は、発掘区のほぼ中央に位置する6号溝と重複して検出された。6号溝よりも後出する遺構である。発掘開始時に遺構の存在をつかみ得ず、6号溝底より上位は図上復元である。

平面プランは直径1mの円形を呈し、断面形は、上位がラップ状に開く筒形である。底面も平らであり、

埋土は、地山の黄褐色粘質土と黒褐色土の混土であるが、その混ざり具合で分層できた。又、どの埋土層においても炭火物粒が混入し、1層においては、多量の炭化物粒と焼土粒が看取できた。

出土遺物はほとんどなく、時期を決定するのは困難であるが、後述の8号土壇との形態や埋土の類似性からして、8号土壇と同じ中世の遺構と考えた。平安時代の6号溝に後出することからも、肯首できよう。



1. 粘土粒、焼土粒と多量の炭化物を含む黒色砂質土。
2. 粘土粒、焼土粒、少量の炭化物を含む黒色砂質土。
3. 多量の粘土粒、少量の炭化物を含む黒褐色土。
4. 粘土粒を少量含む黒褐色土。
5. ロームブロックを上半に混じる黒褐色粘質土。
6. ロームの小ブロックを混じる黄褐色土。
7. 黄褐色土。

第156図 7号土壇実測図

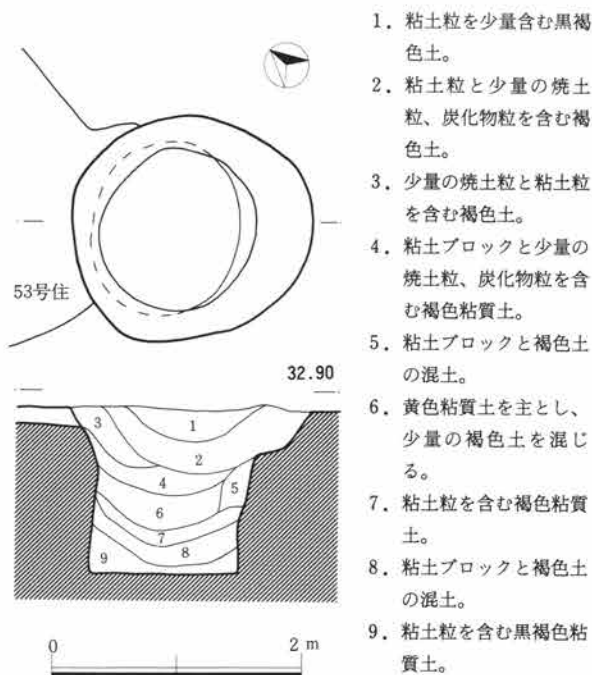
9号土壇

9号土壇は、発掘区のほぼ中央よりやや東に位置する平安時代の53号住居址のカマドを壊して掘られている。

平面形はやや南北に長い楕円形で、断面は筒形の下半分に、広く広がる上半部がつく。下半部の北西半分は、オーバーハングしている。底面は平らである。

埋土は、地山の黄褐色粘質土と黒褐色土の混土であり、7号土壇ほどではないが、上半の各層に炭化物粒を含んでいる。

出土遺物がなく時期は明確でないが、後述の8号土壇との形態や埋土の類似性からして、中世の遺構と考えられよう。



1. 粘土粒を少量含む黒褐色土。
2. 粘土粒と少量の焼土粒、炭化物粒を含む褐色土。
3. 少量の焼土粒と粘土粒を含む褐色土。
4. 粘土ブロックと少量の焼土粒、炭化物粒を含む褐色粘質土。
5. 粘土ブロックと褐色土の混土。
6. 黄色粘質土を主とし、少量の褐色土を混じる。
7. 粘土粒を含む褐色粘質土。
8. 粘土ブロックと褐色土の混土。
9. 粘土粒を含む黒褐色粘質土。

第157図 9号土壇実測図

8号土壇▶出土遺物P.165 第160図

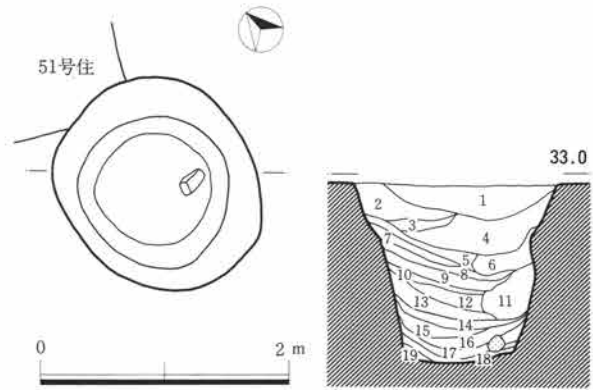
発掘区のほぼ中央の6号溝の東3mのところで検出された。平安時代の51号住居址の南東隅を切っており、住居址より後出の土壇である。

平面プランは、長径1.5m、短径1.3mの楕円形を呈している。断面形は、やや上方に開いた筒形であるが、上部約 $\frac{1}{3}$ はさらにラップ状に開いている。底面は整えられており、平らである。

埋土は、層厚5～10cmの薄い互層と、地山の崩落によるブロック状のものの重なりである。互層は、黒褐色土と黄褐色の粘質土や砂質土（地山）の混ざり具合により分層できた。この状態からすれば、自然に埋没したというより、掘りあげた土を少しずつもどしたと考えられる。また、この互層の上方および下位の土壇底面付近には炭化物の層があり、特徴的である。

遺物は、土師器の甕形土器や杯形土器の破片などが埋土中に混ざりこみながら出土したが、土壇の時期を示すのは、その中でも最も新しい第160図に示した陶器類と考えられる。1は白磁の皿で、12・3世紀のものである。2は、渥美焼か常滑焼の甕で、13・14世紀のものと考えられる。また、底面近くに、石が1個埋められていた。

本土壇は、7、9号土壇と同形態を示し、4号溝に近い時期の遺構であろう。



1. 黒褐色土。
2. 炭化物を少量含む褐色土。
3. 炭化物を多量に含む褐色土。
4. 焼土粒、炭化物、黄褐色土粒を多量に含む黒褐色土。
5. 炭化物を多量に含む褐色土。
6. 黄褐色粘質土と黄色砂質土の混土。
7. 黄褐色土ブロックと、少量の炭化物・焼土を少量含む黒褐色土。
8. ほぼ同じ土層で、しま状に埋まる。
9. 黒褐色土。
10. 黒褐色土。
11. 黒褐色土粒を含む黒褐色土。
12. 黄褐色粘質土と黄色砂質土の混土。
13. 黒褐色土を混じる黒褐色土。
14. 黒褐色土。
15. 黒褐色土。
16. 炭化物を多量に含む黒褐色土。
17. 黒褐色土と黄褐色土の混土。
18. 炭化物。
19. 黄褐色土。下面に炭化物層がある。

第158図 8号土壇実測図

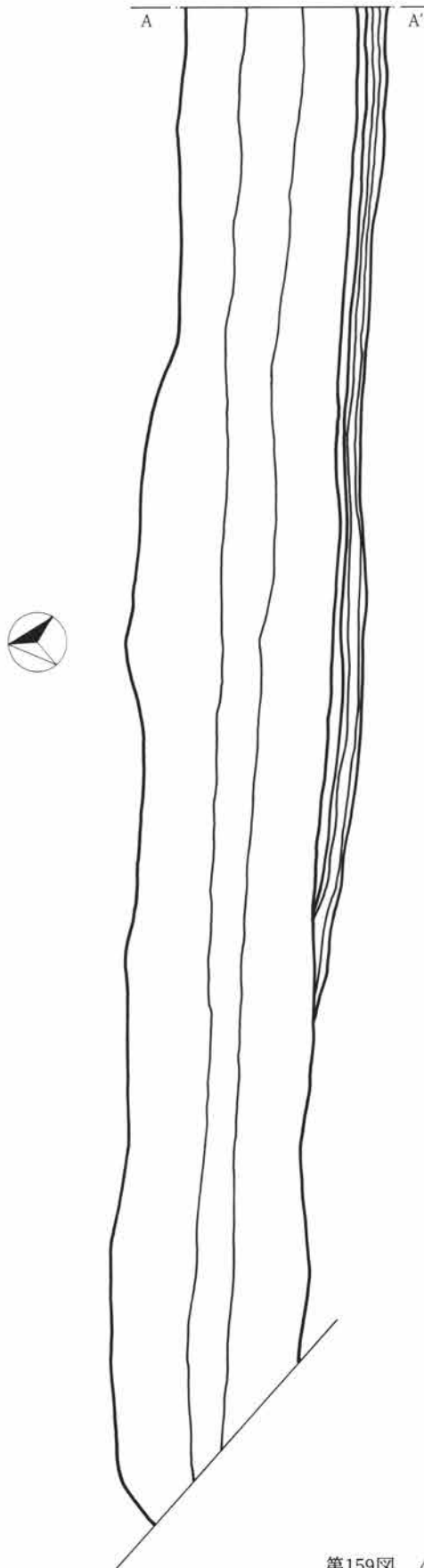
4・5号溝▶出土遺物P.165 第160図

1号溝の南約8mに平行した東西走向を見せる大型の4号溝と、4号溝の南側に沿うようにある小規模の5号溝である。両者は一部で重複しているが新旧関係は明らかにできなかった。4号溝の存在を前提として5号溝が掘られた可能性が強いことから、5号溝が時期的に後出すると考えている。

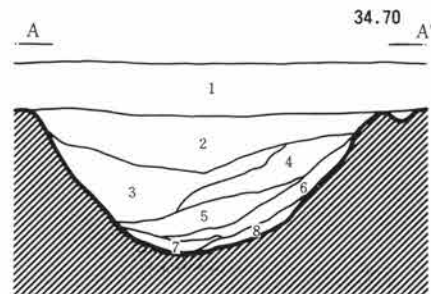
4号溝は、幅、上端で4.2m、下端で約90cm、深さ約1.5mの規模を有している。約45°の傾斜を有しており、底面は舟底状を呈している。長さ約33mにわたって検出したが、その範囲では、底面のレベルは不規則ではあるが、大きなばらつきはない。溝への埋土の埋没状況からは、水が流れていたり、常時水をたたえていたような痕跡は見当たらない。検出した溝の両端部では、溝が終息する痕跡は見られないことから、調査区域外の東西へもまだ連なっていくものである。

出土遺物には、鎌倉時代の青磁の碗破片があり、溝の下限を示しているものと思われる。

III 検出された遺構と遺物



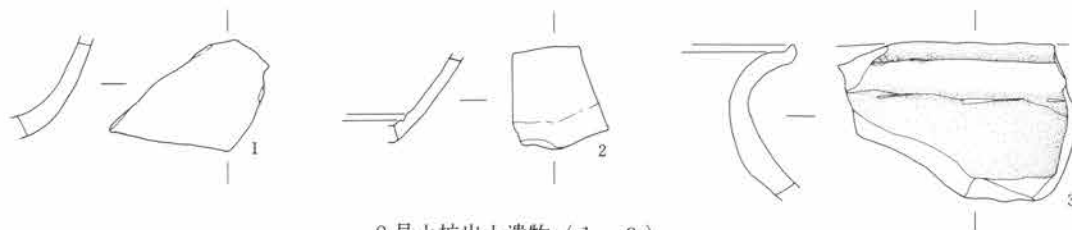
1. 表土（耕作土）
2. 軽石を含む黒褐色土。
3. 軽石、黄褐色土粒を少量含む黒褐色土。
4. 2と、黒色土ブロック、黄褐色土ブロックの混土。
5. 礫を混じる黄色砂質土。
6. 黒色土。堀の中央は粘質。
7. 粒子の細かい褐色砂質土。
8. 黄褐色粘質土粒を混じる黒褐色粘質土。



第159図 4号溝・5号溝実測図

5 中世の遺構と出土遺物

本溝は1号溝より規模の上では小さいものの、大型の部類に属するものである。位置関係、規模、走向等からするならば、1号溝の埋没後に掘り返しとしてつくられたものと考えられる。



8号土壇出土遺物（1、3）
第160図 4号溝出土遺物（2）

8号土壇址出土遺物観察表（第160図・P L37）▶本文 P. 163・第158図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
1	皿（白磁）	体部破片。	埋土中。	①夾雑物なし。 ②淡灰色。	内面・外面上半施釉。外面下半露胎となる。内面底に界線の劃文あり。 13世紀代の舶載白磁皿。
3	甕 （焼締陶器）	口縁部破片。	埋土中。	①灰色の鉱物粒多く含む。 ②灰色。	内・外面におリーブ色の白然釉かかる。器表面は酸化気味である。製作地は渥美焼か常滑焼か常滑焼か不詳。 口縁部の形状は13世紀後半から14世紀前半の口作りの特色に類す。

4号溝址出土遺物観察表（第160図・P L37）▶本文 P. 163・第159図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土 ②色調	成・整形の特徴
2	碗（青磁）	体部破片。	埋土中。	①夾雑物なし。 ②淡黄灰色。	内・外面に青磁釉がかかり、細貫入が入る。貫入の方向性は右よりである。龍泉窯系青磁と考えられ、13～14世紀の所産と推定される。

VI 成果と問題点

賀茂遺跡のある太田市東部の沖積地帯は、昭和40年代後半からほ場整備事業も実施され、それに伴って埋蔵文化財の発掘調査が数カ所で行なわれている。さらに今回、国道122号線の改良工事に伴って本遺跡の他、4地点の発掘調査が実施された。これらの遺跡は、1つの地形単位である沖積扇状地に立地し、それぞれ有機的な関連をもって地域を構成する遺跡群と考えることができる。

先のII章は、このような視点で、賀茂遺跡の居住域の変遷について、他の太田東部遺跡群の居住域・生産域と関連させながら述べたものである。これは、賀茂遺跡がどのような遺跡であるかを周辺の遺跡と比較・検討し地域発達史として総合化するなかで、明らかにしようとするものである。発掘調査された遺跡も少なく、学術的な分布調査も行っていない本地域において、現時点で地域発達のプロセスを定式化したものとして述べることはできない。したがってII章は、本調査報告書の総論であるとともに、今後の地域研究の導入であると考えている。

これに対し、本章では、遺跡内での分析により抽出し得た諸事項と、なお今後問題となる点を述べて、賀茂遺跡発掘調査報告書のまとめとしたい。

1 賀茂遺跡出土の平安時代の土器について

賀茂遺跡の土師器を出土する住居址は、古墳時代の中期から平安時代後期にまでわたっており、出土遺物も多岐にわたっているが、特に検出された遺構数の最も多い平安時代については、出土土器がまとまった資料を提供してくれた。本稿においては、賀茂遺跡出土の平安時代の土器について概観して、そのおおまかな組成の変遷を提示して、最近、県内で整理の進んできている当該期の^{#1}編年と対比する準備としたい。

平安時代になると、日常什器、特に杯形土器について成形・調整・焼成等の技法上のバラエティが多くなり、それまでの土師器・須恵器の分類を外見からだけではむずかしくなってくる。その多様性は土器生産の集団の盛衰や流通関係などとも関連し、単に土器の分類だけにとどまらない。とりあえず本報告においては、ロクロ成形で還元焰焼成されているものを須恵器、ロクロ否使用の成整形で酸化焰焼成されているものは土師器と考えた。ロクロ成整形し酸化焰焼成される一群の杯形土器については、従来ロクロ土師器とか土師質土器といわれているものであるが、群馬県内においても未だ呼称と背景の解釈が定式化していないと判断されるので、本書では特に名称を与えず、土器の特徴を述べるにとどめている。

さて、第161図は、賀茂遺跡出土の平安時代の土器を、型式組列を縦軸に、共伴遺物を横軸にとって並べてみたものである。ここに採用した住居址は、杯・椀形土器と甕・釜形土器と一緒に出土した住居址に限っており、全検出住居址49軒中12軒である。このうち重複例は23号住居←24・25号住居址のみである。土器群の変化と住居址ごとの土器組成とから、7期に分けられる。^{#2}

I期は、底径が口径に比して大きい須恵器の杯形土器、杯部が浅く篋削りで調整された土師器の杯形土器と、大きくはっきりした「コの字」状口縁の台付甕形土器のセットの時期である。

土師器杯形土器は、真間式期の盤状の杯形土器からの流れにあるが、やや深くなり、杯部側面に指押えの調整がされることが特徴的である。I期には、これらの器種の他に、ロクロを使用し、酸化焰焼成された杯形土器が伴う。器形は同時期の須恵器のものに近いが、内面を黒色処理し、篋磨きを施す技法は土師器の

ものといえる。本期の時期は、須恵器の年代観等から、9世紀前半と考えられる。

II期は、須恵器の杯形土器と、高台付の椀形土器、土師器の杯形土器とコの字状口縁甕形土器のセットの時期である。須恵器の杯形土器は、I期の杯形土器がひき続いて存在するが、新たに、須恵器の器形をうつしたのもつくられるようになる。甕形土器はきれいな「コの字」を呈し、曲型的なものである。I期に存在した内黒土器は、本遺跡発掘資料のなかで、II期に入る資料はなかったが、本来的には継続すると考えられる。本期の時期は9世紀後半代であろう。

III期は、須恵器の椀形土器、高台付の椀形土器、土師器の椀形土器、コの字状口縁甕形土器に、ロクロ使用、酸化焰焼成の椀形土器が加わる時期である。須恵器の高台付椀形土器は、丸みを帯び、口縁部は外反するようになる。土師器の杯形土器には、高台付のものが出現し、甕形土器は、口縁のコの字がくずれてくる。内黒のロクロ使用の土器は、丸くなりきれいな椀形を呈するようになる。本期に羽釜の明確な資料は得られていない。時期は900年前後と考えられる。

IV期は、III期のセットに、ロクロ成形、酸化焰焼成の高台付椀形土器と、羽釜が加わる時期である。本期についての明確な土師器杯・椀形土器の資料は、賀茂遺跡では得られなかった。須恵器は最後の様相を示し、高台も丸くなっている。ロクロ、酸化焰焼成の椀形土器は、内黒の有無にかかわらず、高台がついた資料がみられるようになる。羽釜は、口縁部が直立する形であり、県内における古い一群ではない。焼成も酸化焰によるもので、土師器のようである。破片であるが、住居址から口縁部が内湾した須恵器の羽釜が検出されており、本地域における羽釜の出現はIII期に溯る可能性もある。時期は10世紀前半と考えられる。

V期は、須恵器の椀形土器を伴わない時期で、椀形土器は、酸化焰・ロクロ使用の土器と、土師器の椀形土器に整理される。これらは、大型と小型に明瞭に区別されるが、内黒については、本期に小型のものをみつけることができなかった。煮沸用の土器には、新たにいわゆる土釜が、セットに加わる。厚手であるが口縁にはあまり外反せず、ゆるやかな屈曲をもっている。

VI期は、高台付椀形土器の高台部の変化が特徴的である。土師器は、高台付のものは検出されない。内黒・ロクロの土器については、同様な変化を示している。甕形土器は、大きく口縁が外反する土釜と、羽釜が共存している。時期は11世紀前半であろう。

VII期は、いわゆるカワラケの時代であるが、11世紀後半と考えられ同じ住居址に土師器の小型杯形土器が共伴しており、土師器が11世紀まで残存することを示している。いわゆるカワラケにも、やや丸みをもつ浅いものと、直線的なものとがあり、VI期の酸化焰・ロクロ使用の杯形土器とのつながりが興味あるところである。

以上、賀茂遺跡出土の平安時代の土器について、I～VII期まで、その変遷を概観してきた。この分類は、あくまで土器組成の変化を整理したにすぎないので、即編年というものではない。東毛平野部の平安時代におけるおおまかな土器の流れとして理解したい。最後に、県内で最近示された編年案と比較して気づいた点をまとめてみると、

- ① 11世紀後半まで土師器の杯形土器が残ること。
- ② ロクロ使用・酸化焰焼成の椀形土器は、9世紀前半に出現し、その系譜は、土師器杯形土器と同様に11世紀まで追えること。
- ③ 10世紀中葉になると、椀形土器は小型・大型の区分が明確になり、それぞれの型式が、大・小の型をもち、11世紀後半には小型のものだけが残っていくこと。

以上3点くらいに集中できるだろう。須恵器の杯形・椀形土器や、煮沸形態の土器の変遷は、中毛の他遺跡

IV 成果と問題点

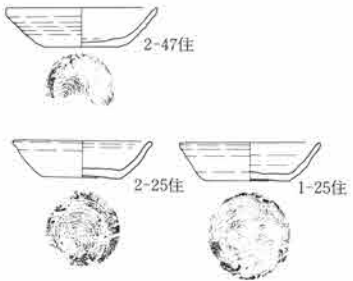


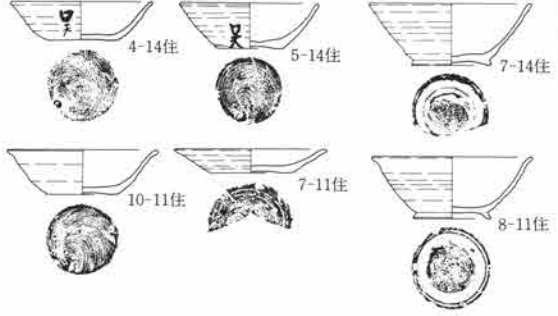
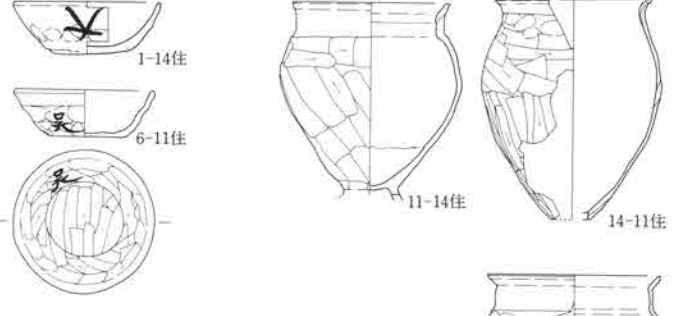
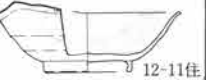







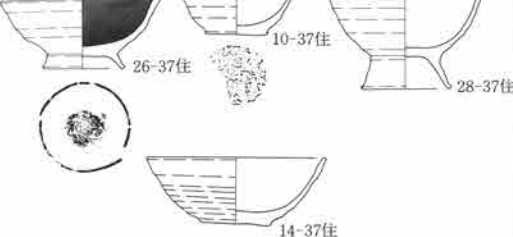
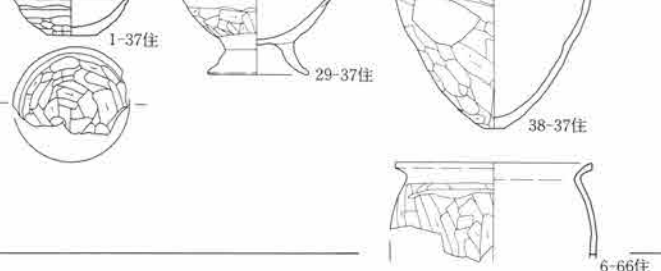
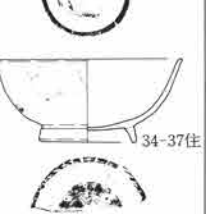


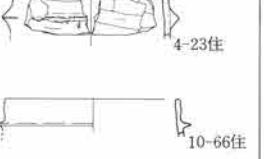



と大きな相違はないが、本遺跡の出土土器には、土師器の椀形土器の残存に大きな特徴が認められる。周辺の小町田遺跡や、大塚・間之原遺跡などの出土遺物についても同様な傾向がある。これについては、埼玉県や栃木県との比較検討が今後必要であろう。

また、最近「土師質土器」と呼ばれる土器について、本報告では、前述したようにその名称を敢えて使用せず、「ロクロ成整形、酸化焙焼成の土器」（観察表では＊印）と表記した。それは、その提唱者である中沢悟氏が、清里陣馬遺跡の報告書において、9世紀中葉以降土師器杯形土器が出土しないことから、土師器生産の消滅と、須恵器工人の変質を想定して使用した名称であるからである。本遺跡出土の資料は、「土師質土器」の特徴の1つである焼き締まりも顕著でなく、土師器の残存により、中沢氏のこのような背景も、見出し得ない。関東平野のレベルで見れば、南関東では「ロクロを使用した土師器」という概念は平安時代初頭では一般的であり、本遺跡の東毛における空間的位置を考えあわせれば、本遺跡出土のロクロ成整形・酸化焙焼成の土器は、ロクロを使用した土師器であるとの見方も成り立つだろう。むしろ国府域に立地する清里陣馬遺跡や、その周辺の有馬条里遺跡などのあり方に地域性（特殊性）が看取できるのかもしれない。この土器群についての概念規定やその背景を明らかにすることは、今後の大きな課題であろう。

奈良・平安時代の土器は、生産や流通の背景を抜きにしては理解できない。本遺跡出土の土器からそこまで言及できる段階でもないが、今まで不明確であった東毛地域の平安時代の土器について若干の整理を試みた。今後の本地域の土器研究の一資料となれば幸である。

なお、本稿をまとめるにあたり、大江正行・中沢悟・飯田陽一の各氏より御意見を賜った。記して感謝する次第である。

- 注1 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」1978（文献22）
井上 太「古墳時代から平安時代の土器について」1981（文献23）
山下歳信「竪穴住居と出土土器について〈編年試案〉」1981（文献24）
中沢 悟「出土土器の分類と編年」1981（文献25）
綿貫綾子「出土土器の分類と編年」1983（文献26）
宮田 毅「まとめ」1983（文献27）
- 2 この7期区分は、土器組成の変遷を概観したもので、実年代については、先学の編年案に準拠している。中沢氏の5期区分と比較すれば、本遺跡Ⅰ期は清里陣馬遺跡の1期、以下、Ⅱ期が2期に、Ⅲ・Ⅳ期が3期に、Ⅴ期が4期に、Ⅵ期が5期に、Ⅶ期が6期に対応すると考えられる。

800年 I	須恵器 	＊ ロクロ使用酸化焙焼成の土器 	土師器 	灰釉陶器
II				
900年 III				
IV				
1000年 V				
VI				
1100年 VII				

2 賀茂遺跡の集落について

本遺跡の調査が幅20m、長さ300mほどの調査の対象地であることからして、各時期について集落の全貌を検出し得ていないことは言を俟たない。事実、いくつもの住居址が調査予定地外にかかるため部分的な調査となっている。また、近年の北側隣接地での緊急調査でも平安時代の住居址が確認されている^{註1}。また、地形的に見ても、東側の低地部分に沿って、集落が拡がるのが予想される。一方、東西については本調査により集落の限界がほぼ把握できたといえよう。

かかる調査上の制約下で、本遺跡の集落構造について一定の特色を抽出することは無謀なことかもしれない。しかし、今後とも続く、かかる行政的調査の中で、集落論に関して、断片的とはいえ、一定の方向性、問題点を摘出し、長期的展望の中で、分析資料を集積していくことも、必要かと思われる。

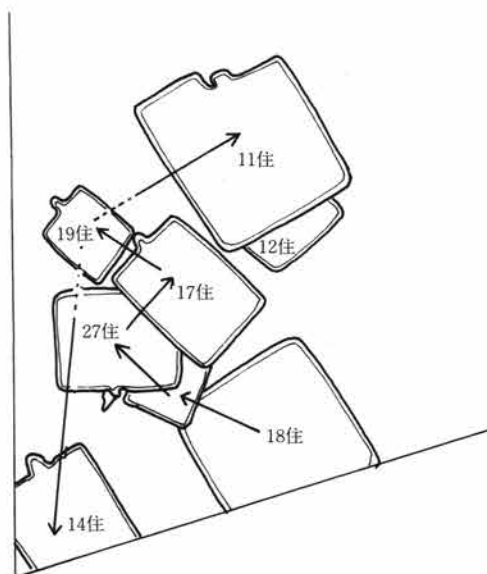
本節では、主として平安時代に限って賀茂遺跡の集落構造の特色について述べてみたい。

(1) 集落の継続性

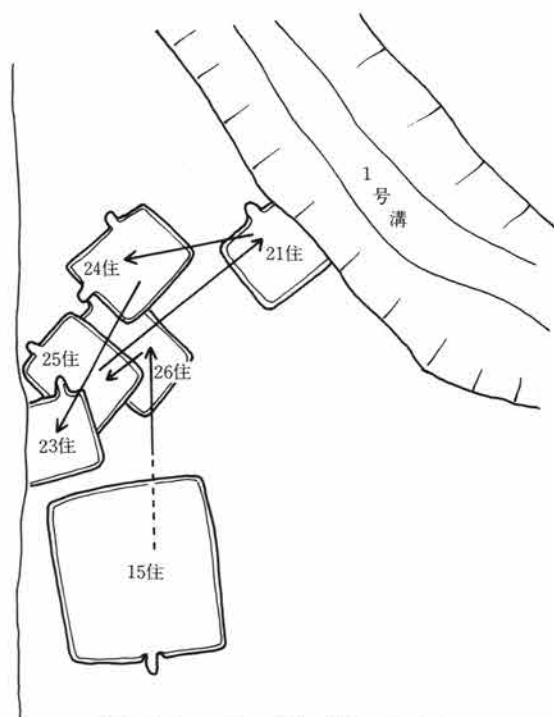
賀茂遺跡の平安時代の集落立地は、石埴時代後期後半以降、奈良・平安時代と継続する地域である。具体的に見ていくと、遺跡地面より部分で、古墳時代後期末（鬼高Ⅲ式期）の15・18・16・27号住居から、奈良時代前半の30・32・33号住居、さらに奈良時代後半の17・26号住居を経て平安時代の集落形成へと続いている。

住居址が重複関係あるいは近接関係にある、18号住居→16号住居→27号住居→17号住居→19号住居→()→11・14号住居、15号住居→()→26号住居→25号住居→21号住居→24号住居→23号住居の変遷は、居住者相互が有機的関連をもつ一系の推移であることを窺わせる。

賀茂遺跡に先立ち調査を実施した小町田遺跡について見ると、鬼高Ⅰ式の段階の中規模集落の形成から一定の空白期間を経て、奈良時代に突如として溝に囲まれた集落が整然として出現し、平安時代の集落へと継続していく^{註2}。集落立地に、律令体制の整備に関連してか、行政的要因に基づく規制が窺われ、賀茂遺跡例とは好対照である。



第162図 古墳～平安時代の住居変遷(1)



第163図 古墳～平安時代の住居変遷(2)

Ⅳ 成果と問題点

(2) 平安時代における集落変遷

前節で賀茂遺跡の平宮時代に属する土器群が、7期に区分できることを述べた。この結果をもとに出土土器から各住居址を区分してみると、第164図のようになる。

I・II期（数字は前節の平安時代の土器編年区分に対応、以下これに準ずる）に属する住居址は、遺跡地西よりに集中する傾向があり、また東よりの台地縁辺部に散在的に認められるが、遺跡地中央部分には、広く空白部分が存在する。前述したように、古墳時代後期から奈良時代の集落域をI・II期が踏襲したものといえよう。

III期以降に致るまでの住居址は、前代まで空白であった遺跡地中央部分に集中して分布し、明らかな差違を示している。この遺跡地中央よりの地域で、住居の時期を示す顕著な遺物の認められない41・46・54・67号住居についても、41・54号住居は方位・住居形状からIV期以降、46号住居は39号住居との類似関係から、VII期前後、67号住居は66号住居（VI期）以降と考えられることから、前に示した分布傾向は変わらない。

6号溝は、出土遺物からIII期の掘鑿が推定される。6号溝東側に近接してIII期の48・49・51・52号住居が所在し、また、55・58・59号住居もこれらの東側に近接している。これらIII期の住居群と6号溝の直接的連関が推される。溝の規模・形状等からして、集落内の単位群を画する溝であろうか。

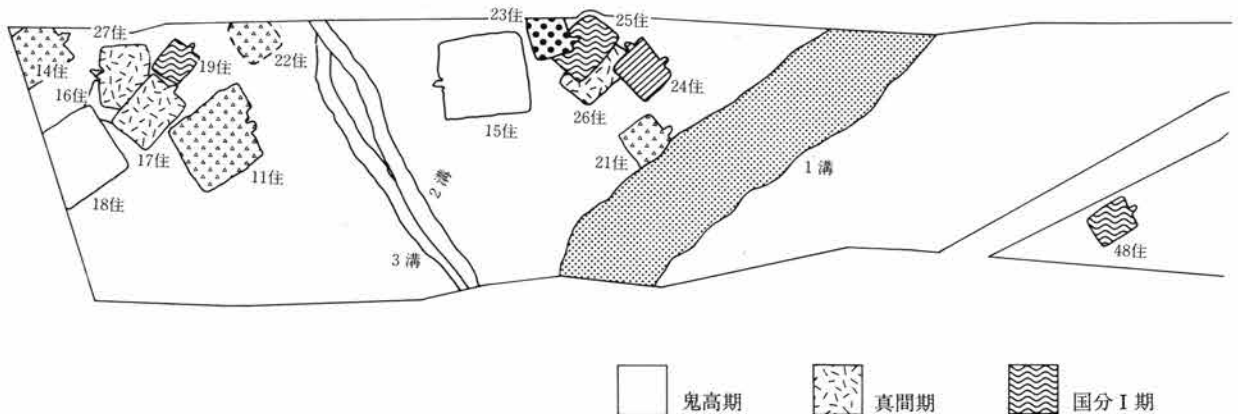
I号溝は、II期の21号住居を切っており、溝底面より、80cm上に浅間B軽石層の純層が確認されている。本溝の時期については、IV期以降の所産と考えられ、浅間B軽石降下時（1108年）^{註3}にも、溝の形状をほぼ残していたといえよう。

IV期からVII期にかけての住居は23号住居を除きすべて1号溝の東側に所在していることは、溝の機能を考えていく上で示唆的である。幅8m、深さ2mで、相当の長さにわたりその存在が予想される本溝の場合、集落全体を画する溝であった可能性が強い。

I・II期とIII期以降の集落域の差違には、いかなる歴史的現象が介在しているのであろうか。I・II期群とIII期以降群が直接的に結びつくものであるならば、集落域の移動、溝等の掘鑿による集落域の整備が想定される。また、耕作地に近い東よりへの移動であったとも考えられよう。

(3) 卓越した住居の存在

一般的には、奈良時代以降、住居規模の小型化が進み、平安時代には一般とその傾向が強くなり大型住居

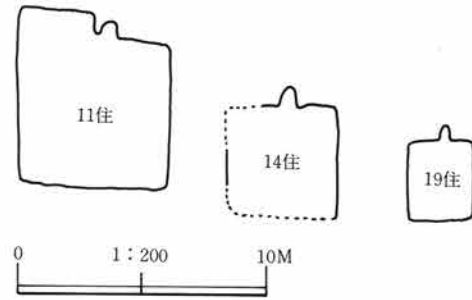


が完全に消失するとされている。

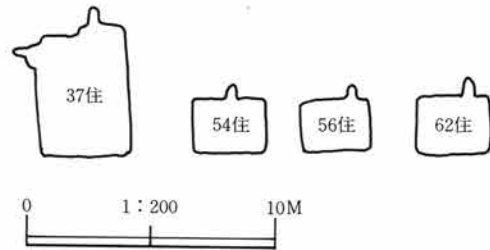
賀茂遺跡における11号住居あるいは37号住居は、古墳時代の住居にも匹敵する規模のものであり、前の通説には適合しないものであった。

11号住居は、近接する同時期の23号住居・14号住居等とともに、集落における単位群を構成するものと思われる。11号住居の居住者が、他住居に対し、きわめて優勢であったことを窺わせる。

本遺跡では、IV期以降、53・62・54・56号住居に見られるような、2×3m前後のきわめて小型化した住居が見られる。これらの住居にも、カマドは必ず有していることから、一生活単位としてあったことは明らかである。一方、これらの小型住居の行なわれた時期に、この3倍以上の面積を有する37号住居のごとき大型のものが存在したことは注意しなければならないと思われる。37号住居における灰釉陶器の集中的掌握等から考えても、きわめて卓越した勢力が一集落内にも存在したことが窺える。



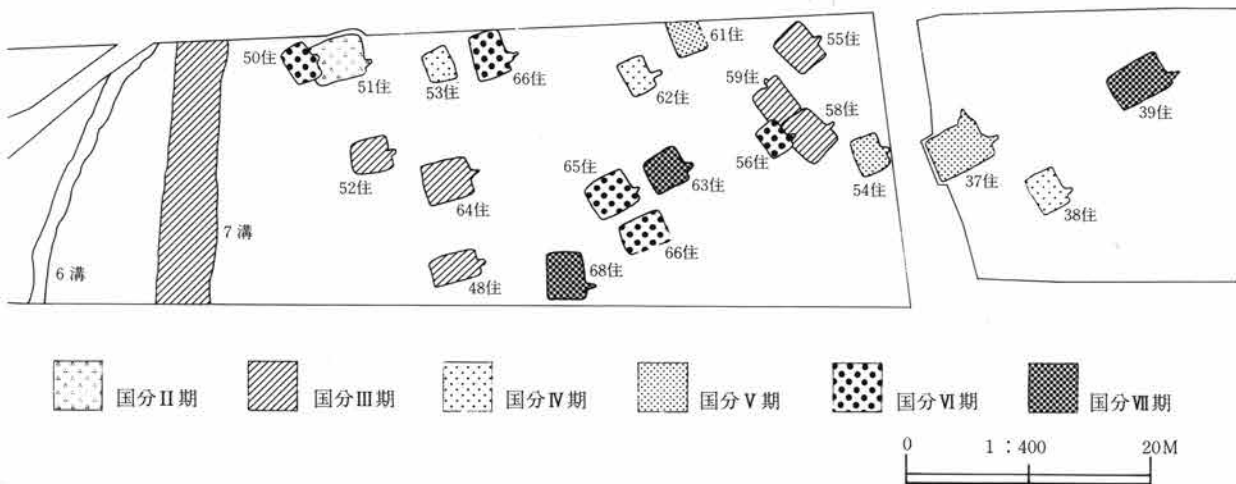
第165図 II期の住居規模



第166図 IV～VI期の住居規模

賀茂遺跡の平安期の集落構造の特色を見ていくと、各時期ごとに一様でないことが明らかになった。各時期ごとの差違、変遷の背景となった歴史事象について、現段階では具体的にあとづけることはできない。周辺地域の同時期の遺跡の存在状況、当時の自然環境の復元的研究、古代史研究の成果等により考察していくことが今後の課題と思われる。さいわい本遺跡の周辺地域では、122号小町田遺跡、太田東部土地改良事業に関連して清水田遺跡、塚井遺跡、小町田遺跡等の発掘調査が実施されている。今後、これら諸遺跡について調査報告書が公開されていく中で、調査成果を総合化することにより、一定地域の歴史的空間がより具体的なものとして把握できるものと思われる。

群馬県内において近年実施されている夥しい数の集落址の発掘調査においては、平安期に属するものがそ



第164図 賀茂遺跡の時期別住居分布（部分）

Ⅳ 成果と問題点

の大半であるといっても過言ではない。僅かに残る戸籍・計帳を基礎資料として進められている古代史研究の成果には一定の限界があると思われる。それだけに、吟味された考古学的資料の量的集積は、平安社会理解への重要な基礎資料を呈示できるものと思われる。

註1 県道龍舞・山前線の拡幅工事に伴う確認調査をされた群馬県教育委員会西田健彦氏の御教授による。

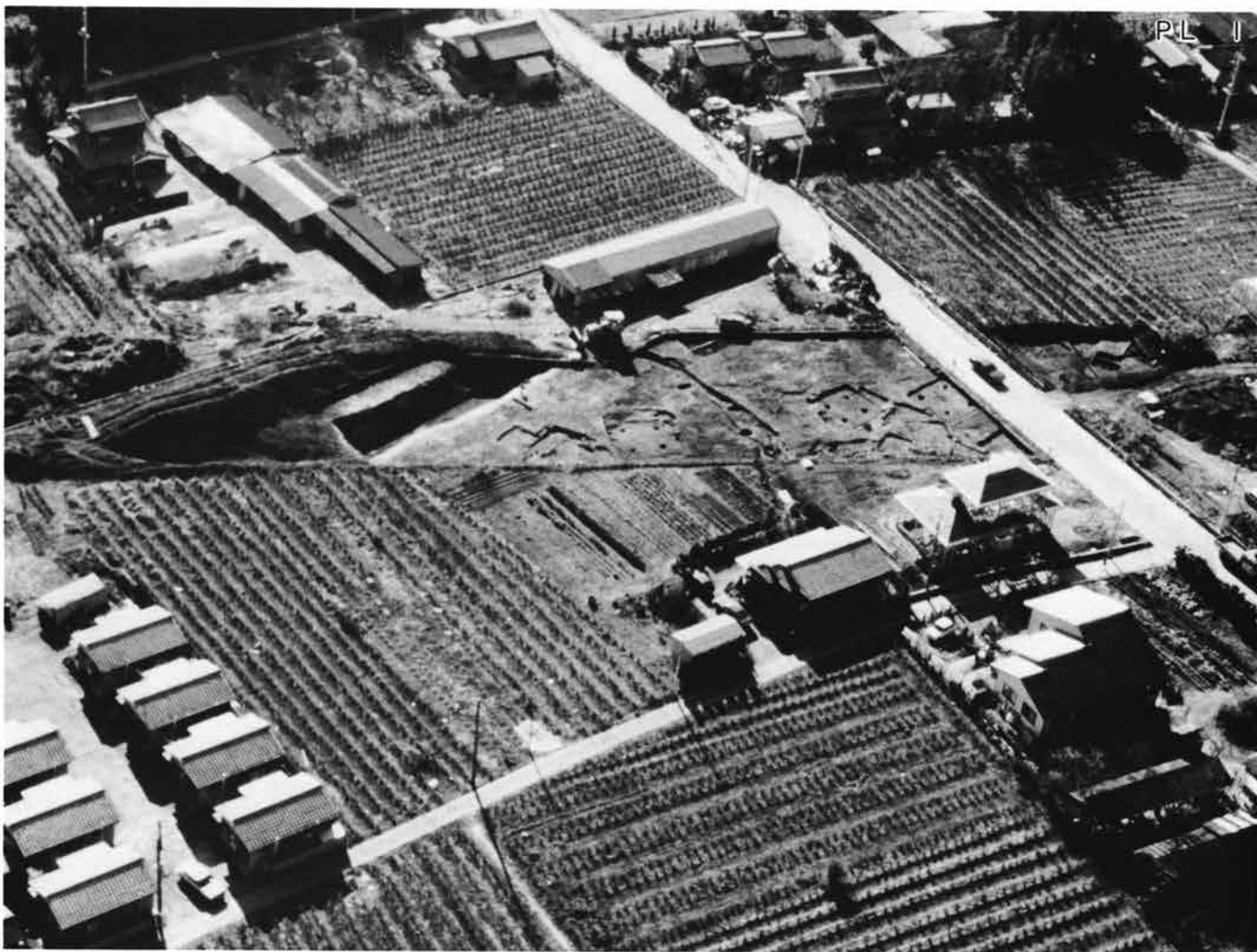
2 概略は文献1によるが、近日中に本報告刊行の予定である。

3 新井房夫1979(文献28)による。

参考文献

- 1 右島和夫・藤巻幸男・柏崎敦子 『小町田B遺跡・賀茂遺跡—国道122号道路改良地域埋蔵文化財発掘調査略報』(助群馬県埋蔵文化財調査事業団1980(昭和55)年
- 2 大木紳一郎編『庚塚・上・雷遺跡—国道122号(太田バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書I』(助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1980(昭和55)年
- 3 石塚久則 a『清水田遺跡、塚井・塚廻古墳群—県営太田東部地区ほ場整備事業に伴う「太田東部遺跡群」昭和51年度発掘調査概報』群馬県教育委員会 1977(昭和52)年
b『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会 1980(昭和55)年
- 4 飯塚卓二 『小町田遺跡—昭和52年度太田東部地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要』群馬県教育委員会 1978(昭和53)年
- 5 能登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫 「赤城山南麓における遺跡群研究—農耕集落の変遷と溜井灌漑の出現—」『信濃』第35巻4号 1983(昭和58)年
- 6 能登 健・小島敦子 「弥生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』1984(昭和59)年
- 7 野村 哲編 『群馬の地質をめぐって・日曜の地学5』筑地書館 1978(昭和53)年
- 8 木村喜雄・野村 哲・中島啓著 『群馬のおいたちをたずねて(上)』上毛新聞社 1977(昭和52)年
- 9 大地のあゆみ編集委員会編 『大地のあゆみ』上毛新聞社 1982(昭和57)年
- 10 沢口 宏 a「大間々扇状地の地形発達史—予報—」群馬県高等学校社会科研究会会誌第7号 1966(昭和41)年
b「渡良瀬川扇状地とその教材化」群馬県立太田女子高等学校 1977(昭和52)年
c「第二章地形・地質」「第三章土壌と土地利用」『大泉町誌上巻』1978(昭和53)年
- 11 『群馬県遺跡地図』群馬県教育委員会 1973(昭和48)年
- 12 宮田 毅 『大塚・間之原遺跡確認調査の概要—第1次調査—』太田市教育委員会 1981(昭和56)年
『 —第2次調査—』太田市教育委員会 1981(昭和56)年
- 13 『野尻湖発掘展図録』群馬県立博物館 1981(昭和56)年
- 14 『御正作遺跡発掘調査概報』大泉町教育委員会 1981(昭和56)年
- 15 『焼山遺跡総合調査報告 第1分冊』はにわの会 1968(昭和43)年
- 16 山内清男 『日本先史土器の縄文』先史考古学会 1979(昭和54)年
- 17 石井 寛 「集落の継続と移動」『縄文文化の研究』第8巻 雄山閣 1982(昭和57)年
- 18 下村克彦 「附加条縄文に関する二、三の問題について」『土曜考古』第4号 土曜考古研究会 1981(昭和56)年
- 19 庄野靖寿他 『貝崎貝塚第3次発掘調査報告』大宮市教育委員会 1978(昭和53)年
- 20 若月省吾 『笠懸村稲荷山遺跡』笠懸村教育委員会 1980(昭和55)年
- 21 新井和之 「植房貝塚の土器とその周辺」『奈和』15号 1977(昭和52)年
「黒浜式土器小考」『日本考古学研究所集録』II 1979(昭和54)年
「黒浜式土器研究の問題点」『土曜考古』創刊号 1979(昭和54)年
「黒浜式土器小考追録(その1)」『奈和』19号 1981(昭和56)年
「黒浜式土器」『縄文文化の研究』第3巻 1982(昭和57)年
- 22 井上唯雄 「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』8号 1978(昭和53)年
- 23 井上 太 『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会 1981(昭和56)年
- 24 山下歳信 『天神風呂遺跡発掘調査報告書』大胡町教育委員会 1981(昭和56)年
- 25 中沢 悟 『清里・陣馬遺跡』(助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981(昭和56)年
- 26 綿貫綾子 『有馬条理遺跡第二分冊』渋川市教育委員会 1983(昭和58)年
- 27 宮田 毅 『大塚・間之原遺跡—川向・中西田地区(第2次)』太田市教育委員会 1983(昭和58)年
- 28 新井房夫 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』No.157 1979(昭和54)年

写真図版



1 III区 航空写真(北から)



2 III区 全景(西から)



1 J1号住居址 遺物出土状態（南から）



2 同 遺構全景（南から）



3 同 セクション



4 J2号住居址 遺物出土状態（北から）



4 同 セクション



6 同 床面上遺物出土状態（東から）



7 同 大型破片出土状態



8 同 環状石製石出土状態



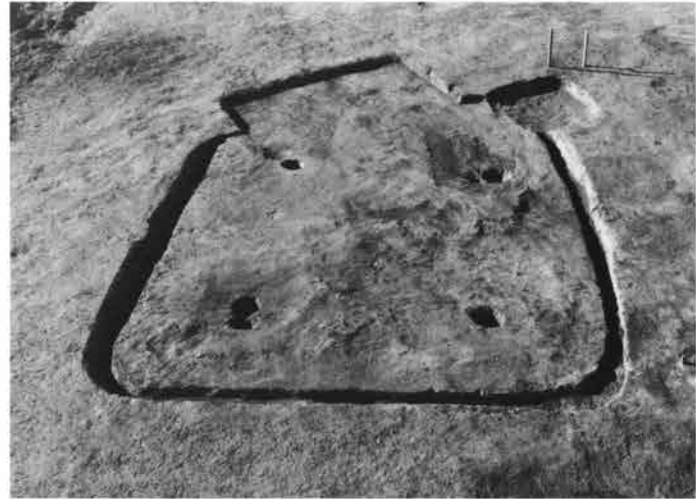
1 J 3号住居址 遺物出土状態（東から）



2 J 5号住居址



3 J 4号住居址 遺物出土状態（南から）



4 同 遺構全景



5 J 3号土塚



6 同 セクション



7 J 3・J 4号土塚



8 J 5号土塚



1 J 6号土坑



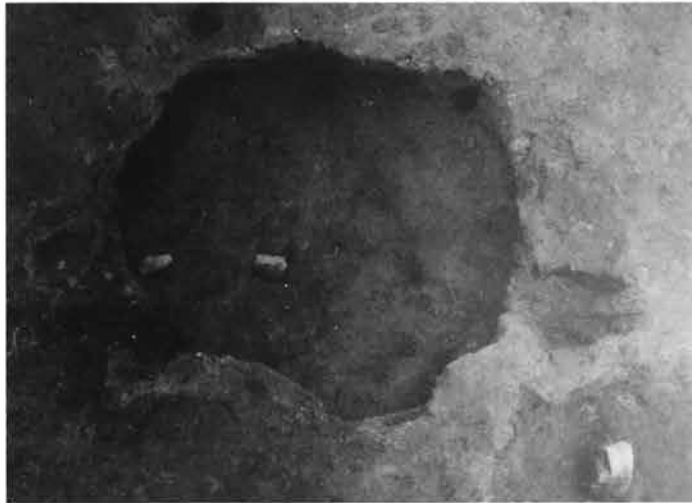
2 J 7号土坑



3 J 8号土坑



4 J 9号土坑



5 J 10号土坑



6 J 11号土坑 セクション



7 J 12号土坑



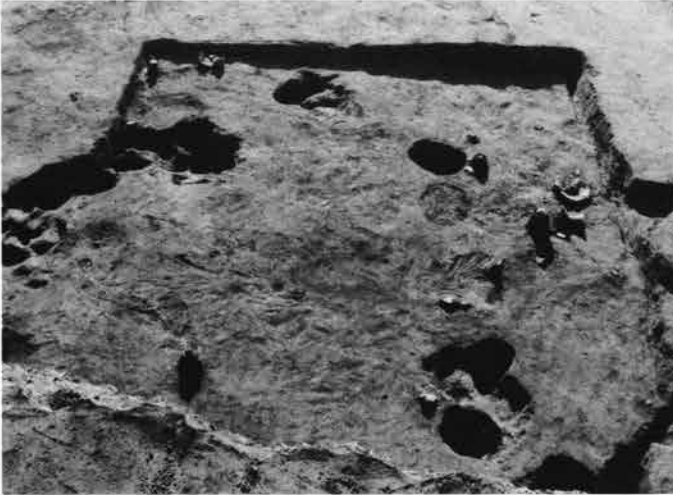
8 J 14号土坑



1 2号住居址 全景（南から）



2 同左 遺物出土状態



3 4号住居址 全景（南から）



4 同左 遺物出土状態



5 9号住居址 全景（西から）



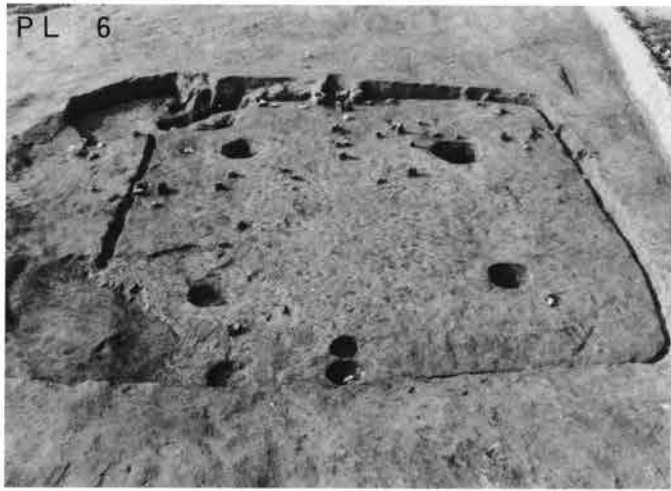
6 同左 遺物出土状態



7 10号住居址 全景（南から）



8 同左 カマド



1 15号住居址 全景 (東から)



2 同左 カマド



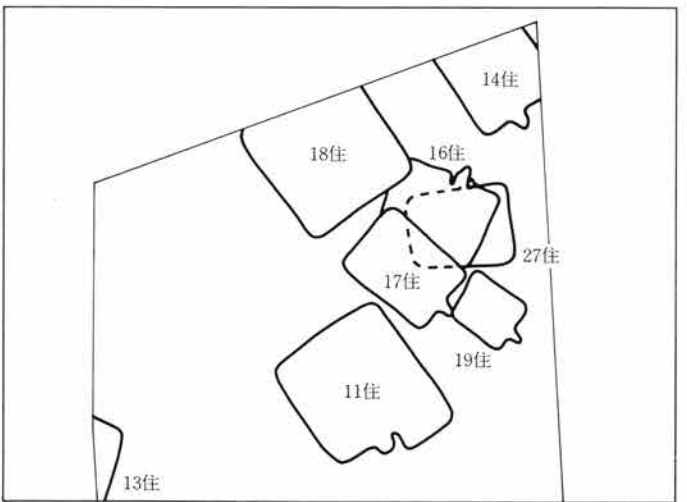
3 18号住居址 全景 (東から)



4 27号住居址 全景 (東から)



5 2・3号溝 全景 (北から)



6 同左 埋積土層断面



1 2・3号溝 遺物出土状態



2 同左 遺物出土状態



3 7号溝 埋積土層断面



4 同左 遺物出土状態



5 同上 遺物出土状態



6 16号住居址 全景



7 同右上 カマド



8 17号住居址 全景(東から)



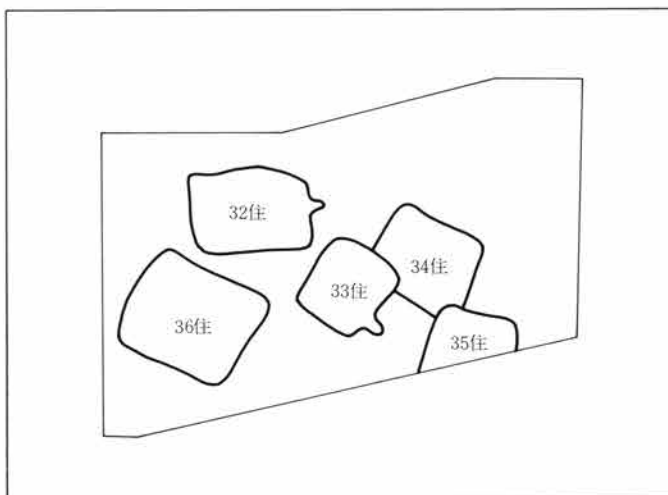
1 17号住居址 カマド



2 33号住居址 全景（東から）



3 33号住居址 カマド



4 5号住居址 全景（西から）



5 1号住居址 全景（西から）



6 6号住居址 全景（北から）



7 7号住居址 全景（西から）



1 7号住居址 遺物出土状態



2 同 左



3 11号住居址 全景(西から)



4 同左 カマド



5 同上 遺物出土状態



6 同 左



7 14号住居址 全景(南から)



8 同左 遺物出土状態



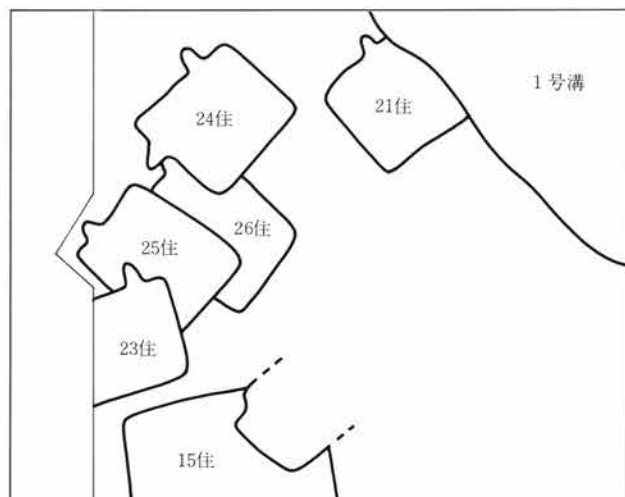
1 14号住居址 カマド 遺物出土状態



2 同左 カマド



3 24・25・26号住居址 全景（西から）



4 25号住居址 カマド



5 26号住居址 カマド



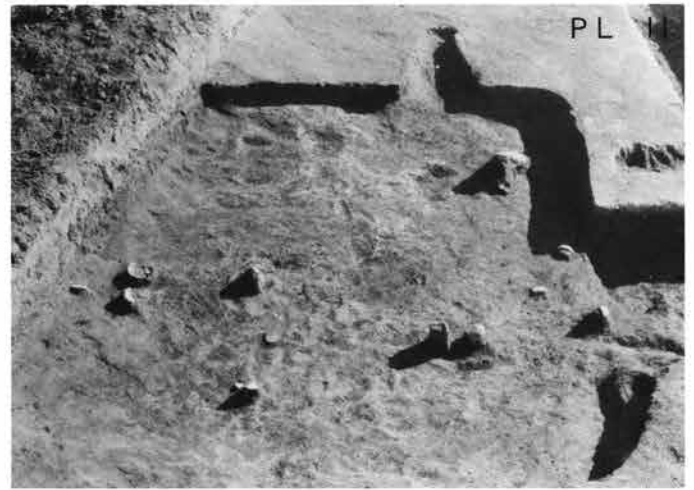
6 24号住居址 カマド



7 同左 東壁カマド



1 19号住居址 全景（西から）



2 23号住居址 全景（西から）



3 21号住居址 1号溝埋積土層



4 同左 全景（西から）



5 28号住居址 全景（西から）



6 29号住居址 全景（西から）



7 30号住居址 全景（西から）



8 31号住居址 全景



1 38号住居址 全景（西から）



2 同左 カマド



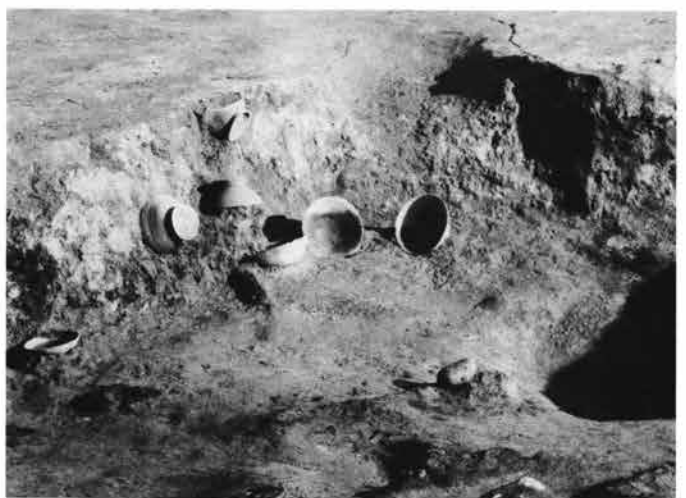
3 37号住居址 埋積土層断面



4 同左 遺物出土状態（南から）



5 同上 全景（南から）



6 同左 東壁カマド



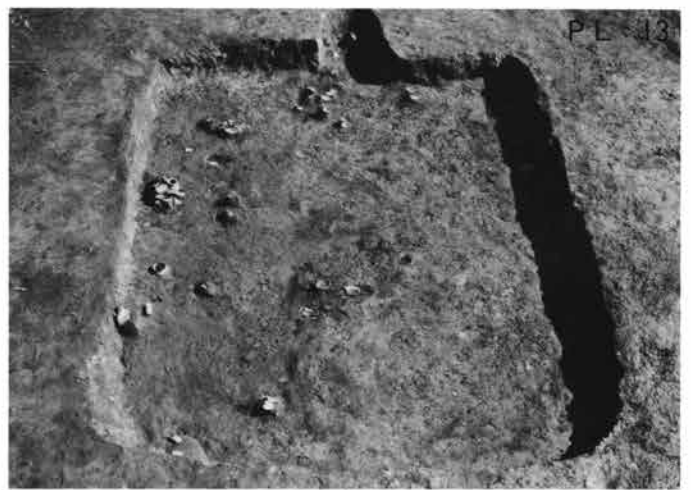
7 39号住居址 全景（西から）



8 40号住居址 全景（西から）



1 46号住居址 全景（西から）



2 47号住居址 全景（西から）



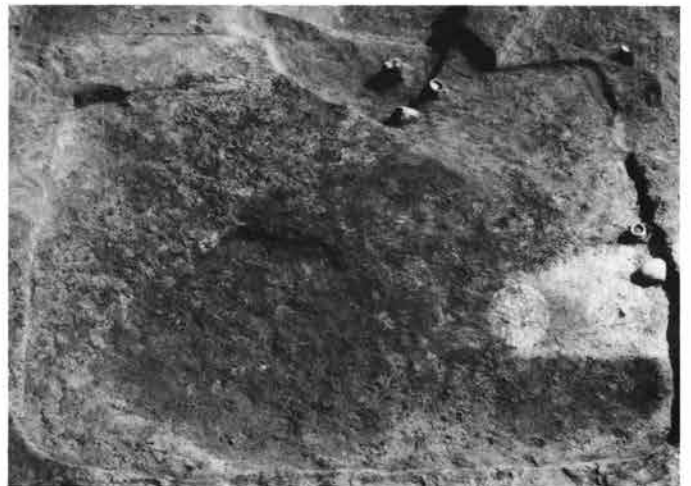
3 48号住居址 全景（西から）



4 同左 カマド



5 49号住居址 全景（西から）



6 50号住居址 全景（西から）



7 52号住居址 全景（西から）



8 同左 カマド



1 51号住居址 全景（西から）



2 同左 遺物出土状態



3 69号住居址 全景（西から）



4 同左 カマド



5 53号住居址 全景（西から）



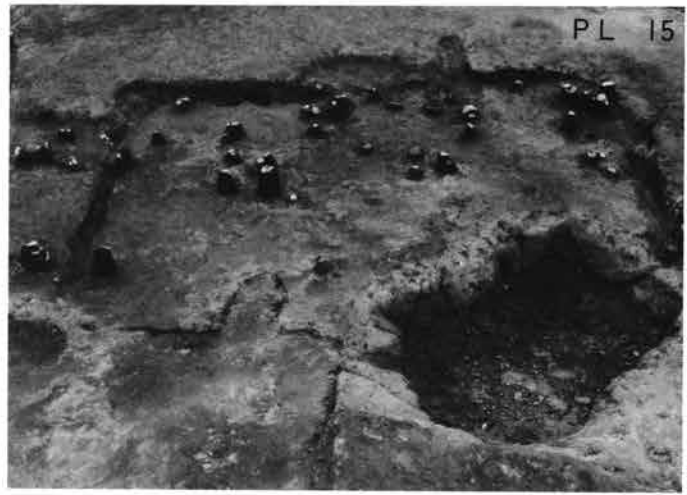
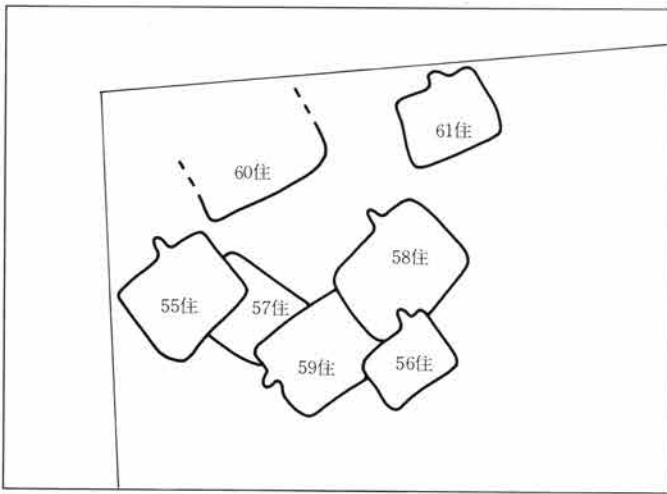
6 54号住居址 全景（西から）



7 55号住居址 全景（西から）



8 56号住居址 全景（西から）



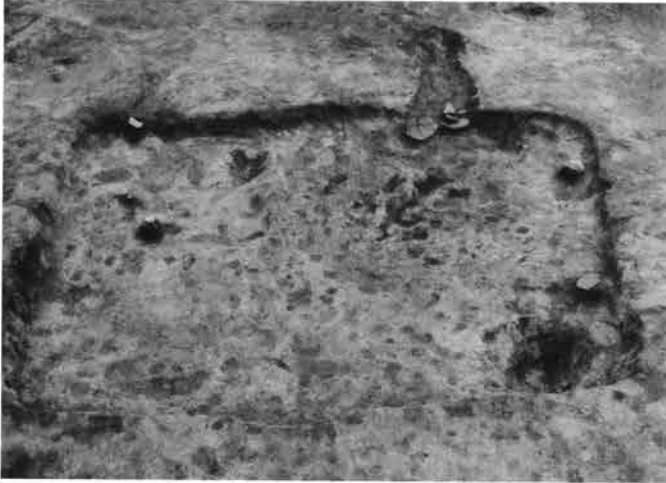
1 58号住居址 全景 (西から)



2 59号住居址 全景 (南から)



3 同左 遺物出土状態



4 62号住居址 全景 (西から)



5 63号住居址 全景



6 64号住居址 全景 (西から)



7 同左 カマド



1 65~67号住居址 全景



2 68号住居址 全景 (西から)



3 3号住居址 全景 (東から)



4 45号住居址 全景 (西から)



5 61号住居址 全景 (西から)



6 1・4号溝 全景 (東から)



7 1号溝埋積土層断面



8 4号溝埋積土層断面



1 1号溝 遺物出土状態



2 7号溝 埋積土層断面



3 7号土坑 埋積土層断面



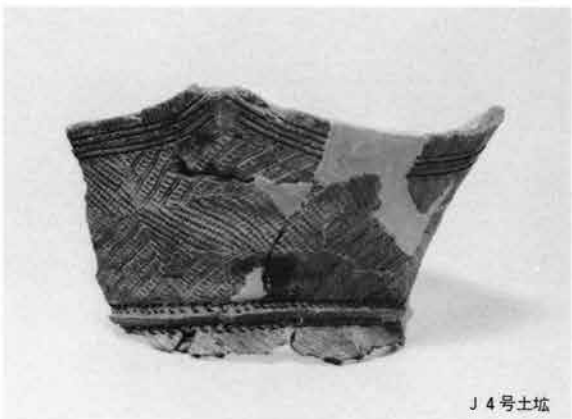
4 8号土坑 埋積土層断面



J 2号住



J 2号住



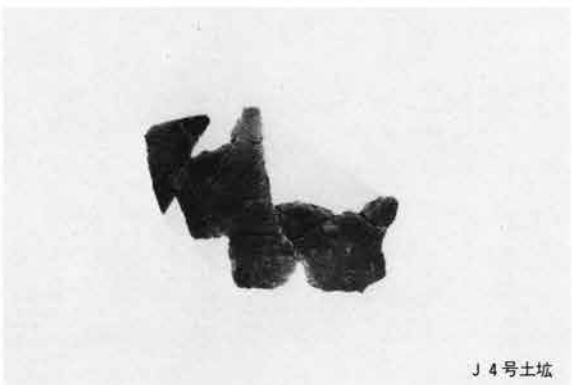
J 4号土坑



J 4号住



J 2号住



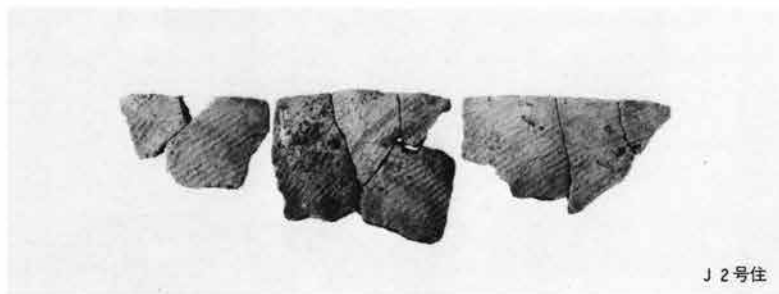
J 4号土坑



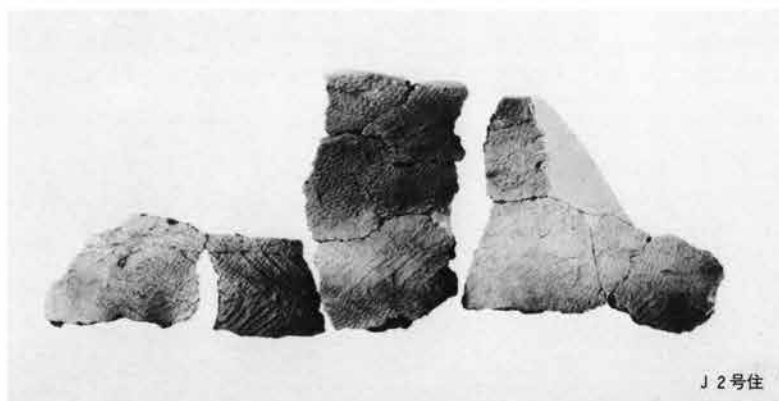
J 2号住



J 3号土坑



J 2号住



J 2号住



J 4号土埴



J 3号土埴



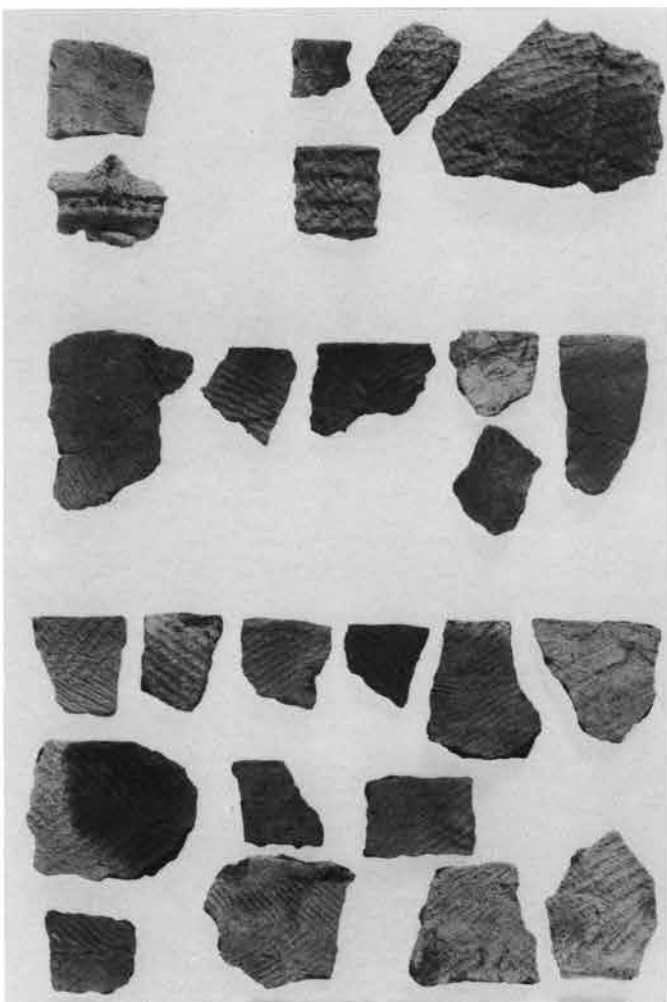
J 3号土埴



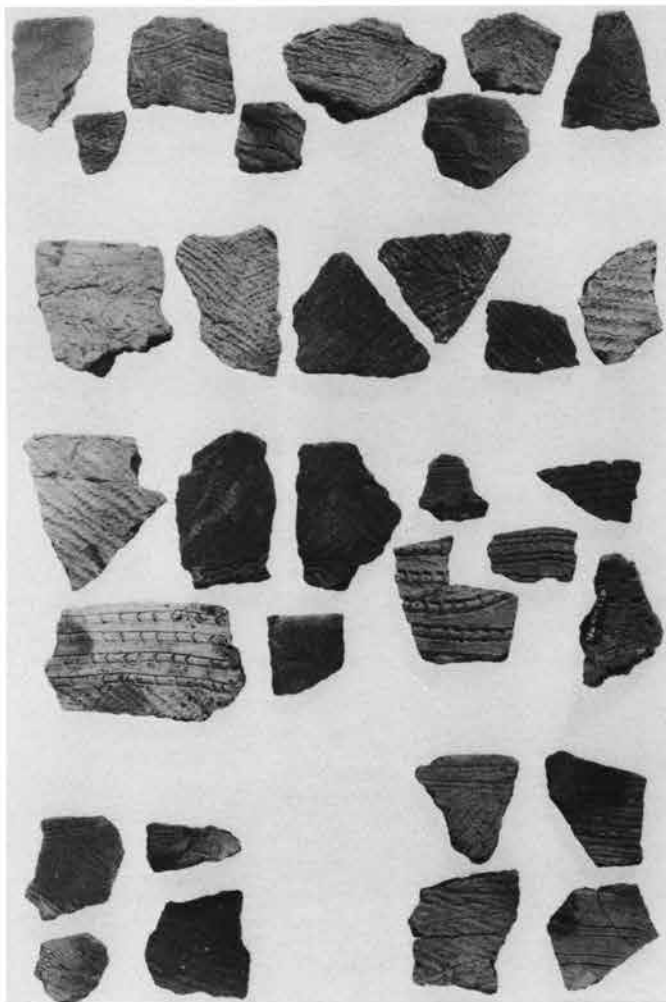
J 2号住



J 2号住



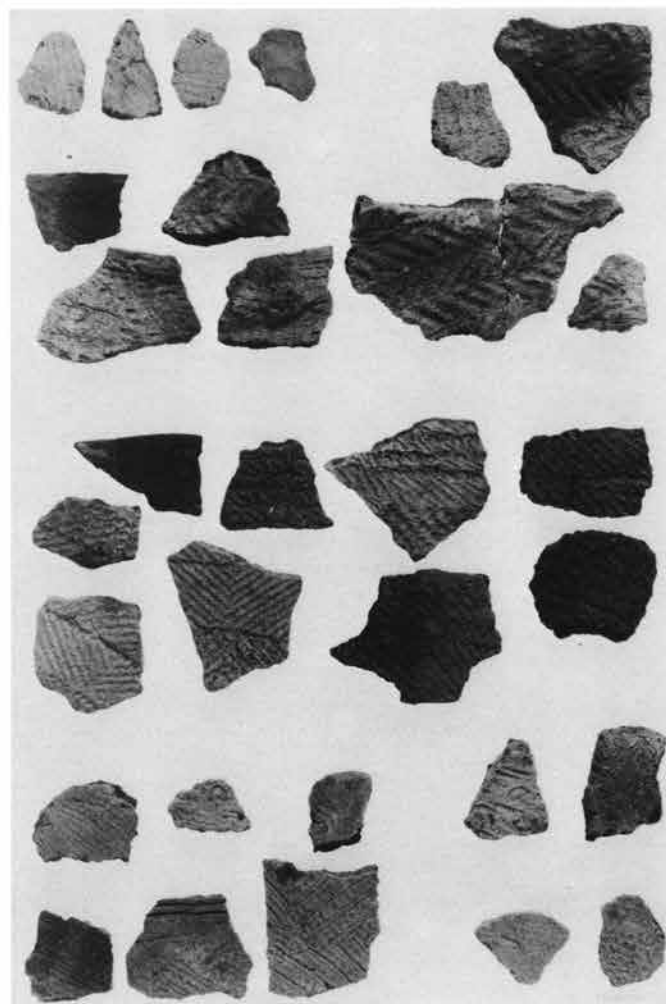
1 J 1号住居址出土土器



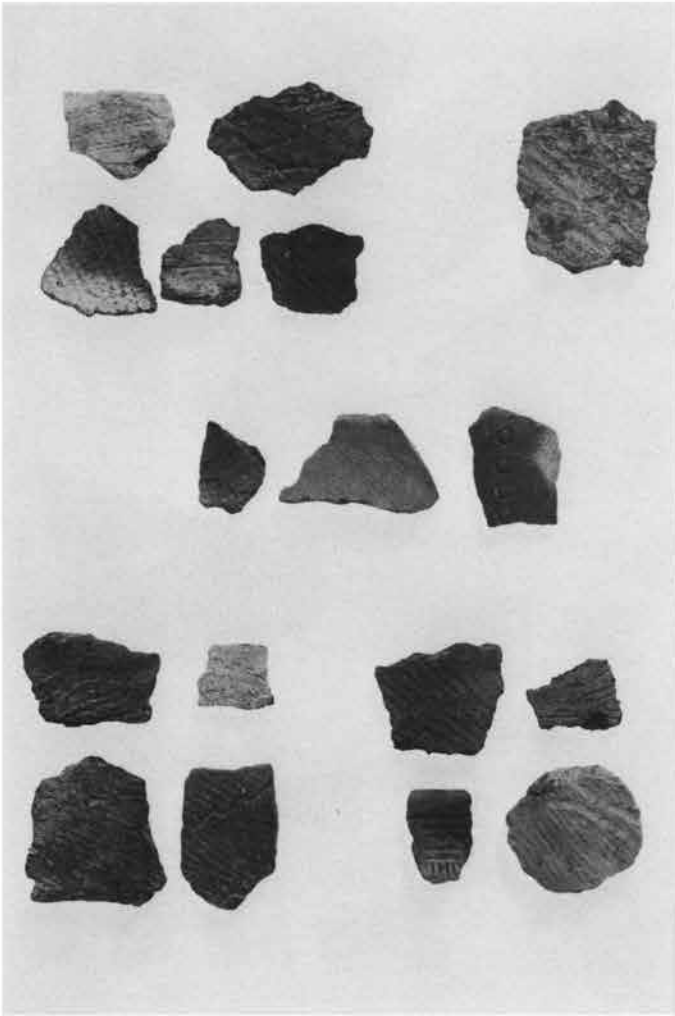
2 J 1号住居址出土土器



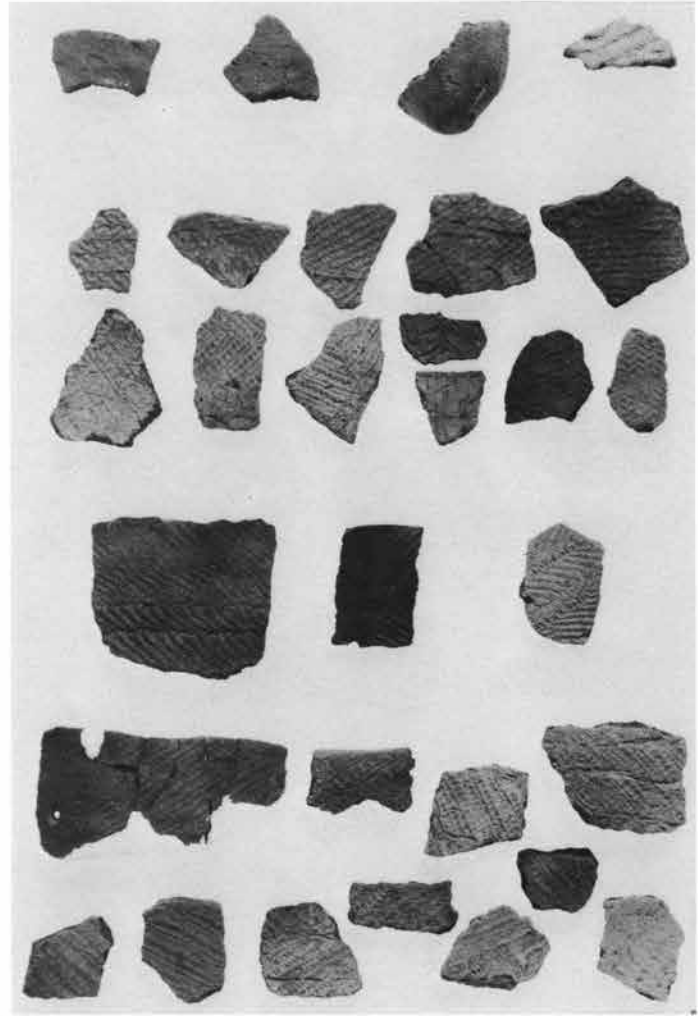
3 J 1号住居址出土土器



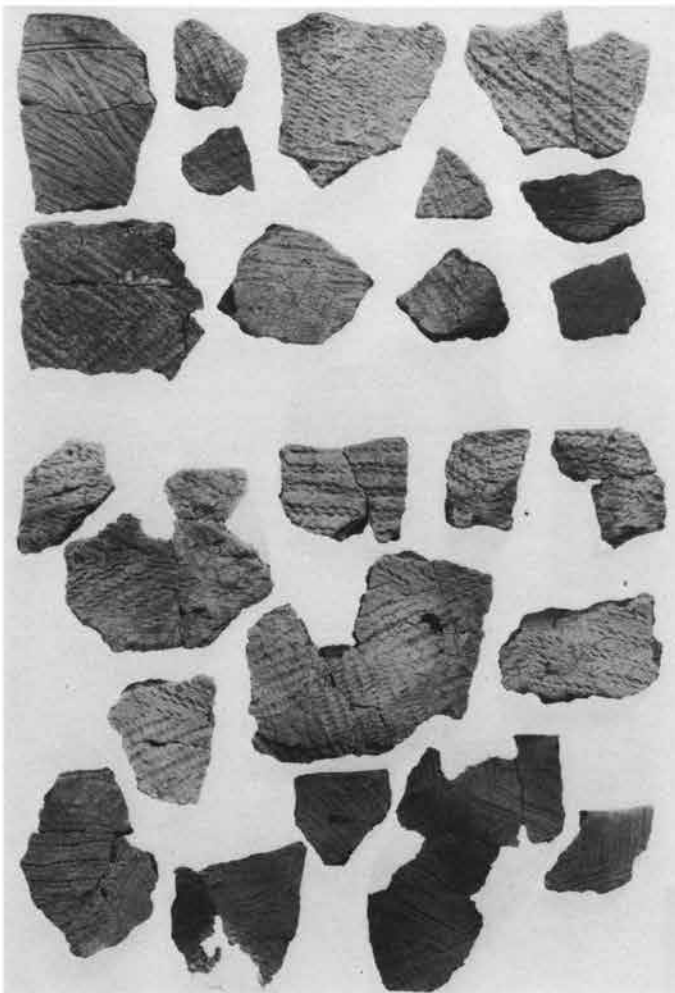
4 J 2号住居址出土土器



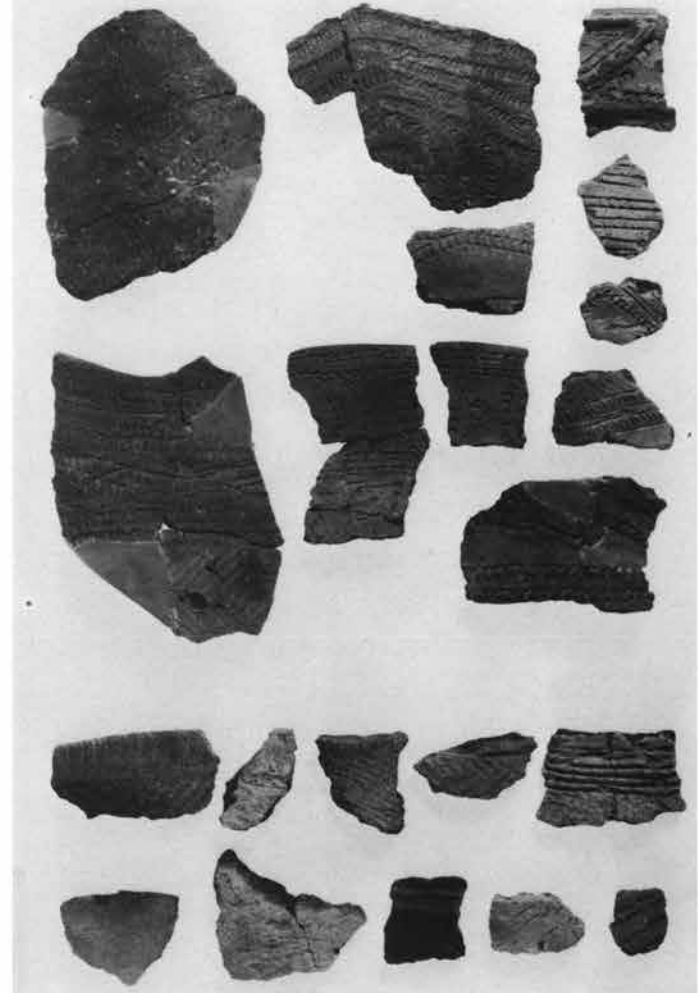
1 J 2号住居址出土土器



2 J 2号住居址出土土器



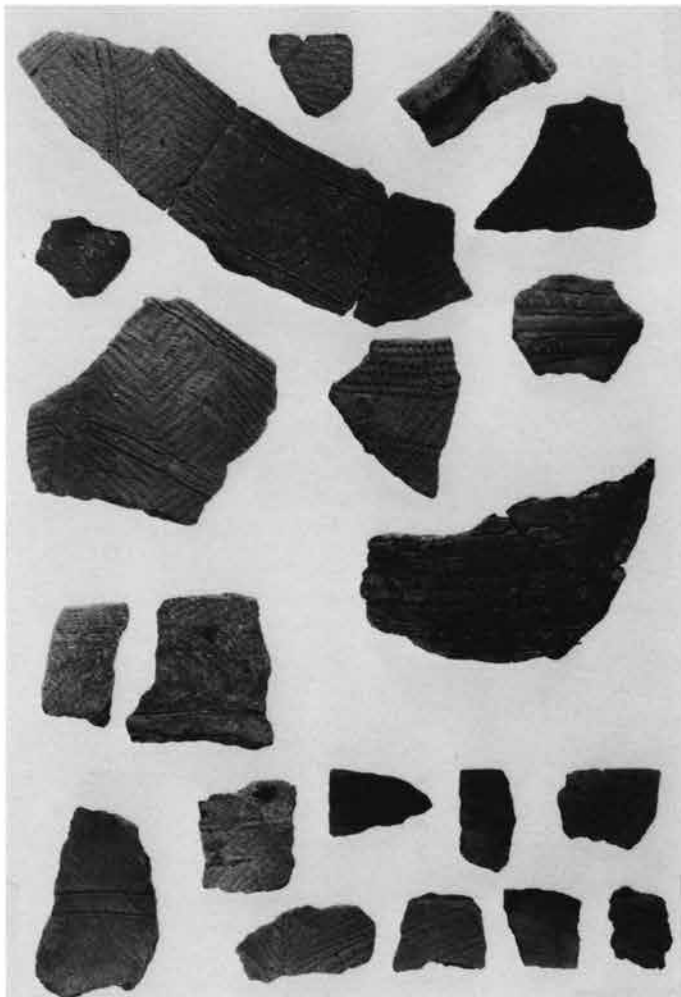
3 J 2号住居址出土土器



4 J 2号住居址出土土器



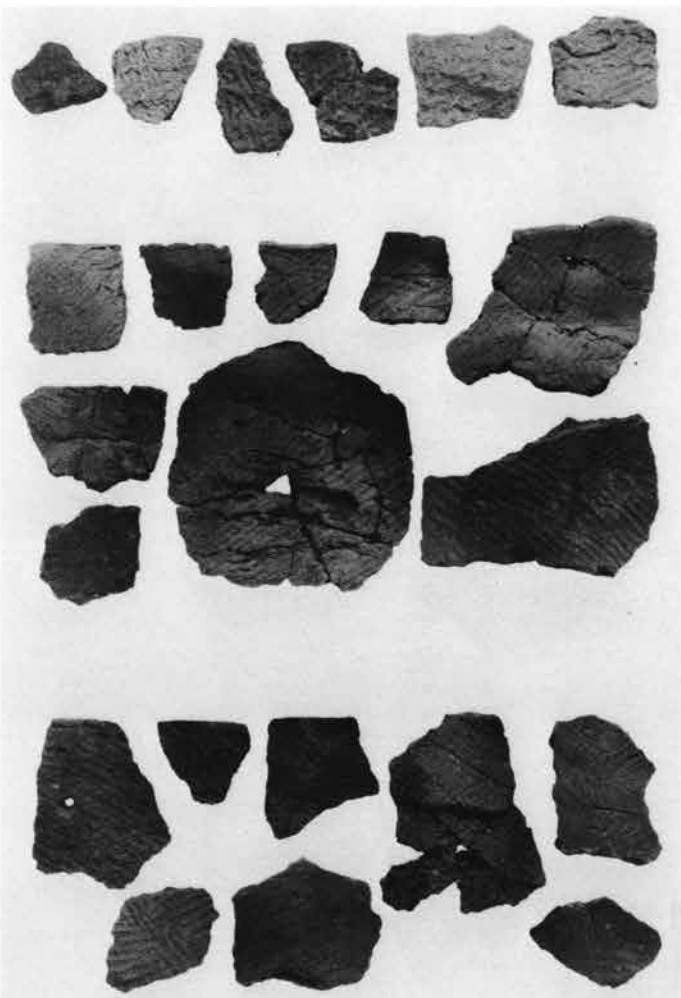
1 J 3号住居址出土土器



2 J 3号住居址出土土器



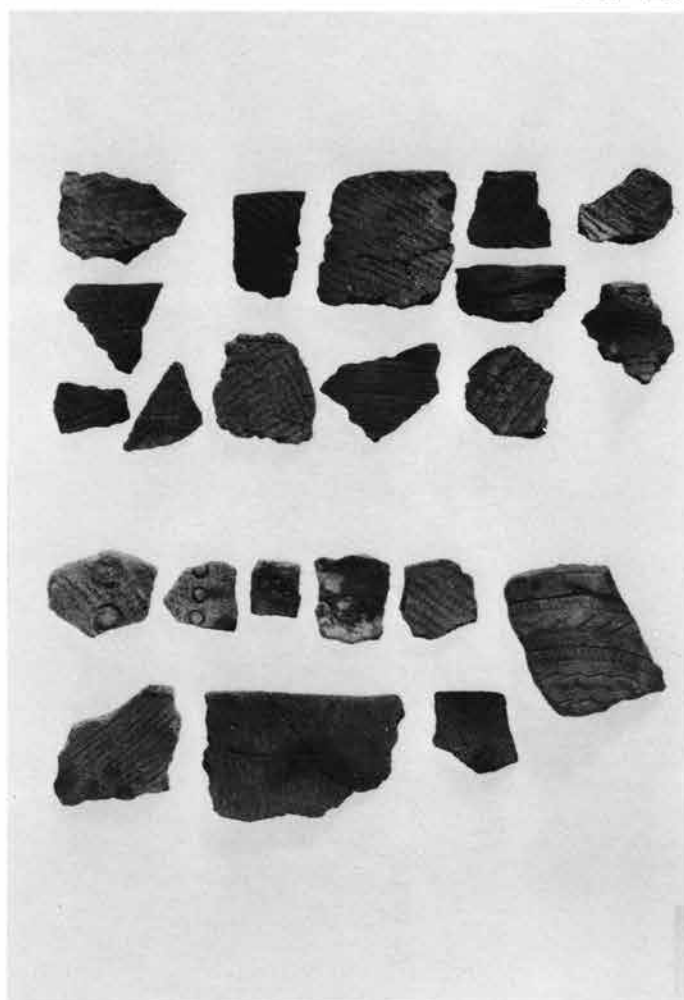
3 J 3号住居址出土土器



4 J 4号住居址出土土器



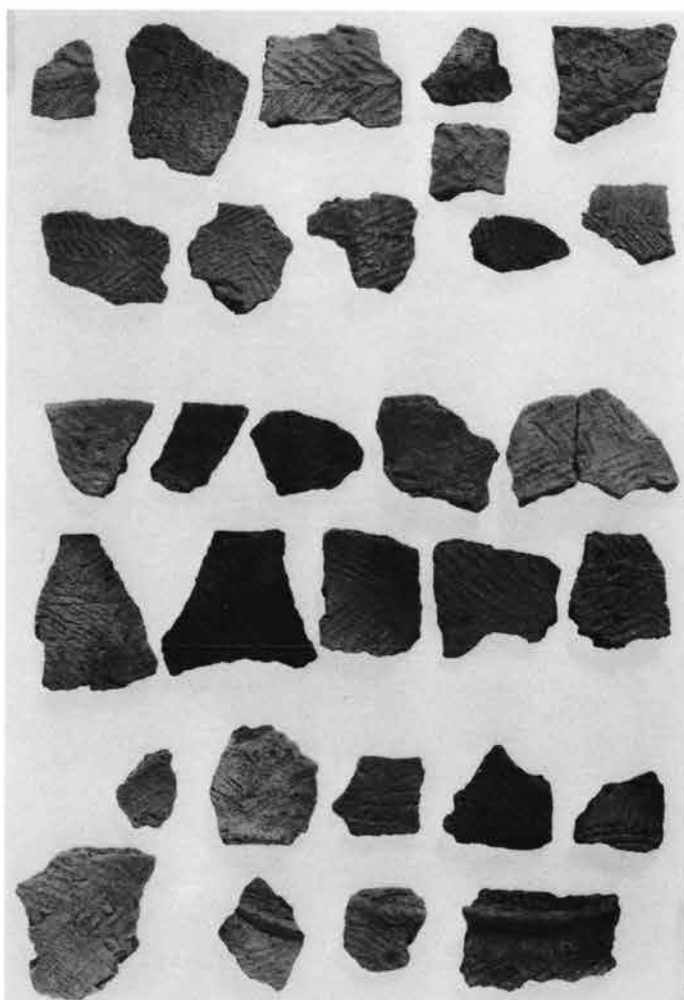
1 J 4号住居址出土土器



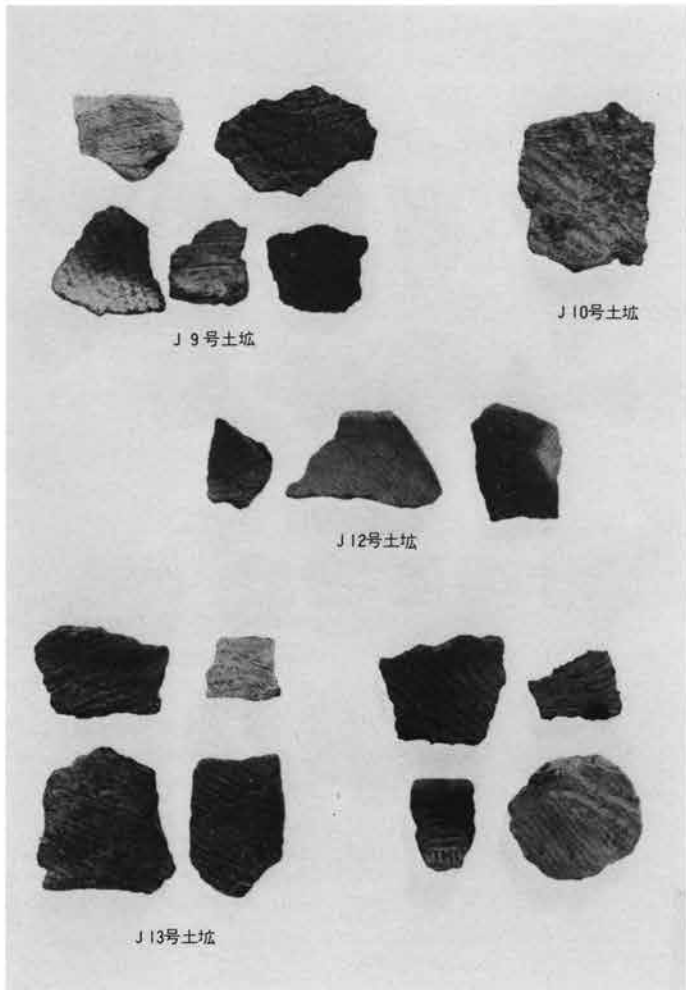
2 J 4号住居址出土土器



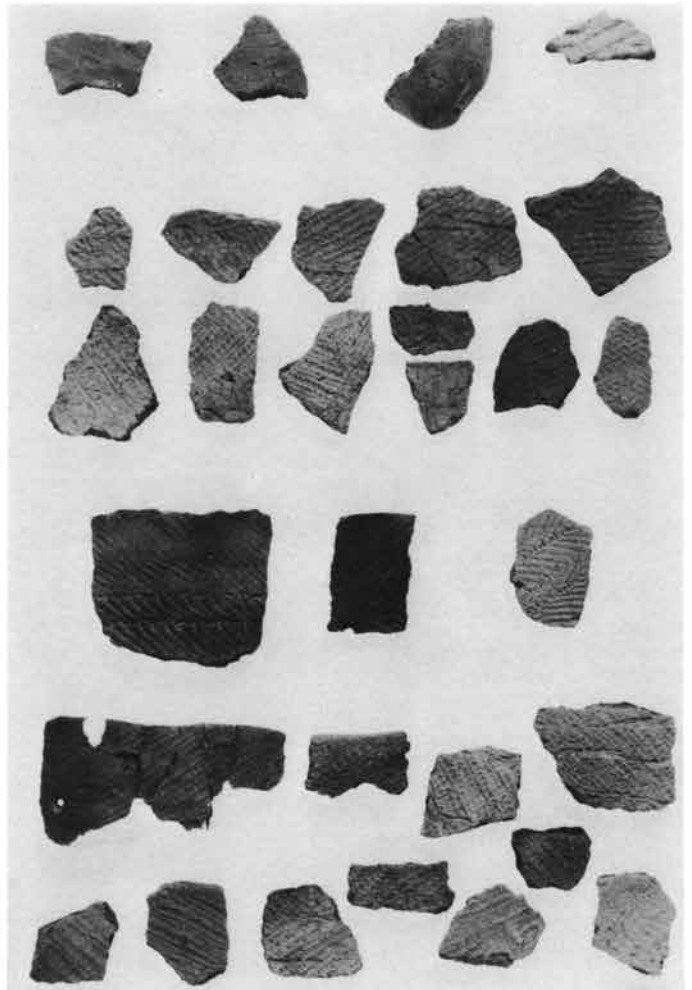
3 J 2号土坑出土土器



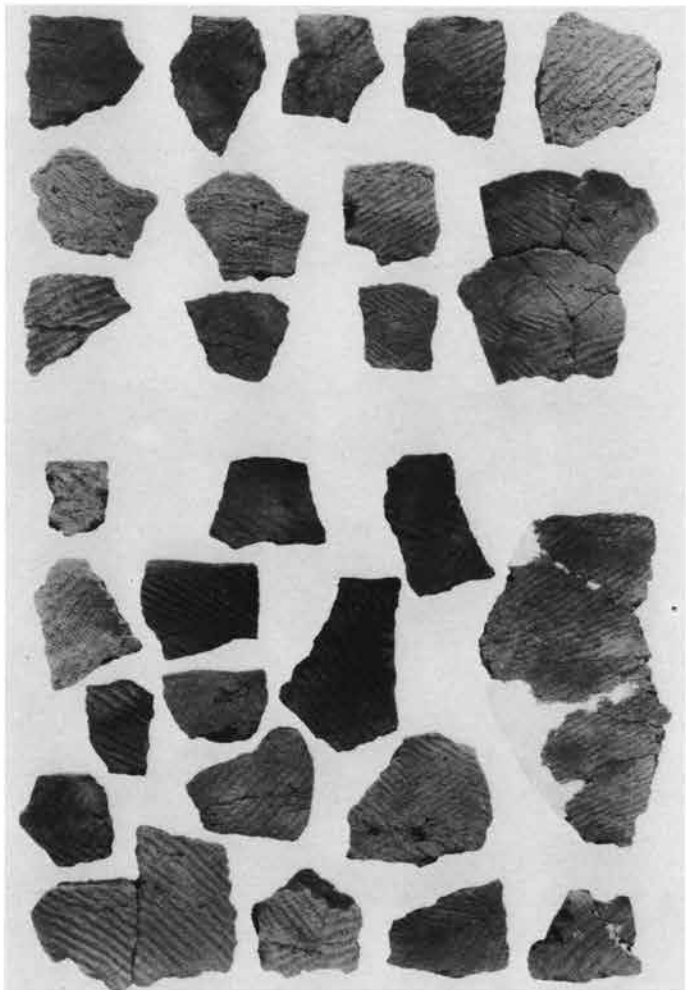
4 J 3号土坑出土土器



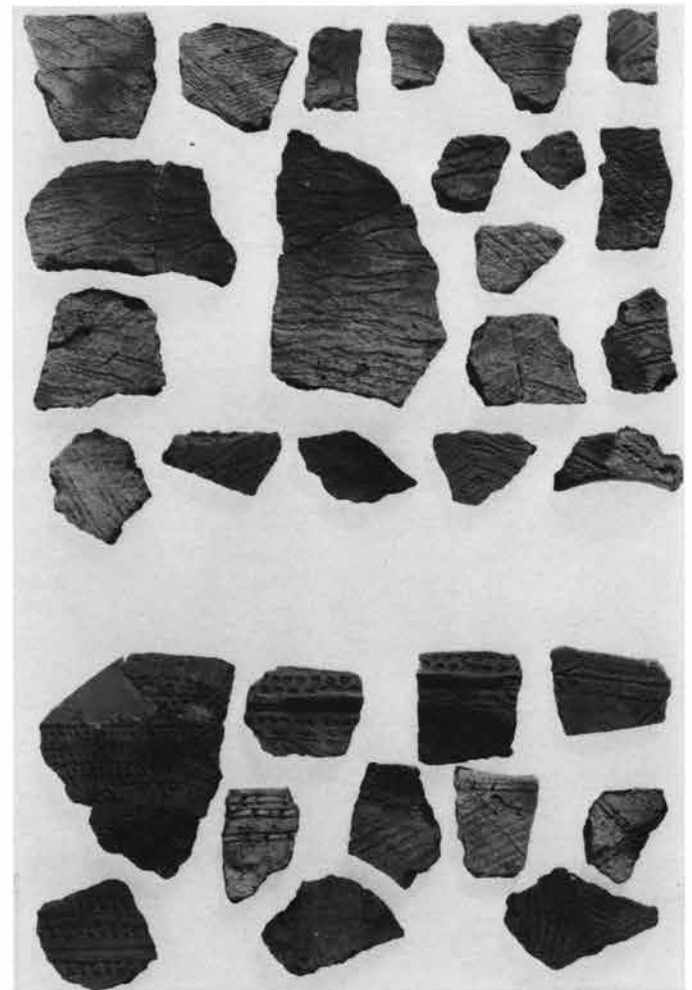
1 土坑出土土器



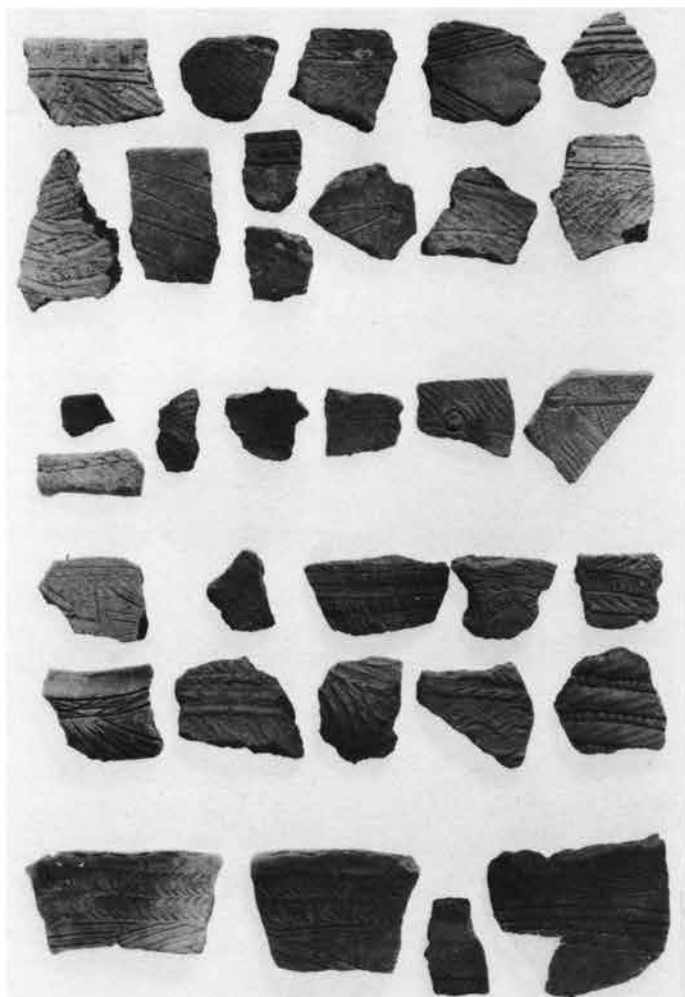
2 遺構外出土土器 第1群~第5群



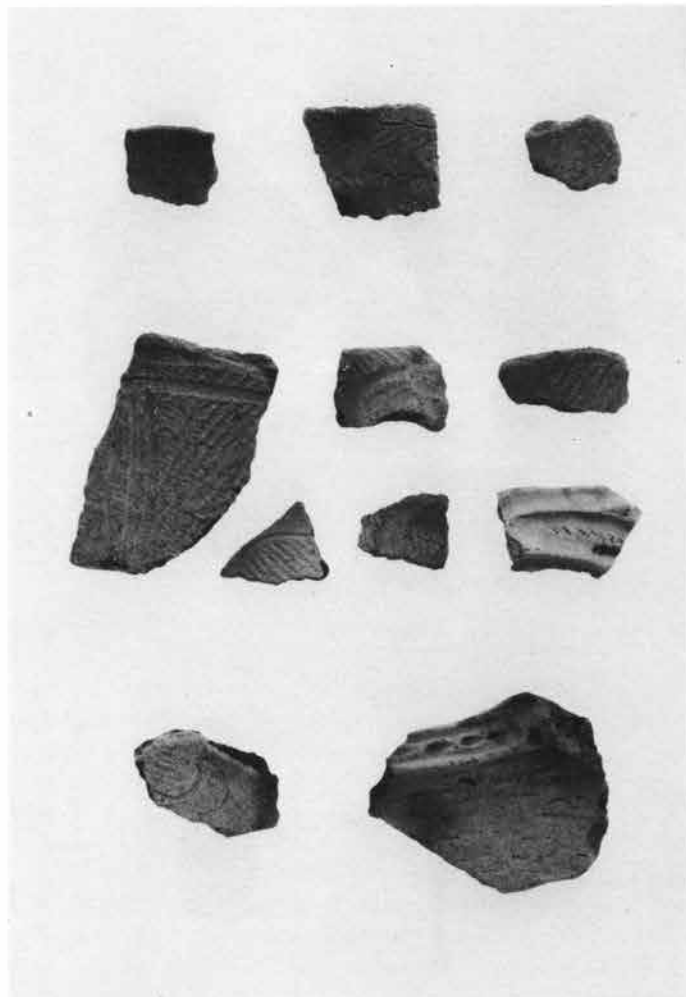
3 遺構外出土土器 第5群



4 遺構外出土土器 第5群



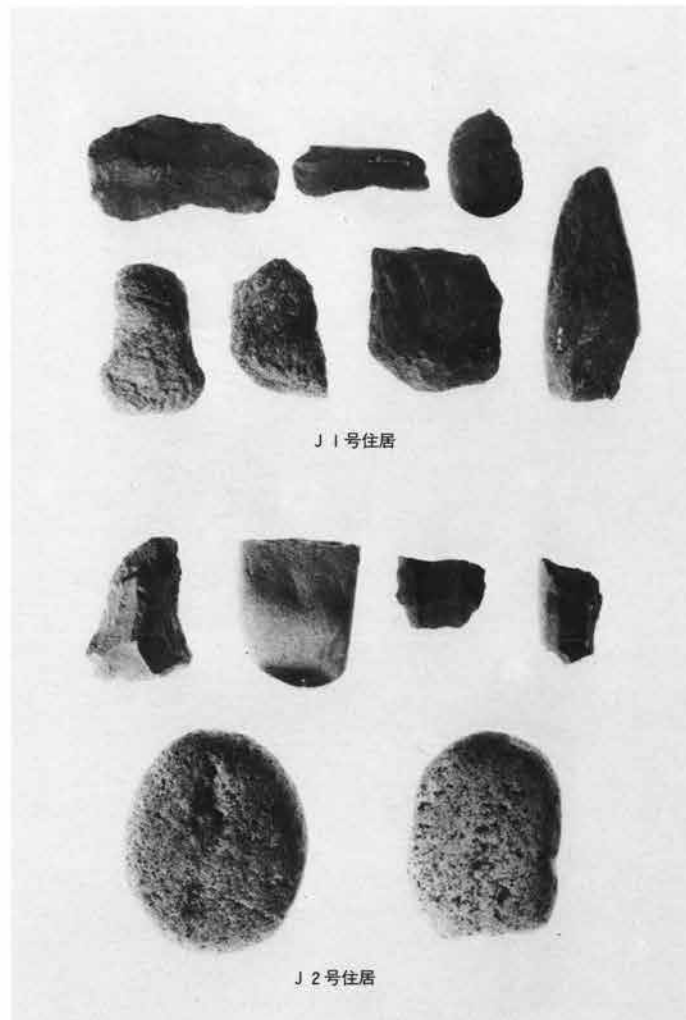
1 遺構外出土土器 第5群~第7群



2 遺構外出土土器 第8群~第11群



3 住居址出土石器



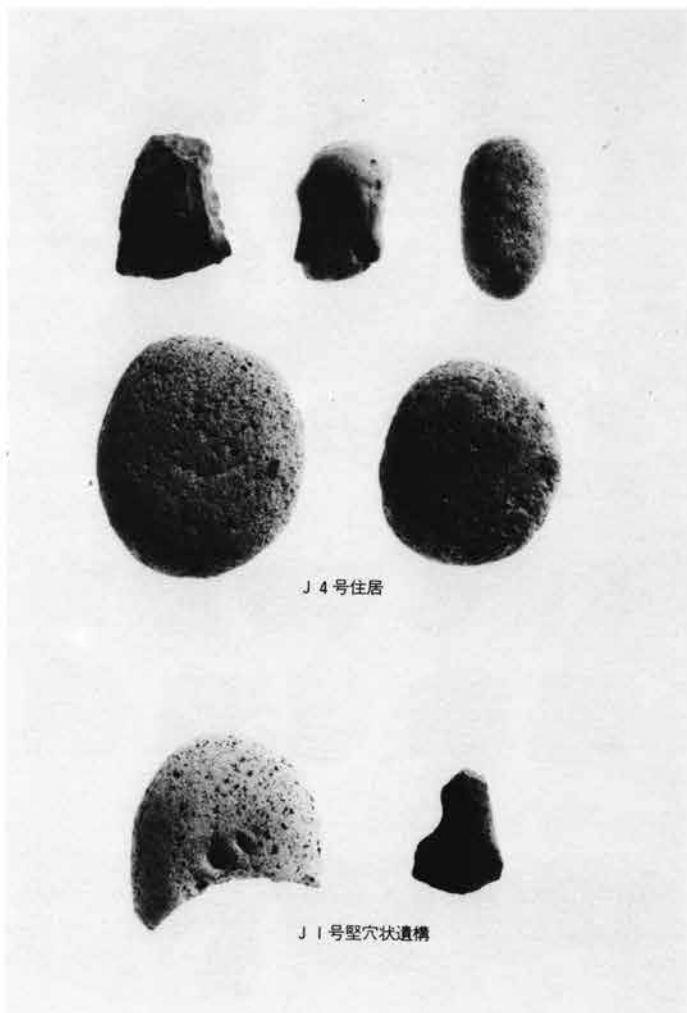
4 住居址出土石器



J 2号住居

J 3号住居

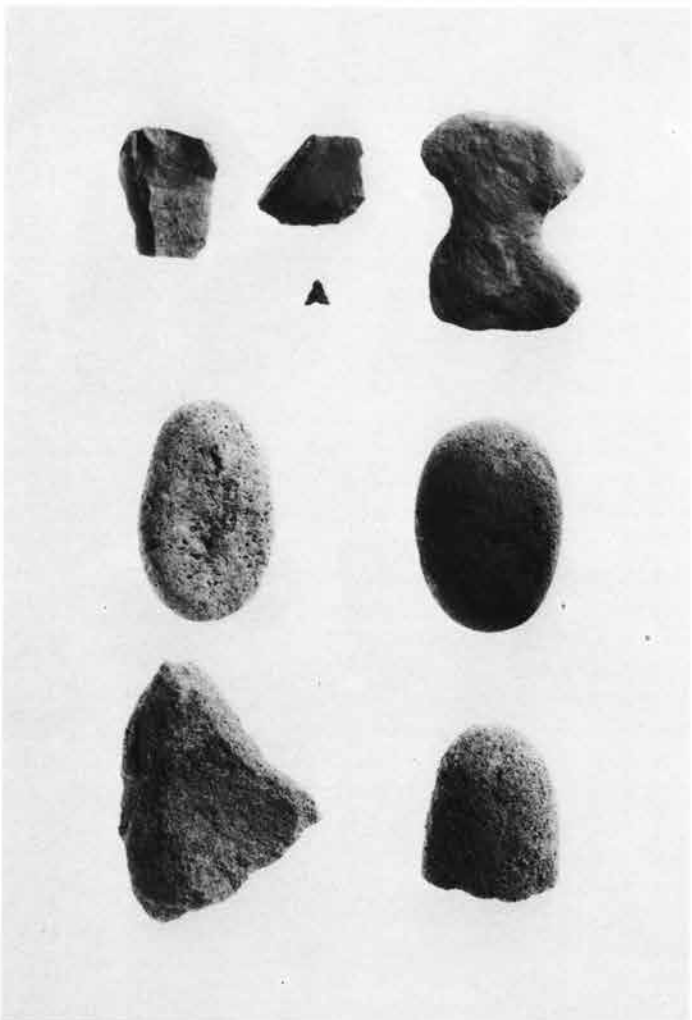
1 住居址出土石器



J 4号住居

J 1号堅穴状遺構

2 住居址出土石器



3 遺構外出土石器



2住-4



2住-1



4住-6



9住-1



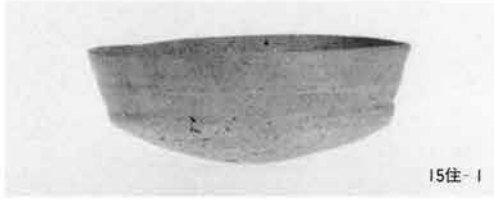
15住-2



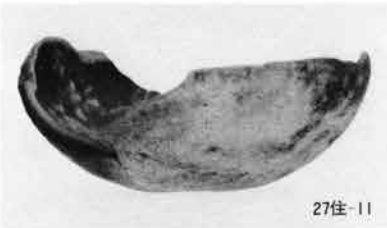
4住-5



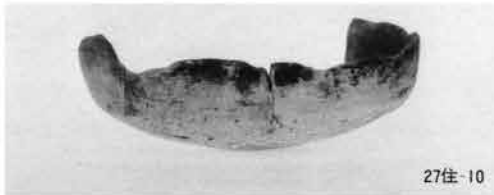
15住-3



15住-1



27住-11



27住-10



10住-5



9住-4



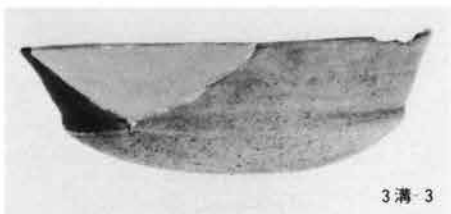
15住-10



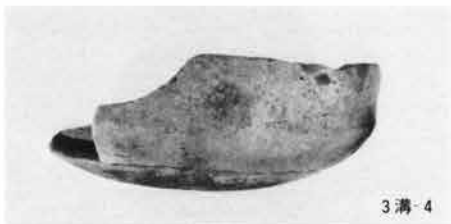
15住-7



18住-7



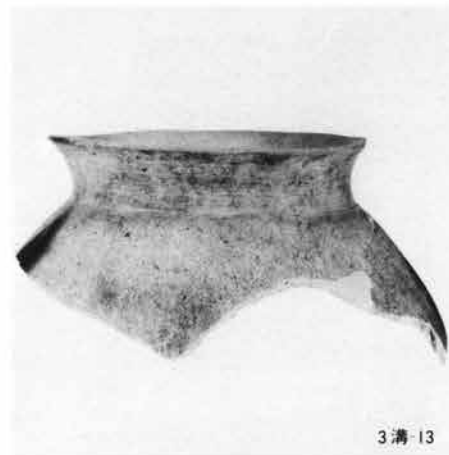
3 溝-3



3 溝-4



3 溝-15



3 溝-13



3 溝-7



3 溝-8



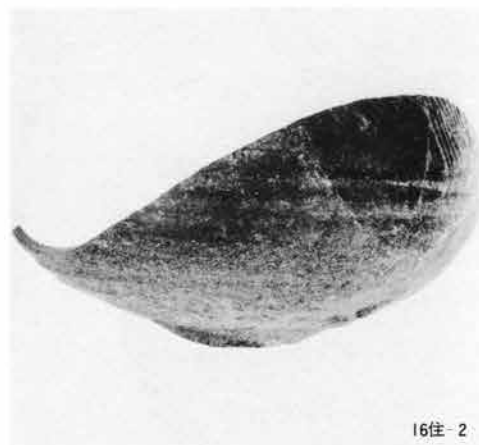
3 溝-14



3 溝-11



7 溝-6



16 住-2



7 溝-5



7 溝-7



7 溝-4



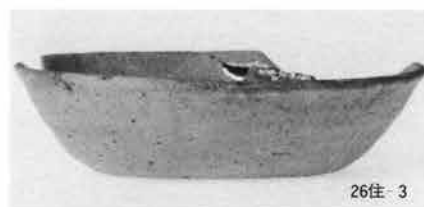
16 住-7



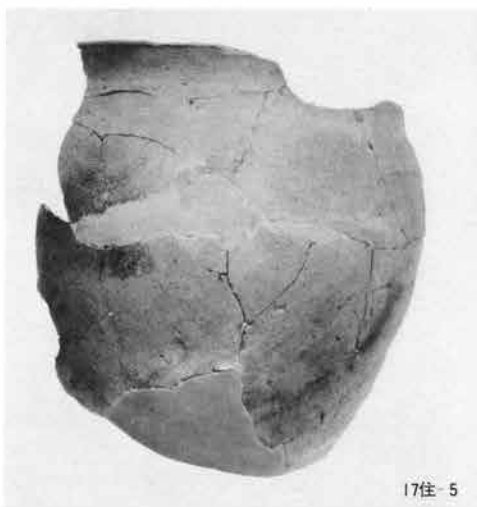
17住-3



26住-1



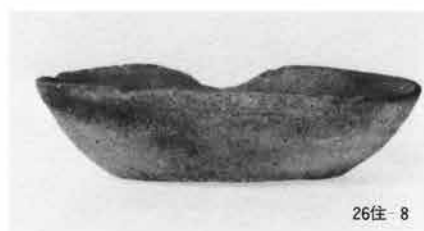
26住-3



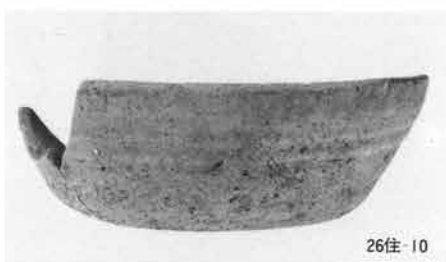
17住-5



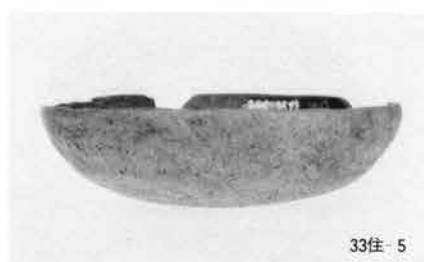
26住-7



26住-8



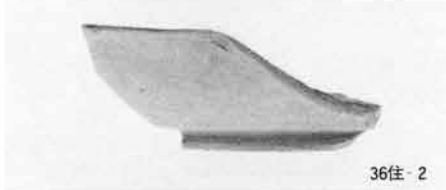
26住-10



33住-5



23住-6



36住-2



1住-1



7住-3



6住-1



5住-5



6住-4



6住-1



7住-9



7住-12



7住-6



7住-5



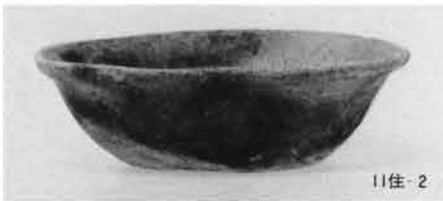
11住-1



11住-8



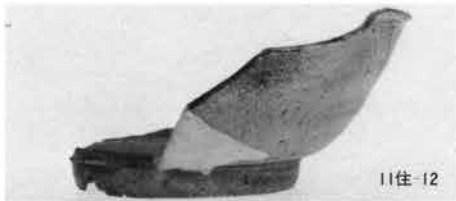
11住-10



11住-2



11住-9



11住-12



11住-3



11住-4



11住-14



11住-7



11住-5



11住-6



14住-4



14住-2



14住-3



14住-8



14住-1



14住-5



14住-6



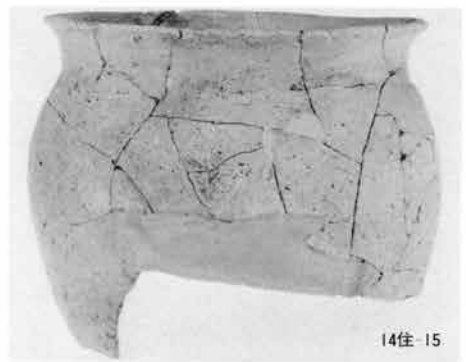
14住-1



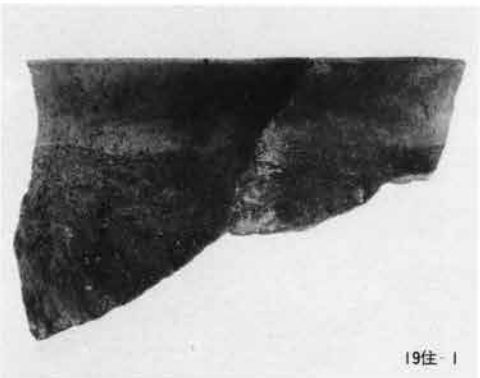
14住-11



14住-12



14住-15



19住-1



14住-16



20住-2



21住-4



21住-4



22住-3



22住-1



23住-1



22住-2



23住-2



24住-8



24住-7



24住-5



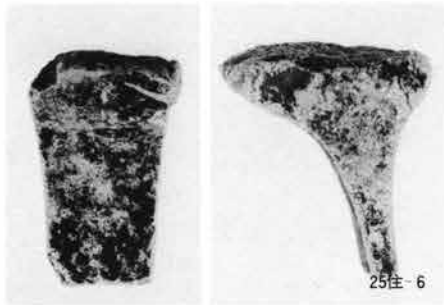
24住-6



24住-12



25住-1



25住-6



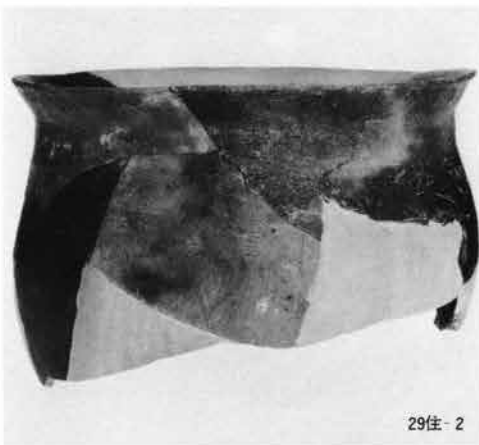
25住-4



25住-2



25住-5



29住-2



25住-3



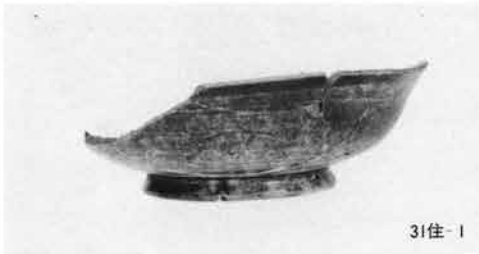
30住-1



29住-5



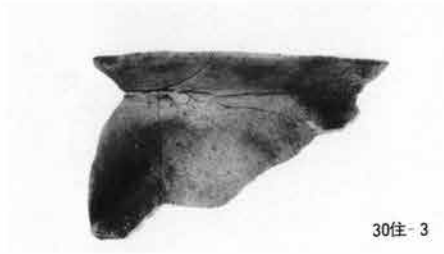
30住-2



31住-1



29住-6



30住-3



37住-3



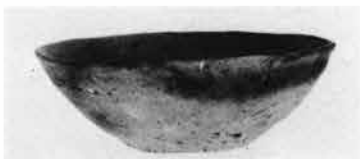
37住-1



37住-6



37住-9



37住-4



37住-7



37住-10



37住-2



37住-11



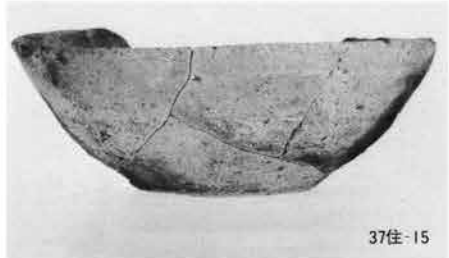
37住-12



37住-13



37住-14



37住-15



37住-16



37住-17



37住-18



37住-19



37住-20



37住-21



37住-22



37住-23



37住-24



37住-28



37住-25



37住-26



37住-27



37住-29



37住-30



37住-37





37住-34



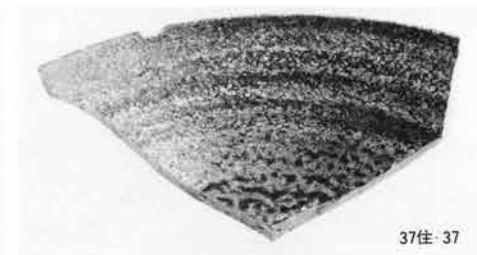
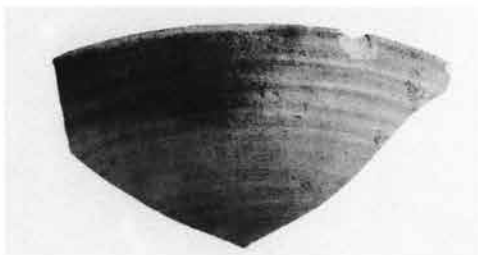
37住-33



37住-31



37住-32



37住-37



37住



37住-35



37住-39



37住-38



38住-4



38住-5



39住-11



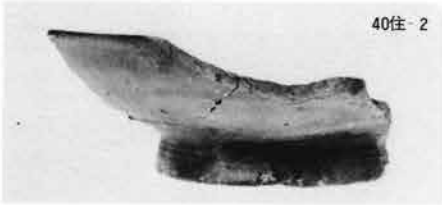
39住-13



39住-12



39住-14



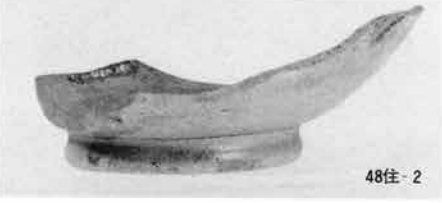
40住-2



45住-8



45住-9



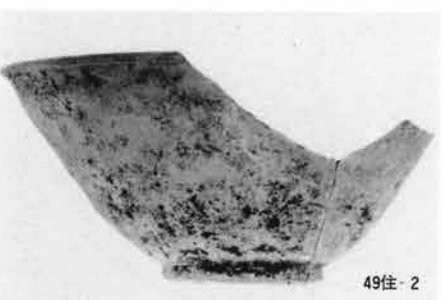
48住-2



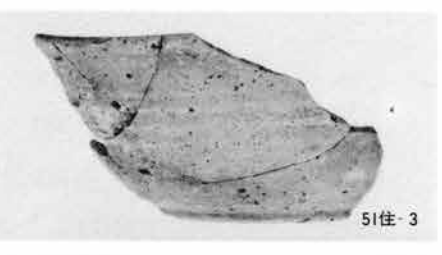
48住-1



48住-5



49住-2



51住-3



51住-5



42住-3



42住-4



42住-4



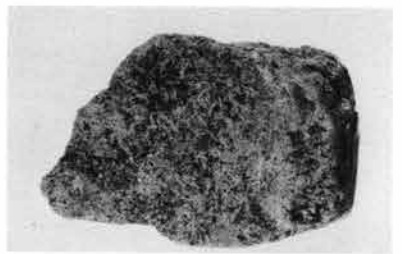
49住-3



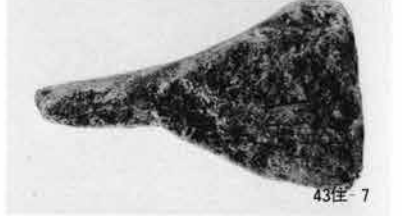
52住-10



52住-11



43住-7



47住-1



49住-7



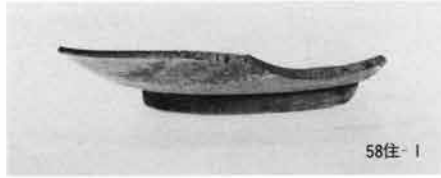
49住-6



52住-14



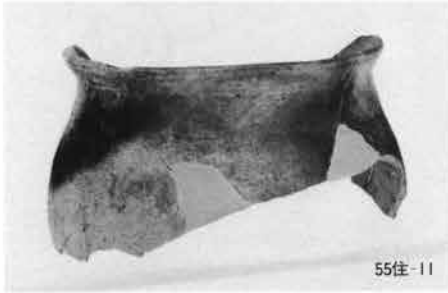
55住-7



58住-1



59住-8



55住-11



59住-11



59住-10



61住-2



61住-3



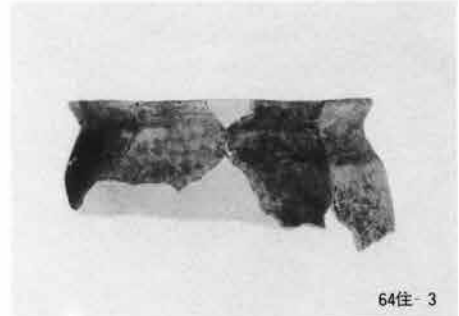
61住-7



61住-5



62住-8



64住-3



64住-1



66住-3



66住-6



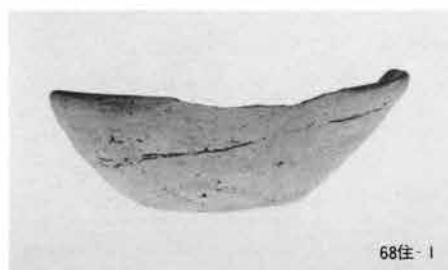
64住-1



68住-3



68住-4



68住-1



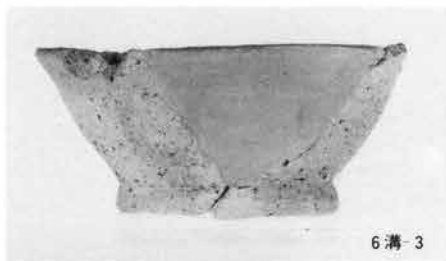
68住-5



68住-7



6溝-2



6溝-3



6溝-4



6溝-5



11溝-10



6溝-11



51住



51住



8塚-1



4溝-3



8塚-2

賀茂遺跡 国道122号（太田バイパス）道路改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

印刷 昭和59年10月20日

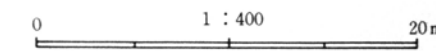
発行 昭和59年10月31日

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52-2511(代表)

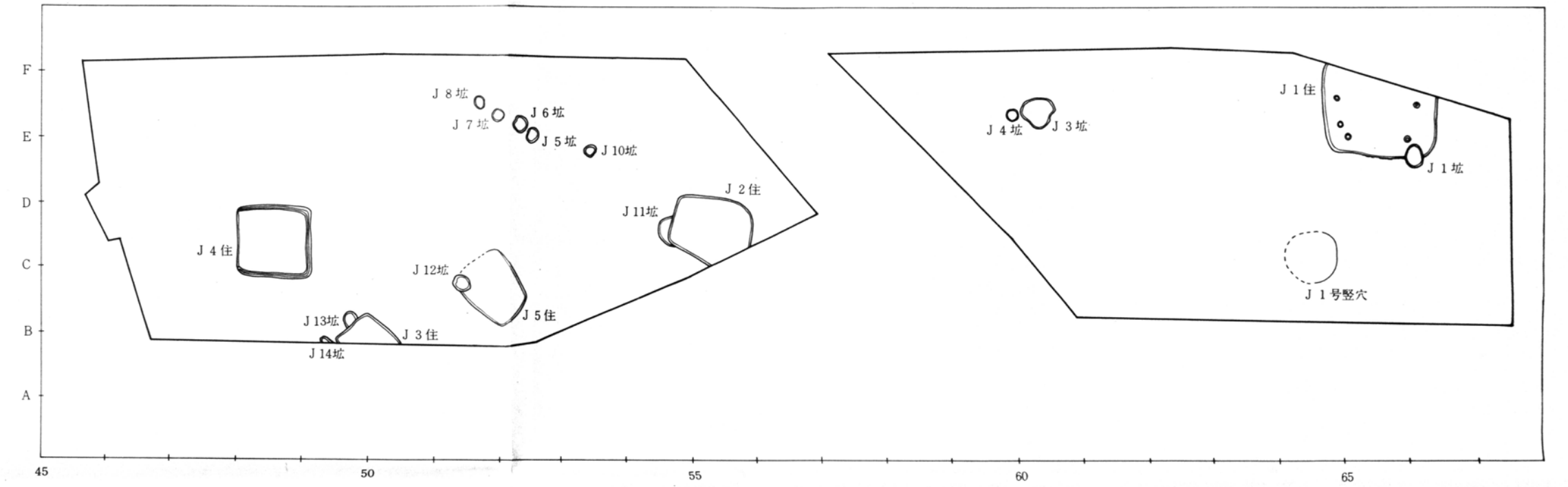
発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

付図 賀茂遺跡 全体図



縄文時代



古墳～平安時代

